

---

# 魔導装甲アレン

秋月あきら（ししゃもにゃん）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導装甲アレン

### 【Nコード】

N0398E

### 【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

### 【あらすじ】

退廃した砂漠の都市クーロン。

都市の地下で見つかった古代遺産で発掘された世界を滅ぼす兵器をめぐる戦い。

砂漠で飢え死にしそうになっていたアレンを救ったトツシユ。

それが切っ掛けでアレンもまた帝國から……。

いししえの魔女、復活するロストテクノロジー。

帝国の陰謀、舞台は砂に埋もれし古代魔導都市アララト、鬼兵団との激戦が繰り広げられる！

秘宝は誰の手に!?

齒車 は渦に呑み込まれようとしていた!

そして、すべてのはじまりは智慧の林檎だった。

全3部作完結!

たぶん縦書きのほづが読みやすいです。

## 黄砂に舞う羽根「砂漠の都（1）」

太陽が燦然と降り注ぐ枯れた大地に少年はいた。

舞い上がる黄砂に吹かれながら、少年は砂に埋もれる足を一步一步着実に動かし、どこ行く当てもなく歩いているようだった。

少年の年の頃は十五、六歳と言ったところだろうか？

頭には耳の垂れ下がった犬に似ているパイロットハットを被り、その帽子にはゴーグルが付けられ、身体を覆う茶色い服は帽子と同じ素材らしき色褪せた皮製の物で、その服は砂や陽の光を拒むような厚手の服だった。

衣服の所々は汚れ、解れ、破れ、少年の旅が長いものだったことを物語っている。

そう、少年は旅慣れた物腰をしていた。

そのことは少年の表情からも見て取れた。

深く被った帽子から覗く瞳は、遙か彼方を見つめているようで、なにも見つめていないような眼差し。

少年はあの先になにを見る？

そして、なにを求め、旅をしているのだろうか？

その時、少年の腹が奇怪な音を立てて鳴いた。  
ぐうううううううううう。

腹を押さえた少年が砂の上に膝を付き、そのまま前のめりになりながら顔面から砂にダイブした。

少年の口から微かな声が漏れる。

「腹減ったあ~~~~」

今、少年に最悪最強の敵が襲い掛かる！！

空腹。

たかが空腹と莫迦にすることなかれ。この少年は金銭的な都合から旅の途中で食料を切らせ、一週間もの間、口に入れた物は塵と空気と水だけ。その水もついさっき飲み干してしまった。

少年は意識を朦朧させながら砂の上に寝転び、仰向けになりながら顔の前に腕を置いて天を仰いだ。

太陽はまだまだ高い位置にあり、陽の光が少年を串刺しにするが、気温そのものは高くない。大地が枯れている理由は、灼熱の太陽のせいではないのだ。

地平線の向こうで砂埃が霧のように舞い上がり、轟々と風が鳴る。上体を起こした少年は目を細めた。

視線の先に映る光景。砂の上を走る巨大な影と小さな影。それを見た少年は思わず声をあげた。

「食料！」

舞い上がる砂の中を巨大な影が小さな影を追っている。

轟々と砂を巻き上げ、風を鳴らしながら爆進する巨大な影の正体は岩蛇だった。その全長は約三〇メートルもあり、岩のような鱗に全身を覆われていて、小象であれば丸呑みにされてしまいそうだ。

これでも小物の岩蛇だ。

巨大な岩蛇に追われていたのは、二足歩行のクエック鳥と呼ばれる飛べない鳥に乗った男だった。

『クエック』と鳴き声をあげることから、その名を付けられたクエック鳥は、人に乗せた状態で時速約六〇キロメートルの速さで走ることができる。だが、それでは岩蛇の魔の手からは逃げられない。身体をくねらせる岩蛇は砂の上を泳ぐようにして獲物を丸呑みにしようとしている。このままでは、男はクエック鳥とともに真っ暗な岩蛇の腹の中に納まってしまっただろう。しかし、そうはならなかった。

巨大な穴としか思えない大口を開けた岩蛇が男を呑み込もうとしたその時、男の手から閃光を放ちながら煙を撒き散らす弾丸が発射された。信号弾だ。

男の放った弾は巨大な口の中に消えていき、岩蛇は巨体を揺らしながら狂うように頭を振った。

表皮は岩のような鱗に覆われていようとも、口の中に弾を打ち込

まれたのでは岩蛇も堪ったものではない。しかし、致命傷にはならず、むしろ岩蛇は怒り狂うように暴れまわった。

一部始終を見ていた少年はお腹を擦りながら呟いた。

「皮剥がせば食えるな」

少年は岩蛇を仕留める気でした。いや、喰らう気でした。

暴れまわる岩蛇によって砂の大地は波打つように動き、砂に足を取られたクエツク鳥が男を乗せたまま転倒する。

砂の上に大きく放り出された男の上に巨大な影が覆い被さる。

巨大な壁のように迫ってくる岩蛇から男は逃げる術を失っていた。だが、男は見た。陽光を浴びて空に舞い上がった小さな影を。

ぼろ切れのマントを空中で投げ捨てた少年は、天に向かって咆哮しながらもだえ苦しんでいた岩蛇の口の中に飛び込んでいった。

少年が岩蛇の口の中に飛び込む瞬間、どこかで歯車の鳴る音がして、少年の右手が激しい閃光を放った。

「喰らえ糞蛇っ！」

怒号をあげた少年が岩蛇の長い舌に右手を押し付けた瞬間、岩蛇は巨大な身体を大きく震わせてスパークした。岩蛇は少年によって電撃を喰らわされたのだ。

舌をだらりと伸ばして痙攣する岩蛇は巨体を砂の上に大きく打ちつけた。

砂煙が舞い上がり、砂を被る岩蛇は微かに痙攣するものの、気を失っているようで動く気配はもうない。

息を荒げて砂の上に大の字になって寝転ぶ少年の顔に男の影が射す。

「おまえ、人間か？」

体躯のいい無精髭を生やした男の声には感嘆と畏怖の色が雜ざっていた。

自分を見つめる男を霞む目で見ながら、少年は息絶え絶えといった声で呟いた。

「……飯…食わせろっ」

そして、少年の意識は闇の中に落ちていった。

## 黄砂に舞う羽根「砂漠の都(2)」

砂漠の中心に聳える鉄の要塞。シユラ帝國が世界に誇る皇帝ルオの居城である巨城だ。

権威を示すただけに広い玉座の間。大理石の床に敷かれた金糸の刺繍が施された紅い絨毯が玉座まで伸びている。その玉座に座る者は、この帝國の若き皇帝　ルオだ。

皇帝であるルオの前に威風堂々と立つ、雄ライオンのような髪型をした女性。白衣のようなロングコートを着た彼女は、濡れた唇からセクシーな低音で掠れた声を部屋に響かせた。

「目下のところトツシユの行方は不明。街の外に出かけたとの情報もあるけれど」

目の前にいるのが皇帝だというのに、『ライオンヘア』の口調には敬意の欠片も含まれていなかった。それに対して皇帝も気にしたようすもない。

「トツシユは行方知れずか。して、あの話の真意は？」

「裏づけは取れたわ。すでに坑道は我が軍が占領し、発掘は至極順調よ。トツシユが街に帰って来て、このことを知ったらどんな顔をするか、楽しみだわ」

妖々と魅惑的な笑みを浮かべる『ライオンヘア』。それにつられて皇帝ルオも静かに笑う。

「大地の下に眠るモノは、神か悪魔か……」

「なにが飛び出して来ようと、『失われし科学技術』は、この世界に新たな風を吹かせるわ」

「それは滅びの風かもしれないよ」

「滅びの力でも手玉にとって見せますわ」

「それは頼もしい」

陰を纏い、くつくつと嗤う皇帝ルオの表情は、悪戯な悪魔のようだった。



皇帝ルオの悪評は多く、独自の美意識を持つ彼の虐殺の数々は国を跨いで人々に知られる。

三年前、前皇帝であるルオの父が崩御し、十三歳という若年でルオが帝位を継承して間もない時であった。ルオは領土拡大のために、とある砂漠に住む部族の要塞を落とすことになり、彼はただ一言を発した

串刺し刑が観たい。

その一言だけで、女子供関係なく一二〇人あまりの人間が串刺しにされ、その半分以上の人間が生きたまま串刺しにされたのだった。その光景は凄まじく凄惨であり、串刺しの刑を実行させられたルオの軍隊ですら躊躇いを覚え、嘔吐する者や、最後までルオの命令に従えずに串刺しの刑に処された者もいたほどだ。

串刺しの方法は肛門から内臓に串を差し込んだり、へそを刺したり、心臓を刺したりといろいろな方法が取られ、串刺しにされた者はみな地面に串とともに立てられ、ルオのオブジェにされた。そして、ルオは乾いた大地に血を滴り落とすオブジェを見ながら、大声を張り上げて満足げに笑ったのだと言う。

以上の悪行が、暴君ルオの名を世界に知らしめた最初の行であり、序の口であった。

玉座に座り、足を前に投げ出したルオは、なにかを思い出しように手を叩いた。

「ああ、そうだ。今朝の料理で舌を少し火傷したんだっただよ」

「『作った料理人を切り刻んで家畜の餌にしる』ですわね？」

『ライオンヘア』はルオのことを熟知しているのだ。

ルオは満足そうに笑った。

「君は最高の側近だ。ただ、信用はできないけどね」

「いいえ、アタクシは『貴方』に身も心も捧げた奴隷ですわ」

「嘘が上手だ君は。君が朕に仕えるのは科学と魔導の研究のためだろっ？」

「ええ、それもありますわ。でも、アタクシは本当に貴方を慕って

いるのよ。貴方は史上最悪の暴君だわ」

今まで立っていた『ライオンヘア』が跪き、投げ出されたルオの足に手を伸ばす。

ルオは自分の投げ出した足に靴の上から接吻する女を見下しながら、満足げな表情を浮かべて嗤った。

「お褒めの言葉ありがとう」

顔を見合わせて二人は、陰を纏いながら静かに静かに嗤った。

## 黄砂に舞う羽根「砂漠の都(3)」

少年は固いベッドの上で目を覚ました。

最初に少年が見たものは、茶色い染みのある灰色の天井。次に見たものは灰色の壁。それ以外はなにもなかった。そこは汚いベッドと灰色の壁しかない部屋だった。

ベッドから跳ね起きた少年は金属のドアの前に立った。ドアノブなどは見つからず、電動スイッチも見当たらない。つまりこちらからでは開けられないというわけだ。

少年がドアに向かってファイティングポーズを取ると、どこかで歯車の回る音がした。しかし、その音は徐々に弱くなり、やがて止まった。そして変わりに別の音が鳴る。

ぐうううううううう。

重い息について腹を擦る少年は、そのまま背中から冷たい床に寝転んだ。

「腹が減ってなにもする気が起きねえ」

少年の声が虚しく部屋に響いて消えた。

天井の染みを見つめながら、少年が虚ろな目をしていると、金属のドアがスライドして部屋の中に無精髭を生やした男が入って来た。部屋に入って来た体躯のいい男は、岩蛇に襲われていたところを少年が助けた男だった。

男の姿を確認した少年は眼の色を変えて飛び起きると、自分より背の高い男の襟首を掴んで叫んだ。

「この糞野郎！ 命の恩人をこんなところに閉じ込めやがって！」

「俺様は慈善家じゃないんでな、例え命の恩人でも素性が知れない者は信用できない。ここまで運んできてやっただけでも感謝しろ」

ぐうううううううう。

男の襟首を掴んでいた少年の手から力が抜けていき、ヘナヘナと少年は膝から崩れ落ちた。

「腹が減って……飯食わせる……」

男は腹を押さえてうづくまる少年を見下げながら、思わず口から空気を噴出して笑った

「腹いっぱい食わせてやるから付いて来い」

「俺をここに閉じ込めて置かなくていいのか？」

「おまえが目を覚ました時に、勝手に出歩かれると困るから閉じ込めて置いたただけだ」

「それだけか？」

「いや」

男は裏のある笑みを浮かべた。その笑みを見て少年はさして気にしないように鼻を鳴らした。

「ふ〜ん。で、あんた名前は？」

「人に名を聞くときは自分から名乗れ」

「俺の名前はアレン。で、あんたは？」

「俺様はトツシュ。この街じゃ、ちつとは知れた名だ」

「自慢なんて聞きたかねえ。早く飯食わせる」

「……口の悪いガキだな。付いて来い」

トツシュは頭をかきながら部屋を出て行き、アレンはその後を覚束ない足取りで付いて行った。

部屋の外は長方形の筒のような廊下が続いていた。

所々が茶色く錆びている廊下を照らす明かりは、等間隔に天井にぶら下がっている裸電球だけで、廊下全体が薄暗いために遠く先は闇だった

二人は足音を響かせながら廊下の奥へ向かった。

前を歩くトツシュが顔を向けずにアレンに話しかけた。

「ところでおまえ、魔導師か？」

「違う」

「じゃあ科学者か？」

「いいや。俺は魔導師でも科学者でもない、ただのガキさ」

この世界を支える二大柱は科学と魔導。

魔導と科学の融合により生まれた魔導炉により、膨大なエネルギーが二十四時間、止まることなく都市にエネルギーが供給される。しかもそれも過去の恩恵。今に残る『失われし科学技術』によって世界は成り立っている。

廊下の突き当たりには金属の梯子があり、それを登って二人は地上に出た。

アレンは自分たちの出てきたマンホールを見ながら興味深げに呟いた。

「おもしろいところから出たもんだ」

「他言しない方がおまえの身のためだ」

「なるほど」

すぐにアレンは理解した。このマンホールは秘密の出入り口と言ったところなのだろう。

辺りは朱色に染まり、石畳の路に影が射している。

左右は石などで造られた凹凸のない建物に囲まれ、もちろん人通りはない。

アレンはトツシュに連れられ裏路地を抜けると、そこは一変して人通りの多い歓楽街だった。

目がチカチカするようなネオンが街を照らしはじめ、得体の知れない出店が並び、娼婦たちが仕事をはじめている。夜が更けてくれば、もつとこの街は賑わうことだろう。

トツシュとともに人ごみの中を歩きながらアレンが呟いた。

「こんなデカくて活気のある街は珍しいな」

「この街にはなんでもある。武器も薬も　暴力もな」

「たしかに治安も衛生もサイテーだな」

まだ日が完全に落ち切っていないというのに、屋台で酒を引っ掛けて喧嘩をはじめている若者たちが目に飛び込んでくるし、汚れた路の片隅では鼠たちが食べものに集っている。

掘っ立て小屋のような店が並び中、トツシュがアレンを連れてきた店は豪華な門構えの店だった。

店内に入るとすぐに、大胆に切り込まれたスリットから脚を覗かせるチャイナドレスを着た美女に出迎えられた。

「いらつしゃいませトツシユ様」

店の女はトツシユの名を知っているようだ。

しばらくして、チャイナ服を着た別の美女が店の奥から出てきて、トツシユがなにも言わなくても店の奥の個室に案内された。

個室は朱色が多く使われ、部屋の真ん中には朱色をした円形の回転テーブルが置かれていた。

席に着いたトツシユはメニュー表をアレンに見せながらしゃべった。

「この店はエビチリが美味しいんだ」

「俺、辛いのが苦手なんだけど、この店辛そうなもんばっかだな」

「食わせてもらおう立場の奴が文句言っな」

「文句じゃねえよ、腹の中入ったらみんな同じだしな」

「それでおまえはなに頼むんだ？」

「うんじゃ、全部持って来させる」

「は？」

トツシユは眼を丸くして、半ば呆れたように口をポカンと開けた。面倒くさそうにアレンはメニューを全部なぞるように指差して口を開いた。

「聞こえただろ、ここに書いてあんの全部持って来させる」

「全部食っ気か？」

「もちろん、残さず食っ」

「よし、おい全部持って来い！」

トツシユが近くにいた店員に声をかけると、店員はドレスのスリットから脚を覗かせながら慌てたようすで厨房に走って行った。

しばらくして湯気の立つ料理が次々と運ばれて来て　消えた。

もちろんアレンの腹の中に。

腹の底に料理を流し込んでいく小柄な少年を見ながらトツシユがため息をついた。

「マジで食ってやがる。おまえの胃はジャンクイーターか……」  
ジャンクイーターとはゴミでも金属でもなんでも喰う怪物の名前だ。

アレンは口いっぱい豚肉を頬張って、それをウーロン茶で流し込んで喉を鳴らした。

「俺の胃は特別せいだかな。あんたの財産全部食ってもいいぜ」  
「それはやめてくれ」

トツシユは苦笑いを浮かべながら少し汗をかいた。

そして、店のメニューを全部食い終えたアレンは腹を擦りながら天井を仰いだ。

「食った食った、これで三日は食わなくても平気だ。飯食わせてもらったついでに、もうひとつ頼みたいことがあるんだけど、いいか？」

「あつかましい奴だな。言ってみろ」

「仕事の世話してくんねえか？」

「なにができる？」

急にトツシユの眼が鋭く光り、アレンは不適な笑みを浮かべた。

「なんでも」

「それは話が早い」

そしてトツシユも笑った。

トツシユの言葉からも伺えるように、彼ははじめからアレンにある話を持ちかける気であったのだ。

煙草に吹かせながらトツシユが仕事の内容を話しはじめた。

「仕事に頭は必要ない。ただ向かって来る敵を倒せばいい」

「ふん、ボディガードってことかよ？」

「目的はある物を手に入れることだ。それを手に入れるために、おまえは俺に手を貸す。簡単な仕事だろ？」

「簡単とは思えないけどな」

アレンは空気を察していた。目の前にいる男は小物ではない。それだけに仕事が簡単なものとは思えなかった。

無言でアレンは三本指を立ててトツシユの眼前に近づけた。それ

を見たトツシユが口を開く。

「三万イエンか？」

三万イエンもあれば、まあまあ困ることなく一年間暮らせる額だ。アレンは首を振った。

「いいや、三食昼寝付き」

「……おまえなあ」

「それから、報酬は五〇〇〇イエンでいい。前金に二〇〇〇イエン、仕事が終わったら残りの三〇〇〇イエン、もちろんキャッシュで」「その条件を飲もう」

と、トツシユが言葉を発し終えたときだった。爆音とともに厚い壁が粉々に吹き飛び、辺りが咳き込むような煙に包まれた。



## 黄砂に舞う羽根「砂漠の都(4)」

料理店の裏路地に集まった数人の人影は身を潜め、盗聴器によって厚い壁の向こうで交わされる会話の一部始終を聴いていた。

《仕事に頭は必要ない。ただ向かって来る敵を倒せばいい》

《ふん、ボディガードってことかよ？》

《目的はある物を手に入れることだ。それを手に入れるために、おまえは俺に手を貸す。簡単な仕事だろ？》

《簡単とは思えないけどな》

壁の向こうは店の個室で、そこにいるのは二人だけらしいことが確認されている。ここに集まっている者たちの標的は、そのうちのひとり トツシユと呼ばれる男だ。

《その条件を飲もう》

と盗聴器から聴こえた刹那、女の声が裏路地に響き渡った。

「突入！」

硝煙と爆音とともに分厚い壁が破壊され、店の中に一人の女と銃を構えた男たちが流れ込んだ。

アレンとトツシユは先の見えない煙の中を逃げようとしたが、席から立ち上がったのみで足を止めて、両手を高く上げた。

煙が晴れてくると、ハンディバズーカを持つ女が現れ、その後ろに従える男たちは小型マシンバルカンの銃口をアレンとトツシユに向けていた。

女は白衣のようなロングコートの裾を揺らしながら、ミニスカートから覗く脚を見せ付けるように歩き、ブーツの踵を鳴らしてトツシユに詰め寄った。そして、雄ライオンのような金髪ヘアをかき上げながら濡れた唇を舐めた。

「お久しぶりねトツシユ」

妖艶な声音だった。

この女の名前はライザ。『ライオンヘア』と異名される帝王ルオ

の側近だ。

トツシユは両手を挙げながら口にくわえていた煙草を床に吐き捨てた。

「そんなでもないだろう。前に遭ったのは一週間前だったか？」

ライザと話しながらもトツシユの目は他のところを観察していた。目の前にいるライザの持つハンディバズーカは、ライザが社長を務めるライザ社の最新型モデルで、発射する炸薬弾は感度が高く、威力も非常に大きい。しかも、どうやら正規の物ではなく、ライザ専用に改造が施されているようだ。

ライザの後ろにいる男たちの持つ銃は最新式の小型マシンバルカで、優れた連射性と集弾性を備えている。

この部屋の出口は元からあった出入り口の扉とライザが壁に開けた穴。壁にできた穴まで行くには小型マシンバルカを構えた男たちの中を通ることになり、逃げるとすれば出入り口の扉か？

だが、敵は連射性を備えた小型マシンバルカを装備している。バルカンを乱射されたら逃げ切るのは困難と言える。

トツシユは横で手を上げているアレンに目を向けた。

「どうにかできるかアレン？」

「いいや。まだあんたから金もらってないからどーもならん」

それは金さえもらえば、この状況を打破できるということか？

『ライオンヘア』は獲物でも物色する眼つきで、アレンを下から上に舐めるように見た。

「可愛らしい坊やね。トツシユといるからにはただの子供じゃないだろうけど……」

自分を見て舌舐めずりしたライザを見てアレンは悪寒を覚えた。

「俺はこんな男と一切関係ない。ちょっと飯をおごってもらっただけ」

もちろんアレンの言う『こんな男』とは他でもないトツシユのこと。まだ雇い主でない男に懸ける命は持ち合わせていないのだ。

一切の自分との関係を絶とうとするアレンの言葉に、トツシユは

呆れたように言葉を吐いた。

「……おいおい、そりやないだろ」

「だってまだ金もらってないもん」

「飯おごってやっただろ」

「あんたの命助けたからチャラだね」

「砂漠から運んでやっただろ！」

アレンとトツシユはこのまま喧嘩でもはじめそうな勢이었다。

それを止めたのはハンディバズーカを二人に向けたライザだった。

「アナタたち、自分の置かれている状況を理解しているのかしら？」

自分の置かれている状況を忘れていたトツシユが、鋭い眼つきで

ライザに振り向いて怒鳴り散らした。

「わかつてる！」

とんだとばつちりを受けたライザは、唇を尖らせて不満顔をする

「アナタたちはアタクシたちにいつ殺されても可笑しくない状況な

のよ。わかつたら口を謹んで、手を首の後ろに回して膝を付きなさい！」

「い！」

トツシユはすぐにライザの言うとおりにしたが、アレンは手を天

井に向けて上げたままで従うようすを見せなかった。

「だから俺はこんな男と関係ないから解放して欲しんだけど？」

とアレンが言っても無駄なようで、怒っている『ライオンヘア』

はハンディバズーカの銃口をアレンの顔面に向けた。

「さっさとアタクシの言うとおりになさい。そうすれば命は取らな

いわ」

「はいはい」

抵抗をあきらめたアレンはため息混じりの声を漏らして床に膝を

付いた。

ライザはアレンとトツシユをすぐに殺す気はないらしい。それに

疑問を覚えたのはトツシユだった。

「どうしてすぐに俺様を殺さん？ いつもなら容赦なく銃撃される

が、拷問にかけてジワジワと殺す気か？」

「拷問もいいけど、今のアタクシにアナタを権限はないわ。今日は商談に来たのよ」

商談に来たにしては物騒な格好だ。それに、この状況では一方的な取引しかできそうにない。だからこそトツシユは取引に応じるしかない。

「それでどんな商談だ？」

「『アレ』を手に入れるために力を貸して欲しいのよ」

ライザの言う『アレ』と聞いてアレンはすぐにピンと来た。トツシユはアレンを雇おうとした際に目的を『ある物を手に入れることだ』と言った。そして、『ただ向かって来る敵を倒せばいい』とも言っていた。さしずめ『敵』とは今目の前にいる輩のことだったのだろう。

少しの間、沈黙して考え深げに俯いていたトツシユが顔を上げた。「俺様に拒否権はないらしいが、報酬くらいはあるんだろう？」

この状況において報酬を要求するトツシユにライザは妖艶と微笑んだ。

「さすがは『暗黒街の一匹狼』さんだこと、肝が据わっているわね。報酬はアナタの命でどうかしら？ 今後一切、帝國はアナタの命を狙わない。アナタが帝國に危害を加えなければの話だけ」

「俺様の命か……魅力的な提案だが、金も欲しい」

「ふふ、一〇〇万でどうかしら？」

「その条件で飲もう」

商談が成立したところで、アレンがこの場に適さない間延びした声を発した。

「あのさあ、俺の処分はどうなるわけ？」

妖しい眼つきでアレンを見たライザは、上唇を舐めて熱い吐息を漏らした。

「坊やはアタクシが可愛がってあげるわよ」

アレンはゾクゾクと身を震わせて、わざと嘔吐するような仕草をした。

「オエー、そりゃ勘弁だ」

「アタクシはアナタみたいに性格の曲がった子が好きなのよ」

「俺はあんたの期待に添えないと思うけどな」

「あら、そんなことないわよ。それに『一匹狼』が雇った子だし、興味こそられるわ」

「まだ雇われてない」

「なら、アタクシが代わりに雇って差し上げるわ」

「それはお断り」

アレンは小型マシンバルカンを構える男たちに一瞥した。男たちの緊張の糸は全く途切れるようすはない。つまり、少しでも可笑しな動作を見せれば撃たれる。

どこかで歯車が激しく回転する音が聴こえた。その音にライザが気づいた時には、アレンが右足で床を激しく蹴り上げたところだった。そして、蹴られた床は四方に砕け、アレンは扉までの五メートルという距離を軽く跳躍した。

銃口から火を噴く小型マシンガンから弾丸が連射され、アレンに当たった三発の弾が高い金属音をあげて地面に落ち、最後に当たった一発がアレンの左肩の肉を貫いた。

「くっ！」

歯を食いしばるアレン。

アレンは銃弾を躲しながら、右手で拳を作って眼前の扉を激しく粉碎し、個室から飛び出すことに成功した。

鮮血が吹き出る左肩を右手で押さえながら、アレンは賑わう店内を跳躍した

店内で飯を食っていた客たちは、自分たちの座るテーブルを足場にして料理を滅茶苦茶にし、一メートル以上もの距離を跳躍する少年を見て目を白黒させた。

この店の個室は完全防音であり、店の賑わいもあつたのも相俟って、個室の壁がハンディバズーカによって破壊されたことに気づいていなかった。客たちはアレンが扉を破壊したときにはじめて騒ぎ

に気づいたのだ。

店を飛び交うアレンにマシンガンの銃口を向けられるが、それをライザが静止させた。

「もういいわ、騒ぎを大きくする必要もないわよ。それにあの子まだ詳しくは知らないんでしょ？」

ライザに顔を向けられたトゥッシュは大きく頷いた。

「どうせ盗聴してたんだろう。この店の中で話したことで全部だ」

「なら放置しても問題ないわね。でも、可愛い子を逃がしたのは残念だわ」

そう言ってライザは自分の人差し指を濡れた唇で軽く噛んだ。

## 黄砂に舞う羽根「砂漠の都(5)」

その日の夕暮れ、シスター・セレンはいつもどおり夕食の買い物  
を済ませ、自分の勤める教会へ足早に帰ろうとしていた。

セレンは生まれた時からこの街を出たことがなく、かれこれ一五  
年ほどこの街に住んでいるが、それでも夜は怖いし、この街の治安  
がいいとも思っていない。そのため、僧衣の下には、護身用として  
いつもハンドガンを忍ばせている。だが、そのハンドガンの銃口は  
これまで一度も火を噴いたことがない。

ネオンが店を彩りはじめ、屋台からは香ばしい肉やソースの焼け  
た匂いが漂ってくる。

武器や防具を扱うジャンクショップの横を抜け、セレンは裏路地  
の横を抜けるところだった。昼間ならば、この裏路地を通って教会  
に帰るのだが、日が落ちはじめからは通りたくない路だ。そのた  
め、いつもならば素通りするのだが、今日に限っては違った。

裏路地の闇から音が聴こえた。

「ちよつと嬢ちゃん、手を貸してくれないかい？」

それは中年男性の声音だった。

セレンは闇の中に顔を突っ込み、そこにいる男を確認しようとし  
た。セレンの頭には困っている人を助けなくてはいけないという使  
命感だけで、それが危険な行為だったことをすっかり忘れていた。  
仲間以外の人間と関わらないことが、この街でトラブルに巻き込ま  
れない鉄則だったにも関わらず。

薄暗い路地の中に入り、壁に寄りかかり腹を押さえて座っている  
中年男がセレンの目に入った熊のような男は顔を歪ませながら歯を  
食いしばり、見るからに苦しそうな表情をしていた。

「大丈夫ですか？」

とセレンが声をかけると、男は荒々しい息遣いで答えた。

「ちよつと腹の調子が……よくなくてよ……」

「悪い食べものに中つたん　！？」

セレンは物陰から突然現れた男によつて口を押えさられてしまったそう、一人が病人のフリをして、残りの一人が物陰に隠れて獲物を狙う。男たちは暴漢グループだったのだ。

普段、暴漢に襲われる割合が多いのはこの街の人間ではない。それが今、暴漢グループに襲われているのは、この街に一五年も住む者だった。セレンは自分の間抜けさを悔やんだ。

セレンの口は泥臭くて毛むくじゃらの分厚い手によつて塞がれ、真後ろにいる男の身体がセレンのヒップや背中にぴったりと密着している。時折、耳に吹きかけられる荒い息にセレンは身震いした。こんなときにセレンにできることは神に祈るのみ。だが、その祈りも通じない。

病人のフリをしていた男が立ち上がったかと思うと、セレンは乳房を鷲掴みされた。

「尼さんのクセになかなかいい乳してんじゃねえか」

目の前で舌舐めずりをする男を見てセレンは失神しそうになった。きつとこのまま男たちにいいようにされて、身包み剥がされて売られるか、殺されるか、するのだろうセレンはいつそのこと殺して欲しいと思った。

地面には先ほどセレンが羽交い絞めにされてしまったときに落とした買物籠があり、その周りには汚れてしまった野菜や果物が散らばっている。それを見たセレンの目頭は熱くなり、大粒の涙が頬を伝つて地面に次々と落ちた。嫌だ。

心の中でなにかが吹っ切れたセレンは、自分の口を塞いでいた芋虫みたいな指を、歯を立てて思いっきり噛んでやった  
「痛えっ！」

情けない声をあげて男がセレンから身体を放した瞬間、セレンはその隙を突いて僧服の裾を捲り上げ、太ももに装着していたホルダーからハンドガン抜いて構えた。

銃口を向けられた男は両手を高く上げ、セレンに指を噛まれたも



う一人の男は、噛まれた指を口に銜えながらセレンから距離を取った。

「わ、わたしから離れて、さっさとどこかに行ってください……さ、さもないと撃ちますよ！」

セレンは自分では凄みを効かせて言っただつてもりだつたのだが、その言葉は振るえ、ハンドガンを構える手も大きく震えていた。それを見た男は銃口を向けられながら嗤った。

「嬢ちゃん、ちゃんと銃口を向けないと当たんねえぜ」

そのとおりだつた。セレンの手は震えていて、銃口は男から明後日の方向を向いている。これではとても銃弾が命中するとは思えない。

「撃ちます、本当に撃ちますよ！」

セレンは叫ぶが、もはや男たちは信じていない。この女には撃てないと確信している。

口から指を抜いた男がセレンにジリジリと詰め寄り、セレンの前にいる男の巨大な手が伸びる。

「撃ちます！ あっ!?!」

撃てなかつた。セレンは手首を掴まれて捻られ、そのままハンドガンを地面に落としてしまった。銃を持っているだけでは、護身用にはならないのだ。

セレンの身体は巨漢の男によって力のまま地面に押し倒され、僧衣が泥で穢された。

再びセレンは男に捕まり、もう一人の男がハンドガンを拾い上げてまじまじと見詰めた。

「こりやマガジンが装填されてねえぞ。がははっ、こんな玩具で冷や汗かいて損したぜ」

ハンドガンには弾が入っていなかった。これではセレンが引き金を引いても弾は出るはずもなかった。銃の取り扱いに慣れていないセレンは、そんなことも気づいていなかったのだ。

シスターに覆いかぶさる熊のような男が、穢れを知らない乳房を

激しく揉みしだく。

「止めっ!？」

叫ぼうとしたセレンの顎が無理やり閉じられた。自分の顎から伸びる毛むくじやらの腕をセレンが目線で追うと、そこにはニヤついた男の顔があった。セレンは熊男の上に乘られて胸を掴まれ、もう一人の男には顎を無理やり閉められ叫ぶこともできなかつた。

再びセレンは心の中で神に祈りを捧げた。

そのときだつた。

裏路地に缶カラを蹴飛ばしたような音が響いた。

男たちは耳を尖らせて、音のした方向を勢いよく振り向き、熊男が声をあげた。

「誰だてめえ!？」

「俺のこと? ただの通りすぎり」

闇の奥から現れたのは左肩を手で押さえた少年だつたその押さえられている手からは、紅い血が滲み出していた

セレンは神に感謝した。これで自分は助かるかもしれない。けれど、次の少年の言葉にセレンは愕然とさせられた。

「ちよつと横通るけど、俺のこと気にしないでお楽しみを続けて」

この言葉に男たちは口を開けてきよとんとした。

少年の態度は男たちが怖いとか、関わりたくないとか、そういうものではなく、本当にどーでもいいと言つた態度だつた。この少年は、少年の顔を持つた冷酷無慈悲の悪魔かもしれない。

空気の横を通るように少年は男たちの横を歩いていく。

このときほどセレンは自分の不幸を呪つたことはなかつただろう。救いの手が現れたと思つたら、それは悪魔だつた。だつたらはじめてから手なんて差し伸べて欲しくない。ぬか喜びとはこのことだ。

だが、話の展開は少し違つた方向に向かうことになつた。セレンの顎を押さえつけていた男が、セレンを解放して立ち上がり、少年の背中に向かつて叫んだのだ。

「おい小僧、俺たちの顔見たからには生かしちゃおけねえ!」

そう言った男の手には銀色に輝く刃のギザギザしたナイフが握られていた。

振り返った少年はすごく機嫌の悪そうな顔をして、自分の左肩から右手を離し、その手で紅く染まった右肩の傷口を指差した。

「俺さ、今すぐーく機嫌悪いわけ。なんでかつつーと、撃たれたから。マジで痛くてイライラすんだよ！」

歯車の回転する音が裏路地に響いた刹那、ナイフを持った男の左頬を少年の拳が激しく抉った。それは目にも止まらぬ速さだった。

少年に殴られた男は五メートルほど宙を飛び、地面に落ちてからは服に泥をつけながらゴロゴロと五メートルほど転がった。

相棒が一発でヤラれたのを見て逆上した熊は、頭に血を昇らせてセレンの上から立ち上がると、なにも考えずに猪突猛進で少年に素手で殴りかかった。しかし、少年は赤子相手のように軽く熊を躲し、熊の腹に左膝で一発喰らわせてやった。それで熊はノックアウト。

少年は口から泡を吹いてうつ伏せになる熊の尻を踵で蹴飛ばし、満足げな笑みを浮かべた。

「糞つたれが。俺に喧嘩売ろうなんざ一億年早えんだよ」

そう言って少年は熊の後頭部に唾を吐きかけた。

目の前で繰り広げられた出来事に啞然としていたセレンであったが、我に返って地面から立ち上がり僧衣についた汚れを手で払うと少年の前に立ち、大きく右手を振り上げた。

「この人でなし！」

バシン！

日も沈み真つ暗になってしまった裏路地に鳴り響く音。

セレンは涙ぐみながら少年の頬を叩いた。

普段であれば人に手を上げるなどしなかっただろう。しかし今は、極限状態の恐怖から解放されることにより、いろいろなことが思い出されて頭に血が昇っていた。

なにがセレンの感情を高めたかというと、それは少年の行動にある。

「あなた、わたしが襲われてたというのに、助けもしないで立ち去ろうとしましたよね！」

「別にいいじゃん、結果的に助けてやったろ？」

「助けて頂いたのは感謝いたしますけど……あっ!？」

会話の途中でセレンは目を丸くして、自分の口をはっと思を呑みながら手で押さえた

セレンの視線は少年の左肩に注がれていた。そして、紅く染まる少年の肩を見ているうちに、セレンの顔からスーッと血の気が引き、頭に昇っていた血が一気に足元まで落っこちた。

「だ、大丈夫ですかあ!？ 肩から血が出ているじゃありませんか、すぐに手当てしないと! あ、あの打ったりしてごめんなさい、ちよっと冷静さを欠いていたみたいで……」

と言っているセレンは今も冷静さを欠いているようだった。

目の前で慌てふためく年端も行かぬ尼僧を見て、少年はため息をついてパイロットハットの上から頭を搔いた。

「肩の怪我なんか大したことねえよ」

少年とセレンの歳は同じくらいだと思われるが、二人の纏っている雰囲気は明らかに違った。セレンはおどけなさの抜けない少女であり、少年は口も性格も悪いただのガキのようだが、少年はセレンとは明らかに違う影を纏っていた。

歩き去ろうとする少年の背中をセレンは見送りそうになってしまった。なぜだが、少年の背中に声をかけることに気が引けたのだ。

しかし、セレンは喉から声を絞り出した。

「あの、待ってください。病院まで付き添います!」

少年が無愛想な顔つきで振り返った。

「病院は行かねえ」

「駄目ですよ、病院に行かなきゃ!」

「俺って頑丈だから、血なんてとっくに止まってんし。病院とかあんま好きじゃねえんだ」

「では、わたしの家で手当します」

「一晩泊めてくれんなら行く」

「えっ」

少年は悪戯な笑みを浮かべ、それを見たセレンは少し戸惑った。だが、命の恩人であり怪我人である少年をこのまま放って置くわけにはいかず、セレンは首を縦に振った。

「わたしの家は寂びれた教会ですけど、それでよろしければお泊めします」

「うんじゃ、泊めてもらうわ。で、あんた名前は？」

「わたしですか、わたしはセレンと申します」

「ふうん、俺の名前はアレン、よろしく」

差し出されたアレンの真っ赤な右手を見てセレンは少し戸惑った。アレンの手は乾いてひび割れた黒い血に覆われていた。そんな手で握手を求められても困ってしまう。

すぐにアレンはセレンの表情を悟って、服で手についた血を適当に拭い去り、再び右手を差し出した。けれども、乾いた血は拭い去れず、また少し付いていたが、セレンは相手の好意を裏切つてはいけないと思いアレンの手を握った。

柔らかかった。アレンの手は思ったよりも柔らかくて温かい手だった。そのことにセレンは少し心を解きほぐす。

「柔らかくて赤ちゃんみたいな手ですね」

そう言われた途端、アレンは握っていたセレンの手を激しく振り払い、唇を尖らせて怒ったようにそっぽを向いた。

「俺は赤ん坊じゃねえ。ほら、さっさとあんたんちに案内しろよ」

「別にそういった意味で言ったんじゃないですけど……。わかりました、わたしの家に案内します、付いて来てください」

なぜ相手に態度を悪くされたのかわからないまま、セレンはしゅんとした表情で歩きはじめた。が、その足が急に止まる。

「ああっ！？ 夕飯のおかず！」

地面に散乱する野菜や果物を見て、セレンの瞳は少しずつ濡れはじめていた。それでもセレンは涙を堪えて、黙々と地面に落ちて汚

れてしまった食べ物を拾い集めて籠の入れていく。

籠の中にリンゴ持った手がそつと入る。それはアレンの手だった。

「洗えば食えんだからクヨクヨすんなよ」

別にそういうことで泣きそうになってるんじゃない。セレンはそう思いながらも、アレんに優しさを感じて嬉しかった。

最初の印象よりも悪い人じゃないかもしれない。

## 黄砂に舞う羽根「砂漠の都（6）」

街の奥まった道の先にある寂びれた教会。そこに訪れる迷える子羊たちはいない。この教会に出入りする者は、今やセレンただ独りだった。

所々、屋根や壁が風化し、破損してしまっている教会の外観を見て、アレンは正直な感想を口にする。

「これ本当に教会かよ、寂びれてんなあ」

この言葉を聞いてセレンは少しムツとしたが、すぐに悲しい表情をして呟くように話した。

「昔から寂びれた教会だったんですけど、三年前に神父様がお亡くなりになってからは、前にも増して寂れてしまつて……。今このころ新しい神父様が赴任して来る予定もありませんし、今この教会に勤めているのもわたしだけですし……」

「フーことは、あんた独りで暮らしてることかよ？」

「ええ、三年前からは独りでこの教会に住んでいます」

そのため、セレンは裏路地でアレンに一晩泊めてくれと言われた時に、少し戸惑いを覚えて躊躇した。

女独りで暮らしている家に、たとえ命と恩人と言つても男を泊めていいものか。それにまだ相手の素性もわかっていないのに。それでも首を縦に振ってしまったのは、困っている人を見ると放っておけないセレンの性格だろう。その性格が幾度となくトラブルの種になったのは言うまでもなく、今日の出来事は最も最悪だった。

目の前にある教会は寂れていて、物静かな印象を受けるが、どこからともなく激しい地響きのような音が聴こえてくる。

「あおさ、近くで工事とかやってんの？」

アレンが尋ねるとセレンが大きく首を振った。

「一ヶ月ほど前から近くで工事をしているみたいで、今まで静かだったんですけど、先日から急にうるさくなって困ってるんです」

「ふ〜ん」

二人は壁と壁に挟まれた細い道を通って教会の裏手に回った。そこには小さな庭があり、そこで見た物にアレンは感嘆の声をあげた。「こりやすげえな」

そこにあつた物は綺麗に咲き誇る色取り取りの花だった。

美しい花壇の横には湧き水の流れる水路があり、水のせせらぎとともに甘い香りのする風が爽やかに吹く。この場所は、この街のオアシスと言える場所だった。

セレンは花々をかけがえのない存在として、大切に思う眼差しで見つめた。

「神父様は花を育てるのが好きな方でした。今でもわたしがそれを受け継いで育て、少しでも生活の足しになればと売っているんですよ」

「ふ〜ん、クーロンで大地に咲く花を見るなんて思ってたなかった」  
クーロンと呼ばれるこの街は、街としては大きく繁栄しているが、その大地は汚れ、枯れ果てているために栄養価もなく、花が咲くに適してるとは到底言えない。

教会の裏口から建物の中に入り、アレンはセレンに連れられるままに薄暗い廊下を歩いた。

廊下を歩いている途中で、不意にセレンがアレンに声をかけた。

「アレンさん、その床が」

「うわっ!？」

急に木造の床が割れ、アレンは抜け落ちた床に片足を取られてしまった。

事故とはいえ、大事な教会が壊されてしまったことにセレンは頭を抱えた。

「腐ってるって言おうとしたのに……もう、これからは気をつけてくださいよ」

「だったら、早く言えよ」

「だって、わたしはいつも意識せずに避けてるから、ついつい言い



そびれてしまっただんです！」

「フーかさ、腐ってるってわかってんなら直すとかしろよ」

「直すお金もないですし、わたし大工仕事なんてできません！」

「なんであんな怒ってんだよ、床が抜けたのは俺のせいじゃないだろ」

「だって……」

生まれて間もないときからセレンはこの教会で育った。この教会はセレンにとって掛け買いのない大切な場所であり、事故であったといえ、その大事な場所が壊されることに怒りがこみ上げてくる。頬を少し赤くしながらもセレンは高ぶる感情を抑え、アレンをあの部屋に案内した。

「ごんまりとした小さな部屋にはベッドとダンスが置いてあるだけだった。」

「長い間使っていませんでしたけど、この部屋を一晚使ってください」

セレンは長い間使われてないと言ったが、その部屋の床にもタンスの上にも埃なく、アレンがベッドに腰掛けても埃が空气中を舞うことはなかった。そのことから、この部屋が定期的に、セレンの手によって掃除されていることが伺えた。

「わたしは包帯と消毒薬を持って来ますから、この部屋でじっとして待っていてください」

「わかった」

セレンはアレンを部屋に残し、自分の部屋に救急セットを取りに向かった。

廊下を歩きながら、セレンは今さながらアレンを連れて来てしまったことを後悔する。しかし、この家には盗まれるような物はなく、アレンが自分ことを襲うような人とは思えない。でも、やはり見ず知らずの人を泊めることに不安はあった。

アレンは悪人ではないが、善人とも思えない。それがセレンの感想だった。

救急セットとタオルとバケツに張った水を持ったセレンは、アレンの待つ部屋のドアをノックもせず開けた。

「……………!?!」

部屋に入った途端、セレンは息を呑んで目を丸くした。

あまりの驚きにセレンは荷物を落とすことなく、ただ固まってしまうばかりで、アレンから目を放せずいた。

セレンの視線の先には服を全て脱いでいる、全裸の状態のアレンが立っていた。

全裸を見られているアレンは気にすることもなく、セレンに声をかけた。

「ちよつとさ、背中見てくんない?」

「え、あつ……………」

自分に背中を向けるアレンから、セレンはまだ目を放せずいた。そこにあつたモノがただの男性の裸だったら、セレンは目を両手で覆って視線を逸らせたに違いない。しかし、そこにあつたモノは違つたのだ。

柔らかな曲線を描く脚の付け根にある小ぶりなお尻は、発達途中の少女のお尻のようであつたが、大きく形良く膨らんだ胸は見ているだけでセレンもドキツとしてしまう。そう、アレンは女だったのだ。しかも、セレンを驚かせたのはそれだけではなかった。アレンの右半身は鼠色に輝く金属によって覆われていたのだ。

その場で動けなくなっているセレンの目の前までアレンが移動した。

「俺の身体ジロジロ見て、エッチだぞあんた。もしかして、そつちの趣味があんのか?」

「え、違います、別に女の人が好きとかじゃなくて、その身体……………」

「サイボーグだよ。こん中に入ってる臓器も半分は人工臓器」

そう言つてアレンが右胸を叩くと、金属の鳴り響く音がした。アレンの右の乳房は左と形の上では差異なく再現されているが、やはり鼠色の金属でできていた。

アレンはセレンの手からタオルと水の張ったバケツを取り上げ、タオルを水で浸すと、右肩についた血の痕を拭きはじめた。

血の拭き取られた傷痕は大きな瘡蓋になっていた。通常の人間ではありえない回復の速さなのを言うかでもない。

水の張ったバケツの中に紅く染まったタオルが投げ入れられ、バケツの中から水が床の上に少しはね飛び散る。そして、アレンはセレンに向かって背中を向けた。

「背中ちよつと見てくんない？」

言われたとおりセレンがアレンの背中を　　というより、アレンから目を放せずにしたセレンが背中を見ると、そこには黒い煤がついたような跡が三つ並んでいた。その三つの後を線で繋げた先に、右肩の傷痕がある。この三つの跡はアレンが料理店で銃弾を受けたときのものであった。

「黒い煤汚れみたいな跡が三つありますけど？」

「そこんとこさ、へこんだりしてない？　ちよつと手で擦ってみて」  
言われたとおりセレンはアレンの背中に触れた。温かった。

金属の背中は予想とは違い温かく、人の温もりが感じられた。しかし、人肌とは違い、硬い金属であることには違いなかった。

セレンが弾の痕を指先で擦ると、黒い煤が指先に残るだけで、アレンの背中にはへこんでいる痕もなにもなかった。

「別にへこんでもませんけど？」

「やっぱな。あんな弾くらいでへこむはずないんだけど、いちよー確かめないとな」

「弾って、もしかして撃たれんですか！？　もしかしてこの傷も？」  
にしては治りが早いことにセレンも気が付いた。

「貫通したから治りが早く助かったぜ。炸裂弾とか喰らってたら泣いちゃうとこだったよなあ」

振り返ったアレンはセレンに向かって笑った。その笑みをみたとき、セレンはとんでもない人と係わり合いになってしまったことに気づいた。目の前にいる少年のような少女は、ただの人間ではない。

アレンは自分のお尻や脚などを見回すと、満足そうに頷いた。

「他は撃たれたないみたいだな」

服を着替えはじめのアレンを見て、セレンはこれからこの少女とどうやって接すればいいのかを一生懸命、頭をフル回転させて考えていた。

まず、少年だと思っていたアレンが少女だったことで、それなりに態度が変わってくるだろうし、それよりもあの鼠色の身体を見てしまっっては……。

アレンは軽くサイボーグと言ったが、あんな大掛かりな物は今だからって、セレンは見たことも聞いたこともなかった。きっと、半身をサイボーグ化する技術は現代の技術ではなく、今に残る『失われし科学技術』によるものだろう。しかし、それでも誰がその技術を使ってアレンにサイボーグ手術を施したのかわからない。そんな技術を使いこなせる者が、この世に何人いるのか？

「あの、アレンさんって……」

と言っ、セレンは口を噤んだ。

「俺がなに？」

「別にいいんです。それよりも、夕飯食べますよね？ 粗末なものしかありませんけど」

「夕飯はいらねえ。さっき腹いっぱい食って来たところだから……ま、代金は高かったけど」

苦笑いを浮かべるアレン。それを見てセレンはなにを思ったか、こう口にした。

「食い逃げですか？」

「はっ？ 食って逃げたには逃げたけどさ、別に食い逃げじゃねえし、相手が一方的に撃って来たんだしさ」

「お金は持つてるんですか？」

「一文無し」

「やっぱり食い逃げしたんじゃないですか！」

「なんか勘違いしてねえか？ 俺は普通にトツシュって野郎と食事

してたら、変な女が配下の野郎どもをみたいのを引き連れて来て、気づいたらマシンガンでズドドドドドドって撃たれたわけよ」

「トツシュって、『暗黒街の一匹狼』と呼ばれる人のことですか！？」

「そーいやー、そんな呼ばれ方してたような、してなかったような？」

「あなたいったい何者なんですか！？」

これが一番聞きたかったことだった。

「何者って聞かれても困るよなあ。俺は俺だし、決まった職業に就いてるわけでもねえしな」

誤魔化されているのか、本心からこんな回答をしているのか。アレンの表情からは窺い知ることはできなかった。

セレンはアレンから聞くことをやめた。世の中には知らない方がいいことが多い。きつと、目の前にいる少年に似た少女とは、深く係わり合いにならない方がいい。それがセレンの答えだった。

「わたしはこの部屋を出て右の突き当たりの部屋にいますから、用があつたら訪ねて来てください。じゃあ」

セレンは足早に部屋を出ようとしたが、それを真剣な顔をしたアレンが止めた。

「あのさ」

「なんですか？」

「トイレどこ？」

「……はい？ え、えつと、部屋を出て左の突き当たりです」

「あながと、じゃな」

人懐っこい笑みを浮かべるアレンに手を振られ、セレンはなんとも言えない表情で部屋を後にした。

## 黄砂に舞う羽根「砂漠の都（7）」

その坑道が発見されたのは偶然だった

武器の運搬を秘密裏に行うために坑道を掘り進んでいたところ、その新たに掘り進めていた坑道と古い坑道が偶然にぶつかったのだ。古い坑道を見つけたトツシユは武器運搬計画を早々に取り止め、失われた科学技術の発掘に乗り出した。

『失われし科学技術』の発掘は少人数で行われ、ダイナマイトなどは使用せずに、小型ドリルなどを使用し、地上に情報が漏れないように最大限の注意を払って行われていた。この場所は街の真下だった。そう、ここはクーロンと呼ばれる街の真下だったのだ。

最大限の注意を払いながらも、秘密はどこからか漏れるもので、もつともトツシユが気を払っていたはずの相手に嗅ぎ付けられしまった。それがクーロンの南に広がる砂漠の中心に存在するシユラ帝國の若き王 皇帝ルオだった。

街の外れのただの工事現場に偽装されていた空き地。そこに昨日から大量の人や、トラックに乗せた機材が運び込まれた。中でも一番目を引いたのは坑道掘削装置だった。

坑道掘削装置とはトンネルを掘るための機材であり、動力は魔導炉から供給されるエネルギーである電気だ。その全長は一四・九メートル、全幅二・八メートル、全高一・八から三・五メートルで重量三〇トン。先端に取り付けられたドリルには棘のような物が並び、それで岩などを砕きながら、約一時間の間に三〇メートル掘削することができる代物だ。

次々と運び込まれてくる機材を見ながらトツシユが頭を掻いた。

「つたくよー、俺様が街の奴らにバレねえようにしたのに、はあ」  
ため息をつくトツシユの横で、『ライオンヘア』が前髪をかき上げながら掘削装置を眺めていた。

「アナタのやり方じゃ、全坑道を見つげ出して掘り起こすのに何ヶ

月にかかることかしら？」

「一ヶ月くらいじゃねえか？」

「アタクシたちは三日でやるわ」

「雑な仕事して街のあちこちが陥没しそうだけどな」

「何事にも多少のアクシデントや犠牲はあるわ」

「そーですかい」

今のトツシユは帝國に牙を抜かれた狼だ。

トツシユの傍には常に彼を監視し、命を狙うライザ直属の軍隊

獅子軍の精鋭が最低三名は付いている。それに加え、トツシユの

腕にはブレスレット型発信機が付けられている。今のトツシユはト

イレの中ですら気が休まらない。

と、思いきや。トツシユは大あくびをしながら、眠そうに目を両

手で擦っていた。

「俺様は旅から帰って来て疲れてる。寝かせてもらう方がいいか？」

「駄目よ、アナタからは聞きたい話が山とあるわ。それに」

肉食獣のようなライザの金色の瞳がトツシユを放さない。

「アナタが街の外になにをしに行ったのか聞かせてもらいたいわ」

「女遊びをしに行ったただだが」

明らかに嘘だとわかる言葉だったが、それを平然とトツシユは言

つてのけた。

「どんな遊びだったか詳しく聞きたいわ」

ライザは微笑みながらトツシユの頬に平手打ちを喰らわせた。

避けられたものをトツシユは避けず、微動だにせず受けてたつた

紅く染まった頬を気にすることなく、トツシユは不敵に微笑を浮

かべた。

「女をヒイヒイ言わせてた。だが、たまにはこうやって女に甚振ら

れるのもいいもんだ」

たとえ牙を抜かれても、狼の精神は変わらない。

「いいわ、話は少しずつ聞かせてもらうわ。まずは坑道の中に入り

ましょう」

踵を返し、白いコート裾を揺らすライザが坑道の入り口に向かって歩き、そのあとを背中に銃を突きつけられたトツシユが付いていった。

坑道の入り口は高さ三メートルの幅が四メートル。中も同じくらいの広さで、急な下り坂になっている。

オレンジ色のライトが点々と照らす坑道の中をしばらく歩き、先頭を歩いていたライザの足が止まった。彼女の視線の先には金属の扉があった。

「この扉なんだけど、魔導学と科学の権威であるアタクシにも開けることができないのよ。もちろん破壊も試みたけど傷も一切付かず」「俺様もいろいろやったが無理だった」

不気味な輝きを魅せる金属の扉。見た目はどうってことのない、まっ平らな板のような扉だった。それが開かない。

扉の前で腕組みをするライザ。

「なら、扉を無視して別の場所に穴を開けて中に入るうかしら?」

「俺様がすでにやった」

「知ってるわ」

ライザがこの坑道にはじめて足を踏み入れたときにはすでに、この扉までの道が掘り進められ、ライザが言った方法をトツシユが試した痕跡もあり、金属の壁の前で止まっている穴がいくつもあった。うーんと唸ったライザは金属の扉をブーツの踵で蹴り飛ばしたあと、振り返ってトツシユに話しかけた。

「で、アナタはどうやってこの扉を開ける気だったのかしら?」

「さあな、手詰まりって感じた」

「……あ、そう」

ライザの足が振り上げられ、扉を蹴飛ばしたのと同じ踵がトツシユの腹を抉った。

「うっ!」

トツシユは微動だにはしなかったが、その口元からは空気の塊が吐き出された。



「次は股間にいくわよ」

トツシユの股間の膨らみを見ながら妖艶と笑うライザの脚が再び動く。

だが、トツシユがついに動いた。

ライザの脚を軽く躲し、後ろにいる銃を構えた三人の男たちよりも早くトツシユは動いた。

鋭い眼で狙いを定めたトツシユは銃を持っていた一人の男に襲い掛かり、腹を深く殴り、すぐにその男の後ろに廻り込んで、男を盾にしながらか銃を奪い取った。

盾になっている男は、それだけでも通常の銃弾を防ぐことのできる合金素材で織られた防護服を着用し、その上から多層構造の繊維素材で作られた防弾ベストを着ていた。文字通り、この男はトツシユの盾となっている。

しかし、残った二人の男がトツシユを撃てない理由は他にもある。トツシユの持つライフルの銃口はライザのこめかみに向けられていたのだ。

あっさりとしてやられたことにライザは頭を抱えた。

「ウチの精鋭が野犬に軽々とあしらわれるなんて、サイテーだわ」

悔しそう眉をひそめるライザのこめかみには、今もトツシユが銃口を向けている。

「形勢逆転はしたが、これからどうしたものか？」

敵の銃を奪い、人質も取った。がしかし、坑道の中は帝國軍の兵士たちで溢れ、そしてもう一つ。

「アナタの腕に付いているブレスレットのことをお忘れかしら？」

「いいや」

そう、トツシユの腕には発信機が付いていた。しかも。

「アナタに言い忘れていたことがあったわ」

不敵に笑うライザを前にして、トツシユも少し嫌な表情をする。

「なんだ、言ってみろ？」

「そのブレスレットが爆発するわ」

「そいつは困ったな」

さも困ってないように言ったトツシユは、銃の引き金から指をな  
るべく外さないようにして、ブレスレットをしていた右手から左手  
に銃を持ち替えた。

「俺様の右半身が吹っ飛んだら、残った左手でおまえの脳味噌を吹  
っ飛ばす」

それは本気だった。この男なら必ずやるとライザも確信した。

「アナタならたとえ死ぬことになって、最後に敵に報いて死ぬでし  
ょうね」

「俺様はただじゃなにもしない」

そして、ライザはついに折れた。

「わかったわ、アタクシを人質にしてどこまで逃げられるかやって  
みなさい」

「最後まで逃げ切ってみせる」

トツシユが笑う。それは自信の表れだった。

黄砂に舞う羽根「砂漠の都（8）」

夕飯をついついいらないと行ってしまった手前、アレンのすることと言ったら寝ることしかなかった。

いびきを立てて脚を大きく広げて寝ていたアレンが突然の目を開けた。

なにかが爆発したような物音が聞こえたのだ。

しかし、彼女はまた目をつぶって寝ようとした。

どこでなにが起きようと、自分の直接危害が加えられなければ、関係ないのだ。

しばらくして、再び爆発音がした。今度のものは先ほどよりも大きく、建物が古くボロいせいもあるが、大きく建物が揺れた。

さすがのアレンもこれにはキレたようで、ベッドから上半身を起して怒鳴り散らした。

「俺のジンサーの楽しみは寝ることと食うことだ！俺の楽しみを奪う糞野郎はどこのだいつだーっ！」

ベッドから跳ね起きたアレンは、適当に投げ置いていたパイロットハットを被り、部屋の外に飛び出した。

「きゃっ！」

可愛らしい声を出したのはもちろんアレンではない。部屋を急に飛び出して来たアレンにぶつかって、床に尻餅をついているシスタ・セレンだ。

「もお、いきなり部屋から飛び出して来ないでくださいよ！」

「あなたの注意力が足らねえんだよ」

「もお！」

顔を膨らませて怒ったセレンは、アレンを無視するように廊下を走って行ってしまった。その後をアレンが追って、すぐにセレンの横に付く。

「あんたも馬鹿デカイ物音聞いたんだろ？」

「だから外に向かつてるんです！」

「なんの音だと思う？」

「わからないから見に行くんですよ！」

「そりゃそーだ」

二人はボロボロの椅子の置かれた静かの聖堂を抜け、教会の前の通りに飛び出した。

すぐにセレンが空に立ち上る煙を見つけた。

「あそこはたしか工事現場」

「銃声だ」

アレンが呟いてすぐ、通りの曲がり角から人影が現れ、地面を激しく蹴り上げながらこちらに向かつて走って来た。

何者かに追われているような人影は、アレンたちの前を通り過ぎようとしたのだが、ふとアレンの視線が人影と合った。

「あんたは」

「おう、いいところで会った、俺様を匿え！」

セレンは目を丸くしたまま謎の男に押され、アレンとともに聖堂の中へ後ろ歩きで押し込まれてしまった。

謎の男は聖堂の扉を閉め、アレンとセレンに向かつて振り返った。その男はトツシュだった。

「とにかく俺様を匿え、礼はする」

次の瞬間、聖堂の扉が激しく開けられ、ライフル銃を持った数人の男たちが聖堂の中に流れ込んで来た。

「怪しい男を見かけなかったか！」

男たちは入って来るなり、アレンのセレンに銃を向けた。

もちろん『怪しい男』とはトツシュのことだが、トツシュの姿はすでにどこにもない。そこには古びた聖堂があるだけだ。

アレンは大あくびをしながら、受け答えをする。

「爆発音がしたみたいだから外に出ようと思ったんだけどさ、なんかあったの？」

「貴様らの知ることではない！」

「はいはい、そーですか。怪しい奴なんか見てねえよ。こっちにいるにはシスターだし、嘘は付かねえから、さっさと別んとこ探した方がいいぜ、追ってる奴が逃げちゃうよ」

アレンの言葉に続いてセレンがひと押しする。

「神聖な神の家に銃を持ち込まないでください、お願いします」

丁重に頭を下げるセレンであったが、男たちは構わず聖堂内を捜索しようとした。

だが、外の通りから男の声が聞こえて、足が止まる。

「怪しい男がいたらしいぞ！」

聖堂から男たちが無愛想な顔をして無言で出て行く。アレンが背中唾を吐きかけたことにも気づかず。

一気に肩から力の抜けたセレンは早々に聖堂の扉を閉めた。すると、今までどこに隠れていたのか、トツシュがひょっこりと顔を出した。

「ブレスレットを外して男にプレゼントしたのが効いたな。俺様の悪運も大したもんだ」

「わたしは不幸のどん底です」

セレンは深くため息をついた。今日は特についてない。

裏路地で男たちに襲われ、謎の少女を家に泊めることになり、今度は謎の男をその場の空気に流されて匿ってしまった。今朝割った卵に黄身が二つ入っていたが、もしかしたらその時に今日の運を使い果たしてしまったのかもしれない。

木製の椅子に腰掛け、煙草に火を点けたトツシュの顔が、薄闇の中に浮かび上がる。

「さてと、匿ってもらった礼はどうするか。一五〇〇イエンでどうだ？」

「一五〇〇イエンですか!？」

思わず声をあげてしまったセレンを見て、トツシュがうんと唸る。

「それでは満足できないか。三〇〇〇イエンでどうだ?」

「違います、お金とかじゃなくて……」  
さつさと出て行って欲しかった。

これ以上ごたごたに巻き込まれたくない。それがセレンの本音だった。

「金じゃないと来たか。そんなことを言う人間がこの街にいたなんてな、さすがは教会だ。そんな慈悲深いシスターにお願いがあるんだが、一晩泊めて欲しい」

トツシュの言葉に、さすがにセレンは頭を抱えてあからさまに嫌な表情をした。泊めて欲しいイコール匿って欲しいと同じ言葉だ。だが、セレンはうなずいてしまった。

「わかりました、一晩お泊めします」

「ありがとうシスター」

景気のいい声でトツシュは言うが、セレンにしてみれば悪い。

煙草の煙を天井に向かって吐いたトツシュの前にアレンが立った。

「あんたさ、まだ俺のこと雇う気ある？」

「前金は払える状態じゃないぞ。それに三食昼寝付きも難しそうだ」

「一万イエンで手を打ってやるよ」

「五〇〇〇イエンじゃなかったのか？」

「条件が変わったし。あー、それとさ、こっちのシスター・セレンへのお礼はこのボロ教会の建て直しでいいよ」

勝手に自分へのお礼を決められたセレンは声を荒げた。

「そんなこと頼んでいません」

「あんたさ、お礼はちゃんと貰わないと駄目だぜ」

アレンの言葉にセレンの心が揺らぎ、彼女がトツシュに頭を下げようとした瞬間、トツシュが先に口を開いた、

「匿ってもらっただけで教会建て直しとは高くついたな」

言われてみればそうだ。セレンはなんてとんでもないお願いをしようとしていたのかと、自分を恥ずかしく思っ顔面を赤らめた。だが、トツシュの次の言葉に目を丸くした。

「だが、たまにはカミサマにコネを作って置くのも悪くない。よし、

「二〇〇万もあれば立派な教会になるだろ」

「えっ、えっ、えええ、やめてください、そんな駄目です。とにかく駄目です、だってそんな教会なんて建てたら、ほら、街の人たちに壁とかステンド硝子とか持っていかれそうですし！」

とにかくセレンは慌てふためいた。普段から慌てることは多いが、こんなに慌てたのはきつと生まれてはじめてだろう。一秒間に瞬きを三回もしていることから、その慌てぶりが伺える。

今にも目を白黒させながら失神しそうなセレンの横で、呑気な顔をしてアレンが笑っていた。

「ま、いーんじゃないの。トツシュが直してくれるって言うんだからな」

トツシュ。その名を聞いて、ついにセレンはお尻から冷たい石の床に崩れ落ちた。

「ト、トツシュ!? この方が『暗黒街の一匹狼』……」

おでこに手を当てたセレンは、ゆっくりと後ろに倒れて気を失った。

「あーあ、あなたの名前聞いたら氣い失っちゃったじゃん」

「俺様のせいじゃないだろ。とりあえずこのシスターをベッドまで運んでやろう」

「あんたがな」

「口の悪いガキだな」

「そいつはどーも」

悪戯な笑みを浮かべるアレンに舌打ちしたトツシュは、手に持っていた煙草を投げ捨て靴の裏で火を消すと、地面に横たわっていたセレンを胸の前で抱きかかえて歩き出した。

「シスターの部屋はどこだ？」

「んなもん自分で探せよ」

「糞ガキがつ！」

金で雇われようとも、この二人の間には絶対に主従関係は成立しないようだ。

## 黄砂に舞う羽根「帝国の影」(1)「

心身ともに疲れていたのか、セレンはいつもよりも遅い朝を迎えた。

目を開けてベッドの上で上半身を起したセレンはふと思う。

「あれ、わたし……？」

そうだ、聖堂で気を失って、きっと誰かがここまで運んでくれたのだろう。

そして、セレンの脳裏にトツシユの顔が浮かんだ。

セレンはおでこに片手の甲を当てて、背中からベッドの上に倒れ、口から息を吐き出した。

とんでもない人と係わり合いになってしまったと思いつつも、過ぎたことはしかたないとあきらめ、これ以上深く関わらないようにしようとセレンは心に誓った。二人とも。

ベッドから身体重たげに這い起きたセレンは、少しずつ気持ちを切り替えながら僧服に着替える。ただのセレンから、シスター・セレンに変わる瞬間だ。

シスターへと変貌したセレンは、胸の前で拳を二つつくり、気合を入れて頷いた。

「よし、今日も頑張ろう！」

これが毎日の日課なのである。特に今日は気合が入っている。

自分の部屋から廊下に出たセレンは、そこで鼻をくんくんと動かした。

「……なんだろう？」

どこからかキツネ色に焦げたいい匂いが漂ってくる。きっと、トーストの焼けた匂いだ。だとすると、この匂いは食堂から？

踵を鳴らしながら足早にセレンが食堂に向かうと、そこではトツシユとアレンが美味しそうに朝食をとっていた。

キツネ色に焦げたトーストの上で蕩けるバター、白い食器の上に



乗せられたハムエッグ、瑞々しい色鮮やかなサラダまであり、トッシュが飲んでいるのは湯気の立つコーヒーだった。

セレンとトッシュの視線が合い、トッシュが先に挨拶をしてきた。

「おはようシスター」

「お、おはようございます」

頭を下げて、再び頭を上げたセレンは食卓の上を見た。

食卓にはセレンの分の朝食も置いてある。こんなに食卓の上に料理が並んだのは、いつ以来だっただろうか。食卓に一人以上の人間が着いているいつ以来だっただろうか。

爽やかな朝の光景を見て、セレンは嬉しくて少し口元が綻んだが、すぐにある疑問が頭を過ぎる。

「あの、うちにこんな食材ありましたっけ？」

トッシュはあくびをしながら首を横に振って答えた。

「いいや、なかった。だからこいつに朝市に買いに行かせた」

こいつとトッシュが親指で示す先には、口元についたミルクを服の袖で拭き取るアレンいた。そして、アレンの口から手が退かされるとき、セレンはあることに気づいた。

「その頬どうしたんですか？」

アレンの頬には紅い一筋が走っていた。なにかで切られたような傷痕だ。

「ああん、これ？ ちょっとさ、ごたごたに巻き込まれちゃってさ。ま、どーってことなんだけど」

「どうせすっ転んで切ったんだろ」

「ちげえよ、ばーか！」

トッシュに向かってあっかんべーをしたアレンは、ヤケクソと言わんばかりにトーストに喰らい付いた。あっかんべーをされたトッシュはアレンに構うことなく、コーヒーを飲みながら黙々と食事を続けている。結局アレンはなぜ怪我をしたのか語らず仕舞いだった。

## 黄砂に舞う羽根「帝國の影（2）」

それは今朝のことだった。

「おい、金渡すからパンと野菜と卵とハムでも買って来い」

トツシユにいきなり金を差し出されたアレンは露骨に嫌な顔をした。

「なんで俺が行かなきゃいけないんだよお」

「俺様は街を出歩けんからな。家の中でガクガクブルブル震えてることしかできん」

「よく言っぜ」

トツシユから金を奪い取るように受け取ったアレンは、鼻で笑って部屋を出て行こうとした。そのアレンの背中にトツシユが声をかける。

「あと、タイムズ紙っていう新聞も頼む」

「あいよ」

アレンは背中越しに手を振って部屋を出た。

セレンよりも早く起きたアレンとトツシユは台所で食材を確認し、食材が乏しいということで、トツシユがアレンに朝食の材料を買いに行かせた。

街外れの静寂と物悲しさに包まれた教会を出て、石畳の上を散歩でもするように歩くと、やがて石畳の道が乾いた地面になり、アレンは少し大きな通りに出た。

街は朝から活気付いている。その活気の本質は夜とは全く違うものだが、根底にあるものは人間の生だ。

生きるために必要なものとして、衣食住が拳がられるが、それを満たすことは難しい世の中だ。その衣食住のひとつである『食』がここにはあった。

ビニール屋根の店が立ち並び、店には所狭しと野菜や肉や魚食材が敷き詰められている。

彩り豊かな野菜や果物、生きたままの鶏やさばいたばかりの紅い肉、身が締まり鱗の輝く魚たち。ここに集まった食材はすべて街の外から輸入されて来たもので、食材の豊富さは文句のつけようがない。問題を挙げるとしたら、たまに食あたりを起すくらいなものだろつ。

声のデカイ親父や頭にタオルを巻いた丸顔の女主人が、今日も朝から客相手に汗を流している。そんな人々の往来する店と店の間を歩きながら、アレンは目的の品を買っていく。

まずは豚のもも肉を加工したボンレスハムを二本買い、次は薫り立つパン屋の前で立ち止まり食パンを一斤買おうとしたが、やつぱりやめて一斤の三倍にあたる一本の食パンを買った。

新鮮な野菜も買い、卵も買って、さあ帰ろうとしたところでアレンは立ち止まった。

「デザート喰いてえ」

両手に食材の入った紙袋を持ち、アレンは『胃』の向くままに果物屋に向かった。

赤や黄色や緑の色鮮やかな果物たちが並び、甘い香りが店の周りに漂っている。

柑橘系の果物を見ただけで、アレンの口の中は甘酸っぱさで満たされ、彼女はゴクンと唾を呑み込んだ。

柑橘類の横には真っ赤に染まった林檎があり、色艶良くてこれも食欲をそそられる。

口元を拭ったアレンは結局両方買うことにして林檎に手を伸ばした。が、その林檎がアレンの手の先から突如姿を消した。

林檎が消えた方向へとアレンが視線を移動させると、そこには金髪の『ライオンヘア』が立っていた。

「あら坊や」

赤い林檎と真っ赤なルージユが妖艶と誘っていた。

一番美味そうな林檎を取られたことも腹立たしかったが、それよりも昨日の一件がアレンの頭に血を昇らせた。

「デメエ！」

アレンは持っていた紙袋を地面に置き、ライザの襟首に掴みかかろうとしたが、赤い林檎が宙に投げられライザの白コートが波打ち、ハンドガンがアレンの顔に向けられた。

「それで防ぐ気がしら？」

ライザのハンドガンの先にはグローブに隠されたアレンの左手があった。

「防いでやるよ」

「アナタの手は鋼鉄でできているのかしら？　でも、このハンドガンから出る玉は鉛じゃないわよ」

「ふ〜ん」

興味なさそうな返事だった。それは絶対に防げるといふ自信の表れか？

ちよつとでも二人に触れれば、この争いに巻き込まれそうな危機に直面して、人々は後退りするようにこの場から徐々に離れて行った。

ライザの持っていたハンドガンから、なにかが蠢いているような奇妙な音が聴こえはじめた。

「このハンドガンは『失われし科学技術』を使ってアタクシがこの世に生み出した傑作。グングニールとアタクシが名づけたこの銃から発射されるエネルギーは、一瞬にしてすべてを灰にしてしまうのよ」

「ふ〜ん、魔導銃ってことか」

魔導をつくられた武器や兵器の威力はどれも威力が凄まじく、つくり出すこともとても困難なために滅多にお目にかかれない。それを前にしてもアレンは『ふ〜ん』で片付けてしまった。魔導銃ですらアレンの脅威ではないというのか？

物怖じしないアレンを前にして、ライザは苛立ちを覚えるとともに、ある種の欲求に駆られて上唇を妖しく舐めた。

「アナタがアタクシの足元で屈服する姿が見たいわ」

「それは嫌だ」

「アタクシに反発する者を屈服させてときの快感……」

いつの間にかライザの片手は自らの股間に宛がわれ、熱い吐息を漏らしながら、ライザは目の前にいる『少年』を今にも食べてしまいうそだった。

目の前でよがる女を見ながら、アレンは背筋をゾクゾクさせながら蒼い顔をした。

「うげえ、早く俺のこと撃って殺してくれ……」

「もう駄目、愛しすぎて殺したい」

「だからさっさと撃てよ！」

「ああん！」

雌獅子が甲高い喘ぎ声をあげた刹那、グングニールから稲妻が迸り左手ごとアレンの身体を貫かんとした。だが次の瞬間、ライザは瞳を限界まで見開き、稲妻がアレンの手の中へ吸い込まれていくのを目の当たりにした。

「どうということなの!？」

冷静さを取り戻そうとしている最中で、ライザはグングニールをアレンに奪われ、その銃口を顔面に向けられた。

「俺の勝ち」

悔しそうな表情をしながらライザは唇を噛んだ。屈辱だった。自分の理解の範疇を超えたできごとが屈辱だった。しかし、それが彼女を再び燃え上がらせた。

「最高だわ、最高よ、どうしてもアナタをアタクシのモノにしたい」

「はいはい、わかったから自分の立場理解しろよ。あんた絶体絶命のピンチなんだぜ？」

「アタクシが窮地に追いやられていても言いたいのかしら？」

武器を奪われ、その武器で命を狙われている。これを窮地と言わずなんと言つ？

だが、ライザは自身に満ち溢れた妖艶とした笑みを浮かべていた。「アタクシは科学者にして魔導師。アタクシに不可能なことはなく

てよ。でも、今日はお預け」

「はあ？ あんたこの状況から逃げられると思ってんの？」

「アタクシはどろどろに熟れた果実が好みなの。では、御機嫌よう。そして、これがアタクシの印」

ライザの手が風を鳴らして素早く動き、長く伸びた真つ赤な爪がアレンの頬を切った。

そして、ライザの姿は空間に溶け込むように消えてしまった。それはまるで白昼夢のような光景だった。

完全にライザが姿を消してすぐ、アレンは自分の頬を触れ、その指先についた鮮血を眺めた。これは夢ではない。

「空間転送か……いろんな意味で厄介な女」

アレンの周りには人ひとりいなかった。

途中まで何人かの人間がギャラリィとして残っていたが、ライザの持っていたグングニールが稲妻を吐き出し、辺りが激しい閃光に包まれた瞬間、ひとり残らず逃げてしまった。

アレンは片手に握ったままだったグングニールを、近くに置いてあった自分の買い物袋の中に投げ込み、地面に転がっていた林檎を拾い上げた。

拾い上げた林檎を服の袖で拭き、アレンは大口を開けて林檎に噛り付いた。

汁が口から零れ出し、口いっぱい広がる甘酸っぱい香り。

「さうと、買い物も終わったし帰ろつと」

このときアレンはトッシュに頼まれた新聞のことなど、すっかりと忘れていた。

## 黄砂に舞う羽根「帝國の影」(3)

朝食を食べ終えたアレンは懐から一丁のハンドガンを出して、顔の前で弄繰り回しはじめた。見せびらかすように。

見せびらかされたトツシュは、あまりにアレンがワザとらしくするので、無視しようとも考えたが、銃に施された紋様を見て気が変わった。

紋様は雷のようなエネルギー感が溢れるデザインで、トツシュはそれをひと目見て、ただのデザインではなく、魔導的意味が込められていることを悟った。

「なんだそのハンドガンは、ただの銃じゃなさそうだが？」  
「拾った」

これは嘘だ。

実際はライザの忘れ物だが、アレンはライザと出遭ったことすらトツシュに話してなかった。

「拾っただと？ 嘘をつくな。魔導銃が道端に落ちてたとしても言うのか？」

「うん」

真顔で頷くアレンにトツシュが一言。

「おまえの真顔はうそ臭い」

「じゃ、もらった」

話の内容をコロコロと変える時点で、アレンの話は信憑性に欠けている。そもそも、この少女に本気で嘘をつく気があるのかどうか？

「誰にだ？」

「女」

「どこのどいつだ？」

「ライオンみたいな髪型の女」

「ライザかつ!？」

声を荒げたトツシュが勢いよく椅子から立ち上がり、テーブルの

上に置いてあったカップが倒れ、中の黒い液体がテーブルの上を侵食して、やがて黒雫が床の上で四方に弾けた。

弾け飛んだ雫とともにトツシユの頭もぶち飛んでいた。

「この糞ガキがつ！ なぜあの女に遭ったことを言わなかったんだ！ 俺はあの女に狙われてるんだぞ！」

「そりゃご愁傷様で」

「ご愁傷様で済むか。おまえが奴らに付けられてたらどうするんだ？」

「そんなときゃそんなときで、逃げるなり戦うなり、どーにかなるっしよ」

「馬鹿だろおまえ」

「おう、ロクな教養も受けてない」

ぬけぬけというアレンの言葉に、テーブルに両肘を付いたトツシユは頭を抱えた。

こんな『少年』を雇った自分がどうかしてたとトツシユは悔やんだが、あのときトツシユが目撃したアレンの力は本物だ。なんとかと鉄は使いようという言葉があるように、アレンは使いようによっては自分のとって強い味方になるとトツシユは考えていた。だが、馬鹿を見るとい言葉もトツシユは忘れてはいない。

トツシユが思考を巡らせていると、戸口の方から情けない女の子の聲が聞こえてきた。

「ああ〜〜ん、ごめんなさい！」

裏返った声を出したのはセレンだった。しかも、彼女はひとりではなかった。後ろにいる白いロングコートを着た『ライオンヘア』

ライザだ。

「こんなところに身を隠してただなんて、今ごろ神に命乞いかしら、トツシユ？」

「成り行きだ」

静かの答えたトツシユの視線はライザの後ろに注がれていた。

戸口の奥から蟲のように湧き出てきた重装備の男たちは、ライザ



お抱えの獅子軍の精鋭だ。その数、目で見えるだけで四名。その他に教会の周りに待機している可能性は高い。

ライザは鈍く光るナイフをセレンの首元に突き付け、唇を濡れた舌で舐めて笑った。

「トツシユ、この娘を殺されなくなかったら、武器を全て捨てて投降なさい！」

「殺せばいいだろ、そのシスターとは赤の他人だ」

「そんなあゝ！」

情けない声をあげるセレンの瞳は涙をいっぱい溜め、今にも防波堤が壊れて大洪水になりそうな状態だった。

そんな中、アレンはトイレに立ったセレンが残していった朝食のプチトマトを、指先でつまんで口の中に放り込んでいるところだった。

「甘すつぱー、このプチトマト」

場違いな声をあげたアレンにライフルの銃口が四つ向けられた。つまり、ライザの後ろに控えていた男たち全員がアレンに銃を向けたということだ。

アレンは銃口を向けられていることなど気にせず、わざとらしく口に手を当てて大あくびをすると、口元をつり上げて不敵な笑みを浮かべた。その眼は恐れを知らぬ魔人の眼差しだった。

「あのさ、そのシスターを解放してくんない？」

「駄目よ」

間を入れずライザが言った。

「アタクシにメリツトがないわ」

人質を無償で解放するほどライザはお人よしではない。人質に捕った娘はトツシユとの交渉の道具でしかなかったのだが、トツシユは娘を殺してもいいと言う。この時点で、人質は人質の役割を果たさなくなった。つまり、セレンはいつ殺されても可笑しくない状態なのだ。

セレンの首の皮一枚をこの世と繋ぎ止めているのは、ライザのア

レンに対する欲求だった。

「トツシユとの交渉は決裂のようだけど、坊やはこの娘の命を案じてるみたいじゃない？」

流し目を使うライザの交渉相手はアレンに移っていた。

一人目の交渉相手であるトツシユは、『殺せばいいだろ、そのシスターとは赤の他人だ』と交渉の余地なし。

二人目の交渉相手であるアレンは、『あのさ、そのシスターを解放してくんない？』と交渉の余地あり。

ライザの本来の目的はトツシユの身柄確保であるが、彼女は仕事に私情を挟み、第一優先事項であるはずのものが覆される。それが皇帝の勅令であつてもだ。ライザと皇帝ルオの関係は地位も権力も及ばないところにある。との家臣たちのもっぱらの噂だ。

自分のことを妖しい目つきで見るとライザから視線を外したアレンは、深くため息をついてから懐に手を入れようとした。が、すぐに銃口を向けられて止めた。

「武器向けんなよ、肝が冷えるだろ。懐ん中に入ってる交渉道具を出そうとしただけだよ」

しかし、それを出したらアレンは蜂の巣になっていたに違いない。不敵に笑うアレンの衣服の下で膨らみを見せる物体は、魔導銃グングニールだった。これをアレンは交渉の道具に使おうとしたのだ。

アレンはライザの姿を確認してすぐに、グングニールを懐に隠していた。呑気に他人のプチトマトなんて食ってるわりには、こーゆーところはしつかりしているのだ。

懐を指差すアレンを見て、ライザは首を傾げた。

「そこにどんな物が入っているのかしら？」

「あんたの落とし物」

このアレンの一言でライザは理解した。だが、果たして人と銃が同じ天秤にかけられるものなのか？

「いいわ、アタクシのグングニールとこの娘、交換しましょう」

交渉はあっさりしていた。人の命など魔導銃に比べれば、取るに足りないものだ。ライザは判断したのだ。だが、彼女の気持ちは移ろい易い。

「やっぱりやめたわ。この娘、坊やの恋人？ それとも愛人？ だったら、坊やの目の前で甚振るのも一興ね」

「残念だけど、赤の他人。まだ一緒に寝てもない」

可笑しなことを口にしたアレンに対して、人質のセレンが顔を真っ赤にして声を荒げた。

「やめてください、誤解されるようなこと口にしなさいよ！ あなたと寝れるわけじゃないじゃないですか」

この言葉に深い意味はない。セレンは同性同士ということを強調したかったのだが、この場にアレンが女であること知る者はセレン以外いなかった。

「あら、フラれちゃったわね」

悪戯にライザが笑った。明らかに勘違いされている。

勘違いされようが気にしないのか、本当にそういう性癖があるのか、アレンは何事もなかったように話を戻した。

「それでさ、ここん中に入ってる銃とシスター・セレンを交換する話なんだけど、どーすんの？」

「そうね、まずグングニールをテーブルの上に出しなさい。少しでも可笑しな真似をすればわかるわね？」

ライザの言葉に頷いたアレンは懐にゆっくりと手を入れはじめた。このとき、ライザの後ろに控える獅子軍の持つライフルの銃口は、すべてアレンに向けられていた。ケアレスマミスだ。

トツシュの足が激しく床を蹴り上げた。

銃口をトツシュにも向けるべきだったと気づいたときには、時すでに遅し。

腰からハンドガンを抜いたトツシュとライザの目が合う。

瞬時にライザがセレンを突き飛ばした刹那、トツシュのハンドガンが火を噴いた。

一斉に奏でられる銃声の中で、呆然としていたセレンの手が引かれた。

「逃げるぞ！」

セレンの手を引いたものは、グローブのはめられた硬い手だった。肩が外れるかと思うほどにセレンは手を引かれ、次の瞬間には小柄な少女の背中に担がれていた。

銃弾を避けながらトツシュが前を走り、その後ろからセレンを担いだアレンが追う

神聖な聖堂で銃が叫び声をあげ、セレンはアレンの背中であげ、肩を震わせていた。

「どうしてこんなことに……」

「あんたがツイテナイんだろ」

相手の気持ちも考えないで素っ気無く言うアレンに対して、セレンは殺意にも似た感情を覚えたが、それはすぐに心の奥底から来る哀しみ流されてしまった。

もう一生、この教会に帰って来ることができないのではないか。

そんな気がセレンはしていた。

道を塞ぐ扉をトツシュが開けると、大量の光が寂れた聖堂に流れ込んだ。まるでそれは天へのお導きのようであったが、果たして本当にこの先は天国か。いや、地獄かもしれない。

教会の前には数人の武装した獅子軍がライフルを構えて立っている。と思われたが、可笑しなことに、教会の前には誰もいなかった。

すぐにアレンが教会前に止まっていた軍用ジープを見つけて叫んだ。

「乗り込め！」

「鍵がないだろ！」

トツシュが叫ぶが、アレンは気にすることなく運転席に乗り込み、セレンを助手席に乗せた。

どこかで微かに歯車が鳴り、アレンの左手が鍵の差込口に触れる

や、バチンと閃光が火花を散らした。するとジープのエンジンが唸り声をあげ、アレンは床が抜けるくらいアクセルを踏んだ。

「俺様を置いて行く気かっ！」

自分を置いて走り出したジープの荷台にトツシユは汗をかきながら乗り込んだ。

走り去るジープに銃弾が浴びせられるが、一発も当たることなくジープは逃げ切った。

遠ざかるジープの影を眺めながら、ライザが妖しく微笑んだ。

## 黄砂に舞う羽根「帝國の影（4）」

巨大な鉄の塊がクーロン上空を旋廻し、街に影を落とした。

シユラ帝國が世界に誇る巨大飛空艇　キユクロプス。一つ眼の巨人の名になぞられた、その飛空艇の船首には、巨大な眼のような穴が開いている。その穴こそが街を死の灰と化し、世界を恐怖のどん底に叩きつける矢われし科学の脅威　魔導砲だ。

過去に一度だけ実践で使用されたキユクロプスの魔導砲は、一撃で辺りを光の海に沈め、約四〇〇〇平方メートルが一瞬にして灰と化したと云う。その光景を遙か遠くで見た者は、天に光の柱が昇るのを目撃し、神々が戦争をはじめたのかと思つたそうだそして、その光景は目を閉じてても、長い間、瞼の裏に焼きついてしまつていと云われている。

楕円形の機体をしたキユクロプスが風を震わせ大地に降り立ち、クーロン近くに横付けされた。

巨大飛空艇の昇降口から延びる鉄の階段が大地に足を付け、朱色のマントを羽織る少年が足音を響かせながら一步一步と階段を下りてくる。その歩き方一つを取つても、王者　いや、魔王の風格に相応しい。

地上で少年を待つ軍の者たちは、皆、直立不動で敬礼をして『魔王』を出迎える。その中でただひとり、『魔王』に敬意を払わぬ者がいた。

「貴方自ら赴くなんて、どういふ風の吹き回しかしら？」

ライザは吹き付ける風の中で、髪の毛をかき上げながら皇帝ルオに訊いた。

「地の底になにが潜んでいるのか、自らの目で見たくなつたんだ」

「せっかく来てもらったのはいいけれど、お楽しみにはまだ早いわ」

「あと、どのくらいかかるんだい？」

「さあ？」

など皇帝の前で不確定な返事をしようものなら、気まぐれで拷問に掛けられて殺されるのだが、ライザだけは特別であった。

うーんと唸ったライザは口元で人差し指を立て、蒼い空を仰ぎながら口を開いた。

「街の外に鍵を取りに行ったトツシュ次第ね」

「ほう、鍵を？」

「鍵がなんなのかわからない以上は、彼を泳がせて鍵までの道案内をさせる。鍵が見つかり次第、トツシュたちの抹殺を命じてあるわ」「誰を向かわせたんだい？」

「手が開いていたスイキと、もうすぐ仕事が片付きそうなキンキにも、仕事を片付け次第と依頼を出しておいたわ」

「なるほど抜かりはないようだ」

と、ルオは満足そうに笑うが、ライザは少し気がかりなことがあった。

「そうね、スイキとキンキなら……」

シュラ帝国のお抱え殺戮集団『鬼兵团』の一員であるスイキとキンキ。この二人の手にかかれば、トツシュなど赤子のようなもの。

だが、ライザの脳裏に浮かぶ『少年』の顔。

「あの坊やが気がかりだね。あの子の内から生じる気は、たしかに魔の力だった」

この女には珍しく、不安な表情を浮かべるライザを前にして、ルオの表情も曇る。

「あの子とは誰のことだい？」

「素性は不明。けれど、魔導師特有の気が感じられたわ」

「君を感じさせたか？」

「ええ、身体の中が熱く火照ったわ」

「盛りのついた犬みたいに欲情するなんて、穢らわしい女だ」

ルオの手が大きく振りかぶられ、ライザの頬を力強く引つ叩いた。紅く色づいた頬を片手で押さえながら、ライザは甘い声を漏らす。

「でも、貴方が一番よ」

黄砂に舞う羽根「帝國の影（5）」

砂海原の中を、砂を巻き上げ泳ぐように走るジープ

茶色い布を頭から被り、砂から身を隠す三人の男女。一人は車の運転をするトツシュ。二人目は荷台で寝転がっていびきを立てているアレ。そして、三人目は頭を抱えて頂垂れるセレンだった。

「どうしてわたしまで……」

どうして自分はこんな場所にいるのか。それもこんな人たちと。

「どうしてって言われてもなあ」

笑って誤魔化すトツシュをセレンは横目で睨み付けた。

「自分が悲劇のヒロインだなんて言いませんけど、少しでもあなたに人を思いやる気持ちがあるのなら、わたしを街に帰してください！」

「用が済んだらあの街に戻るつもりだ」

「今すぐ！」

「今すぐは無理だ。それに俺様たちと一緒にいるところを見られるから、シスターも奴らに狙われてるだろうな」

「わ、わたしも……ああ……」

「心配するな、シスターをトラブルに巻き込んだのは俺様だ。シスターの命だけは俺様が責任を持って預かる」

「勝手にわたしの命を預からないでください」

「じゃあ、シスターが命の危機に晒されるときに、知らん振りして立ち去れるってことか？」

「そんなわけないじゃないですか！」

「だったら俺様に命を預けるんだな」

「……………」

ぐうの音も出なくなったセレンは、首を横に振って悪夢を振り払おうとしたが、振り払えるのは砂埃だけで、悪夢は消えてくれなかった。



ジープは砂漠の中を走り、ある場所に向かっていった。その目的地を知る者はトツシュウだけだ。

「わたしたちはどこに向かっていているんでしょうか？」

「さあてな」

「そんな返事は許しません。わたしの身にも関係することなんですから」

「シスターは俺様に命を預けたんだから、黙っ

「黙りません！」

真剣な顔をするシスターに負けてか、トツシュウは重い口を開いた。

「……そうだな、これも運命ってやつか。なあ、シスター、本当に俺様の話を聴くか？」

聴けば後戻りはできなくなる。それはセレンにもわかっていたが、もうすでに足は踏み入れてしまっている。

「聴かせてください」

「帝國から一生命を狙われるぞ」

この辺りで帝國と言えば、皇帝ルオの率いるシュウラ帝国しかない。そして、シュウラ帝国の悪評をセレンは嫌と言うほど耳にしている。

それでも彼女は首を縦に

「やっぱり駄目ですよ。聴きません聴けません、わたし長生きしたいですから、これ以上トラブルに巻き込まれたくないです。トツシュウさんに命預けましたから、必ずわたしのこと守ってくださいね！」

先ほどまでの真剣な顔をしたシスターはどこいつてしまったのか。トツシュウは目の前で慌てふためくセレンを口を半開きに見つめていた。

「シスター、あんた正直な人だな」

「ただの怖がりです」

「よくそれであんな街に住んでられるな」

「臆病者だから生き抜けたんです」

「まったくだ。俺も臆病者だから、これまで死なずに済んできた」

そんな莫迦なとセレンは思った。

『暗黒街の一匹狼』と呼ばれるトツシユの噂はセレンも耳にしている。拳銃を持ったやくざもん一〇〇人と素手で遣り合って勝ったと言つのは朝飯前で、警戒厳重なシユラ帝國が運営管理する銀行からキャツシユを根こそぎ奪い去つたのが昼飯前で、ある街に雇われてシユラ帝國の軍隊と遣り合つたのが晩飯前。そして、彼の最大の偉業と云われるのが、シユラ帝國の皇太后　つまり皇帝ルオの母君の寢室に侵入したことで、それが食後のデザートというところだろうか。

トツシユのことを考えながら、ここでふとセレンの頭にあることが浮かんだ。

「トツシユさんて、職業なんなんですか？」

「なんだと思う？」

「金さえもらえればなんでもする、なんでも屋さんですか？」

「いいや違う。俺様はトレージャーハンターだ」

「はい？」

目を丸くしてきよとんとするセレンを、ジープを運転しながら横目で見たとツシユは、少し口元を緩め恥ずかしそうな顔をした。

「聞こえてただろ、トレージャーハンター。宝探し屋だよ」

「わたしのことからかっているんですか？」

「からかってなんかないぞ。俺様の夢はガキの頃から世界を股にかける、トレージャーハンターって決めてたんだ」

少し胸を張って大きな声を出したトツシユの横で、セレンが笑いを堪えながらクスクスと微かに声を漏らした。それを見て、トツシユが子供のように唇を尖らせて不機嫌そうな顔する。

「なにが可笑しい？」

「だって、可笑しいじゃないですか」

「なにがだ？」

「……やっぱり可笑しくありません。トツシユさんて、噂だと凄く怖い方のイメージがありましたけど、実際にこうして話してみると、

悪い人じゃないかとも思います」

「噂なんてものは、尾ひれがどんどん付いていくものだからな」

トツシユは鼻先で笑い、横のセレンから前方に視線を戻した。そこで彼は目を見開いた。

大地が振動し、約二〇〇メートル前方が砂煙に覆われ、その先がまったく見通せない。

竜巻か、いや違う。

砂蛇か、いや違う。

それは群れだった。

トツシユの視線の先で、右から左へと影が次々と飛び跳ねるように上空を移動している。それはまるで、砂から砂へと飛び跳ねて泳いでいるようだった。いや、泳いでいるのだ。

雲海のような砂煙の中から飛び出す生物の形状は、身体は菱形で平たく、尾が糸のように細長い。人々はこの生物にサンドマンタという名を付けた。

何十匹というサンドマンタの大群を前にして、セレンは感激の声をあげた。

「こんな雄大な自然の光景を目の当たりにできるなんて感激です！」

「俺様もこんな大群の大移動を観たのははじめてだ」

ジープを止めたトツシユは、サンドマンタたちが通り過ぎるのを待った。その間に、荷台から聞こえていたいびきが聞こえなくなり、変わりに大きなあくびの音が聞こえてきた。

「ふわあ~~~~つよく寝た。お、美味そうなのが空飛んでんじゃん」  
目を覚ましたと思ったら、すぐに食のことである。

呆れ顔をしたトツシユが荷台に向かって振り返った。

「おまえは寝ることと食べることしか頭にないのか。あんな硬い骨格に覆われた生物をどうやって喰うんだ？」

「う〜んと、普通に皮剥けばいいんじゃないの。蟹とかといっしょ  
いっしょ」

「いっしょなわけないだろうが」

ジープの荷台でサンドマンタを喰うとか喰わないなどと話されたら、せつかくの雄大な光景も台無しだ。セレンはため息をついてサンドマンタの大群から視線を外すと、手に顎を置いてふと横を見た。「あ、二人とも見てください!？」

セレンの声に誘われて、アレンとトツシユはそこに広がる光景を見た。

砂漠の中で、そこだけが水の恵みに育まれ、草木が生える緑地オアシスだ。だが、トツシユはすぐにそれを否定した。

「さっきまではなかった。　　廬の夢　　だな」

「大蛤喰いてえ!」

トツシユの言葉に、すぐにアレンが言葉に乗せたが、セレンには二人の言葉がさっぱり理解できなかった。

「あのお、　　廬の夢　　とか、あとなんでいきなり大蛤の話になるんですか?」

「俺様が説明する。　　廬の夢　　ってのは、つまり廬気楼のことだ。

『廬』は大蛤のことで、『気』は息、『楼』は楼閣の楼。この砂の中に住んでる大蛤が吐く気が廬気楼になってるってわけだ」

「そうなんですかあ、だいたいわかりました」

うんうんと首を縦に振って頷くセレンの首が、ガクンと揺れた。

それはトツシユが急にジープを走らせたからだ。

「　　廬の夢　　に囚われる前に早いとこ逃げよう!」

アクセルを踏み、ハンドルを切るトツシユにセレンが声をかけた。「逃げるってどうしてですか?」

「　　廬の夢　　に囚われた者は、下手をすれば一生夢の中の住人ってことだ」

幻のオアシスが水の中にあるように揺れ動き、遙か後方に消えていく。

薄れゆく幻影を眺めながら、アレンがボソツと呟いた。

「俺の蛤い……」

燦然と輝く太陽は、まだ一番高い位置には到達していなかった。

## 黄砂に舞う羽根「帝國の影（6）」

木製のドアが軋めきながら開けられ、中から無数の皺が刻まれた老人の顔が出てきた。

「どうぞ中へお入り」

三人は老人に促されるまま家の中に入った。

茶色いローブを羽織った老人の後姿は、まるで枯れ果ててしまった老木のようなだ。幾星霜を生きた老人は、その姿からも声からも、性別を判断することすらままならない。

石造りの家の室内には古ぼけた木製の家具が並び、この家で使われている金属はすべて真鍮だった。そして、どこからかお香を焚いた独特な匂いが漂ってくる。

居間に通された三人が椅子に座って待っていると、老人が薰り立つコップを三つトレイに乗せて運んできた。

「どうぞ召し上げ」

枯れ枝のような手からセレンはコップを受け取り、コップの中身を覗き込んで鼻で息をした。

鼻を抜ける心地よい花々の甘い香りが口の中で広がり、セレンは薰りに誘われてコップに口を付けた。

「美味しい」

と、自然と口から零れた。

至福の顔をするセレンを見て、老人がにっこりと微笑む。

「裏庭に生えていたハーブに、特性のシロップを三滴ほど加えたもんさ」

老人の言葉は緩やかな川のせせらぎのようで、この家の中の時間は外の時間の流れよりも遅く流れているようだった。

セレンはこの家に懐かしさと温かみを覚え、いつまでもものんびりとティータイムをしていたい気分だったのだが、彼は違うらしい。

「俺様は前回ここに来たとき、まんまと惑わされちまったが、今日

はそうはいかない」

目をキラキラと輝かせ、気合十分なトツシュの横で、あくびをする音が聞こえた。

「わたし……なんだか、眠くなっちゃいました……」

眠い目を擦りながらあくびをしたセレンは、腕を枕にしてテーブルの上に沈んだ。そして、すぐに彼女の鼻から安らかな寝息を聞こえてきた。

眠りに落ちてしまったセレンを見て、トツシュは訝しげな表情をしていた。

「やはり、この飲み物に睡眠薬が入っていたのか」

トツシュの言葉を受けて、アレンはカップの中を満たす液体を覗き込んでいた。

「ふ〜ん、そーなんだ。飲まなくてよかった」

食べることで寝ることが思考の大半を占める彼にしては珍しく、アレンは一口も飲み物に手をつけていなかった。もしかしたら、野生の勘とやらで危険を察知していたのかもしれない。

老人が静かに笑う。

「ほっほっほっ、同じ罠には引っかけらんか」

「俺様が二度も同じ罠に引っかけたってたんじゃ、世間様に顔向けできんからな。さて、シスターが眠ってくれたのはちょうどいい、クローン地下に眠るエネルギープラントの話でもしようか」

以前にもトツシュはこの老人の家を訪ねている。そのときは話半ばで眠気に襲われ、気づいたらクエツク鳥の背中に揺られ、砂漠の真ん中を彷徨っていた。同じ過ちは繰り返さない。

クローン地下にエネルギープラントがあるというのはアレンも初耳だった。トツシュはここに来るまで詳しい話をなにひとつしていなかったのだ。

「クローン地下にエネルギープラントがねえ。で、この『姐ちゃん』となんの関係があるわけ？」

老人は表情一つ変えないでアレンの顔を見つめていたが、やがて

破顔一笑した。

「おぬしはわしを『姐ちゃん』と呼ぶか。ほっほっほっおもしろい小僧じゃ」

「姐ちゃん」と呼ばれたのが嬉しかったのか、老婆は不気味な笑いを低く立て続けている。

トツシユは「この老人、『婆さん』だったのか」という感心した表情をしていたが、すぐに気を取り直して話を元に戻した。

「クーロン地下に眠るエネルギープラントの開発に、あなたが携わっていたという話は前回もしたと思うが、覚えておいでか大魔導師リリス殿？」

「わしを耄碌したただの婆と思っっているのかい？」

妖婆リリスは妖艶と笑った。その笑みを見たトツシユは、久しぶりに背中を冷たいものを感じ、自分が額から汗を流していることに気づいてすぐに拭った。

「いいや、失礼した。それでエネルギープラントの件だが、あそこへの入り口を開けられるのは、この世でもうただひとり あなただけと知っているのだが、やはり開ける気はないか？」

「ないね」

リリスの返事はあっさりしていた。だが、ここまでは前回来たときと同じだ。

正直トツシユには切り札もなにもなかった。彼はもとより考えるより身体が先に動く性質なのだが、ひとたび頭を使えば切れ者と早変わることから、その辺りを高く評価して彼を高額で雇う者も多い。だが、今回に限っては目の前にいる老婆の心を動かす材料が、なにひとつ見つからなかったのだ。

「うーん、と深く唸って、それっきりトツシユは口を開かなくなってしまった。その代わりにアレンが口を開く。

「なあ姐ちゃん、金で雇われる気はないのかよ？」

「ないね、わしは金なんぞに興味ない」

それは前回トツシユが条件として提示し、すでに断られている。

金では動かないのだ。

「そんじゃ、姐ちゃんの望みを叶える代わりにつてのは？」

「自分の望みは自分で叶えられる」

「じゃあさ、俺と一晩過ごすつてのは？」

「ほほっ、おもしろいこという」

平然ととんでもないことを言つてのけたアレンを見る妖婆の瞳は妖しく輝いている。その瞳は目の前にいる『少年』が、『少女』であることを見透かしているようだった。

鼻を小刻みに動かしたアレンは、少し部屋を漂うお香の匂いが強くなったのを感じた。すると、すぐ隣でトツシユが顔面からテーブルに突っ込んで気を失った。香りにやられたのだ。

この部屋での脱落者は二人目。セレンもトツシユも深い眠りに落ちてしまった。その中でアレンだけが平気な顔をしている。

妖婆リリスの目は輝きを放っていた。それは嬉しさの表れだった。自分の妖術にかからぬ者に対しての興味関心。

「おぬしには効かぬか」

「ちよつと鼻が詰まつててさ」

鼻をわざとらしく啜ったアレンは、まだ手をつけていなかったコップに口を付け、薰り立つ液体を一気に胃に中に流し込んだ。

「美味しいね」

なんともなかった。それどころか、アレンはトツシユのカップにも手をつけて、中味を一滴残さず飲み干してしまったではないか。

「ふほおっつほっほっほっほっ、おぬし何者じゃ？」

「唾飛ぶから大口開けて笑うなよ。俺は俺だ、ただのガキさ」

「魔導手術を受けた『少女』をただのガキとは言つまい」

「……なんだ、やつぱバレてたのか。だったら姐ちゃんもさ？」

「わしもわしじやて」

「あっそ」

素っ気ない返事をするアレンであるが、彼女は目の前にいる妖婆



に関する秘密をなにか知っているようだった。だが、別に追求するつもりもないらしい。

いつの間にかリリスの手にはポットが握られており、妖婆はアレンのカップに煌びやかに輝く液体を注いだ。

「このハーブティーが気に入ったのなら、いくらでも飲むがよい」

「お菓子ないの？」

「おぬしに食わず菓子などない」

「ケチ」

「わしをケチとな？」

「あーそうだね、あんたはケチさ。　扉　くらい開けてくれりゃあいいのに」

「その『扉』の向こうになにかがあるか知っておって、そんな口を聞いておるのか？」

「いいや、知らないし、そんな興味もない。俺はただ横でぶっ倒れてる、この兄ちゃんに金で雇われただけだし」

深い眠りに落ちているトッシュは、当分目を覚ましそうになかった。

妖婆はアレンの瞳を見つめていた。ただ見つめているだけではない。妖しい彩を放つ瞳で見つめている。妖婆でありながら、その艶かしい瞳は妖婆のものではない眼光。

アレンは決して視線を逸らそうとはしなかった。これは二人の間で繰り広げられる壮絶な戦いなのである。だが、その静かな戦いもすぐに終わってしまった。

ぐうううううううううう。

アレンの腹が奇怪な音を立てて鳴いた。

「腹減ったんだけど」

「緊張感のない奴じゃ。わしの瞳で見つめられたものは男女問わず、獣であってもわしに魅了されるはずなのじゃが。食欲が性欲に優るか」

「ババアの身体になんて欲情しねえよ、ふっー」

妖婆リリスの眼光は人の身も心も虜にするはずであった。それが  
いとも簡単に破れてしまったのだ。

「ほっほっほっ、おぬしになら 扉 の向こうになるが『いる』の  
話してやってもよいぞ」

「興味ないね」

「じゃが、そこで眠っておる若いのはどうかの？ 若いのは アレ  
のことをただのエネルギープラントだと思っておるようじゃが、  
実際はもつと恐ろしい存在じゃ」

「で、なにがいんのさ？」

「アレ の正体は人型エネルギープラントとでも言っておこうか  
の」

「でさあ、あんた 扉 を開けてくれる気あんの？」

「さて、それはおぬし次第じゃな」

「条件は？」

「ない」

「はあ？」

『おぬし次第』と言っておきながら、条件はないという。これで  
はなにをしいのかわからない。

突然、どこからか玲瓏たる鈴の音が家中に鳴り響いた。

「招かれざる客が来たみたいじゃな」

リリスの意識は家の中ではなく、窓の外に向けられていた。

「外にずっといたの気づいてたクセに」

アレンがボソツと言うと、リリスは妖々と微笑んだ。

「相手の出方を伺っていただけさね」

## 黄砂に舞う羽根「帝國の影（7）」

青々と茂る草むらの一角に建つ、小さな木造立ての家。

風が草木の匂いを運び、この男も運んできた。

シユラ帝國のお抱え殺戮集団『鬼兵团』の一員であるスイキ。彼は息を殺し、身を潜めながら草を踏みしだき、古屋に一步一步近づいていた。

スイキの首から下は、怪物の甲羅を切り抜いて作られた胸当てと、肩から二の腕にかけて保護する防具、足にはジェットエンジンを搭載したメカニカル・ブーツを装備していた。特質した装備として人々の目を集めるのはジェット・ブーツだが、人々が最初に見るのは別の場所だろう。

スイキの顔は人のモノではなく異形のモノであった。鱗のついた青い顔から伸びる口は鳥の嘴のようで、眼は黄色く光り瞳孔が縦に長細く、尖がった耳が忙しく動き、顎からは老人のような立派な白髭が蓄えられていた。その顔は河童によく似ていた。

スイキ 水を操る鬼。『鬼兵团』のひとり水鬼は水を操る妖術に長けた刺客だった。

古屋の石壁に近づいた水鬼は聞き耳を立てた。近くに窓があるが、そこから顔を出すなんてへまはしない。彼の聴力を持ってすれば、石の壁の向こう側で人がなにをしゃべり、何人の人がそこでなにをやっているかなど、手に取るようにわかってしまうのだ。

中にいる標的は全部で四人。

やがて、ひとりが寝息を立てはじめた。

そして、またひとり。

二人が眠りに落ち、残るは二人。水鬼にとっては好都合な出来事であった。

話の内容を聴いていると、どうやら老婆が扉を開く鍵であるらしい。となると、残る三人を殺害し、老婆を連れ去るのが今回の

仕事になりそうだ。

狭い家の中での戦闘は水鬼の戦闘スタイルには合わない。そこで水鬼はジェット・ブーツ使用して、屋根の上に登り、標的が家の外に出てくるのを待つことにした。

ジェット音は吹き荒れる強風に紛れ掻き消され、宙に浮いた水鬼は軽々と屋根の上に昇った。だが、水鬼が屋根に足の裏をつけた刹那、家の中で鈴の音が鳴り響いた。その音を水鬼もしかと聴き、苦い妙薬でも飲んだような顔をした。

「儂としたことが、家の外見に惑わされてしもうたわい」

老人のような嗶れ声を嘴から発した水鬼は、この家をただの檻褸屋だと思っていたらしい。警戒を怠っていた理由はそれだけではない。必要な情報を仕入れた今となっては、敵と正面からぶつかるのが、結果は同じだと絶大なる自信を持っていたのだ。

水鬼は屋根から地面に飛び降り、玄関の前で敵を待ち構えた。不意打ちなどする必要もない。自分は絶対に勝つ。

古屋の中から小僧と婆が、慌てもせずにくつくりと出てきた。婆の方は大魔導師とか言われていたが、ただの枯れ木にしか見えない。ちよつと突付いてやれば、全身の骨が砕けてしまいそうだ。水鬼は心の中で嗤った。

お腹を擦りながらアレンが水鬼に向かって叫んだ。

「あんた誰さ？」

「儂は『鬼兵団』のひとり水鬼。うぬらの殺し、その婆さんをもらい受けようぞ」

「へえ、そうですかあ」

あまりのヤル気のないアレンの言い草に、水鬼の米神に太い血管が浮き上がった。

「小僧、儂をおちよくっておるのか！」

「いいや、ただ腹が減ってヤル気がないだけえ。なあ、姐ちゃん、俺の代わりにこいつやっつけてくんない、ここあんたの家だろ？」

「わしの庭じゃが、無駄な戦いは好まぬ。おぬしがどうにかせい」

「自分の庭に入った害虫くらい、自分で駆除しろよな」

アレンに害虫と呼ばわりされ、水鬼の青い顔は徐々に赤みを差してきた。

「おのれーっ人をおちよくりおつて、血祭りに上げてくれるわ!」

水が滴り落ちた。水掻きのついた水鬼の手から水が滴り落ち、地面に生えた草を潤した刹那、水鬼の腕が大きく横に振られ、人の頭ほどの水の塊が投げられた。

リリスの耳はどこかで鳴った歯車の音を聴いた。

猛スピードで襲い来るボール状の水の塊を、アレンは間にも止まらぬスピードで躲した。

水鬼の瞳孔が開かれた。このとき彼は、目の前にいる『少年』がただ者でないこと知らされた。

水の塊を躲したアレンが後ろを振り向いて、しまったと口を開けた。

「あゝあ、穴開いちゃった」

石造りの壁にメートルほどの穴が穿たれ、家の中まで風通しがよくなっていた。こんな攻撃を一撃でも受けたら、全身の骨が砕けてしまいそうだ。相手の操る水の破壊力はわかった。

開いた穴を指差して、アレンはリリスに話しかけた。

「ほら、器物破損。これであの野郎と戦う理由ができたじゃん？」

「こんなもん、すぐに直せるわ」

「ああ、そーですかーっ」

作戦失敗。アレンはリリスの感情に揺さぶりをかけたつもりだったが、作戦は失敗に終わった。もとよりアレンは、この作戦が成功するとは思っていなかったが。

気を抜いていたアレンの背中に水の塊が迫っていた。だが、アレンは前屈運動でもするように軽々と躲してしまった。

攻撃が当たらぬことに苛立ちを覚えた水鬼は作戦を変えた。

水鬼の両手から水がレーザービームのように連続的に放たれる。

先ほどまで一球入魂の攻撃よりは破壊力が劣るが、こちらの方が連

続的に発射できるため、標的に当たる確立が高い。

「儂の水撃から逃げられるものか！」

二本の水撃をアレンは上手く躲すが、先ほどに比べて動きが可笑しい。理由は地面にあった。青草と大地が水を含み、地面が滑りやすくなっていたのだ。

地面に足を取られながら、アレンは必死に水撃を避けて避けて、避けることしかできなかった。敵に近づけないのだ。

「糞っ、水遊びなんかキライだーっ！」

水に遊ばれ、叫び声をあげるアレンを見ながら、水鬼はニヤニヤと醜悪な顔を歪めていた。

「ほつれ、ほつれ、逃げてばかりでは儂を倒すことおろか、触れることすらできんぞ」

口ぶりは敵を甚振るようであったが、水鬼は内心焦っていた。こんなにまで自分の攻撃が当たらなかったことなど、今だ嘗てなかったのだ。

ちょこまかと鼠のように逃げ回るアレンに、次第に苛立ちを増幅させていく水鬼。

水撃の水圧が上がり、水が蛇のような動きを見せはじめた。水鬼の必殺技のひとつ 『水竜』だ。

水がまるで生き物のように大きくゆるやかに曲がりくねり、二方向からアレンに襲い掛かる。その瞬間、アレンの眼には水が大きな口を開けて、牙を剥いたように見えた。

「飛べ姐ちゃん！」

歯車が激しく回転し、アレンは地面を激しく蹴り上げ宙に舞った。その下で二本の『水竜』がぶつかり合って、激しい水飛沫を辺りに撒き散らした。

水鬼は水が霧のように散乱する先で、アレンが屋根の上に乗って笑っているのを見た。

アレンが懐から魔導銃

グングニールを抜いた。

「喰らえ糞ったれ！」

怒号の声とともにグングニールの銃口から稲妻が吐き出され、その稲妻は空気中を漂う水分子はおろか、水が浸透して湿地帯のようになつていた地面に電撃を走られ、そして水鬼の身体を稲妻の槍が貫いた。

世界が眩いフラッシュに包まれる。

やがて色の戻ってきた世界の中で、水鬼は立ったまま身体を痙攣させていた。

勝ち誇った満足げな顔をしたアレンがグングニールを懐にしまうと、何者かに後頭部を殴打された。

「莫迦者がっ！ わしも殺す気じゃったのか！」

「イテテテテ……後ろから殴んなよ！」

後頭部を手で押さえながらアレンが後ろを振り向くと、そこにいたのはリリスだった。

「老人に急な運動をさせるでない」

「自分で老人とか言ってるクセには、ちゃんと屋根の上までジャンプしてんじゃん」

「年の功というやつじゃ」

「意味わかんねえよ」

「それよりも小僧、あ奴まだ生きて居るぞ」

「えっ!？」

勢いよくアレンが振り返ったその先で、水鬼が嗤いながら構えのポーズを取っていた。

「電撃の耐性くらい持つておるわ！」

水鬼の両手から放たれる『水竜』が、回転しながら注連縄のように一つに混じり合い、アレンに襲い掛かる。

大口を開ける『水竜』が間近に迫り、歯車が急回転するが、アレンは避けることができなかった。

信じられないほどの水の圧力がアレンの胸を衝き、水が四方に爆発するように弾け飛び、アレンの身体は屋根の上から飛ばされて家に向こう側に消えてしまった。

なにかが地面に落ちる鈍い音をリリスは聴いた。

「坊やは気を失ったみたいだね。じゃが、心臓は廻り続けておるわ」  
リリスはその身体を水鳥の羽に変えてしまったように、ふわりと地面に降り立った。地面に浸っていた水はまったく跳ねなかった。

妖婆リリスと水遣い水鬼が対峙する。

風が吹いた。

土の香りが風に運ばれ、それとともにお香の匂いが水鬼の鼻を衝いた。

妖婆が老婆とは思えぬ艶っぽい口元で微笑んだ。

「爺さん、わしと殺るかい？」

「うぬは殺さずに連れて行く」

「それじゃあ、力づくでやってみるがいいさね！」

強風がリリスの身体を包み込み、彼女の羽織っていた茶色い口ーブが天に舞う。そして、水鬼は見た。そこにいたはずの老婆が絶世の美女に変わってしまったのを。

「妾がリリスじゃ」

玲瓏たる声が辺りに響き、妖女リリスが月のように静かに微笑んだ。

老婆が一瞬にして二十歳半ばの美女に変化してしまった。果たしてどちらがリリスの真の姿なのだろうか？

黒い喪服を着たりリスは艶めく長い髪を腰の辺りで揺らし、蒼白い月のような顔をして、ただひたすらに緋色の眼で水鬼を見つめていた。その眼差しは、恋人を愛する眼差しだった。

この世にこんなにも美しい生物が存在しているのか。全ての存在をその美貌で否定し、足元に平伏せさせる絶対的な存在。もはやこれは神が手違いか、気の迷いで創り出してしまったとしたか思えなかった。

リリスの柳眉が微かに動く同時に、水鬼の身体が金縛りにあったように動かなくなってしまった。

「わ、僕に、なにをしたのじゃ!？」



「妾はなにも……汝の本能が恐怖したのじゃろうて」

美に恐怖する。リリスの持つ美は、魔性のモノだったのだ。

「!?!」

水鬼の眼が限界まで見開かれた。そして。

「世界に還して進ぜよう！」

膨張した水鬼が一瞬にして弾け飛んだ。まさにそれは刹那の出来事であった。水風船が爆発したような現象だった。

血まみれの肉片が辺りに散乱する中、目の前にいたはずのリリスの顔はおろか、衣服すらいっさいの汚れを付けていなかった。もしかしたら、壮絶なる美を前に、穢れが恐れおののき、自然の法則を破ってしまったかもしれぬ。

地面に落ちる眼球を指先で拾い上げたリリスは、それを迷うことなく口の中に放り込んだ。

喉元が艶かしく動き、眼球をひと呑みにする音がした。

黄砂に舞う羽根「帝國の影（8）」

ジープを走らすトツシユは納得のいかない顔をしていた。自分が寝ている間に、なにがあつたのかさっぱりわからない。わかることは、大魔導師リリスが助手席に乗っているということだけだ。

「まったく砂漠ってやつは埃っぽくて嫌いだよ」  
などと妖婆は愚痴をこぼしている。

ジープの荷台では相変わらず誰かさんがいびきを掻いて寝ているし、いつの間にかその誰かさんに膝を枕にされてしまっている。セレンは、そろそろ足が痺れてきて嫌な顔をしはじめている。けれど、結局なにも言えないところがセレンらしい。

自分の太ももの上で豪快ないびきを掻く少女の寝顔を見つめながら、セレンは『いつもこんな可愛い顔してくれればいいのに』なんて思っていた。

トツシユは前方を見ながら、横でさつきからブツブツ文句を垂れているリリスに話しかけた。

「ところでリリス殿、封印されている入り口の封印を解いてくれる気におなりか？」

「さあてね、まだ決めかねてる途中じゃよ」

相手にばれないようにトツシユは静かにため息を漏らした。ジープに乗ってくれているだけマシと言うところだろうか。

ジープの荷台から奇怪な声が聞こえてきた。

「肉、肉、もも肉喰いてえ！」

もちろんアレンの寝言だ。

セレンは自分の太ももの上で『もも肉喰いてえ』と言われると、少し腹立たしくなる感じがして、あからさまに嫌な顔をした。

「わたしの太ももが必要以上に太いとも言いたいんですか!？」

「太もも太もも……うひゃひゃ」

「まあ、わたしのこと莫迦にしてるんですか!」

寝言に話しかけて怒るセレンもセレンだが、いったいアレンはどんな夢を見ているのだろうか。口元から涎が垂れていることから、食べ物夢が濃厚だが……？

太ももとべつとりとした涎で汚され、セレンは少し怒った顔をすがるが、それでもアレンを起さずに、自分のポケットからそつとハンカチを出した。

「もお、涎なんて垂らして……！？」

セレンは自分の太ももに付いた涎を拭き取り、アレンの口元にも付いた涎を拭こうとしたときだった。消えた。

目を丸くするセレンが素っ頓狂な声をあげて叫んだ。

「消えちゃいましたーっ！」

声に驚いたトツシユがすぐにブレーキを踏んで、荷台に向かって振り返った。そして、彼もまた目を丸くした。

「あの小僧はどこ行った？」

「わたしに聞かないでくださいよぉ〜」

困った顔をするセレンの膝元には誰もいなかった。そこにはたしかにアレンがいたはずなのに、先ほどまではいたはずなのに、そこには誰もいなかったのだ。

急ブレーキのせいで首を痛めたか、リリスは首の裏を手で擦りながら後ろを振り向いた。

「ありやま、本当にいなくなっちゃったね」

と言葉では驚いているが、リリスの表情はいたって平常だった。

三人の中で一番驚いているのはセレンだ。アレンは彼女の膝の上から突如消えてしまったのだから、驚くのも無理もない。

「わたしの膝の上でいびき掻いてたんですよ。それがいきなりパツと消えちゃったんです」

訝しげな表情をしていたトツシユが、お手上げして宙を仰いだ。

「つたく、普通は人が消えるわけないだろう」

「だって消えちゃったんですってば！」

セレンは今にも泣きそうな顔をしていた。自分のせいじゃないの

に、自分のせいのような気がしたからだ。

遙か遠くの景色を眺めるような眼差しをしているリリスが呟いた。

「 蜃の夢 じゃな」

天を仰いでいたトツシユも顔を首を下げて、リリスの視線の先を見た。そして、涙目になっていたセレンもまた。

そこには、そこにあるはずのない映像が映し出されていた。蜃気

楼 それすなわち蜃の見る夢の幻影。砂漠の真ん中で 蜃の夢 を見た。

そして、妖婆がその容姿に相応し声音で言った。

「あ奴、 蜃の夢 に囚われ堕ちたか……」

「世話の焼けるガキだ」

鼻で息を吐いたトツシユは、頭に手を乗せながら目をゆっくりと閉じた。

オアシスの幻影を前にして、セレンの頭は混乱していた。

「リリスさん、アレんが囚われ堕ちたってどういうことですか!？」

「あの坊やは 蜃の夢 の住人になちまったってことじゃよ」

「どうしたら、戻ってくるんですか!？」

「さて、あの坊や次第じゃよ。どうするトツシユ、あの坊やを待つかい?」

トツシユは目を閉じながら返事をした。

「一時間くらいなら待つか。それ以上は待てないな」

「アレんを置いて行く気ですか!」

そんなことセレンにはできない。だが、トツシユの言葉がセレンの胸を突いた。

「戻って来る確証のない者を待つつもりか?」

「でも……それでもわたしは……」

戻って来る確証がないなんて言われたら、身も蓋もなくなってしまう。けれど、セレンは言葉を続けた。

「それでもわたし待ちます。人を置き去りにしたり、人を犠牲にしたり、そんなことわたしにはできません。ちっぽけなわたしにでき

ることって少ないですけど、それでも目の前にいる人は放って置けませんから、できる限りのことはしたいと思うんです」

帰って来ないかもしれない者を待つというのか。

なにを思ったのか、リリスは荷台に転がっていた双眼鏡を指差してセレンに命じた。

「そこに落ちてる双眼鏡であのオアシスを見てごらん」

「双眼鏡ですか？」

不思議に思いながらも、セレンは言われるままに双眼鏡でオアシスを眺めた。すると、そこにはアレンの姿が！？

湖の畔でアレンが昼寝しているのを、セレンは双眼鏡を通して目撃した。

「どういうことですか!？」

「それが 屋の夢 の住人になっ たってことじゃ」

## 黄砂に舞う羽根「帝國の影（9）」

帽子の上から頭を掻きながら、大あくびをしたアレンは、湖の畔で目を覚ました。

上半身を起したアレンはすぐに辺りを見回す。

「どこだよここ？」

水底の砂まで見える透き通った湖の周りに、ナツメヤシなどの草木が生い茂り、その先に広がる砂漠を見て、ここはオアシスなんだと、アレンは頷きながら納得した。

でも、どうして自分がこんなところにいるのか、皆目見当が付かない。

寝ている間に置き去りにされたのかもとアレンは考えたが、その理由はピンと来ないような気がした。

辺りには人の気配もなく、湖の水面は波風一つ立っていない。

アレンは頭を悩ますばかりで、これが 塵の夢 だということに、まったく気づいていなかった。

しばらく考え込んでいたアレンであったが、考えるのは彼女の性に合わないらしく、地面の上に寝転んで蒼空を眺めはじめた。

「腹減ったなあ」

と、こんなときでも少女の口から出るのは、こんな言葉だった。

鼻先をポリポリと指先で掻いたアレンは、雲ひとつない蒼空を眺めながら、自分の喉が渴いていることに気づいた。その渴きは通常の渴きよりも激しく辛く、まるで血を欲している吸血鬼のような渴欲だった。

苦しい。

喉を掻き雀りたくのを堪えながら、アレンは急いで水辺に駆け寄ると、頭から水の中に顔を突っ込んだ。

口から吐き出される幾つもの気泡が、水面で弾け飛んでは消え、そしてまた消え。儂い夢のように消えて逝く。

光差し込む水の中で、アレンは眼を大きく見開き、夢の中で夢を見た。

アレンの口から大量の紅い血が吐き出され、水を真っ赤に染めていく。やがて、紅色に変わってしまったスクリーンに、紅よりも紅い血塗れの少女が映し出された。

年の頃はアレンよりも若い、六、七歳の可憐な少女が血塗れになって倒れている。少女の右脚が股間からもがれ、右腕も肩から同じくもがれており、右脇腹から内臓がはみ出してしまっている。この悪魔の所業としか思えぬこの光景を、凄惨と言わずしてなんと言う。手足を失った少女が、この世のものとは思えぬ苦痛の中で死んでいたことを、アレンは知っていた。

生きたままもぎ取られた腕や脚は、少女の見る前で貪り食われた。涙はでなかった、恐怖も感じなかった。残ったのは憎しみだけ。

そして、少女の心臓はたしかに鼓動を打つことを止めた。

だが、ここにいる。少女はここにいた。

アレンは自分の心臓を鷲掴みするように、胸を強く強く握っていた。その瞳からは、自分でも知らぬうちに涙が流れ、止まることなく頬を伝って流れ落ちる。

水の中にいたはずのアレンは、いつの間にか闇の中で独りぼっちになっていった。

長い間、独りだったような気がする。

多くの人も出会ったが、みんな別れの時が来た。

最後はいつも独りだった。

闇の中で独りぼっちになっていたアレンの手を誰かが掴んだ。

それは天使？

それとも悪魔？

それは光だったかもしれない。

それとも闇だったかもしれない。

手を引かれるアレンは導かれるままに黄泉がえった。

人ではない、機械ではない、その中間の存在として、科学と魔導

の申し子として。

最大の罪。

偉大なる大魔導師は、死人からヒトを創ったのだ。

嗚呼、夢が溶ける。

闇の壁がチョコレートのように溶けはじめ、光の世界が目を見ま  
す。

夢の中の夢が目覚め、 蜃の夢 が発狂した。

そして、アレンは還った。



黄砂に舞う羽根「帝国の影（10）」

瞼の上に光を感じ、頬に落ちる熱い雫を感じたアレンは、ゆっくりと目を開けた。

「わたし見ました……」

そう言いながらセレンは大粒の涙を流して泣いていた。

「あっそ」

相手が驚くほど素っ気ない返事をアレンはした。

果たしてアレンは自分が 蜃の夢 に囚われたことを知っているのだろうか？

きつと、知っている。だから、そんな返事をした。

運転席にはトッシュがいた。その背中はずいぶん暗く重い。顔は見なくて、どんな表情をしているか察しはつく。

セレンが観たということは、残りの二人も観ていたに違いない。

それでもアレンの態度は素っ気なかった。

「胸糞悪い夢見ちまった……オエエ」

わざとらしく嗚咽したアレンは状態を起し、ふと助手席にいたりリスに目をやった。

「あんたが俺のこと助けたんだろ？」

「そうじゃ。地中で眠っておった蜃を一瞬だけ叩き起こしてやった」

「ところで俺とあんた今日が初対面だよな？」

「はて、最近歳のせいかわれが激しくてのお」

「俺も昔のことはよく覚えてない」

そこでアレンは口をつぐんだ。

セレンはまだ泣いていた。でも、なにも言わなかった。なにも言えなかった。ただ、アレンのことを見ているだけだった。

見られている方のアレンは、わざとらしくはにかんで見せて、

「俺のこと潤んだ目で見つめんなよ。抱きしめて押し倒したくなるだろお」

なんて冗談で言ったのだが、セレンが急に抱きついてきて、さすがのアレンも眼を剥いて驚いた。

セレンの手がアレンの背中に廻され、服をギュッと掴む。

自分の胸で泣きじゃくる女に、アレンは途方に暮れた顔つきをしていた。その表情もわざとらしい。

なにも言わずジープが走り出す。

タイヤが巻き上げた砂埃の中で、セレンはずっと肩を上下に揺らし、鼻を嚙っていた。

## 黄砂に舞う羽根「いにしえの少女（1）」

ジープでクーロン近くまで来ると、否が応でも巨大な鉄の塊が目に入った。

「なんですかあれ!？」

とセレンが声を上げるのも無理はない。空を飛ぶ乗り物が一般的でないうえに、この飛空艇の大きさは尋常ではない。シユラ帝國が世界の誇る キュプロクス がそこにはあったのだ。

ハンドルを握っていたトツシユが嫌な顔をする。

「あれは皇帝専用の飛空艇だ」

すぐ近くに悪名高き皇帝ルオがいる。

ぞつとした顔をしたのはセレンだった。

「でも、そんなまさか……クーロンは完全な自治領で、シユラ帝國は勧誘して来ないはずじゃ？」

自由の名の元に繁栄と陰を築き上げてきたクーロンは、シユラ帝國の領土ではあったが、その自治は完全に独立国とっていいほどであった。

ジープは迂回し、キュプロクス が停めてあるのとは反対の方  
向から街に入り、さすがに目立つジープはすぐに空き地に捨てた。

街に入った四人はすぐに話し合いをはじめ、三手に分かれること  
にして、それぞれの方向に歩き出した。

セレンはすぐに自分の教会に戻ることにした。あときは一生戻  
って来れないかと思った。けれど、どうにか戻ることができそうだ。  
教会の前で通りまで来て、セレンは懐かしの教会を見上げた。

数日見なかつただけなのに、どうしてこんなにも懐かしく感じる  
のだろうか。外観はなにひとつ変わっていないというのに。

教会の静寂の中で、ただひとりの足音が鳴り響き止まった。

セレンは美しき色彩が差し込むステンドグラスを見上げ、深い息  
を肺の底から吐き出した。

所々襪履がきて壊れてしまっている教会だが、このステンドグラスだけは、時が経つのを忘れたように輝き続けている。

静かに微笑む聖母が赤子を抱きかかえている構図のステンドグラスは、まるで自分のことを象徴しているようだと思つた。生まれて間もない頃に、この教会に拾われた。セレンは父と母の顔も、その名すら知らない。セレンを育ててくれたのは、若い神父と新米のシスター・ラファディナだった。その二人も、今はもうこの世にいない。

ラファディナは若くして病魔に胸を犯され、この世を去ってしまった。神父もまた……。

セレンは沈痛な表情をしながら、胸で輝くクロスを握り締めた。

この教会は自分が絶対に守りぬくと決めた。

長い間、時が経つのを忘れて、セレンはずっとステンドグラスを眺めていた。

静寂に包まれた冷たく硬い石の床に、ブーツの踵を鳴らす音が鳴り響いた。

はっとしたセレンが後ろを振り向くと、そこには白い影が揺れていた。

「あなたは!？」

セレンの声は上ずっていた。

知っている。この女性を知っている。終日前に、この女性に襲われ教会を追われた 『ライオンヘア』。

艶やかに微笑むライザが、

「お帰りなさい」

と静かに声を響かせた。

自然とセリスは一步足を後退させた。

「なんであなたがここに？」

「人質が必要なのだよ」

せつかくあの人たちと別れたのに。平穏な日々が送れると思つたのに。自分の考えが甘かつたことをセレンは悔やんだ。トツシユは

自分もこれから帝国に狙われる可能性があると言われたのに。

街の入り口で話をしたときも、誰かをセレンの護衛に付けると言っていたのに。それを断ったのはセレン自身だった。

「わたしはもうあの方たちと無関係です。わたしを人質にしても無意味です！」

「あら、それはアナタが決めることではなくってよ」

「まったくそのとおりだな」

第三者の声だった。

教会の入り口に立ち、輝く白い光を背に浴びる人影。それは少年

いや、少女だった。その名はアレン。

「まったくよー、せっかく誘導作戦してもアンタが捕まったら意味ねえもんな」

アレンの息は少し上がっていた。今さっきまで銃弾を浴びせられていたところなのだ。

四人はクーロンに入り、三手に分かれた。セレンは教会に戻り、トッシュとリリスは坑道に向かい、そしてアレンは街で暴れていた。そう、アレンが囷になっている隙に、トッシュとリリスは警戒の網をぬけて坑道に入ったのだ。

腹を擦りながら教会の中へアレンは入っていく。

「腹空いちやってさあ、文無しだからここでなんか喰わせてもらおうと思っただよ。そしたら変な女いるし」

変な女とはもちろんライザのことである。

「坊やが単独行動してるって通信が入ったから、そちらに行こうと思っただけけど、教会にシスターが戻ったって聞いたものだから、この子を人質にして坊やと楽しく遊ぼうと思っただいたのに、坊やの方から会いに来てくれるなんて、嬉しいわ」

「坊や坊やうるせえぞ、俺の名前はアレンだ。呼ぶときはアレン様と呼びやがれ！」

威勢のいいアレンを見て、セレンは心から安堵した。たまにはアレンの食欲も役に立つことがあるものだ。そのお陰でセレンは救わ

れた。

白い陰が動いた。歯車の音もなっていた。二人は同時に動作を取り、硬直した。

神聖なる教会で、二丁の銃が抜かれた。だが、まだ牙は剥いていない。

アレンの構える銃は雷撃を噴く。グングニール。そして、ライザの構えるハンドガンもまた正体不明の魔導銃だった。

二人の間に緊張という名の糸が張り詰められるが、それもすぐにライザの不敵な笑みによって解かれた。

「アタクシは銃を撃つ気ゼロよ。なぜなら、このピナカは荒々しい怒りによる、想像を絶する破壊の象徴。こんなのをぶっ放したら、アタクシの身体まで吹っ飛んでしまうわ」

紋様が刻まれて入るが、それ意外は普通のハンドガンと変わらな  
い。そんなちっぽけな銃が、想像を絶する力を持っているというの  
か。グングニール。以上の力を。

「俺は撃つぜ」

相手が撃たないのなら、アレンは勝ったも同然だ。しかし、ライザは嘲笑う。

「ならアタクシも撃つわ。同時に撃てばアタクシが勝つ。けれど、坊やが撃たない限りはアタクシも撃たない。まだ死にたくはないもの」

相手の言葉が嘘ではないことにアレンは気づいていた。

どちらにも動けない状態で、第三者のセレンが叫んだ。

「教会の中で争いはやめてください！」

と言ってから、小さな声で付け加えた。

「……やるなら外で」

そうは言っても、二人は一触即発状態で、どちらとも一步も動けない状態だ。った。

ため息を漏らしたアレンが、なんとグングニールの銃口を床に向けたのだ。

「外出んぞ」

「わかつたわ」

なんとライザも銃口を下ろし、アレンの提案に同意したではないか！？

アレンは敵に背を向けながら教会を出て、ライザは最後まで銃を放つことはなかった。

教会の前の通りに出た二人は、五メートルほどの距離を取って向かい合った。二人とも銃は構えていない。

舗装されていない剥きだしの大地を踏み鳴らし、アレンは前屈運動をしながら独り言をこちた。

「さーてと、どーっすっかな。こっちが撃てばあっちも撃つだろ。でもさ、こっちが早く撃つて、相手に撃たせる時間を与えなきゃいいんじゃない？」

「あれ嘘よ」

ライザがボソツと呟いた。いったいなにが嘘なのか？

「嘘つてなにがだよ？」

「同時に撃てばアタクシが勝つわ。でも、アタクシの身体が吹っ飛ばすというのは嘘よ。普通の人間が撃てばそうなるかもしれないけど、『この子』を飼いならしているアタクシなら平気」

ライザは ピナカ の銃口を天に向け、そのスライド部分を愛でるように片手で愛撫し、銃の先端に口付けした。

少し背中をゾクゾクとさせながら、アレンは生徒が教師に質問をするように手を上げた。

「はい、はい。じゃ、なんで俺のこと撃たないんだよ？」

「アナタを殺したくないのよ。アナタをアタクシの奴隷にしたいのよ！」

「オエエエ……」

「だから、降伏なさい。一生アタクシの足下で可愛がってあげるわ」濡れた唇をライザは艶かしく嘗め回し、よりいっそう唇は妖艶な輝きを放った。

気分的にアレンは負けそうだった。



## 黄砂に舞う羽根「いにしえの少女(2)」

砂や砂利を荷台に乗せ、次から次へと行き来するトラック。坑道の入り口は獅子軍によって警備され、そいつらの手には小型マシンバルカンが構えられている。その他にも、見張りの数は数知れない。そんな警備厳重な坑道入り口に、小柄な『少年』が単身で突っ込んだ。アレンだ。

「糞兵士どもがっ、掛かって来いや！」

アレンの手に握られているのは、グングニール。歯車の音も轟々と鳴っている。その姿を見た者は破壊神でも現れたと思ったかもしれない。

尋常ではないスピードで地面を駆ける『少年』は、稲妻を吐きながら次から次へと兵士たちを打ちのめしていく。

雷撃が生き物のように駆け巡り、雷雲の中に入ってしまったかのようにだ。その中で雷鳴に負けぬほどの叫びをあげる破壊神。

「オラオラオラオラッ！」

雄叫びあげる『少年』が通ったあとは、稲妻が大地を抉り、全てを灰にする。草木などは未来永劫生えないかもしれない。それほどまでに壮絶だった。

アレンが走るあとを銃弾が追いかけて、大地に穴をつくり砂煙が上がる。

さすがのアレンも、複数の方向から撃たれる銃弾に耐えかね、坑道の中に駆け込んだ。

薄暗い坑道の中に雷鳴とともに稲光が翔ける。

坑道の入り口からフラッシュする光が逃げ出し、ついでにアレンも大勢の兵士に追われて逃げ出てきた。

このとき、アレンは本能だけで動いていた。もはや作戦もあつたもんじゃない。とにかく暴れまわることだけしか頭にない。

大勢の兵士を引き連れ、アレンはハーメルンのヴァイオリン引き

のように、ヴァイオリンの代わりに雷鳴を鳴らして兵士たちを街の中へと導いた。

天を突く雷が遠くに見え、雷鳴の音が徐々に遠くなっていく。雷雲は去っていったのだ。

坑道入り口からは兵士の数が減り、警備も手薄となったところで、トツシユとリリスがひよつこりと顔を出した。

「あれじゃあ、ただのヤケクソにしか見えんな」

苦笑するトツシユにライフルの銃口が向けられたが、トツシユの動きの方が早い。

疾風のごとく風を切ったトツシユはハンドガンを撃ち、この場に残っていた数人の兵士の脳天を撃ち抜き、慣れた手つきで弾倉を入れ換えて、弾のなくなった弾倉を地面に放り投げた。

「さて、リリス殿を 扉 に案内するか」

「ほほっ、 扉 を見るのは久しぶりじゃの」

果たして妖婆リリスの『久しぶり』とは、どのくらいの時間を指し示すのか。それは途方もない年月に違いない。

坑道の中は静かだった。遠くから掘削機の音が響いては来るが、兵士たちの数はアレンの活躍によって減っている。

前よりも広くなったと思われる坑道を、点々と壁に埋め込まれたオレンジ色のライトに沿って歩く。

道は入り組み、迷路のようになっていているが、道順は前と変わらない。ただ、心配なのは兵士と出くわすことぐらいだろう。

トツシユが不意に足を止め、リリスの身体をそつと手で押し戻した。近くに人の気配がする。

曲がり角からトツシユがそつと顔を出す。その視線の先には二人組みの兵士が、立ち話をしていた。

二人組みの兵士は頭からフルフェイスのヘルメットを被っている。そのヘルメットは通常の弾丸を弾き返し、口のところには空気浄化機が付いている。それを見たトツシユはあることを思いついた。

曲がり角を勢いよく飛び出したトツシユは、そのまま止まること

なく一気に兵士の懐に廻り込み、相手の首に腕を掛けて一気にへし折った。

骨の折れる音が鳴り響く中で、残った兵士がライフル銃を構えるが、トツシユは長い円筒状の銃身を脇に抱え込み、そのままハイキックで兵士のヘルメットを蹴り飛ばすと、ライフルを思わず手放して地面に倒れた兵士の上に乗し、首に腕を掛けた。

鈍い音が鳴り響き、兵士はそのまま息を引き取った。

二体の死体を見下ろしながら、トツシユは物陰から顔を出したりリスに話しかける。

「俺様はこれを着られるが、リス殿は……」

ローブを纏う枯れ木のような老婆に、兵士の服が着られるか。それがトツシユの心配だった。

「わしがこんな汗臭い服、ごめんじゃな」

服のサイズが合うか以前の問題だ。

トツシユはしかたなく自分ひとりでもと、兵士の装備と服を脱がし、素早く自分の服と取り替えるために着替えをした。その横でリスが嫌な顔をして呟く。

「レディーの前で裸になるんじゃないよ」

「……………」

この老婆に乙女の恥じらいがあるとは思えなかったが、トツシユは押し黙りながらリスに背中を向けた。

着替えを済ませたトツシユが振り返ると、そこにはなんと兵士が立っており、トツシユは自然と身構えた。

「わしじゃよ、わしじゃ」

フルフェイスの中から響く声は、まさしくリスのものだった。着替えるのが嫌だと言いながらも、しっかりと着替えたいらしい。しかも、どう見てもそこに立つ兵士の背丈は、リスの背丈とは異なっていた。

不思議なことと言えばもうひとつ。素っ裸で転がっているはずの兵士の死体すら見当たらない。すべては妖婆の成す業か？

リリスは地面に転がっていたトツシユの服を持ち上げると、それをトツシユの目の前で壁に押し付けた。すると、まるで壁が粘土かゼリーになってしまったように、服がズブズブと壁の中にめり込んでいくではないか!?

兵士の死体もこうやって処理したいに違いない。

目を丸くしたトツシユを尻目にリリスはさっさと歩いていった。まいった。その歩き方も老人のそれではない。

扉 までの道のり、何人かの兵士とすれ違ったが、それほど怪しまれずにことが運んだ。

不気味の輝きを魅せる金属の 扉 の前には、二人組みの兵士が開かぬ 扉 の門番として立っていた。

トツシユは物怖じすることなく兵士たちに話しかけた。

「交代の時間だ」

「もうそんな時間か」

とひとりの兵士は怪しみもせず受け答えたが、もうひとりの兵士が不信を持った。

「まだ、交代まで一時間はある。それに坑道の入り口で騒ぎを起きたと連絡が入っている。おまえらがその一派という可能性もある」  
一筋縄ではいかないらしい。

ここでリリスが前に出て、被っていたヘルメットを取り、胸ポケットからIDカードを提示した。その顔は妖婆リリスの顔とは異なる若い男のもので、IDカードに写っている顔写真ともピタリ一致した。あのときに身包み剥がした男と瓜二つの顔だ。

兵士二人はほっと胸を撫で下ろし、先ほど不信感を抱いていた兵士が声を弾ませた。

「なんだマイクか、そうならそうと早く言えよ」

リリスが使った顔は顔見知りの『顔』だったらしい。

「外の騒ぎのせいで、タイムシフトが大幅に変更になったんだ」  
とリリスはその顔に相応しい声で言った。

こうして二人の兵士はなんの疑いも持たず、この場を離れて行っ

た。

再びヘルメットを被るリリスを見ながら、トツシユは魔導師という存在が異界の存在であることを痛感した。

魔導師という存在は、普通に暮らしていれば、まずお目にかかれない存在だ。普通の暮らしをしていなくて、一生内に出会えるかどうかわからない。魔導師というのは、それほどまでに数が少なく、半ば伝説上の存在なのだ。

扉　を手の甲で叩いたリリスは老婆の声で、

「本当に開けていいのかい？」

「そのためにあなたを呼んだ」

「そうかい。じゃが、わしの仕事は　扉　を開けるまでじゃ。そのあと世界が滅びようがわしには関係ないってことを覚えておいで」  
とんでもないことを口にするリリスだが、トツシユはその言葉をただの脅しとして受け取った。

「誰かが来る前に早く開けてくれ」

「せつかちな奴じゃな」

リリスの両腕が、羽ばたく巨鳥のように大きく広げられた。

巻き起こるはずもない強風が吹き荒れ、微かにリリスの足が宙に浮いた。そして、玲瓏たる声が響いた。

「ここを封じたのも妾の気まぐれなら、ここを開けるのも妾の気まぐれじゃ」

玲瓏たる声はリリスの声だった。その声は妖女リリスの魅言葉。

誰をも魅了する声音。

トツシユの全身は弛緩し、思わず足から地面に崩れてしまった。だが、彼の意識はほぼ正常なものを保っている。狂人的な精神力の賜物というところだろう。普通の人間であれば、快樂に酔いしれて堕ちてしまっていただろう。

「妾の愛しい子……迎えに来たぞよ」

扉　がよりいっそう妖しい輝きを放ち、悲鳴をあげた。

キーンと耳を突くような高い音が鳴り響き、　扉　が熱せられた

チョコレートのように溶けていく。

幾星霜の時を経て、ついに扉は開かれた。  
ひとりの気まぐれな女の力によって。

## 黄砂に舞う羽根「いにしえの少女(3)」

通りに風が吹き、甘い香りを含んだ妖気が場を満たす。

白い影は微笑み、『少年』は嫌な顔をしていた。

相手の妖気に中って、アレンは戦う前から負けそうだった。

アレクの前方には ピナカ を構えるライザが、濡れた唇を歪ませながら微笑んでいる。

「アタクシの奴隷になれば、一生なに不自由なく暮らせるわよ」

「俺は束縛されんのが嫌いな」

「アタクシは束縛するのが好きなのよ」

「このサド女！」

「本当のことを言われても、痛くも痒くもないわ あら？」

白いロングコートのポケットで鳴る通信機に気づき、ライザは魔導銃 ピナカ を持った手をアレンに向けつつ通信機に出た。

通信内容を聞いたライザが、この上なく妖艶な笑みを浮かべる。

「ふふっ……そうなの……」

通信機を切ったライザの浮かべる表情が気になったのか、訝しげな表情でアレンが尋ねる。

「なんだったんだよ？」

「魔導感知器が、地下から放出された魔導エネルギーを感知したそうよ。もしかしたら 扉 が開いたのかもしれないわ」

ライザの勘は当たっていた。先ほどトツシュたちによって 扉 を開いたのだ。

扉 が開かれたかもしれないと聞き、アレンがニヤッと笑う。

「俺の活躍が実を結んだってことだな」

「そういうことになるかしらね。でも、 扉 の中に入ったトツシュは袋の鼠。 扉 の中になにがあるにせよ、それをどうやって持ち去るのかしら。巨大な装置だったら運べないわよね」

扉 を開けること。それはまさに今回の作戦の入り口でしかな

い。果たしてトツシユの策は？

「俺、中になにがあるか知ってんぞ。人型エネルギープラントがあるんだってさ。人型なら自分で歩くんじゃないのか？」

この情報はアレンがリスから聞いたものだった。そして、この情報はトツシユもライザもまだ知らぬことだった。

エネルギープラントと聞き、この世界の者たちが、まず頭に浮かべるものは魔導炉の存在だろう。魔導により放出されたエネルギーを電気エネルギーに変換し、膨大なエネルギーが二十四時間、止まることなく都市にエネルギーが供給される。だが、この技術は失われし科学技術であり、ゼロから魔導炉を造り出す技術は現代には残っていない。魔導炉がなんらかの理由で大爆発を起したとしたら、その被害は計り知れない規模となるだろう。

人型エネルギープラントなどと言うモノ、科学者であり魔導師であるライザも聞いたことがなかった。

「人型エネルギープラント？ 古の時代に戦争で投入された巨神兵……いえ、あれはただのゴーレムと機械の合成物……だとすると？」  
ブツブツと独り言を言いながら、ライザの思考は巡らされ、古い書物に書かれた事柄を思い出していた。それでも人型エネルギープラントに関する事柄は思い出されなかった。いや、その事柄に関する書物を読んだことがないだろう。それでは思い出することなど不可能だ。

現在、世に残っている魔導炉の規模を考えると、それを人型にするなど不可能だとライザは考えた。できたとしても、全長何十メートルもの巨人だろう。

未知への探究心が、ライザの欲望を駆り立てた。

「休戦にしないかしら？」

「はあ？」

突拍子もないライザの提案に、アレンは思わず口を半開きにしてしまった。

「アタクシはアナタを殺したくない。だから、アタクシには戦う理



由がないわ。 扉 までアタクシが案内するわよ」

「はあ!？」

「それに、そちらのシスターもアタクシといっしょのほうが安全よ」  
突然ライザに視線を向けられたセレンは、

「えっ!？」

と眼を剥いて後退りをした。

先ほどまで自分を人質にしようとしていた人が、今度は自分とい  
たほうが安全だと言う。セレンは困惑した。

「あの、どうしてあなたといっしょだと安全のでしょうか。その、  
あなたは……敵なわけですし」

「アタクシはアナタを人質にするのをやめたわ。けれど、他のもの  
がアナタを狙うかもしれない。少なくともアタクシと行動をともに  
すれば、アタクシ直属の獅子軍に命を狙われる心配はないわ」

「でも、それは……その……」

つまりこれは休戦というより、捕虜になれと言っているのではな  
いだろうか？

「俺はいいぜ、別にいい」

「なに言ってるんですかアレンさん!？」

セレンが声をあげるが、アレンは構うことなく両手を上げて降伏  
のポーズを示した。あまりにもあっさりし過ぎだ。

ピナカ を構えていたライザも、ピナカ を下げてコート  
内ポケットにしまいこんだ。

「やっとアタクシの奴隷になる気になったのかしら?」

「絶対違う!」

アレンは即答で断言した。

「俺があんたの休戦を申し入れたのは、道がわかんねえから。 扉  
までの道聞いたんだけどさ、忘れちゃって」

坑道の中はまるで迷路のようになっていて。はじめて入る人間は  
地図でもなければ 扉 まで辿り着くのにも多くの時間を要する。だ  
が、トツシユは地図が噴出し、誰かの手に渡ることを恐れ、口頭で

アレンに 扉 までの道のりを説明しただけだった。

「まあ、いいわ。二人ともアタクシに付いて来なさい」

踵を返してコート裾を跳ね上げたライザの後ろを、なんの迷いもなくアレンが付いていく。その行動はセレンの理解しがたいものだった。ライザは仮にも敵なのだ。

その場に立ち竦んでいるセレンに、振り返ったアレンが声をかける。

「さっさと行くぞ」

「でも……」

口ごもるセレンに対して、アレンは人懐っこい笑顔を贈った。

「俺が守ってやんよ」

守ってやるもなにも、敵の中心に自ら入るなんて とセレンは思ったが、アレンの表情から感じられる、底知れぬ自身を信じた。

「絶対守ってくださいよ。わたしになにかあつたら一生怨みますからね！」

「任せとけて、たぶんなんとかなるからさ」

「……………」

一瞬セレンの心が揺らいだ。 やっぱり信用できないかも。それでもセレンの進み道は限られていた。

前を歩く二人をセレンは小走りで追いかけた。

一〇〇メートルばかり歩くと、鉄の囲いをされた工事現場が見えた。この中に行動入り口がある。

工事現場の中は殺伐とし、兵士たちがあれやこれやと走り回っていた。そして、ライザがこの場に来たことで、兵士たちの動きが慌しくなり、ライザの傍らに居る『少年』の顔を知っていた者は、ぎよつと眼を剥いて驚いた。

先ほどアレンがこの工事現場で暴れたことは記憶に新しい。多くの兵士は負傷して運ばれていったが、中には無傷の者や軽傷の者もいて、この場に残った者もいる。その者たちがアレンの顔を忘れるはずもなく、ライフル銃を構えて身構えた。

だが、それをすぐにライザが抑えた。

「この二人はアタクシの客人よ、銃を下ろしなさい」

兵士たちは頭を混乱させながらも、ライザの言葉に従わざるを得なかった。

すぐに上級兵がライザのもとに駆け寄ってきて敬礼した。

「地下から放出された魔導エネルギーを感知してすぐ、『鬼兵団』のキンキが何人かの兵士を引き連れて 扉 に向かいました」

兵士の報告を聞いて、ライザがあからさまに嫌な顔をする。

「あの脳なしの莫迦鬼が向かったの？」

「はい！」

「アナタたちも脳なしだわ！」

目の前にいた兵士の股間をブーツの踵で蹴り飛ばしたライザは、鼻で嗤いながら早歩きで坑道の入り口に向かって歩き出した。

股間を押さえて蹲る兵士を見下げながら、

「『愁傷様』」

と呑気にアレンは言って、ライザのあとを追った。そのあとを気の毒そうな顔をしたセレンがすぐに追う。

魔導を孕む空気が漂う坑道の入り口に、三人は足を踏み入れた。

## 黄砂に舞う羽根「いにしえの少女(4)」

白銀の長方形の箱。切れ目も繋ぎ目もない箱。その中にトツシユとリリスはいた。

先ほどまで薄暗い坑道の中にいたせいか、眩しい光で目が霞む。目が落ち着いてきてもなにも変わらなかった。やはりなにもない部屋。

ざつと辺りを見回したトツシユが呆れた声を響かせた。

「なんだここは？」

期待していたものがなにひとつない。

空っぽの部屋の床に、トツシユは胡坐をかいて手に顎を乗せた。

「俺様はここになにをしに来たんだったか？」

苦笑する横で老婆の声でリリスが笑う。トツシユがヘルメットを取っているのに対して、リリスはまだフルフェイスのヘルメットを被っていた。

「ほほほっ、現代人は古代人よりも頭が悪くなったのかね。エネルギー

ギープラントはこの部屋の床下に眠っておるのじゃ」

「なにっ？」

「あの時代はなんでも収納して隠してしまうのが流行での、エネルギーギープラントも隠してあるのじゃ」

「この部屋のどこにもスイッチは見当たらないが？」

トツシユの言うとおり、部屋のどこにもスイッチはない。凹凸すらなく、切れ目すらない部屋のどこにもモノを隠せるのか？

未だ武装兵の格好をしたりリリスは、優雅な足取りで部屋の中心に向かった。果たして、フルフェイスの奥に隠されたリリスの顔は今？

部屋の中心で足を止めたりリリスは床に肩膝を付け、右手を天井高く上げ、床に向かって振り下ろそうとした刹那、リリスの動きが止まった。

床すれすれでピタリと手を止めながら、リリスは部屋の入り口に

視線を移動させた。

腰を曲げて頭を下げた巨人が部屋の中に入って来た。

立ち上がった男の背の高さは三メートルを越えていた。上半身裸の巨人の胸板は鉄板のようで、そこから伸びる腕は丸太のように太く、そして理想的な逆三角形のボディが美の輝きを放っている。だが、その上についた頭はなんと醜悪なことか。

殴られた瞬間みたいな顔をした坊主の頭の巨人が、手に持った金棒でブンと風を切った。

「オラノ名前ハ金鬼ダ。水鬼ヲ殺シタ奴、許シテオケネエ。ドコノドイツダベ？」

胡坐をかいてるトツシユが首を横に振り、リリースもぬけぬけと首を横に振った。

「わじじゃないよ。水鬼なんて奴の名前、はじめて聞いた」

「嘘付クデネエ、オマエラノ仲間ガ水鬼ヲ殺シタノハワカツテル。オラ怒ツタ！」

突然金棒を振り回し暴れ出そうとした巨人を近くにいた兵士が止める。せつかく開いた扉の中で暴れられ、施設を破壊されてしまったのは元も子もない。だが、暴れまわる巨人を静止させることはできなかった。

金棒が轟々と風を唸らせ、兵士のヘルメットの中味を砕いた。銃弾を弾き返すヘルメットも、中味は打撃による衝撃に耐えられなかったのだ。地面に倒れた兵士のヘルメットの中は崩れた豆腐のようになっってしまった。

さすがに身の危険を感じた残りの兵士はライフルを構えようとしたが、その前に殴打され地面に沈んだ。巨人の割には動きが早い。

仲間殺しをした巨人金鬼は地面に足音を響かせながら、胡坐をかきトツシユの前に立った。

「オマエガとつしゆ力？」

「ああ、俺様がトツシユ様だ」

トツシユは立ち上がったが、巨人との体格の違いは明らかだ。こ

れでもトツシユは体軀もよく、身長も一八〇センチを越える。それでも、まるで大人と子供に見えてしまう。

首を曲げて上を向くトツシユと金鬼の視線が合致する。どちらも負けず劣らずの鋭い眼をしている。

「とつしゅト言ウ男ヲ殺セ言ワレテル」

「殺れるもんなら、殺ってみな！」

遙か頭上から振り下ろされる金棒を後ろに飛び退き躲したトツシユは、愛用のハンドガンを抜いて引き金に手を掛けた。火を噴く銃口。

放たれた銃弾は三発とも命中した。

トツシユが眼を剥いた。

「嘘だろ」

金鬼は胸板で銃弾を受け止めたのだ。そして、金属音を立てた銃弾は虚しく地面に転がった。金鬼の胸に傷ひとつ付けることもできず。

トツシユも持つハンドガン レッドドラゴン は、五センチの鉄板を貫通する威力を誇る大口径の銃だ。それが肉すら皮膚すら貫通できなかった。

「オラノ身体ハ鋼鉄ヨリモ硬イ。銃弾ナンテ恐クナイゾ」

つまりトツシユのハンドガンは武器としての意味を成さなくなつた。

頭を抱えるトツシユがリリスをチラリと見るが、

「年寄りのわしを扱き使う気かい？ わしはここでおぬしらの戦いを見ておるから、思う存分戦うがよい。幸い、この部屋はおぬしらがいくら暴れても壊れんようになったるでな」

視線を巨人に戻したトツシユは床を駆けた。

敵と距離を取りながら、作戦を練る。が、武器の効かぬ相手とどう戦う？

金鬼は金棒を無鉄砲に振り回しトツシユを追いかけてくる。巨人の割には意外に動きの素早い金鬼だが、トツシユの動きの方が素早

さでは上回っている。それに金鬼の武器が金棒ということもあって、近づかれなければ負けることはない。だが、いつまでも逃げ回っているわけにはいかないだろう。

部屋中を駆け巡りながらトツシユは金鬼の金棒を見ていた。あの威力は先ほど目の当たりになっている。一発でも喰らえばアウトだ。それでもトツシユは接近戦を目論んでいたのだ。

床を蹴り上げたトツシユが速攻を決める。

金鬼との距離を一メートルに縮めたところで、トツシユが レッドドラゴン を構える。だが、金棒が地面を割るように振り下ろされて、トツシユの鼻先を通過して地面を叩いた。

グオオオン！ と床が唸り声を上げるが、床にはなにひとつ傷が付いていない。リリスの言うことは本当だったらしい。

肝を冷したトツシユは再び金鬼を間合いを取っていた。

「ふう、死ぬところだったぜ」

冷や汗をぬ拭ったトツシユが再び速攻を決めた。

「狭まる金鬼との距離。」

トツシユには振り下ろされる金棒がスローモーションに見えた。

遙か頭上から振り下ろされた金棒は鼻先を通過し、床を力強く叩こうとしていた。トツシユはこの刹那に全神経を集中させた。

僅かな隙を突く。

レッドドラゴン の照星を通して照準が定められた。

引き金が引かれ、銃口が火を噴き、また火を噴いた。

「ギヤアアアアアッ！」

奇声をあげた金鬼は金棒を投げ捨てて、両手で顔面を覆って床に膝を付いた。

続けざまに発射された銃弾は確かに金鬼を貫いたのだ 金鬼の

両眼を。

指の間から血を滴り落とす金鬼は床の上を転げまわりながら泣き叫んでいた。これほどまでの苦痛は、この鉄巨人にとって初めてものだったのだろう。

仰向けになつて天井に咆哮する金鬼の口の中に冷えた金属が突っ込まれた。

「俺様の勝ちだ」

金鬼の口に突っ込まれた銃口がなんども叫び声をあげた。

飛び散る血飛沫が レッドドラゴン を持つトツシユの手を紅く染める。

やがてカチカチと音を鳴らした銃は弾切れを起し、トツシユは血まみれになった金鬼の口から銃身を引き抜いた。

もうすでに金鬼は息を引き取っている。それも最初の数発目には息を引き取っていた。それがわかつていながらトツシユは撃ち続けたのだ。

屍体の傍らに跪いたトツシユは、血だらけになった手と銃を金鬼のズボンの布で拭いた。普通の神経を持つ者がする行為ではない。

トツシユの持つ名 『暗黒街の一匹狼』の由縁は、トツシユが単独行動を好むためではなく、誰もトツシユと組みたがらないために付けられた名前だったのだ。

立ち上がったトツシユの視線に三人の人物が目に入った。

「なんでその女と一緒にいる？」

トツシユの問いはすっ呆けた顔をしたアレンに向けられたものだった。

「一時休戦」

簡潔に述べるアレンをすぐさまセレンがフォローする。

「あ、あの、わたしの命を保証してもらおう約束もして……そのお」  
フォローになっっていなかった。

鬘を靡かせながら『ライオンヘア』が一步前が出る。

「一時休戦して、お互い無意味な争いはやめたのよ。それにしても、前よりヒツドイ顔ね、この莫迦鬼」

床に転がる屍体にライザは言葉を吐き捨てた。決して仲間とは思っていない口ぶりだ。

屍体の横を素通りしたライザはリリスの前に立った。



「アナタが 扉 を開けてくださった方かしら？」

「いかにもそうじゃ、ライザちゃん」

「あら、アタクシの名前を知っているだなんて、光栄だね」

「なにもない部屋を見回したライザが言葉を続ける。」

「ところでエネルギープラントはどこにあるのかしら？」

「わしが目覚めさせようとしたところで、そこで眠る木偶の坊が邪魔に入ったのじゃ」

「あら、なら殺されて当然ね。では、さっそくだけどエネルギープラントを出してくれないかしら？」

「よいじゃろっ」

部屋の中心まで歩いたりリスが足を止め、再び床に肩膝を付け、先ほどと同じように右手を天井高く上げ、床に向かって振り下ろそうとした。

その刹那、床に付いたりリスの手を中心して強風が吹いた。リスの一番近くいたライザが後ろに吹き飛ばされたほどの強風だ。

風はその勢いを増し、光の波紋が部屋の中心から放たれ、光の通過した床には魔方陣らしき紋様が描かれていた。

「娘よ、お目覚め！」

リスの声が響いた。妖女リスの声がフルフェイスのヘルメットの奥から響き渡った。

部屋中が目も開けられぬほどの眩い光に包まれ、それが合図となつて部屋中からモーター音が轟々と鳴り響いた。

光の渦の中で歯車もまた、なにかに共鳴するように激しく回転していた。

## 黄砂に舞う羽根「いにしえの少女(5)」

その日、クーロンが局地的な地震に見舞われた。

時間にして一〇秒にも満たなかった揺れは、轟々と地獄の叫びをあげながら地面に亀裂を走らせ、街を闊歩していた多くの者が足を取られ亀裂の中に吞まれていった。

悲鳴があがり、幼子が泣く声や獣の咆哮は、地響きに掻き消された。

悲痛の声をあげたのは人や獣だけではない。建物や道や風さえも声をあげ、ガラス製品の割れる音が街のあちらこちらから鳴り響き、街中の点けてもいない電気が勝手に点き、蛍光灯や電球が弾け飛んで割れた。

魔導炉からのエネルギー供給は一時的にストップし、電気系統のトラブルや二次災害による事故や火災が起きた。そして、多くの場所では被害が出るとともに死傷者も出てしまった。

これが自然災害ではなく、あるモノによって引き起こされた地震であることを知っているのは五人のみだ。その五人は今、クーロンの地下にいる。

銀色の箱は凄まじい輝きを放ち、リリスが部屋の中心から少し離れると、その床から鳴り響くモーター音とともに煙が立ち昇り、筒状の物体がせり上がってきた。荘厳とさえ言えるその登場は、神の光臨を思わせたほどだ。

激しい揺れによって壁に叩き付けられていたセレンだったが、やっと揺れが治まり、光も治まってきたところで、自然と部屋の中心に向かって足を運ばせていた。そう、部屋の中心に現れたモノに惹き付けられるように、足が勝手に動いてしまったのだ。

部屋の中心に現れた筒状の物体は、直径一・五メートル、高さ二メートルほどの液体が満たされた硝子ケースで、中には人型をした物体が入っていた。

硝子ケースに片手をつけたセレンは、中に入っている物体に魅了されていた。

「……綺麗」

表現力の乏しい言葉だが、そうとしか言えなかった。

中に入っていたのは可憐な『少女』だった。

硝子ケースの中に入っていたのは十三、四歳の『少女』で、衣服などはまったく身に付けていなかったが、その代わりに白と紅の翼が身体を包み込み、膝を抱えるようにして『少女』は安らかに眠っていた。その表情はまるで天使のように安らかで、世の中の穢れを知らぬ純粹無垢な顔をしていた。

腕組みをしながら『少女』を見るトツシユが、難しそうな顔をした。

「これがエネルギープラントか？」

トツシユの横でライザも難しい顔をしていた。

「人型とは聞いていたけど、ただのキメラにしか見えないわ」

キメラとは獅子の頭を持ち、山羊の胴に蛇の尾を持つ怪物ことで、異なった遺伝子型が身体の各部で混在する生物のことも指し示す。

誰にも気づかれずに、ローブを纏った老婆の姿になっていたリリスが、硝子ケースの中にいる『少女』を懐かしい眼差しで見つめていた。

「人型エネルギープラントのゼロ号機じゃ。これが最初で最後の人型エネルギープラントじゃよ」

「開発が打ち切りになったということか？」

トツシユがそう尋ねると、リリスは深く頷いた。

「そうじゃ。あまりにも強大な力を持つがゆえに、造られたのはこれ一機のみ。そして、この子の存在は歴史から抹消され、地下深くに嚴重に封印されたのじゃ」

そんなものをなゼリリスは今更封印を解く気になったのか？

リリスは深い皺の刻まれた顔で哀愁を浮かべた。

「この子を永遠の眠りに付かせたのはわしらの勝手じゃ。この子が

望むようにしてやるのもよいじゃろう。たとえ世界が滅びようとしには関係ないからの、ほほほっ」

硝子の中で眠る『少女』に世界を滅ぼすほどの力があるのか。だとしたら、この『少女』は、天使ではなく悪魔だ。

四人が硝子ケースの近くに集まる中、ただひとり遠く離れた場所で壁にもたれ掛かっている者がいる。アレンだ。

歯車の音は鳴り続け、アレンは額から冷たい汗をかいていた。

「わけわかんねえ……」

それはアレンにも理解しがたい、今までに経験したことのない現象だった。

近づけば近づくほど『身体』が苦しくなる。けれど、アレンは硝子の中で眠る『少女』に呼ばれていた。アレンは今、矛盾という壁に板ばさみにされている状態だった。

蒼ざめた顔をしているアレンに気が付いたセレンは、少し慌てた表情をしてアレンの元へ駆け寄ってきた。

「アレンさん大丈夫ですか、顔色が悪いですよ」

「腹が減っただけ」

「はい？」

不思議な顔をしたセレンは不思議な音を聞いた。それは腹の虫が鳴く音ではない。もっと奇妙な音だ。その音が歯車の回転する音だということを知るとセレンは知る由もない。

セレン以外のものはアレンを気にすることなく、硝子ケースの前で話を続けていた。

「中から出して平気か？」

と聞きながらトツシユはリリースに視線を向けた。

「出してもいいのじゃが、そのときは子のが目覚めるときじゃ」

「俺様に装置全体を運ぶ術はない。となると、中味だけを運ぶしかないな」

「おぬし、本当にこの子を目覚めさせる気かい？」

「もちろんだ。でなきゃ、ここまで来た甲斐がないだろう」

「ちよつと待つてくださらない、アタクシのことをお忘れかしら？」  
二人の会話にライザが割り込んだ。

「アタクシ　いいえ、帝國側としても、このエネルギープラントの所有権を主張するわ」

「ちよつと待て、扉　を最初に発見したのも、この部屋に入ったのも、俺様が先だ」

少し声を張り上げたトツシユの眼前に、長く伸びた人差し指が立てられ、ライザが舌を鳴らしながら人差し指を横に振った。

「残念だけど、この土地は帝國が買収したわ。だからこの土地から出てきたものは、帝國のもの」

「それは地上の空き地の話だろう。おそらくこの上は街の中心部、空き地から遠く離れた場所だ。それでも権利を主張するか？」

「だったら、この場で殺り合うかしら？」

ライザの手は白いコートの内側に差し込まれ、トツシユもそれに応じて腰に手を掛けようとしたときだった。『少女』の口から小さな泡がシャボン玉のようにいくつも吐き出されたのだ。

思わずライザとトツシユは『少女』に目を向けた。

『少女』の安らかな表情はなにひとつ変わらない。ただ、小さな口から泡が吐き出されただけだ。けれど、誰もがそれを予兆と感じた。

歯車が鳴っている。

呼ばれている。

セレンはゆっくりと歩くアレンの背中を追っていた。

硝子ケースの前に立っていた三人は、なぜかアレンに道を開けた。それは本能的なものだったに違いない。

『少女』を包んでいた白と紅の翼が水の中で揺れ動き、閉じられていた瞳が微かに動く。そして、リリスの瞳が妖しく輝いた。

「ほほほっ、共鳴しているようじゃな。わしが目覚めさせなくても、この子が目覚めるようじゃぞ」

その言葉はすぐに実現した。

アレンと『少女』の距離が一メートルを切ったとき、『少女』を包んでいた硝子ケースが、シャボン玉が弾けるように跡形もなく割れた。それはまるで儂い夢が弾けたように。

『少女』を優しく包み込んでいた溶液は、壁を失い外に流れ出し、七色に輝いた。そして、すぐに蒸発して消える。すべてはおぼろげな記憶と化したのだ。

白翼が開かれ、紅翼が開かれ、そこに現れた一糸纏わぬ清らかなる『少女』の裸体は、瑞々しさを放ち輝いていた。まさにその姿は狂い無き創造物。神ですら創らなかつた美を、古のヒトが創り出していたのである。それは果たして神をも畏れぬ大罪か？

静かに開かれた『少女』の瞳が、目の前にいる『少年』を寝ぼけ眼で愛くるしく見つめた。

「私と……同じ……」

小さな声を漏らした『少女』は赤子のような無邪気な笑みを浮かべた。

純粹過ぎるが故の不自然と底知れぬ恐怖を感じたライザが微笑んだ。

「いいわ、最高よ。この子はアタクシが預かるわ」

素早くライザが『少女』の腕を掴むが、掴まれた当の本人は自分の置かれている状況が理解できないのか、きよとんとした表情をしながら真ん丸の瞳でライザを見つめている。

『少女』を我が物にしようとするライザに対して、トツシュがレッドドラゴンの銃口を向けた。

「可愛い子の独り占めはよくないな」

「あら、早い者勝ちじゃなくて？」

「四対一だ」

この言葉に対して、すぐにセレンが声を荒げた。

「わたしを数に入れないでください！」

「わしも入れないでもらおうかの」

セレンとリリースに嫌な顔をされ、頭を掻いたトツシュはアレンに

視線を移した。するとアレンは、今までにないほどの真剣な顔をしているではないか。

「その子を外に出さちゃいけない……よーな気がする」と、そのままリスに視線を移して言葉を続けた。

「あんたはやっぱ糞婆だ。なんで封印を解いたんだよ！」

「わしは自由気ままに生きているだけじゃ」

「糞婆！」

リスを罵ったアレンはライザに視線を戻して、グングニールを構えた。

これで二対一。ハンドガンを構える『少年』と『暗黒街の一匹狼』、『少女』を人質に捕った『ライオンヘア』。互いに対峙し一歩も動かない。

ライザの身体が霧の中のように霞んだ。だが、すぐになにごともなかったように輪郭がシャープになり、ライザが舌打ちをした。「ここじゃ無理みたいね」

「いったいなんのことを言っているのか？ それに気づいたのはリスとアレンだった。しかし、声に出したのはアレンのみだ。」

「空間転送か！」

いつかの市場でアレンの前からライザが突如姿を消したあの現象だが、この白銀の箱の中ではその効果を発揮できなかったのだ。

『少女』の腕を強く掴んだライザが床を力強く蹴り上げる。

出口へ走るライザの背中を追いながらトツシユが叫んだ。

「攻撃するな、『少女』を無傷で奪還しろ！」

「言われなくてもわっかつてらーっ！」

逃げるライザをトツシユとアレンが素早く追う。しかし、ライザの勝ちだ。

白銀の箱を出たライザは後ろを振り返り妖しく微笑んだ。

「では、御機嫌よう」

ライザの身体とともに『少女』の身体が霞んだ。

「セレン捕まえるー！」

それはアレンの叫びだった。

アレンの視線の先にはトツシュが居り、その先には出入り口付近で突っ立っているセレンがいた。この距離ならセレンが一番近いとアレンは判断したのだ。

突然のことにセレンはびっくりしながらも、すぐに自分のするべきことに気づき、『少女』に手を伸ばした。

そして、消えた。

ライザと『少女』が空間に解けるように消え。『少女』の腕を掴んだセレンもまた、空間に呑み込まれるようにして姿を消してしまったのだ。

三人もの人間が消えてしまうという不可解な現象を前にして、トツシュは口を半開きにしながらアレンとリリースに顔を向けた。

「なんだありや、人が消えたぞ？」

それはトツシュにとってはじめて見る光景だった。魔導というものが、この世に存在していることを理解しながらも、人が消えるなどという現象は信じがたいことだったのだ。

床に胡坐をかき頭を抱えるトツシュのもとにリリースが歩み寄った。

「あれは空間転送じゃな」

「空間転送ってなんだ？」

「人を瞬間的に移動させる手段じゃよ。とは言っても、決まった場所にはいかないうえに一方通行じゃ。街の外に飛空艇が停まって居ったことを考えると、あの中に移動したのかのお？」

手に顎を乗せて考え込みはじめたトツシュの前にアレンが座った。

「仕事どーすんだよ。あの『少女』を奪還しに行くのかよ？」

「行かない」

「はあ!？」

それはアレンにとっても予想だにできなかった返事だった。

「行かないと言ったんだ。ミッションは失敗、おまえへの支払いは半額の五〇〇〇イエンだな」

「はあ？ ちゃんと全額支払えよ」



「仕事に失敗したんだから、半額だけでも払ってもらえるだけ感謝しろ」

「もついらねえーよ。あんたから一銭ももらわねえ。だから今後一切俺にかかわるなよ糞オヤジがつー!!」

顔を真っ赤にしたアレんが、のっしのっしと大股開きで出口に向かって行く。そんな怒りを露にするアレんの背中に、飄々とした声でリリスが声をかける。

「どこに行くのじゃ？」

リリスの呼び止めに、アレんは顔を蛸みたいな真っ赤にして振り返り、大声で怒鳴った。

「あんたも今後一切俺と関わるなよ！あんたらと組むとロクなことがないつーことに気づいた。……糞っ!!」

アレんは独り坑道の奥へと消えていった。

## 黄砂に舞う羽根「いにしえの少女（6）」

待遇としては牢屋に入れられなかったただけマシだろう。それが自分を慰めるセレンの考えだった。

部屋は一人でいるには広く、床には金糸と銀糸の刺繍がされた赤絨毯が敷かれ、テーブルや椅子といった家具にはこみいった曲線模様様の細工がされ、部屋は華やかな色彩を放つロココ様式にまとめられていた。

豪華絢爛なこの部屋にもてなされるのは、普段であれば一流の貴族に違いないが、今この部屋にいるのは、汚れた僧服を着た十五歳の小娘だ。釣り合いが取れていないのが目に見えて明らかだ。

こんな部屋に入れられている以上は、立派な客人として迎えられていると思いきや、どうやら違うらしい。ドアは鍵が掛けられておらず開きっぱなしになっているが、その先には見張り役の男が立っており、窓はもとから開かぬように嵌め殺しの窓になっている。これでは逃げようがない。

セレンは部屋中を意味もなく歩き回った。やることがないのだ。窓の外に広がる光景は、朱色に染まったクーロンの街だ。朱色に染まった空へ街から吐き出される黒い煙が伸び、街はすでに地震から立ち直り、二十四時間眠らぬ街にふさわしい活気を取り戻している。

セレンはクーロン地下坑道からここ　　キユクロプス　艦内への空間転送に巻き込まれてしまった。そして、すぐにこの部屋で軟禁状態にされ、『少女』がどこに連れて行かれたか知らない。

部屋は今セレンがいる場所の他に寝室とシャワールームがある。なに不自由ない部屋だが、それは困いの中の自由だ。こんなところにいられない　　というのが、セレンの気持ちだった。

どこでどう運命を見誤ってしまったのか。アレンと出会わなければ、もっと平凡なシスターとして一生を終えていただろう。いや、

アレンと出会う前の時点で、裏路地に入ってさえいなければ、あの時間にあの道を、買い物を　運命の鎖を辿れば尽きることない。

部屋を歩き回っていたセレンはシャワールームに足を運んだ。シヤワーを浴びるためではない。逃げ道を探すためだ。

天井を見上げた視線の先に、通気孔の入り口が見えた。蓋が閉まっているが、簡単に外せそうで、小柄なセレンならば中に入れるくらいの大きさだ。

天井までの高さはそれほど高くないが、セレンが両手をめいいっぱい上げてジャンプしても届きそうもない。

部屋の外の見張りに悟られぬように、セレンはそつと椅子を一つ運んで来ると、通気孔の真下に置いた。

椅子に乗ったセレンが両手を上に伸ばすと、楽々と天井に手がついた。これで上に登れる。

通気孔の蓋を開けたセレンは、暗闇の中に恐る恐る手を入れ、縁に手を掛け、肘を掛け、踵が少し浮いた。

ぐつと細い腕に力が入り、踵がぐつくりと椅子の上に降りた。「登れない」

肘を掛けたところで足が浮いてしまい、それ以上動けない。筋力のないセレンには、とても通気孔までよじ登ることができないようだ。

小さな口元から、ゆっくりと息を吐いたセレンは、心の中で数を数えた。

三、二、一。

椅子を踏み台にしてセレンが勢いよく飛び上がった。

片足が椅子の背もたれに引っかかり、椅子が大きな音を立てて床に倒れた。

通気孔の中に両肘を掛けられたのはいいが、足場を失い、力も入らず、セレンは足をバタつかせながら、その場から動けなくなってしまうた。

やがて部屋の外から物音を聞いて駆けつけて来た見張り役の兵士

に、ライフルの銃口を向けられてしまった。

「そこでなにをしている？ 早く降りて来い！」

セレンからは下にいる兵士の顔が見えなかった。顔を通気孔の中に突っ込んでいる。

声に命じられるままにセレンは降りようとしたが、下が見えないために床までの距離が掴めず、

「すみません、降りるの手伝ってくださいませんか？」

と暗い通気孔の中に声を響かせた。

どこからかため息を吐くような声が聞こえ、セレンの両足が抱きかかえられるように掴まれた。

「ゆっくりと手を放して降りて来い」

「ありがとうございます」

床の降ろされたセレンは、そのまま腕を掴まえれ、リビングまで歩かされると、銃口を向けられ椅子に座らされた。

「じつと座っている」

「はい」

力ない声でセレンは返事をした。

状況は完全に悪化した。

手足を縛られることはなかったが、椅子から一步も動けず、常に自分に銃口を向ける兵士が凜とした態度で立っている。セレンは目を伏せ、重いため息を吐いた。逃げ出そうなんて考えなければよかった。

そもそもセレンひとりでは逃げられるわけがない。それに逃げる途中で銃弾に晒される可能性は大いにある。そう考えると、セレン身体をゾクゾクとさせて身震いをした。

最初から殺す目的なら、こんなところに閉じ込めておくはずがない。じつとしていれば殺される心配はない。そう思ったセレンは運命に身を任せることにした。

だが、しばらくしてセレンは足をムズムズと悶えるように動かすはじめた。

妙な動きをするセレンに対してライフル銃を構え直した兵士が聞く。

「どうした？」

「あの、えっと……トイレに行きたいのですが？」

顔を真っ赤にしたセレンは恥ずかしそうに言った。そう言えば、ずっとゴタゴタに巻き込まれ、トイレに行く暇などなかったのだ。

尿失禁しそうな強い尿意を催し、寒気がして鳥肌が立ったセレンは、相手の承諾を得る前に立ち上がった。

「ごめんなさい、我慢できません！」

「仕方ない、俺の前をゆっくり歩け」

背中に銃口を突きつけられ、トイレに向かってゆっくりと歩き出した。早く歩きたいのは山々だが、ゆっくり歩けと命令されている上に、走りなどしたら恥ずかしいことになってしまいそうだった。

「扉は開けたままにしろ」

トイレの前に来たところで、兵士がとんでもないことを言い、セレンは顔を真っ赤にして眼を剥いた。

「な、なんですか!？」

「可笑しな真似をしないと限らない」

「窓もない密室から逃げられるわけじゃないですか!」

「わかった、ドアは閉めていい。その代わり早く済ませろよ」

ドアを閉めて密室の中でひとりになったセレンは、僧服の裾を巻く仕上げパンティを下ろすと便座に腰掛けた。

「はあ」

自然と安堵のため息が漏れ、セレンはふと天井を見上げて、大きな目をいつも以上に大きく開けた。

トイレの外で待っている兵士はライフルの銃口を天に向けて構え、微動だにせずセレンのことを待ち続けていた。

三分の時間が流れ、五分を過ぎた。

なにか可笑しいと思った兵士はトイレのドアを強く叩いた。

「早く出て来い!」

少し強い口調で言ったが、応じる答えはなく、しーんと静まり返っている。まるでなかに人がいなようだ。と、ここで兵士ははつとした顔をしてドアノブに手を掛けて、壊れんばかりに強く廻した。

「返事をしろ！」

返事はない。ドアも開かない。　してやられた！

兵士は足を上げてドアを蹴破ろうとしたが、足跡が付いただけでびくともしない。

已む無く兵士はライフル銃を構えた。艦内での銃の使用は基本的に制限があるが、これは緊急事態だった。

ドアノブに三発の銃弾を喰らわせ、ドアを蹴破り中に突入した兵士は辺りを見回した。

一般人には不必要と思える大きな個室には、洗面台が設置され、便器の蓋は閉められ誰も座っていない　もぬけの殻だ。ただ、びゅうびゅうと風の音が鳴っている。天井の通気孔が開いていた。そこからセレンは逃げたのだ。

通信機でどこかに連絡をした兵士は、閉まっている便器の蓋に足を掛けて、すぐに通気孔の中に入っていた。

そして、少し経ったところで、洗面台の下に設置されていた棚の蓋が内側から開かれ、セレンがひよっこり顔を出した。彼女はずつとトイレの中で息を潜め、じつと兵士が通気孔に入ってくれるのを祈っていたのだ。セレンの作戦にまんまと敵は嵌ったわけだ。と言いたいところだが、これは不幸中の幸いがもたらした出来事だった。本当は通気孔から逃げようとしたのだが、またしても背が足りなかったのだ。セレンが右往左往していると、外から兵士の怒鳴り声が聞こえ、慌てて彼女は棚の中に隠れたのだ。そして、運は彼女を味方した。

だが、これから先、セレンはこの敵陣の中からどうやって脱出する気なのだろうか。運もそうは味方してくれないだろう。そして、セレン自身も自分の運が、人よりも悪いことを身に沁みてわかっていた。

頭を抱えたセレンは重い足取りで歩きはじめた。

## 黄砂に舞う羽根「いにしえの少女（7）」

「これが人型エネルギープラントかい？」

少年とは言いがたい妖気を纏う皇帝ルオが尋ねた。

「ええ、そうらしいわ。検査はこれからしようと思っただけだけど、なにからしようかしら？」

ライザは硝子板を通して、その先の密室にいる『少女』を見ていた。

冷たい金属の壁に包まれた部屋で、『少女』は瞬きもせず壁に一点を見つめ続け、ただじつと膝を抱えて座っているだけだった。逃げるでもなく、動くでもなく、声すら漏らさない。生きているのかと疑うほどだ。いや、はじめから『生物』ではないのかもしれない。

『少女』が閉じ込められている部屋の壁は、魔導炉の爆発にも耐えうる超合金であり、硝子の板もただに硝子にあらず、魔導的なコーティングを施しており、周りの壁よりは脆いが、それでも壊されることなど有り得ない。魔導炉の小型版とも言える、人型エネルギープラントが突如爆発しようとも、絶対壊れない筈だ。筈というのは、『少女』の力が未だ未知数だからだ。

白い布の服を着せられた『少女』は、まるで天上人のような雰囲気醸し出し、肌は着せられた服よりも白く輝き、穢れなき純粹さをイメージさせた。そして、背中に生えた二対の翼が、天上人の雰囲気よりいっそう強いものにする。しかし、片方の羽根は紅い。

「まるで天から降って来た『少女』だね。いや、堕ちてきたのか？ 悪戯な表情をして笑うルオに対して、ライザは深く頷いた。

「そうね、だから古代人は地の底に封印なのでしょうね。魔導硝子越しでも、ゾクゾク感じるわ」

「魔導を帯びた風を纏っているのが、ここにいっても感じられる。その『少女』は魔導の塊に等しいかもしれない」

「帝國の力　いいえ、貴方の力になるわ」



「朕に操れると思うかい」

「アタクシがお手伝いいたしますわ」

「それは頼もしい言葉だ。では、あとは君に全て任せるとしよう」

「畏まりました」

紅いマントを翻し、部屋をあとにするルオの背中に一礼したライザは、再び檻の中の小鳥を見つめた。

翼の生えた『少女』は尚も膝を抱えじっとしている。

ライザにはひとつの疑問があった。

古代人は、なぜこんなモノをつくったのか？

そもそもエネルギープラントを造るならば、人型である必要はない。人型の方が不便であるし、造るのにも手間が掛かるはずだ。なのに、古代人は人型エネルギープラントを製造した。

人型『エネルギープラント』というのは嘘、もしくは便宜上なのではないかとライザは考えた。古代人は『人型』のモノをつくらうとしたのではないか？

では、『少女』はなんの目的で、この世に生み出されたのか？

人型兵器 否、人型は兵器の形としては欠点が多すぎる。だが、それでも人は人型にこだわりを持つらしく、ゴーレム、ホムンクルス、自動人形、F男爵という医師は、死体を繋ぎ合わせ人型のモンスターを創り上げた。人はいつの時代も生命の創造を試み、神の真似事をしてきたのだ。

古代人は初めから新たな生命を創ろうとしていた。それがライザの結論だ。

ライザがこのような結論を出したのは、彼女自身が生命の創造主になろうと試みたことがあるからである。しかし、彼女は自分が納得できる結果を出せず、成功と言える例は一例もない。その成功の糸口が目の前にいる。ライザは心躍らせた。

だが、問題はこれから『少女』をどう扱ってよいものか？

せっかく手に入れたサンプルを壊すわけにもいかない。それに、小型魔導炉とも言うべき力を持つモノに、もしもなにかがあってか

らでは済まない。『失われし科学技術』はなにが飛び出すのかわからない、ビックリ箱のようなものなのだ。

『少女』の翼が微かに煌き、光の粒子を呼吸するように放出している。

「翼は内部に溜まったエネルギーを外に放出するためのものなのね」  
ライザは自分の言葉に自分で納得し、深く頷いた。

翼は空を飛ぶためのものではないだろう。あのような形状と大きさでは、ヒトが空を飛ぶことは物理的に不可能だ。できたとしても、それは翼が羽ばたく力によるものではなく、他の力の働きによるものだろう。

ライザの考えでは、翼は『少女』の原動力になっている魔導エネルギーを体内から外部に排出するためのものであり、翼から零れる煌めきは魔導のカス 廃棄物に達しない。

立てた人差し指を唇に当てたライザは、甘い息を漏らし考え事をする、なにかを思い立ったように白いコートの裾を翻した。

電子ロックにカードキーを差し込み、暗証番号を紅いマニキュアを塗った爪で押すと、金属の扉が横にスライドして開いた。その先にいるのは『少女』。

ブーツの踵を鳴らし、ライザは優雅な足取りで『少女』の横に立った。

どこを見ているのかわからない『少女』の瞳に、しゃがみ込むライザの姿が映し出された。

「アタクシの言葉が理解できるかしら？」

なんの反応もない。

「創造主に魂を入れてもらわなかったのかしら？」

『少女』の眼は死んでいた。

「でも、アタクシは見たわ。アナタの瞳に光が宿った瞬間を」

それは『少女』が永い眠りから醒めたときのこと。『少女』は愛くるしい瞳をしながら、小さく呟いたのだ 『私と……同じ……』  
と。あのときと今、なにが違う？

「……あの子の存在」

唇を舐めたライザの脳裏に浮かぶ『少年』の影。あの『少年』が鍵に違いないとライザは確信したのだ。

「となると、あのシスターがやはり役に立ちそうね」

シスターとはもちろん、シスター・セレンのことである。人質としての効果が今発揮した。あとは、セレンを出しにアレンを呼び寄せればいい。

「さあ、アナタはアタクシと王子様に会いに行きましょう」

『少女』の腕を掴んだライザがゆっくりと立ち上がり、『少女』は抵抗することもなく、揺ら揺らと立ち上がった。

虚ろな『少女』を外に連れ出そうとしたライザの足が止まった。静かだった部屋に通信機の音が鳴り響く。『少女』は音など聞こえていないように、なにも反応を示さない。虚ろなままだ。通信機に出たライザが艶やかに笑う。

「あのシスターも、見かけによらずおてんばさんだこと……ふふ」それは拘束中のセレンが逃げ出したとの連絡だった。

掴まれていた腕を放された『少女』は、木の葉が舞い落ちるように床にへたり込み、ブーツを鳴らす音が遠ざかって行った。

## 黄砂に舞う羽根「夢見（1）」

周りの壁や床は鼠色の金属できており、走りなどしたら大きな足を音が立ってしまふ。横幅三メートルほどの大きな通路を、セレンはなるべく摺り足で歩いていく。

足音だけに注意を払ってはいけぬ。いつどこから人が飛び出して来るかわからないので、聴覚を研ぎ澄ませて耳を常に立てておかなければいけないのだ。そのため、セレンの疲労は雪のように深々と積もっていった。

シユラ帝國が世界に誇る超巨大飛空艇 キュプロクス の内部は、そこが飛空艇の中であることを忘れてしまふほど広く、まるで巨大な鉄の要塞の中にいるような感覚だ。

セレンはここに連れて来られたときの記憶を辿り、出口までの道順を思い出そうと勤めるが、そもそもセレンは出入り口から入ったのではなく、空間転送によって艦内に連れて来られたのだった。それにここに連れて来られた当初は、極度のパニック状態にあり、通ったはずの道ですら覚えていなかった。

セレンの足が不意に止まり、顔が強張る。

金属の床に響き渡る足音。

「その場を動くな！」

男の声が響き渡り、セレンは泣きそうな顔をして後ろを振り向いた。

二人組みの兵士が駆け寄ってくる。

ライフル銃、ハンドガン、ナイフを装備しているが、そのどれも構えていない。兵士たちはセレンを無傷で捕らえると命令されていた。だが、セレンをそんなこと知らないのです、殺されると思って必死で逃げる。逃げれば当然、相手も必死で追ってくる。

僧服の裾を激しく揺らしながら走るセレンの視線に、エレベーターが飛び込んで来た。

運がいいことに、ちょうどエレベーターはこの階に停止中で、セレンは手動のドアを急いで横にスライドさせ、エレベーターの中に乗り込んだ。

手動ドアを閉めようとしたセレンだが、ドアの隙間に男の手が伸びる。

「ごめんなさい！」

と叫んだセレンは、男の手に構わずドアを閉めた。

ドアに手を挟まれ、『うがっ！』と重い空気の塊を口から吐いた男が、苦痛に表情を歪ませながら手を引いた。

エレベーターは兵士たちの目の前で下がって行った。

密室の中でセレンはパニック状態に陥っていた。

逃げなきゃ！

それだけが頭の中を駆け廻り、逃げるためにどうしたらいいのかまで頭が廻らない。

冷静になろうと呼吸を整えようとするが、呼吸は荒くなるばかりで、心臓の鼓動は激しいドラム演奏のように鳴り響き、セレンは足元から崩れて床に尻餅を付いた。

頭为天辺から意識がすーっと抜けていくような感覚に陥り、目がチカチカしはじめた。

壁にもたれ掛かろうとしたところでエレベーターが停車し、セレンは必死の思いで立ち上がると、渾身の力で手動ドアを開けた。

待ち伏せはなかったようだ。それもそのはずで、このフロアにいるのはセレンを含めて人間は二名。このフロアに来るための唯一の道はエレベーターのみだった。だが、セレンはそんなことなど知る由もない。

覚束ない足取りで歩くセレンの前に、とある部屋から出てきたばかりの白い影が立ちはだかった。

「あら、シスター、御機嫌よう」

甘ったるい声を漏らしたのはライザだった。

セレンの運もここまでのようだ。

逃げることをやめたセレンにライザが踵を鳴らしながら歩み寄ってくる。

「アナタも見かけによらずおてんばさんなのね。あの部屋がお気に召さなかったのかしら？」

「別にそんなんじゃないやありません。わたしはただ……！？」

ライザの白い繊手は伸ばされ、紅いマニキュアを塗った指先がセレンの頬を包んだ。

「アタクシと行動している間は、アナタの命を保障すると言ったはずよ？ 少なくとも、アナタに利用価値がある間は」

紅い爪がセレンの頬を傷つけた。

柔らかな頬に一筋の紅い線が走り、痛みを覚える前にセレンはビツクリして眼を剥いた。

頬に伝わる生暖かく柔らかい感触。それは艶かしく動き、紅い血を美味しそうに舐め取った。

セレンの頬から顔を離れたライザは恍惚とした表情を浮かべた。

「アナタ処女でしょ？」

「はい！？」

「血の味でわかるのよ」

「変なこと言わないでください！」

「アタクシは魔導師だからわかるのよ。あの坊やとはまだ寝てないみたいね。あの子、意外に奥手なのかしら？」

「勘違いしないでください！ あたしたちそんな関係じゃありませんし、だってアレンは」

セレンが最後まで言い終わる前に、エレベーターから大量の兵士が流れ出してきた。

一本道でセレンは逃げ場をなくした。

すぐ目の前にはライザ、後ろには隙間なく通路を塞いでいる兵士。セレンは床を力強く蹴り上げた。

白いロングコートの隙間を抜け、セレンは伸ばされるライザの手も振り切った。そして、開きっぱなしになっていた扉の中に飛び込

むと、ドアの開閉ボタンを叩いてドアを閉めた。

兵士たちの声に紛れてライザが叫んだが、それはすぐにドアの向こう側に消えた。

閉められたドアは向こう側から開かれることはなかった。なぜなら、ドアの開閉ボタンは、セレンが火事場の馬鹿力で叩いた衝撃で、バチバチと火花を散らし壊れてしまっていたのだ。

口を半開きにするセレンだったが、これは好機だ。いい時間稼ぎになった。セレンの運はまだ続いているようだ。しかし、これは今まで運が悪かった反動か、これから運が……。

部屋の中は薄暗く、蒼白いライトだけが心細げに点っていた。

セレンは見た。硝子の向こう側にいる世にも美しい存在を。紅白の翼を持つ『少女』は、膝を抱え壁の一点を見つめているようだった。

硝子の向こう側にいる『少女』に気づいてもらおうと、セレンは硝子を力いっぱい叩いたのだが、硝子は衝撃も音も吸収してしまっただ。魔導的なコーティングをされた硝子は、物理的な衝撃及び、音などを吸収してしまうのだ。

ドアの前に廻るが、そこでセレンの動きが停止する。開け方がわからない

電子ロックを解除するには、カードキーを差し込み、暗証番号を入力する必要がある

恐る恐るセレンは指を伸ばし、番号の描かれたボタンを三つほどプッシュした。が、なにも起こるはずがない。

再び硝子板の前に立ったセレンは深く息を吐いた。中にいる『少女』は先ほどからまったく動いていない。

もはやセレンにはどうしようもない状態だった。

この部屋から逃げるすべもなければ、唯一の出入り口の扉は、そのうち外側から壊されるだろう。これでセレンも万事休すだ。

だが、セレンが万事休すになっても、この場にはもうひとつの存在がいた。

まったく動かなかった『少女』が、ついに自らの足で立ち上がったのだ。

大きな翼を広げ、光の粒子を散らすも、『少女』の瞳は未だ夢現。完全に覚醒め切っていない。それでも『少女』は本能か、それともプログラムか、なにかに呼ばれるようにフラフラとしている。

はっとするセレンが見守る中、『少女』は硝子の向こう側でなにかを呟いた。

その呟きは硝子のこちら側にいるセレンには届かなかったが、中に備え付けてあったマイクはしっかりと『少女』の声を拾っていた。迎えに来る。

その呟きは誰に対してのものか？

『少女』は軽く硝子に触れた。それだけだった。それだけで硝子は煌びやかな粒子に姿を変え、霧のように辺りに四散した。

思わず顔を伏せたセレンが元の位置に顔を戻したとき、そこには『少女』は空気のように立っていた。

「……迎えに来る。私……行かなければ……ならない」  
虚ろな眼をした『少女』は上を向いた。

その眼は何処を見る？

それは果たして天井か、その先の空か、宇宙か、それよりも先のセカイか？

セレンは虚ろな『少女』の腕にそっと触れた。

「あの、どこに行かなければならないんですか？」

「……わからない」

「はあ、そうですかあ」

間延びした返事を返したセレンは途方に暮れた。虚ろな『少女』を見て取って、まともなコミュニケーションができないと判断したのだ。

天を見上げふらふら歩き廻る『少女』に付き添いながら、セレンはとにかく言葉による意志伝達をしようと頑張った。

「ええと、お名前は？」



「……行かなければ……ならない」

「どこに?」

「……名前?」

「そう、あなたのお名前は?」

「……名前?」

「あなたをつくった人は、あなたをなんと呼んでいたんですか?」

「つくった……そう、私は創られた。二人の魔導師に創られた」

『少女』の思考が晴れて来たのか、口調が少しずつだが明瞭になり、瞳に光が微かに輝きはじめた。

糸口を掴んだセレンは、この糸が切れないように話を続けようとした。

「ええと、それで、あなたのお名前は?」

「私を創った魔導師の名前はリリスとレヴェナ。二人の姉妹が私を創った」

「その二人は、あなたになんと名前を付けてくれたんですか?」  
「私の名前……私の名前……レヴェナは私をこう呼んだ エヴァ」

『少女』の瞳が爛々と輝き、翼が煌きを放った。

だが、セレンの目は『少女』とは別の方向に向けられていた。

ドアにレーザー光線が走り、それは長方形の線を描くと、切り取られたドアが外側から激しく蹴破られた。

## 黄砂に舞う羽根「夢見(2)」

太陽が西の地平線に沈み、空で踊っていた朱たちがどこかに消え、代わりに東の地平線から月が昇りはじめると同時に蒼が世界を包む。夜が来る。

砂塵の吹き荒れる大地に立ったアレンは、遙か前方も見える鉄の塊を視察していた。

問題は キュプロクス のどこにセレンがいるのかなのだが、それに検討をつけるのは用意ではない。なぜならば、キュプロクスが超巨大飛空艇だからだ。

キュプロクス の全長は三五〇メートル以上にも及び、全高と全幅もともに一〇〇メートルを越す。この中からセレンを探すのは容易ではない。それに、皇帝ル才専用機とのこともあって、中に乗っている兵士の数も尋常ではない。

砂を踏みしだき、アレンは一步一步慎重に キュプロクス に近づいた。手にはすでに魔導銃 グングニール が構えられている。

飛空艇の一〇〇メートル以内に近づくと、警備用の丸いライトが幾つも地面の上を飛び交い照らしていた。アレンはそれに照らされぬように、吹き抜ける風となって地面を駆けた。だが、その途中で敵に見つかってしまった。

アレンを見つけたのは人の目ではない。機械の眼によって熱探知をされてしまったのだ。

飛空艇側面に取り付けられたレーザー銃が光線を発射する。

空高く跳躍し、翔けるアレンの後を光線が追う。

飛び交う光線の中を縫うように翔け抜け、光の線は天を突き、地平線の彼方に消え、地面を焦がした。だが、どれ一つとしてアレンを焼け焦がすことはできなかった。

そして、アレンは金属の壁に背を当てた。

どうやら飛空艇と直角の位置にいれば、レーザー銃の射程距離が

ら外れるらしく、光のイリユージョンは止んだ。

レーザーの攻撃は止んだものの、敵にアレンのことがバレた明白で、これから先、警備が強固なものとなるのは間違いない。もはやこっそり進入というわけにはいくまい。となると、強引にいくしかない。

今アレンがいる場所から斜め頭上を見上げると、艦尾から迫り出している壁が見えた。飛空艇を横から見ると、そこはバルコニーのような場所だということがすぐにわかる。

バルコニーまでの高さは三〇メートル以上ある。

歯車が廻る音がどこから聞こえ、グングニールを懐にしまったアレンは右膝を屈伸させた。

そして、飛蝗か蛙のように高く飛翔した。

天に伸ばされたアレンの右手はバルコニーの柵を掴み、飛んだときの反動と右手の力で、ひよいと柵を飛び越えてバルコニーの中に入った。

広々とした辺りを見廻したアレンが苦笑いを浮かべた。

「あはっ、お邪魔なようで……」

次の瞬間、アレンに銃口が一斉に向けられた。

兵士の数はざっと一〇名。アレンを待ち伏せていたわけではない。たまたまここに居合わせたのだ。

ライフル銃を構える七名の兵士と、ハンドガンを構える他の兵士たちとは井手達の異なる三名。アレンの目を惹いたのは、その三名に取り囲まれたひとりの少年だった。

「朕の晩餐に招待した覚えはないが？」

大人びた 否、悪魔の笑みを浮かべる少年は皇帝ルオだった。

手にフォークとナイフを握っているルオは、夜風を浴びながら夕食を摂っていたのだ。今日のルオは食事を邪魔されたことを怒るでもなく、慌てるでもなく、『少年』に気さくに声をかけた。すべては気の向くままのである。

「ところで君は誰かな？ まさか単身で朕の命を狙いに来たという

のはあるまい？」

「俺はただの通りすがりー」

「あはは、おもしろいことを言うね」

「そりゃどーも」

いつも通りのアレンだった。

相手が皇帝ルオだということは、ひと目見てすぐにわかった。ルオを取り囲んでいる三名の兵士の質や発する気が、他の屑とは違うことも一目瞭然であったし、なによりもルオ本人のなんとも言いがたい魔性の気が、至上最悪ならぬ至上災厄の暴君を示していた。

銃口を向けられていても余裕か、アレンは鼻の頭をポリポリと掻いた。

こんな状況に置かれたことならいくらでもある。つい先日もどっかの中華飯店で機関銃を乱射されたばかりだ。逃げようと思えば逃げることができるが、あのときは決定的に違う点がある。皇帝ルオがいることだ。

アレンにとって皇帝ルオはただの餓鬼とは思えなかったのだ。

それはルオにとっても同じであった。

「君さ、普通じゃないよね。うん、余興が観たい」

ナイフを持ったルオの手がアレンに向けられた刹那、それを合図として銃口が火を噴いた。

いつ撃たれるともわからない状態ではあったが、これは不意打ちだ。

高速で襲い掛かる銃弾を避けるべく、アレンは床が抜ける勢いで金属板を叩き蹴り上げ、宙を舞った。だが、これでは標的にしてくれと言っているようなものである。飛び上がったあとは、物理法則に従って落ちるしかない。

落下するアレンに当たった弾が甲高い音を立てて火花を散らし、他の弾が頬に一筋の紅い線を走らせても、アレンは冷静さを保ち、懐から銃を抜いた。

グングニール が吼えた。

雷鳴が轟き、稲妻がまるで亀裂のように降り注ぎ、天に向かって降る銃弾の雨を呑み込んだ。

古の老神が持っていた凄まじい破壊力を持つ槍　その名がグングニール。魔導銃　グングニール　の名の由来はそこから来ており、銃に刻まれた紋様は失われし古代ルーン文字であった。

アレンは　グングニール　を我が手中に収めたのだ。

雷光が轟き、稲妻が翔け翔け、兵士の身体を槍の如く貫いた。  
燃え上がる衝撃の炎。

兵士たちが燃え揺れ、黒く焼け焦げた人影が崩れ落ち逝く。

金属板の上に膝を付き着地したアレンが、凜と顔を上げた。恐れを知らぬその顔が向けられた先にいるのは、この場でただひとり無傷でいる少年　皇帝ルオ。

自分を守っていた兵士が次々と殺られていく中で、ルオは優雅に食事を続けていた。そして、何事もなかったように、口を拭いたナプキンを投げ捨て、ゆっくりと席から立った。

ルオの周りには、彼を守るように一本の大剣が宙を廻っていた。  
この剣こそがアレンの攻撃をすべて防いでいたのだ。

大剣は最初から鞘に納まってなどいない。常に牙を剥き、妖々とした輝きを放っている赤黒い剣身には、読むことの叶わない古代文字がびっしりと刻まれ、剣の周りで風が唸り声をあげている。

大剣が宙を舞いながらルオの手の中に納まった。

「朕の愛剣　黒の剣　が君を斬りたくて仕方ないそうだ。ほら、風の音が聴こえるだろ？」

黒の剣　の周りで風が唸っている。それは『早く血を飲ませろ』と言わんばかりに荒々しく殺気立っていた。まるで剣が生きているようだ。

歯車は廻り続けている。だが、それ以上はない。　グングニールを構えたアレンはルオと距離を縮めることなく、その場から足を動かすことはなかった。

「俺飛び道具、あんだ剣。それでどーやって戦う気なんだよ？」

「知りたくば、早く掛かってくるといい」

「あとさあ、そんなデカイ剣、あんたに使えんの？」

ルオの構える大剣は、彼よりも少し背が低い程度で、一五〇センチほどあるだろうか。通常の剣より長く、大の大人でも使いこなすのが大変なこの剣を、小柄な少年が本当に使いこなすというのだろうか？

「朕が皇帝ルオと知つての口の聞き方かい？」

「だからどーだってんだよ？ 俺あんたの国民じゃないし」

こんな口の聞き方をされたのは、ルオにとって初めてだったのだろう。微かにルオの口元が緩んだ。

「くくくつ……あはは、なんて愚かな。朕もまだまだ絶対者には遠いか」

「絶対者なんか、この世にいねえよ、ばーか」

「ならば、朕が最初で最後の存在となるろう。恐怖こそ力、ゆくぞ

黒の剣！」

朱色のマントが舞い上がった。

切っ先を床に向けて構えるルオが駆ける。

迎え撃つは、アレンの魔導銃 グングニール。

「喰らえ糞餓鬼！」

稲妻が空を横に裂き奔る。だが次の瞬間、アレンの表情が曇る。

やはり無駄だった。

銃口から放たれた稲妻が 黒の剣 の呑み込まれていく。

魔導を無効としたルオは、そのまま臆するなくアレンの懐に斬り込んだ。

びゅんと風が唸る。

「くおつ、危ねえ！」

鼻先で切っ先を感じたアレンは、後ろに飛び退いて体制を整えようとしますが、その隙すらルオは与えない。

襲い来る剣技を前に押され気味のアレンが、再び引き金に指を掛けた。

銃口が吼え、眩い雷光が辺りを包む。だが、それも一瞬の輝き。見る見るうちに稲光は 黒の剣 に呑まれた。

ルオは辺りを見廻した。アレンの姿が消えた。眩い光に眼が眩んだ、その一瞬にアレンが消失したのだ。

「後ろか！」

振り向いたルオが見たものは、上空から金属板の上に着地し、艦内に飛び込むアレンの姿だった。

「逃げるが勝ち！」

この勝負、分が悪いと判断したアレンは逃げることを選択したのだ。

「待て！」

「待てと言われて、待つ奴なんていねえよ！」

だが、アレンの足は止まった。

蒼白く巨大な輝きが艦内の廊下を飛んで来る。

光とともに空激破がアレンの横を擦り抜け、アレンの身体が宙に浮いて吹っ飛ばされた。

金属板に尻餅を付いたアレンが見たものは？

「……………！？」

歯車が激しい音を立てて廻りはじめた。

黄砂に舞う羽根「夢見(3)」

ルオも見た。この場に現れた輝ける天使の姿を。

果たして天使がもたらすものは愛か平和か、それとも破壊か？

月明かり照らすこの場所で、輝ける天使とも言つべき『少女』はセレンとともに現れた。

巨大な翼から落ちる煌く粉が、風に揺れて消えていく。

『少女』は無邪気な笑みを浮かべながら口を開いた。

「私と……同じ……」

その言葉はアレンだけに向けられたものだった。

自分の胸を鷲掴みにしているアレンの表情は苦悶に満ち、額から大量の汗が零れ落ちていた。

歯車が廻る。

苦しい。

けれど、それはアレンには制御できないことだった。

床に膝をついて崩れ落ちたアレンに、すぐさまセレンが駆け寄った。

「大丈夫ですかアレンさん!？」

「ぜんぜんへーき。つーか、助けに来なくても平気だったじゃんか、損した」

「もしかしてわたしのこと助けに来てくれたんですか？」

アレンはなにも答えず立ち上がると、ルオに視線を向けた。

「ついでにその子ももらってく」

「朕を倒せたらね」

ルオの手はしっかりと『少女』の腕を掴んでいた。

「下がってる」

アレンはそう言つと、セレンの身体を自分の後ろに押し退けた。

「アレンさん大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃねえよ、ばーか」



「莫迦つて、酷くありませんか!？」

「ギャーギャー喚くな。今の俺マジだから」

「……………」

まだなにか言いたそうなセレンを黙らせて、アレンは一步前へ出た。

『少女』を捕らえているルオも一步前へ出る。

二人の戦いが今またはじまろうとしていた。

が、女性の声が二人の間に割って入った。

「タイムよタイムよ。少しお時間をいただけませんかしら？」

白い影がブーツの踵を鳴らすのを見て、ルオが低く呟いた。

「ライザか……神聖な戦いに水を注しに来たのかい？」

「いいえ、貴方が戦いたいと言うのなら、アタクシはお止めしませんわ。ただ、その前に準備を」

ライザとともに出入り口から流れ出して来た兵士がルオと『少女』を取り囲んだ。二人を取り囲んだ兵士は一・五メートルほどの筒状の物体を持っていた。

なにかを合図するようにライザが手を上げた。

「ルオ様、『少女』を放し、お下がってください」

『少女』から離れ、素早くルオが後退すると、筒を持っていた兵士機械的な動作で『少女』を取り囲み、筒を床に設置した。

筒は『少女』を囲み、その効果を発揮する。

ライザが指を鳴らすと同時に、天に向けられた筒の先端から煙と光が放出された。それは煙幕のように『少女』の周りを覆い、やがてきよとんする『少女』の前に壁ができた。それは半透明の壁。筒が結界を作り出し、『少女』を結界の中に封じたのだ。

自分を取り囲む壁に子供が興味を抱くように、好奇心の塊と化した『少女』が軽く触れた。壁に波紋が生じ、すぐに消えた。薄い羊膜のようなのに、決して破れることはない。それがこの結界の力だった。

結界の効果を確認したライザがルオに視線を向けた。

「あとは貴方のお気の召すまま」

「これで思う存分戦えるよ、ありがとうライザ」

黒の剣を一振りしたルオがアレンの顔を凝視した。

「手出しは無用。手を出した者は、あとでミンチにして家畜の餌だ」  
この言葉でアレンとセレンに向けられていた銃口が床に向けられた。

帽子の上から頭を搔いたアレンが少年のように無邪気に笑う。

「大した自身だな、俺にマジで勝つ気でやんの」

「朕は絶対に負けない」

「勝手に言ってる。すぐに痛い目見せてやんから。お尻ぺんぺんしてやるぜ！」

「朕が負けるわけがないだろう、神が下郎に」

「神なんざいねえよ！」

攻撃するは魔導銃　グングニール。

迎え撃つは魔剣　黒の剣

だが、グングニールの雷撃は、黒の剣によってすべて無効とされている。

いかにして戦うアレン？

アレンの手から雷撃が放たれた。それと同時にアレンがルオとの距離を詰めた。接近戦に持ち込む気だ。

稲妻は刹那のうちに　黒の剣　に吞まれてしまった。やはり、ルオを前に　グングニール　の雷撃は太刀打ちできないのか。だが、アレンはルオの懐に飛び込んでいた。

歯車が鳴る。それはルオの予想を超えたスピードだった。アレンの左フックがルオの顔面に炸裂した。

「ルオ様！」

頬を抉られて後方に吹っ飛んだルオの姿を見て、ライザが叫び声をあげた。

地面に片手を付き、口から血を吐き捨てるルオの姿を見て、アレンがガッツポーズを決めた。

「よっしゃ、1ポイント先取！」

「朕を殴ったな！」

口を拳で拭い、ゆっくりと立ち上がったルオの肩は震えていた。

「くくく……母君にも父君にも手を上げられたことのない、この朕を殴ったね……あははははっ！」

アレンはルオを殴った最初の者となった。それがどのような意味を持つか、ルオを知るものならば震え上がり泣き叫ぶだろう。だが、アレンはアレンだ。

「殴られて笑うなんて、頭イッてんな、あんた」

悪態を吐くアレンを睨みつけたライザは、ルオの元に駆け寄ろうとしたが、それをルオが切っ先を持って静止した。

「手出しは無用と言ったはずだが？」

「わかりましたわ」

首に剣の切っ先を突きつけられたライザは、それ以上はなににも言わず、後退りをしてルオから離れた。

ルオは 黒の剣 を構え直すと、踵を弾ませて微笑んだ。

「あはは、今日はとっても楽しいよ君のこと、子供だと思って甘く見たのが間違えだった。だから、次は本気で行くよ」

子供とは思えぬ邪悪な笑みを浮かべたルオと共鳴するように、

黒の剣 が意思を持つように低く唸った。

アレンが グングニール を懐にしまい、右手をフリーにした。

今度は『右手』で殴ってやるつもりなのだ。

「俺も本気で行くぜ。謝るなら今のうち。それとも一対一は止めにして、そこにいる兵士たちに助けてえって頼めよ」

「一対一は朕の美学。美のなんたるかを知らぬ者に口出しされたくない」

「なにが美学だよ。喧嘩なんつーものは、勝ちやいーんだよ、勝てば。卑怯な手を使ってもな！」

歯車がフル回転で廻り、アレンが床を蹴り上げた。

目にも止まらぬ速さとは、まさにこのことだろう。

アレンの残像だけがその場に残り、瞬き一つした間にアレンは忽然とルオの前に現れた。このアレンの一瞬の動きを眼で追えたのはただひとり。

まさかの出来事にアレンが眼を剥いた。  
剣戟の響き。

ルオも眼を剥いて驚いた。彼の一撃は確実にアレンを捕らえたはずだったからだ。しかし、アレンは受けた。

「たかが掌で朕の一刀を受けようとは」  
「たかがじゃねーよ、特別製」

大剣を受け止めているのはアレンの右手だった。そう、人ならぬアレンの右手がルオの一撃を受け止めたのだ。

どちらも動かぬ状況だった。アレンもルオも動かない。だが、四肢は振るえ、全身の力はただ一点に注がれていた。気を抜いた方が負けだ。

柄を握るルオの両手に力がこもる。

例えルオが超一流の剣技を持っていようとも、その腕力には限界がある。その点、アレンの右手が持つ力は計り知れない。だが、二人の力比べは五分と五分。

黒の剣 が激しく唸った。

それはアレンにとって予期せぬ出来事であった。

四本の指が親指を残し、硬い床に落ちて音を立てた。

そして、次の瞬間には、アレンの右腕が斬り飛ばされ、宙を回転しながら飛んでいたのだ。

言葉も出ないアレン。

すべてを見ていたセレンが両手で顔を覆った。

不敵に嗤うルオに握られた 黒の剣 が再び低く唸る。

## 黄砂に舞う羽根「夢見（4）」

寒空の下で、空気が震えた。

自然の摂理すらが、あるモノに恐怖したのだ。

大剣を振りかざし、アレンに止めを刺そうとしていたルオの動きが止まった。

動きを止めたのはルオだけではなかった。この場にいた皆が動きを止めてしまった。それは本能的なものだったに違いなく、セレンは自分で気づくまで呼吸を止めてしまっていた。

美しくも恐ろしい力を秘める存在。

再び空気が震える。

それは怒りか悲しみか、それとも別の感情か。

『少女』は結界の中で慟哭していた。

二対の羽根は枯れた花のように垂れ下がり、『少女』が肩を震わせるたびに空気が震える。それはあり得ぬことだった。結界の中にいるモノが外に影響を及ぼすはずがない。空気が震えるはずがないのだ。

危機感を覚えたライザが叫んだ。

「破壊されるわ！ 退却なさい、ルオ様もお引きください！」

『少女』を包む結界が、大波に揺られるように激しく波打つ。そして、液体のような壁に蜘蛛の巣のような輝が入り、みしみしと音を立てながら、少しずつ壁が剥がれ落ちていく。もう、長くは持たないと誰もが確信したとき、轟々と風が唸り声をあげ、結界が爆発した。

結界の破片が煌く粒子となって、風に乗って天に昇る。『少女』はその真下に立っていた。

「私と同じヒト……傷つけるなんて……許さない……」

掲げられた『少女』の片手にエネルギーが溜められ輝き、それを見たライザがルオに向かって叫んだ。

「お逃げください！」

「朕の辞書に逃げるなどという言葉はない！」

不敵に笑い 黒の剣 を構えたルオに、『少女』の手からレーザービームとも言うべき攻撃が放たれた。

突風がどこからか吹き込んだ。その風は人の形となり、ルオと『少女』の間に立ちはだかった。

「もうおよし、わしの可愛い娘 エヴァ」

その声はまさしく老婆リリスのものだった。

放たれたレーザービームはリリスの前で光の壁に弾かれ、天に向かつて飛んで消えた。

突然のリリスの登場に、眼を丸くしているセレンの背中に、大柄な男が声をかけた。

「シスター、ぼさつとしてないで早く逃げるぞ」

「はい？」

セレンの振り向いた先にいたのは、気を失っているアレンを背中に担いでいるトツシュだった。

「シスターを助けに来たのはいいが、グッドタイミングだったのか、バッドタイミングだったのわからんな」

バッドタイミングだ。

『少女』 エヴァは銀盤の上を滑るように、床の上を低く飛翔

し、セレンとトツシュの前に立った。だが、二人のことなど眼中にない。エヴァが見つめるのはただひとり アレンのみだ。

「……私と同じ」

これだけだった。なにをしたわけでもない。無邪気に笑うエヴァが、ただ一言の言葉を漏らしただけで、セレンとトツシュは全身が弛緩し、腰を砕かれたように床に倒れてしまった。

床に寝転ぶアレンの頬に、エヴァの蒼白い繊手が伸びる。

「待つんじゃない」

ゆっくりとエヴァが振り返った先にリリスが立っていた。

「よい子じゃエヴァ。わしの言葉をちゃんと聞き」

幼子を諭すようにリリスが話しかける。だが、エヴァは聞く耳を持たずアレンを抱きかかえようとした。

空気が激しく震え上がった。

エヴァが声にならない叫びをあげ、超振動の波紋が広がり、エヴァを止めようとした兵士たちが散り散りに吹き飛ばされた。その場で耐えたのはリリスのみ。

「聞き分けのない子じゃな。まったく誰に似たのやら……」

愚痴を溢したリリスは、優雅に片手をエヴァの額に乗せようとした。再び眠りにつかせようとしたのだ。だが、見えない衝撃によって、リリスの身体は後方に五メートルほど吹き飛ばされて止まった。「わがままなところはわしに似たか……」

少し笑いながら咳くようにリリスが言った直後、彼女の眼は大きく見開かれた。

大きく広げられた紅白の翼から、大量の煌きが零れる。

飛ばたいた。

飛ぶ。

アレンを抱きかかえたエヴァが、天に向かって飛ばたこうとしている。

大事な実験サンプルに逃げられると思ったライザがエヴァに向かって走った。だが、エヴァの身体から放たれた光柱が天を衝き、激しい閃光とともにライザの身体は後方に吹き飛ばされた。

光が天に昇る。

飛び立とうとしているエヴァの前で老婆リリスの姿形が変化した。老婆リリスから妖女リリスへ。

「妾の話を聴くのじゃ。その子は重症を負って、放っておけば死ぬ。全機能停止じゃ」

黒の剣 のよって腕を切られたアレンの傷口からは、煌く砂とも液体ともつかぬ物質が流れ出し、顔は生気を失い蒼ざめている。

『全機能停止』という言葉聞いて、エヴァの顔に陰が差すが、それでも『少女』は『少年』を連れて行こうとした。

舞い上がるエヴァの身体。

逃がさまいとリリスが手を上げた。

宇宙へ昇ろうとするエヴァの足に黒い触手が絡みつく。その触手はリリスのナイトドレスから伸びていた。

「妹の言うことしか聴けぬのかえ？」

月のような静かな激昂だった。

黒い触手がアレンの身体を包み、エヴァはアレンを奪われまいとするが、『創造物』は『創造主』には勝てなかった。

黒色に包まれたアレンがリリスの胸に抱かれ、一筋の流星が天に向かつて降り注ぐ。

金属板の床が激しく揺れ、足場が崩れようとしていた。

衝撃波が巻き起こり、床が落ち崩れる。

ルオは気を失って倒れているライザを抱え出入口に走り、トツシユはアレンを抱えながらセレンとともに走った。しかし、床は轟音を立てながら崩壊した。

「きゃっ！」

足を滑らせたセレンにトツシユが片手を差し伸べるが、彼の立っていた足場も崩れた。

崩れ落ちた金属板たちは、遙か三〇メートル地上に叩きつけられ、砂煙が辺りを包み込み、視界をゼロとした。

すべては砂煙に埋もれ、姿を消してしまった。

夜空には二つの輝きが昇っていた。

静かに微笑む月と、月よりも美しく輝く儂げな『少女』。



黄砂に舞う羽根「夢見（5）」

意識は微かにあった。

薄く開けた瞼の先に見えるライトが眩しく、視界がぼやけ、黒い人影が自分の顔を覗きこんでいるのに、誰だかまったくわからない。

「エーテル体が不足しているようだわ」

誰の声なのかわからない。

前にもこんなことがあったような気がする。

もしかしたら意識は戻っていないのかもしれない。

過去の回想かもしれない。

アレンにはどちらでもいいことだった。

「エーテル体の流出が激しいようじゃな」

過去と現在がリンクする。

「オリハルコンとの合金を」

「オリハルコンの合金のようじゃが」

過去の声と今の声が交差する。

「わたくしの力で」

「わしの力で」

凍てついた手術台の上にひとりの少女が横たわっていた。

一糸纏わぬ少女の身体は紅い血で覆われ、右脚も右腕も欠損し、内臓も飛び出してしまっている悲惨な状態だった。

凍てついた手術台の上にアレンは寝かされていた。

服を脱がされ、鼠色の金属が右半身を覆い、右腕はルオとの戦いで失われていた。

造り変わる身体。

造り直される身体。

過去の偉大な魔導師は、死人からヒトを創った。

現在の偉大な魔導師は。

「これで完璧じゃ。修理だけでこれほどまでに身を削る思いをする

とは、此奴を創った者は……」

そこでリリスは口を噤んだ。その表情に刻まれた皺は深い。手術台の上で寝ていたアレンが、ゆっくりと瞼を動かした。

「……胸糞悪い」

機械の右手をゆっくりと天井に向けたアレンが、自分の右手を眺めながら状態を起した。

「あんたが直してくれたのか？」

「わし意外に誰がおる？」

しんと静まり返った金属の部屋にはリリス以外の者はいない。さきほど聞こえていた声も、やはり幻聴だったようだ。

「あんたが直したのか……。これでひとつはつきりしたことがある。やっぱあんたじゃねえ」

「なにがじゃ？」

「別にい。あと、あんたと初めて会ったとき、初めてじゃない気がしたけど、あれ俺の気のせい」

死人からヒトを創った偉大なる魔導師は誰か？

その問いはアレンに解けることはなかったが、ひとつだけはつきりしたことがある。

リリスではない。

手術台から飛び降りたアレンはリリスから服を受け取ると、素早く着替えて帽子を被り、最後にゴーグルを頭の上に乗せた。

「あんがと」

そう呟いてアレンはリリスを残して部屋を後にした。

部屋の外は長方形の筒のような廊下が続いていた。

所々が茶色く錆びている廊下を照らす明かりは、等間隔に天井にぶら下がっている裸電球だけで、廊下全体が薄暗いために遠く先は闇だった

見覚えのある廊下だった。

「アレンさん、あの、もう大丈夫なんですか？」

部屋の外でアレンに声をかけたのはセレンだった。その表情は沈

痛な面持ちだ。

それに対して、アレンの言葉は素っ気無いものだった。

「へーき」

「……わたし心配してたんですよ。それなのに、そんな返事……」

「心配すんのはあんたの勝手だろ。それとも『ありがとう』とか言  
つて欲しいわけ？」

「別にそうじゃありませんけど」

「じゃ、ちょーへーき。これでいいだろ」

「……………」

セレンは言葉を失った。

悲しいとか、怒りといった感情を越え、ただ唾然と言葉を失って  
しまった。アレンの神経構造が、セレンの理解の範疇を越えたのだ。  
そして、アレンは前の話がなかったように、

「つーかさ、ここどこ？」

「トツシュさんの隠れ家だそうです」

「やっぱね。どーりで見覚えがあったと思った」

アレンがここに来たのは二度目だった。その二度とも、意識を失  
っているときに運ばれた。

自分勝手に歩き出したアレンが、いきなり後ろを振り向く。

「で、トツシュはどこにいんの？」

「えっと、そっちじゃなくて、こっちです」

セレンが申し訳なさそうに指を差したのは、アレンがいるのとは  
まったく逆の方向だった。

「早く言えよ」

「だって、アレンさんが勝手に歩き出したのが悪いんですよ」

「気が利かねえなあ」

ぶつくさ言いながらアレンはセレンに連れられて廊下を歩いた。

いつもよりもアレンの機嫌が悪いことをセレンは感じていた。自  
分の知らないうちに、なにかあったのかもしれない。けれど、なに  
があったのかは想像も及ばなかった。セレンにとって、アレンは未

だ正体不明なのだ。

廊下に二人の足音が響く中、アレンは点々と割れた電球たちに目をやった。その電球はエヴァの封印が解かれたときに割れたものだ。エヴァの解放はクーロンの街に大きな爪痕を残したのだ。

だが、アレンは感じていた。

まだだ。

封印は解かれても、覚醒めてはいない。

幾星霜を経て眠りから醒めたが『少女』が、真に覚醒するとき、世界にどのような影響をもたらそうか？

封印を解いたリリスは知っているのだろうか？

知らぬはずがない。

事の解決にはリリスの力が必要かもしれない。けれど、アレンはリリスに話しても無駄だろうと思っていた。だったら、最初から封印を解いていない。それがアレンの考えだ。

しかし、リリスという女は気まぐれだ。物事がどう転ぶかはわからない。一寸先は闇だ。

電球が割れてしまっているせいで、普段よりも暗い廊下を進み、セレンはアレンをトツシユの部屋の前まで案内した。

「ここがトツシユさんのお部屋です」

セレンがドアをノックしようとする、アレンがノックなしにドアを開けた。

「お邪魔します」

と言っくらいなら、ノックくらいすればいいものを。

ドアを開けると廊下に大量の光が流れ込んだ。

突然部屋に入って来たアレンの顔を見て、トツシユはあからさまに嫌な顔をする。

「ノックくらいしろ。どんな教育を受けて来たんだ」

「悪かったな、俺はガッコーも行ってねえよ」

小さなテーブルに着いているトツシユは、コーヒーを飲みながらアレンの右腕を見た。

「それで、腕は治ったのか？」

「直ったんだけど、そんなことより」

「なにも言うな」

コーヒーカップに口を付けようとしていたトツシユの動きが止まり、空いている手をパーにして力強く前に突き出した。

「話くらい聞けよ」

「いや、聞かない」

断固として自分の意見を曲げないトツシユに詰め寄ったアレンは、彼のコーヒーカップを持ってしている手を下げて言った。

「聞けつてば」

「聞かないと言っているだろう。俺様は二度もおまえを助けて、俺様のせいで危険なことに巻き込んだシスターもちゃんと助けた」

「じゃあ、ついでに」

「ついではない」

「じゃあ、そのついででのついででいいからさ」

ここでトツシユがため息をついて折れた。

「話だけは聞いてやる、言ってみろ」

「まずさあ、人型エネルギープラントはどうなったんだよ？」

「空の上に飛んで行った」

そう言つてトツシユは人差し指を立てて天を示した。

天に昇つたエヴァはクーロンの街からも見ることができ、今もまだ夜空で星のように輝いている。それ以上の動きは見せない。エヴァ

アはクーロン上空で、ただじつとしているのだ。

アレンはトツシユの指差す方向を見た。そこには天井があるが、

アレンはその先を見て、なにかを考えるように目を閉じた。

歯車が廻っている。

こんなに離れているのに、歯車が廻っている。

なぜ、歯車は廻る？

ゆっくりと目を開けたアレンはトツシユに尋ねた。

「あのさ、飛空機とか持ってないのかよ？」

「この街にそんな高価な代物を持っている奴がいると思うか？」

「あんだだっいたら持ってそうだし。小型のプロペラ式でいんだけど？」

「だから持っていないと言っているだろう。それと、この街中を探しても無駄だと先に言っておくぞ」

「使えねえなあ」

腕組みをしたアレンは、そのまま床に胡坐をかいて黙り込んでしまった。

「アレンさん、床に座るなんて汚いですよ」

「うっせーよ」

セレンに悪態をついたアレンは再び黙り込む。

少し顔を膨らませてドアの前で突っ立っていたセレンを押し退けて、リリースが足音も立てずに部屋に入ってきた。

「空飛ぶ乗り物なら、この街の地下に眠っておる」

「マジか姐ちゃん!？」

床を叩いて飛び上がったアレンを、リリースは老女とは思えぬ艶やかな瞳で見つめた。

「ほほほっ、ついて参れ」

## 黄砂に舞う羽根「夢見（6）」

月光が鋼色の機体に反射する。

けたたましい爆音を静かな夜に鳴り響かせながら、巨大な鉄の塊が砂煙を上げなら空に舞い上がる。

魔導を動力源とし、巨大なエンジンに膨大なエネルギー送り込む。全長は三五〇メートル以上もの巨体が宙に浮いた。

シユラ帝國が世界に誇る、世界最大級の飛空艇 キュプロクスが、夜空を支配しようとしている。

幾つものライトを灯台の光のように撒き散らし、 キュプロクスが天へ天へと昇っていく。

風が少し強い。

まるで風が唸り声をあげているようだ。

キュプロクス が目指す航路は、夜空に燦然と輝く巨星 エ  
ヴァのもとへ。

艦内では慌ただしく兵士たちが動いていた。

武器の整備から小型飛空機の整備に時間を追われ、ひとりの『少女』を捕獲するために万全の準備が進められていた。

皇帝ルオの前での失態は許されない。それは死に直結するからだ。それゆえ、兵士たちの士気は高まり、『少女』捕獲の準備は万全に万全を期した。

艦内のほぼ中心部にある広い司令室では、皇帝ルオが艦長の椅子

つまりルオの特等席に脚を組んで座っていた。

「ライザ、どうするつもりなんだい？」

ルオは斜め上を見上げて、不機嫌そうなライザに尋ねた。

「アタクシといたしましては、捕獲を第一優先事項、それができなければ破壊を推奨いたしますわ」

「破壊は勿体ないね」

まったくそのとおりだとライザは思っていた。破壊と口にはした

が、ライザはエヴァを破壊する気など毛頭ない。

「では、人型エネルギープラント捕獲のために、『黒い翼』を投入いたします」

「朕は参謀ではないから、君の好きなようにやってくれればいい」

「御意のままに」

ルオに軽く頭を下げたライザは、前方の席にいるオペレーターに命令を下した。

「『黒の翼』に出動の命令をなさい」

それだけを言った。そう、すでに作戦は決まっていたのだ。『黒の翼』を投入することは最初から決まっており、艦内ではそれに沿って準備が進められていたのだ。

シユラ帝国のエースパイロットで構成された、小型飛空機の精鋭部隊が『黒の翼』である。彼らの任務は常に戦闘の最前線に立つことであり、空での仕事を一手に引き受けるスペシャリスト集団でもある。『黒の翼』は常に模範でなければならないのだ。

『黒い翼』の名のとおり、黒い翼を持つプロペラ型飛空機の周りには、黒尽くめの服に身を包む隊員たちが出動の要請を待っていた。格納庫で待機していた『黒の翼』部隊長に通達が下る。

通信機を口元から下げた部隊長が、すぐさま隊員たちに指示を下す。

隊員たちが慌ただしく動き、格納庫になんともいえぬ緊張感が走る。

月明かりの下での作戦は困難を極める。その困難さと危険さは昼間の比ではない。それでも彼らは行く。ある者は愛する者のため、ある者は名誉や誇りのため、ある者は己のために空を翔け巡る。

飛空機を運ぶための昇降口が開かれ、一機目の飛空機が飛空挺上部の発着場にエレベーターで運ばれていく。

開かれた昇降口の先は闇だった。暗い夜空が広がっている。星々の煌きだけでは心もとない。それでも機械制御のエレベーターは上へと向かう。



長く伸びる甲板の上から観える星はいつもよりも騒がしく輝いていた。

二一時ちょうど作戦開始。

プロペラが高速で回転し、助走をつけた飛空機が夜空へ飛び立った。

後に続けと次々と黒い機体が空に飛び立つ。

六機の黒い機体が群れをつくり、魔鳥のごとく夜空を舞う。

星よりも、美しく輝く月下の『少女』 エヴァ。彼女は未だ夢現であった。

『黒い翼』が近づいてくるのに気づいているのかいないのか。エヴァの瞳は遠くを見据えていた。

六機の雲に映る黒い魔鳥の影が迷いなく、船を導く灯台のように輝くエヴァに向かって飛んでいく。

『黒の翼』に課せられた任務は、エヴァの破壊に非ず捕獲だ。だが、どうやって宙に浮かぶものをプロペラ型飛空機が捕獲するのか？ この手の任務は他に類を見ないと思いきや、『黒の翼』はこれまでに数多くの捕獲作戦を成功させていた。

『黒の翼』のターゲットは必ずしも人や機械だけではない。中には宙を泳ぐ空魚や、巨鳥、空竜などもいた。この手の作戦をさせたら、『黒の翼』に優る飛空部隊はいないだろう。だが、今回の作戦は今までもっとも困難が予想された。

キュプロクス 艦内の司令室にいるライザが、オペレーターに向かつて喚くように指示を出す。

「無傷で捕獲するのよー！」

そう、『無傷』で という言葉が今回の作戦を困難なものにさせていた。しかも、相手はあくまで『生物』ではなく、『機械』なのだ。生物であれば、麻酔弾で眠らせることもできるが、姿形がいくらヒトに似ていようと機械に麻酔弾が効くはずがない。

宙でじっとしているエヴァに近づいた『黒い翼』は、陣形を崩さぬまま減速する。

エヴァに動きは見られない。逃げることもなく、戦う気配もなく、魂が抜けてしまっているようだ。

黒い機体を操縦する部隊長が通信機を通して仲間には指示を出す。  
《魔導ネット発射！》

これを合図に六機の飛空機がエヴァを取り囲み、機体の先端から七色に輝く捕獲ネットを六機同時に発射した。

輝く捕獲ネットは蜘蛛の巣のように広がりエヴァの身体を捕らえ張り付く。

現代科学技術と『失われし科学技術』のアンバランスな融合。プロペラ機が超科学の粋を使っているのだ。

伸縮自在の魔導ネットは見事エヴァを捕獲して捕らえた。

エヴァはなんの抵抗もしなかった。それゆえに作戦がスムーズに進んだのだ。

並んで飛ぶ六機の飛空機の先端から垂れ下がる六本の紐の先には、七色に輝く魔導ネットに包まれ毛糸玉のようになってしまっているエヴァがいる。あとはエヴァを キュプロクス まで運べば、作戦のほとんどが終了する。だがしかし、エヴァは空竜などとは違い麻酔弾によって眠らされていない。ただ、夢現なだけ。

自由の象徴である翼を無理やり丸められ、身動き一つできないエヴァが、やっと目を大きく開けた。

魔導ネットを破り白い翼が出た、紅い翼が出た。万が一、空竜が目を覚まし暴れても破れないはずの魔導ネットが破られた。紅白の翼から零れる煌きが、魔導ネットの力を中和させてしまったのだ。

星よりも、月よりも、世界に昼をもたらす太陽よりも、エヴァは力強く燦然と輝いた。

あまりに眩しすぎる輝きは、エヴァを包んでいた魔導ネットを、煌く炎によって燃やしてしまった。

燃えがる炎の中でエヴァは巨大な翼を力いっぱい広げた。

『黒い翼』の一機を光の柱が下から突き上げるように貫いた。  
夜空に儂い爆発音が響き渡る。

エヴァの身体から幾つもの光の筋が放たれ、無差別に世界を照らし、上空で火炎の華が咲き乱れる。

六機の機体は、花火のように儂くも美しく散った。

キククロプスの司令室で、『黒の翼』が壊滅させられたことを聞いたライザは、苦い顔をして皇帝の顔をちらりと覗きこんだ。

ルオは素っ気無い表情をしていた。

「やっぱり駄目だったようだね。君も無理だとわかっていたのだろ  
う?」

「はい、わかっておりました」

『無傷』でエヴァを捕らえるなど無謀だった。それはライザも十分承知していた。だが、そうとわかっていても、彼女はエヴァを無傷で捕らえたかったのだ。

前の席に座っているオペレーターが後ろを振り返った。

「ターゲットがカメラの撮影可能圏内に入りました」

「すぐさまスクリーンに映像を出しなさい」

ライザが指示を出すと、前方の巨大スクリーンに白一色の映像が映し出された。スクリーンの故障かと思われたが、すぐに白はその大きさを縮め、闇に浮かぶ光球を映し出した。エヴァの身体は光の膜 球体状のバリアによって優しく包まれていた。

オペレーターが激しく振り切られたメーターの針を見て叫んだ。

「測定不能のエネルギー反応を検出!」

魔導師でもあるライザは背中に冷たいものを感じた。本能がなにかを恐れている。そして、彼女は発狂するように声をあげた。

「最大出力で防御フィールドを張りなさい!」

スクリーンを見ていたライザは眼を見開いて言葉を詰まらせる。

皇帝ルオは不気味に笑う。

「来るよ」

ルオは畏れてなどいない。彼は心から楽しんでいた。危機的な状況の中に彼は至福を感じるのだ。

夜空に浮かぶ光の玉は膨張し、縮んだ。

エネルギーの集束。

そして、放出。

巨大なエネルギー光線がエヴァから放たれた。

轟々と唸る光線は大気を燃やし、よりいっそう輝きを増して キュプロクス の真横を掠め、全長三五〇メートルを越す巨艦を激しく揺らした。そう、巨大な光の光線は キュプロクス を外れたのだ。

だが、それだけでは終わらなかった。

巨大な光線は輝きを増しながら キュプロクス の横を抜け、地上に向かって降り注ぐ。その先には巨大都市クーロンがあった。今、巨大な光は巨大都市を呑み込もうとしていたのだ。

街に住む人々は、誰もが空を見上げ慌てふためいた。巨大隕石が振って来る。そうとしか思えない巨大な光だった。 巨大隕

黄砂に舞う羽根「夢見（7）」

空飛び乗り物を求めるアレンはリリスとともに、坑道入り口がある空き地の近くに来ていた。

「本当に空飛び乗り物なんてあんのかよ？」

「わしを信じておらぬのか？」

「ぜんぜん信じられないね。あんたって得体が知れないし、目的がハッキリしねえんだよ」

「得体が知れないのはお主とて同じことじゃ。お主はなぜ行くのじゃ？」

どうしてアレンはエヴァのもとに行こうとしているのか？

「そんなの俺の勝手だろ」

「じゃったら、わしもわしの勝手じゃ。あの子の封印を解いたのも、お主に力を貸すのも、わしの勝手じゃ」

舗装されていない乾いた道を進み、空き地の入り口までやって来たアレンは、顔を少し出して空き地のようすを窺った。

地下遺跡でエヴァが見つかったもなお、坑道の入り口は帝国の兵士によって守られていた。だが、前よりは数がぐんと少なくなっている。これなら大暴れはしなくて済みそうだ。

グングニールを構えたアレンが、リリスをこの場に残して空き地の中に飛び込んだ。

アレンに気づいた兵士が小型マシンバルカンをいち早く撃った。

夜の静寂に銃声の華々しい音が乱れる。

兵士の誰かが大声をあげた。

「指名手配リストに載っている『少年』だ！」

すでにアレンは帝国の指名手配リストに名を連ねていたのだ。しかも、この『少年』を生け捕りをした者には、七〇万イェンもの賞金が懸けられていた。三万イェンあれば、困ることなく一年間暮らせる額だということから、七〇万イェンがいかに高額かということ

がわかるだろう。そして、この賞金を懸けたのはもちろんライザだ。ちなみにトツシユに懸けられている懸賞金は、生け捕りならば一〇〇万イェン。死亡した場合は半額の五〇万イェンである。

兵士たちはチャンスを逃さまいと必死になっていた。

目の前にいる『少年』を生け捕りにしなけばならない。だが、無傷というのは条件に含まれていない。兵士たちは銃で『少年』の足元を狙った。

アレンは地面の上で躍らせれた。

「糞野郎どもが！」

グングニール が吼える寸前だった。老婆リリスが風のように地面を滑り移動し、戦渦の真っ只中に立った。

「お眠り、童子たち」

温かい風が吹き荒れた。

その風は春の薫りを運び、花の蜜のような甘い香りで場を満たした。

甘い香りは夢への誘い。

小型マシンバルカンの音が静かな小雨になり、やがて止んだ。

バタンと一人目の兵士が倒れたのを皮切りに、二人、三人 と兵士が次々と深い眠りに堕ちていく。

その中でアレンもまた、目を両手で力いっぱい擦っていたが、プツンと糸が切れて背中から地面に倒れた。

いびきをかいて大の字になって眠るアレンの頬にリリスが平手打ちをした。

「お主まで眠ってどうするのじゃ！」

それは仕方あるまい。リリスの魔導によって眠りに堕ちたものはちよつとやそつとでは目を覚まさない。もしかしたら一生目を覚まさないこともある。それはリリス次第なのだ。

リリスによって眠りから覚まされたアレンは、眠気眼の夢心地で魂が抜けてしまっているようだった。夢の世界はそれほどまでに魅惑的だったのである。

「もう肉喰えねえ……腹いっぱい……」

どんな夢を見ていたのかは想像ができた。

「しつかりするのじゃ！」

呆れたリリスは、もう一度強くアレンの頬を打った。

「痛えっ!? なにすんだよ!」

「あの程度の魔導に魅了どうするのじゃ」

「あんたが悪いんだろ、無差別に眠らせるんじゃないやねえよ!」

「五月蠅い小僧じゃ。ささ、先を急ぐぞよ」

「自分勝手な女」

「お主も自分勝手な」

女。と言おうとしたときだった。輝きはリリスの口をつぐませた。

空の上でなにかが一際輝いている。

アレンは見た。流れ星が墜ちてくる。いや、違う。エネルギーの塊が飛来してくる。

強風が吹き荒れ、物が上空へ吸い込まれるようにして舞い上がる。人の身体が持ち上げられ、看板が上空を飛び、外に干してあった洗濯物は一つ残らず空に吸い込まれた。

光が世界を包み込む。

目は開けられるはずがない。目を開いてしまったら、その眼は一生使い物にならなくなってしまう。

アレンは反射的に眼を閉じて、地面に這いつくばった。

その中でただひとりリリスだけが全てを見定めた。

クーロンに飛来してくるエネルギーの塊は、流れ星のように長い尾を夜空に描き、大気を燃やし輝きを増した。

その輝きは『失われし科学技術』の最悪の恐怖　魔導砲の光に似ていた。

古の戦いで使用された魔導砲の光は世界の大半を焼き、今もなお世界にその爪痕を残す。クーロン一帯に広がる砂漠地帯も、その戦いの名残だった。

「外れたようじゃな。じゃが、砂の雨が降るぞよ」

リリスが呟いた次の瞬間、巨大なエネルギーの塊がもつともクーロン上空に近づいた。

そして、尾を引く輝きはクーロンの遙か先の砂漠地帯に激突し、世界を昼に変えて巨大な茸雲に姿を変えるときもに、世界に砂の雨を降らせた。

空から降り注ぐ砂は真っ黒に焦げており、クーロンの街はたちまち黒一色になってしまった。

砂を払いながら立ち上がったアレンは、すぐさまリリスの首元に掴みかかった。

「あんた、なんであんなもんの封印を解いたんだよ！ 今のとんでもねえ攻撃はあいつの仕業だろ！」

「心を持つ者には、自由に生きる権利があるじゃろう？」

「はあ？」

「例えヒトの創り出した生命であろうと、自由に生きる権利はあるじゃろう？」

「はあ？」

「強い者が生き残る。それが自然の摂理じゃろう？」

「意味不明」

自分の首元を掴んでいるアレンの手をそつと外したりリスは、それ以上はなにも言わず歩き出した。

「おい、待てよ！」

リリスは返事を返さなかった。

小声でぶつくさ言いながら、アレンは仕方なくリリスについて坑道の中に入った。

オレンジ色のライトは、そのほとんどが壊れており、坑道の中はほとんど闇に近かった。

リリスの足音を追うようにアレンは歩き、やがて前方に白い輝きが見えてきた。その輝きは白銀の部屋から発せられているものだった。そう、リリスがアレンを連れてきた場所は、エヴァが封印され



ていたあの部屋だったのだ。

部屋の中心にはエヴァが眠っていた円柱状のケースがだけがあった。

「マジでここに空飛ぶ乗り物があんのかよ？」

アレンは半信半疑だった。

艶やかにリリスは微笑んだ。

「この部屋ではない。この先の部屋じゃ」

この先の部屋？

扉は今アレンたちが入って来た扉しか見当たらない。それに部屋には切れ目すら入っていないのだ。そのどこに扉など隠されているのか。だが、部屋の中心にあるケースも最初は床の下に隠されていたのだ。

なにも見当たらない壁にリリスの手が触れると、切れ目一つ入っていなかった壁に線が入り、扉のように左右に開けた。その先には別の部屋があるようだ。

別の部屋に移動するリリスに続いてアレンもその部屋に入った。が、ここもなにもない白銀の箱だった。きつと、この部屋に物も全て収納されてしまっているのだろう。

リリスはまた壁に触れ、別の部屋への入り口を開いた。次の部屋にもなにもない。これと同じことを三回繰り返し、ようやくリリスの足が止まった。

「ここじゃ」

やはり、この部屋にもなにもない。だが、もうアレンはなにも言わなかった。

しゃがみ込んだリリスが床を叩いて小声でなにかを呟くと、床に切れ目が走り、床の下からなにかがせり上がってきた。

それはスクーターに似ていた。しかし、タイヤがない。車体の下部は平らにできていた。

タイヤのないスクーターを見て、アレンはすぐに理解した。

「空飛ぶから、タイヤはいらないのか」

「そうじゃ。わかったら、さっさと乗るのじゃ」

「マジで飛ぶのかよ？」

「さあて？」

「なんだよ、その返事は？」

「わしがこのエアバイクに最後に乗ったのは……？」

途方もないくらい前だったことは確かだ。

ちよつと嫌な顔しながらも、アレンはリリースに促されてスクーターに乗った。しかし、エンジンの掛け方がわからない。そもそもエンジンというものがあるのかも怪しい。

「エンジンはどうやって掛けたよ？」

「わしの声に反応する」

そう言うてから、リリースはエアバイクに向かって小声で囁きかけた。すると、エアバイクがアレンを乗せたまま少し浮いた。

音もなく浮いたエアバイクを見て満足そうにリリースは頷き、言葉を続けた。

「バイクの乗り方はわかるじゃろ？」

「前に一回だけ乗ったことある」

「それなら心配ないの……？」

宙に浮いていたエアバイクが力なく床に落ちていく。

「なんだよ、飛ばねえじゃねえか！」

「可笑しいの……やはり、整備もせんと放っておいたのが悪かったようじゃ」

ガン！

リリースの足がエアバイクの尻を蹴った。すると、エアバイクが再び宙に浮きはじめてでないか！？

「直ったようじゃ、早う行け」

「空から俺が落ちたらあんたのせいだかな」

エアバイクが強い風を巻き起こした。

アレンが頭に乗せていたゴーグルを目に装着する。

「そんじゃ、行ってくるわ」

エアバイクが床の上を滑るように走り去り、リリスは子供の背中を見守るような母の眼差しでアレンを見送った。

## 黄砂に舞う羽根「夢見(8)」

アレンを乗せたエアバイクは狭い坑道の中を走り、まだ運転に慣れてないアレンは壁にぶつかりそうになりながらも、そのスピードを緩めることなく、絶叫マシンにでも乗るようにアレンは無邪気に笑っていた。

「ヤッホー！ こりやすげえ」

坑道の出口が見えてきた。

爆風とともに出口を抜けたアレンは、ハンドルを上につくようにして、車体の前方を上につけた。すると、エアバイクは上に向かって進路を変える。

夜空を我が物のように飛ぶアレンは、全身に風を感じながら光に向かって突き進んだ。目指すは星よりも、月夜よりも、燦然と輝くひとりの『少女』。

風と一体になったアレンの目に、巨大な黒い影が飛び込んできた。空に浮かぶ巨大な鉄の塊 超巨大飛空艇 キュプロクス だ。

巨大な キュプロクス の船首にある巨大な眼のような穴 魔導砲の遙か先にエヴァはいた。

アレンは キュクロプス の横を飛び抜け、夜空を翔けて光り輝くエヴァのもとへ向かった。

空の上は風が強く、エアバイクに乗ったアレンは風に煽られ遊ばれる。だが、風はただ強く吹いているだけではなかった。風が魔導を孕んでいる。

煌く光の粒子がエヴァを包み込むように集まっている。

キュプロクス 艦内にいたライザは再び背中に冷たいものを感じた。

オペレーターが激しく振り切られたメーターの針を見て、また叫んだ。

「測定不能のエネルギー反応を検出！」

脚を組んでゆったりと座っていたルオが立ち上がった。

「次はないね。さつきと同じのを喰らったら、この飛空艇もただでは済まない。いいねライザ？」

「わかりました」

皇帝の言葉に『ライオンヘア』が深く頂垂れた。

ライザはエヴァの捕獲を諦めたのだ。

「魔導砲の準備をしたまえ！」

声高らかにルオが命じた。

キュプロクス の船尾にエネルギーが集中する。

ちょうどそのとき キュプロクス の船尾近くを飛行していたアレンは見た。

巨大な眼に蒼白い光が灯った。

エネルギーを充填する魔導砲は轟々と地獄の風を鳴らし、深い穴の中から妖しい輝きを放つ。

すぐにアレンは魔導砲が放たれることを悟った。もちろん、魔導砲の標的は夜空に浮かぶあどけない『少女』。大地を炎の海に変える魔導砲が、ただひとつの存在のために使われようとしているのだ。エヴァの輝きが増し、魔導砲が迎え撃つ。

魔導を孕んだ空気の対流が乱気流を起し、アレンはエアバイクから振り落とされそうになり、被っていた帽子が空に舞うが、そんなことにかまっていられなかった。

「糞っ、操縦が利かねえ！」

アレンを乗せたエアバイクは、どんどんエヴァから離されていく。轟々と叫ぶ風がアレンの耳元で鳴り響く中、夜空に二つの光線が奔った。

光の世界で風が荒れ狂い、アレンを乗せたエアバイクが、まるで強風に煽られる木の葉のように回転しながら落下していく。

光と光が空で交差したとき、激しい輝きとともに、煌く粒子が雨のように地面に降り注いだ。

大爆発を起した光の渦から、一筋の光線が抜けた。

ゴオオオオオツ！！

巨大な鉄の塊が傾いた。

世界を恐怖のどん底に落とす力を持つ魔導砲が負けたのだ。

大爆発とともに煙を上げる キュプロクス が、ゆっくりとしたスピードで地面に落ちていく。

落ちていくのは巨大な鉄の塊だけではなかった。

紅白の翼が色褪せ、煌きが失われていく。

夜空で星よりも一際輝いていた『少女』が地に墮ちる。

『少女』の夢は醒めることなく、そのまま地の底へ深い眠りに墮ちようとしていた。

どこかで歯車の鳴る音が聴こえた。

大きく広げられた腕。それは決して大きくはないけれど、『少女』は『少年』の胸の中に包まれた。

『少年』を乗せていた乗り物は地に向かって落ちてしまった。けれど、『少年』は夜空の上に浮かび、月光を浴びながら『少女』と抱き合っていた。

二つの歯車が鳴る。

光の宿る瞳で『少女』は『少年』を見つめた。

「私と同じひと」

『少年』は頷く。

「俺たちは『ひと』だ」

「……嬉しい」

『少女』は顔を赤らめ微笑んだ。

紅白の翼に煌きが還る。

封印が解かれたときは、まだ覚醒めてはいなかった。けれど、今。

『少女』の柔らかな蕾が『少年』の口に触れ、巨大な翼が『少年』の身体を優しく包み込んだ。

繭に包まれた『少女』は、美しい『大人』へ。

墮ちる墮ちる墮ちる。

夜空からふたりはどこまでも墮ちていた。

このとき、地中に眠る蜃は夢を見た。

『少女』が大切にしまっていた宝石箱の蓋が開けられる。それは夢や憧れが叶うとき。

宝石箱から飛び出した煌きたちが、美しいメロディーとともにダンスを踊りながら想いを乗せて、巡り巡りて世界を呼び覚ます。

夜空には雲ひとつなく、星が歌い、月は燦然と輝き世界を照らし、オアシスの湖が水面を揺らす。世界は変わろうとしていた。

湖の底から泡が溢れ出てきて、それは七色に輝くシャボン玉のように、いくつもいくつも天に昇っていく。

シャボン玉が静かに弾けると、その中からオーロラ色に輝く蝶が生まれ、美しい蝶たちは可憐に宙を舞い、シャボン玉から孵った蝶は世界の成長を暗示していた。

湖の表面が金色に輝き、荘厳たる輝きとともに崇高さを兼ね備えた白い繭が水底から浮上してきた。

蘇る想い、目覚める想い、大切な想い。

繭に小さな輝が幾つも入り、それはやがて大きな輝となり、白い繭から眩い光が漏れ出す。

清らかなる魂を守っていた繭が硝子のように碎け飛び、中から美しい一糸も纏わぬ『大人』が生まれ出た。

突然、世界は弾け飛んだ！

蜃の夢 が無理やり壊されたのだ。

アレンはいつの間にか、砂の上に膝をついていた。エヴァに包まれたアレンは、無事に地面に降りることができたのだ。しかし、エヴァはどこに？

エヴァは『少女』のまま砂の上に横たわっていた。

風が吹き、老婆リリスが姿を現した。

「エネルギーを全て使い切ってしまったようじゃな」

哀愁に満ちた瞳でリリスは横たわる『少女』を見た。すでに『少女』から輝きは失われている。そして、紅い翼も色褪せ、白く変わ

っていた。『少女』の翼は煌きを失っても、白く美しく輝いていたのだ。

歯車が激しく音を立てる。

アレンは胸が千切れんばかりに掴み、歯を食いしばった。創られた存在に魂はあったのか？

頬から零れ落ちた雫が、枯れた砂の大地を潤し、アレンの顔は砂の中に埋もれた。

『少女』は永遠に『少女』のままに　。



## 黄昏の帝国「アレン始動（１）」

砂漠に水が湧けば、自然とそこに町ができる。

水の多さに比例して町も大きくなっていく。

そこは砂漠の真ん中にある小さな町。これと言った産業はないが、一件だけ酒場がある。酒が飲める場所があるだけでも、ほかの町や村よりはマシだ。砂漠にある町はそれほどまでに貧困に喘いでいる場所が多いと言うことだ。

今や世界の3分の2が砂漠地帯であり、人間が住める土地を差し引いた場合、砂漠地帯に住んでない人間のほうが少ない。

砂漠地帯では作物が育たない。作物が育たなければ、家畜も育てることができない。深刻な食料不足の連鎖。

生きるためには金がいる。

金がない者は飢え死にをするだけだ。

そんな世の中で、クーロンのような大都市ならまだしも、こんな田舎町で店のメニューを片っ端か注文する大食らいは珍しい。

しかし、大男ではなく、小柄な『少年』というのが、周りを非常に驚かせた。

山積みなつた空の皿がテーブルに積み上げられていく。

そのようすを見ていたカウンター席の男が、マスターにひそひそ話をする。

「あいつ化け物か？ 店の食いもん全部喰われるんじゃないか？」

「そりゃ困るよ。あんな客想定外だ。店の食料だって町のもんと、外からたまにくる『普通』の客の分くらいしか用意してないよ」  
マスターは溜息を落とした。

一時的に売り上げが伸びても、食料が底について臨時休業となれば、結局は同じ売り上げになってしまう。それに常連たちには文句を言われることだろう。

救いがあるとしたら、あの客が酒を注文しなかったことだろう。

「もし食料が底をついちまったら、常連さんには酒だけを出すしかないな」

つぶやいてマスターは大食らいの客からもらった金を数えはじめた。

この店では常連でない者からは、先払いで金をもらうことにしている。それが今回は仇となった。こんな金の大事な時代だからこそ、金を目の前に出されたら、それを突き返して帰ってくれとは言えない。

フードを目深に被っていた少年がマスターに顔を向けて、大きく手を振った。

「おい、おっさん！ この肉料理うまいから5人目くらい追加、金はここに置いとくぜ」

大食いで周りを驚かせたが、金の羽振りの良さも目を引いた。

テーブル席の3人組も『少年』の話をひそひそとしていた。

「あいつ何もんなんだ？」

「俺さつき便所行くと見見たんだが、ただの餓鬼だったぜ。そうだな、歳はやつと毛が生えそろったところじゃねえか？」

「そんな餓鬼がなんであんな金持つてるんだよ？」

「盗みでもしたんじゃないか？ それ以外考えられるか？」

二人が話している中、同じ席の男はひとり黙っていた。顔が少し青いような気もする。

心配になった仲間が声をかける。

「腹でも痛いのか？ 飯も酒も進んでないぞ？」

「……俺も便所に行くとき見たんだよ、あいつの顔」

青い顔の男が重い口を開いた。

二人の仲間の視線が青い顔の男に強く刺さった。

なにを怯えているんだこいつ？

そして、青い顔の男は再び重い口を開くのだった。

「保安所の壁に貼ってあった賞金首にそっくりなんだよ……あいつ」「どうせちゃんげな盗人で三〇〇イェンくらいの賞金だろ？」

少額の賞金首であったなら、男はこれほどまで青い顔をして怯えるだろうか？

轟音！

店のドアが破壊され、武装した屈強な男たちが続々と店内に入ってきた。

人数は五人。先頭に立っている男は、ほかの者よりも身体が一回り大きく、リーダーの風格が伺える。

リーダーの男が店内を見回した。

「一〇〇万イエンの賞金首はどいつだ！」

この屈強な武装集団が店内に現れた衝撃を凌ぐ一言だった。

一〇〇万イエンと言えば夢の金額だ。貧困層は一生掛かっても稼ぐことのできない金額。そんな賞金を出せる者も限られてくる。

テーブル席に男がつぶやく。

「二桁間違ってるじゃねえか？」

同じ席で青い顔をしていた男は首を横に振った。

「本当だ、三ヶ月の前の噂知ってるだろ……あいつが『雷獣』だったんだよ」

『三ヶ月前』で通じる話題と言えば、クーロンでの事件だ。

クーロンに現れたシュラ帝国の巨大飛空艇キュクロプスが放った魔導砲。それとは別の脅威も人々を見た。あれがなんだったのか、未だに多くの人々は知らずに、数え切れない噂話が生まれた。

そして、同時期に高額な賞金首を懸けられたのが、『雷獣』の通り名を持つ『少年』だった。

賞金を懸けたのはシュラ帝国。事件との因果関係を誰もが勘ぐるだろう。

『少年』は屈強な男たちが乗り込んできたあとも、構わず食事を続けていた。まるで何事もなかったように。

リーダーに睨まれた客たちが次々と首を横に振る。俺は『雷獣』じゃないと。

そして、最後に残ったのが『少年』だった。

「テメエが『雷獣』か？」

リーダーが凄みを利かせて尋ねたが、『少年』は答えず食事を続けている。

次の瞬間、銃声が鳴り響き、『少年』がフォークで持ち上げていた肉に大穴が開いた。

『少年』は凍り付いたように動きを止めた。

子分の一人が笑い出した。

「ギャハハハッ、あの野郎、ビビって小便でも漏らしたんじゃないかねえか？」

ほかの子分も続いた。

「一〇〇万イエンなんて何かの間違いだと思ったぜ」

同じ額の懸賞金を懸けられている男がいる。『暗黒街の一匹狼』だ。彼はその賞金にいたる悪評や噂の数々がある。それが『雷獣』にはなかった。

どこかで 歯車 の音がした。

『少年』が肉ごとフォークをテーブルに突き立てた刹那！

「俺の首狙うなら、顔くらい覚えてこいよ、なッ！」

店にいた者たちが気づいたときには、『少年』がリーダーの顔面を拳で抉った瞬間だった。

この場で誰よりも巨大のリーダーが大きく吹っ飛ばされ、後ろにいた子分たちを巻き添えに、ボーリングのピンのように次々と倒れた。

客たちは眼を剥いた。

しかし、これで終わりではなかった。

男たちは『雷獣』の意味を知ることになる。

『少年』が懐から隠し持っていた『銃』を抜いた。

閃光！

瞬く間に稲妻が店内を翔け抜けた。

雷音はまるで獅子の咆吼。

屈強な男たちは立ち上がる隙も与えられず、聞くに堪えないおぞ

ましい絶叫をあげた。

魔導銃 グングニール の稲妻は、身体の芯から肉を焼いた。被っていたフードがいつの間にか取れていた『少年』 いや、少女アレンはマスターに顔向けた。

「さっきの肉料理まだかよ？」

店内に立ちたちこめる肉料理のような臭い。

客たちが一斉に嘔吐した。

平然とした顔をしているのはアレンだけ。その顔を見ただけで、幾つもの修羅場をくぐってきたことはわかる。

恐怖で言葉を失っていたマスターだったが、ついにこう言ったのだ。

「テーブルの金を持って……さっさと出てってくれ」

ときにその言葉は命取りになる。相手はつい今し方、屈強な男たちを一瞬で倒した100万の賞金首だ。

しかし、アレンは金を持たずに店の出口に向かって歩いた。

「ごちそうさん、うまかったぜ。金は店の修理代にでもしてくれよ」アレンは店を出た。

次の瞬間、緊張の糸が切れたマスターは気絶してぶっ倒れた。

食事を済ませて、軽い運動もしたアレンは、店の裏に停めてあったエアバイクを取りに向かった。

店の裏まで来ると、なにやら三人組の男たちがエアバイクの周りを囲んでいた。

「おい、タイヤがないけど大丈夫かよ？」

「バラしてジャンク屋に売れば問題ないだろ」

「そうだな、さっさと運びまおうぜ」

そう言った男がエアバイクに触れた瞬間、バチバチと音と火花を散らせながら泡を吹いて気絶した。

周りの男たちは慌てて何もできない。

そこへアレンがやって来た。

「人様のもん盗もうとするからだぜ」

『失われた科学技術「ロストテクノロジー」』の産物であるエアバイクの、行きすぎた防犯対策が発動したのだ。

アレンは戸惑って動けずにいる男たちを掻き分け、エアバイクに乗ろうとした。

「気絶しただけで命の心配はねえから、これに懲りたら盗みなんてするなよって伝えてくれ。あんたらもだぞ？」

仲間がやられ、説教までされた。

男たちはアレンが信じがたい額の賞金首だとは知らなかった。

目の前にいるのはただの餓鬼だ。

「よくもこの野郎！」

男がアレンに殴りかかった。

どこかで 歯車 の音がした。

「懲りてねえな糞野郎ッ！」

重いアレンの拳を喰らった男が五メートル以上吹っ飛んだ。よるめいて五メートル下がったのではなく、宙を五メートルもの距離を跳んだのだ。

残る一人の男は仲間を置いて走って逃げてしまった。

アレンは特に追うこともしない。降りかかる火の粉は払っても、遠くの火元まで消すのが面倒だった。

エアバイクに乗って走り出す。高度はあまり出ていない。地表から二〇センチ程度の高さを飛行している。

高度を上げれば、それだけエネルギーの消費も激しくなり、空を吹く風も強くなる。エアバイクにはバランス調整システムが搭載されているが、それでも高い高度での強風に煽られてしまう。それに、高度と風速と時速が加われば、それだけ体感温度は急激に下がる。エアバイクは高い高度を飛ぶようには設計されていなかったのだ。

町を出て砂漠地帯を走る。

砂漠と言ってもここは砂の広がる地帯ではなく、土砂漠だ。

この世界の砂漠の割合のうち、砂砂漠は40パーセントほどである。残りを占めているのが岩石砂漠、礫「レキ」砂漠、土砂漠だ。

小高い丘に登るとアレンは遠くの景色を眺めた。  
もう町は見えない。広がる景色はどこまでも砂漠。  
空もまた、どこまでも広がっている。

降水量の少ない砂漠では、雲一つなく澄み切っている。  
行く当てはない。

広がる砂漠と空になにもないのと同じで、アレンにも目的とする場所がなかった。

シユラ帝國に眼を付けられたために、同じ場所に長いもできなくなっってしまった。

一〇〇万の賞金首は途方もない額だ。そこまでの額になると、首を狙ってくるのは莫迦か自信がある者のどちらかだ。中途半端な者が狙ってくることはあまり少ない。

それでも時折、今日死ぬともわからない生活苦の女子供、年寄りに命を狙われたこともあった。そういうことがあってからは、なるべくそれなりの大きさがある町に立ち寄ることになっている。逆に大きすぎる町に行くと、顔が知れ渡っていることが多く、金の亡者どもがさらなる金を求めて狙ってくることも多い。

「……世の中どんどん住みづらくなってやがる」  
アレンは吐き捨てて再びエアバイクを走らせた。

しばらく行く当てもなく走り続けていると、エアバイクが激しく上下に揺れた。風ではない。同じ高度を保っているのに大きく揺れたということは、地表に変化があったということだ。

崖が音を立てて崩れてきた。

「糞っ！」

ハンドルを切って土砂を避けた。

だが、それで終わりではなかった。

まるで地の底で地獄の怪物が唸っているような地響き。

アレンの目の前で地面に亀裂が走った。

次の瞬間だった！

地中から水柱が天に向かって聳え立ったのだ。

噴き出した水にアレンは一瞬にして呑み込まれた。  
濁流と共にアレンが亀裂の中に消える。  
為す術もない出来事であった。

威厳の象徴である広い玉座の間。

ヒールの音を響かせながら『ライオンヘア』がこの場に姿を見せた。

百獣の王で獅子が跪く相手　暴君ルオ。

「なんだい険しい顔をして？」

「またテロが起きたわ」

「規模は？」

「魔導炉が一つ、機能停止にまで追いやられたわ」

世界の電力を担っている魔導炉。その恩恵に預かっている大半は富裕層である。

シユラ帝國に対するテロ活動。一時は残酷無慈悲な帝國な所業を恐れ、なりを潜めていたが、ある時期からその活動が活発になって来た。

ルオは薄く微笑んだ。

「三ヶ月前から運氣が落ちたらしい」

「貴方ともあるう御方が、運などに左右されるのかしら？」

「いや、朕に切り開けぬ道などない」

その絶対たる自信。それがなければ、幼くしてシユラ帝國に君臨し、武力と恐怖よる政治は行えない。

シユラ帝國の皇帝が皇帝であるためには、人間を捨てた強靱な精神と力を持った魔人でなければならないのだ。

運氣が落ちたという発言は弱音を吐いたわけではない。その状況を楽しんでるのだ。

「弱い者を甚振ったところで楽しくもない。さて、魔導炉を機能停止に追い込んだ彼らは、今とても達成感に溢れ、シユラ帝國に一矢を報いたつもりになり図に乗っていることだろう。叩くには良い頃



合いだと思っただろう？」

「ええ、叩くのなら容赦なく」

「そうだ、久しぶりに鬼兵団に任せてみるか。三ヶ月前の働きはろくなものではなかったからね。名誉挽回のチャンスを与えてやるのも一興。今度は全員だ、全員この場に招集させる」

「御意のままに」

鬼兵団と言えばアレンたちに放たれた刺客だ。

第一の刺客であった水を操る水鬼は、あと一歩までアレンを追い詰めたが、真の姿を見せたりリスによって葬られた。

第二の刺客であった鋼鉄の肉体を持つ金鬼は、トツシュとの戦いの末に口腔に銃を乱射され死んだ。

果たして残る鬼兵団の能力は？

再びアレンたちの前に立ちはだかることはあるのか？

運命の女神は時に残酷だ。

## 黄昏の帝国「アレン始動(2)」

クーロンの住人にも忘れられてしまった廃れた教会。

神父が亡くなってからは、より廃れる一方だった。

三ヶ月前までは建物自体も崩れ落ちそうなほどだったが、今ではある者の援助によって、壊れた箇所や痛んでいた箇所が修復され、小綺麗な教会に生まれ変わった。

建物が生まれ変わっても、住人たちの心は変わらず、迷った仔羊すら教会に訪れる者はいない。

そんな教会であっても、シスター・セレンはこの場所を見放すことはなかった。

セレンもまたシユラ帝国に仇をなし、顔もこの場所も知られている。指名手配こそされなかったものの、教会に留まることは危険極まりない行為だった。

覚悟を決めてセレンはこの場にいる。

あれから三ヶ月経つが、なぜか未だに帝国はこの場に姿を見せることはなかった。その沈黙が逆に恐ろしくセレンを不安にさせる。

今日か、それとも明日か、寝ても覚めても帝国が現れることに恐怖する。

とても辛かった。

慕っていたシスターが亡くなり、神父も亡くなり、独りになってしまつてから、これほどまで独りということが恐ろしいと感じたことはなかった。

短い間であったがアレンたちと行動し、危険な目に遭って命を失いそうにもなった。

それでも今の方が何倍も苦しい。

もしかしたら、アレンやトッシュとの関係が切れたから、帝国が現れないのかもしれない。

何を選ぶのかと訊かれたら、セレンは教会を選ぶ。

そのためなら、独りでも耐えられる。

セレンはだれも見えていなくても、笑顔を忘れない。いや、だれも見えていないわけではない。

教会の裏庭に咲き誇る花々　彼らがちゃんと見守っていてくれる。

今のセレンの心を癒してくれるのは、この花々だった。

枯れた大地に色とりどりの花は珍しい。

クーロンは大都市で水もほかの地域に比べればあるが、それでもこんなに綺麗な花は珍しい。

セレンが水をやり、ときに鼻歌を聴かせ、丹念に育てた花。

それはセレンの心を癒すと共に、生活費として生きる糧にもなっていた。

ほかの町や村では人々は花になど見向きもしないだろう。貧困層にとつて、花など腹の足しにはならない。クーロンは貧困層も多いが、富裕層も多く済んでおり、生活落差の激しい町だ。富裕層には少なからず、花を買ってくれる者がいるのだ。

花壇の横には水路がある。クーロンの井戸などの水は浄化しなければ飲めないが、ここの水が水源が違うのか、澄み切った綺麗な水だった。

そして土も違う。

水は元々この場所に湧いていたものだが、肥沃な土は神父が遠くから運んできたもので、さらにそこへ動物の死骸や野菜の残り滓を埋めて肥料にして育てた土だ。

少し心配な顔をしてセレンは花々を見つめた。最近、花の育ちが悪い。土のせいか、水のせいか、原因はわからない。

セレンは水を汲み、やかんを改造したジョウロで水を撒きはじめた。

先端を蓮口に改造されたやかんからは、シャワー状の水が優しく噴き出る。

甘い風の匂い。

上機嫌になったセレンは鼻歌を歌い出した。

このときは帝国の恐怖などすっかり忘れている。

警戒心もなく、心穏やかに花と向き合う。

だから近付いて来た気配にまったく気づきもしなかったのだ。

「こんにちは」

優しい女性の声だった。

驚いてセレンは振り向いた。

そのとき、ジヨウロの水が相手のドレスに！

「あっ、ごめんなさい！」

「大丈夫ですよ、この花も水が欲しかったのでしょう」

気品のある顔つきの女性は、そのドレスも大輪の花のように美しかった。

セレンはハンカチを持っておらず、自らの服で女性のドレスを拭こうと慌てた。

「本当にごめんなさい。突然だったもので、驚いてしまって、ごめんなさい」

「ですから、大丈夫ですよ。このドレスも綺麗な水が頂けて喜んでおりますわ」

花のような笑顔だった。

その笑顔に同性ながらセレンはドキツとした。

すぐにセレンは女性に見られていることが恥ずかしくなってきた。

同じ女性として、向こうは美しい花のようなドレスを着こなし、

こちらは雑巾のように薄汚れた質素な尼僧服だ。

この尼僧服が気に入らないわけではない。愛着を持って大事に着ている。それでも、こんな美しいドレスを見せられてしまったら、羨ましく思ってしまうのは仕方がないことだった。

ぼつとセレンがしていると、女性の声が現実に引き戻した。

「どうかなさいましたか？」

「あっ、いえ、美しい方だなあって……はっ」

セレンは息の吞んで口を噤んだ。つい口に出して言ってしまった。

「ありがとう、嬉しいわ」

嫌みのない笑みで女性は答えた。

この場の空気と女性は見事に溶け込んでいる。それがセレンには複雑な思いだった。

教会を今まで独りで守ってきた、自分の居場所はここしかないのに、一瞬にして花のドレスを着た女性は、咲き誇る庭園を我が景色にしてしまった。

セレンは気負いながらも、静かに対抗心を燃やした。

「あの、この教会のなんのようですか？」

あくまで女性はこの教会の住人ではない。何かの用で訪れた客人だ。

「花の匂いに誘われて……わたくし花が大好きで、花を売っている方がいると聞いて、ここまで出向いたのですが？」

「そうなんですか！」

セレンの心に花が咲いた。

自分の育てた花がもらわれていくのは、寂しくもあるが、それ以上に嬉しいことだった。

「どの花になさいますか？」

笑顔でセレンは尋ねた。

「そうね、二本ほどあなたが選んでくれるかしら。できれば、土ごと頂きたいのだけれど、よろしい？」

「はい！ 鉢がないので、新聞で土を包むことになりですけど大丈夫ですか？ あっ、溢れないように何重にもして、丈夫に包みますから」

「あなたにお任せいたしますわ」

「ちょっと待っててください新聞紙を取りに行つて……？」

セレンが走り出そうとしたとき、地面が少し揺れた。

だんだんと揺れが激しくなる。

地響きが聞こえた！

立っていられなくなったセレンが地面に手をつく。

地の底で何かが流れているのがわかった。  
眼を丸くしたセレン。

地の底から水柱が天に昇ったのを目撃したのだ。  
まさに土砂降りであった。

地中から水と共に噴き上がった土砂が、空から降ってきた。  
それだけではない。

なにが起きたのかわからぬまま、セレンは鉄砲水に呑み込まれ流  
されてしまった。

叫び声すらあげられない。口を開ければ泥水が口の中に入ってくる。  
る。

流されたセレンは教会の壁に激しく打ち付けられた。

「うっ」

徐々に水が引いていく。

泥だらけになりながらセレンは立ち上がった。

「ああ……そんな……」

絶望的な声をセレンは漏らした。

美しく力強く咲いていた花々が刹那にして土砂に埋もれた。

同じく泥だらけになった女性がセレンに近付いてきた。

「大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。あなたこそお怪我はありませんか？ ドレス  
もそんなに汚れてしまって」

「ご心配なく。それよりも……」

女性は少し離れた地面に視線を向けた。

同じ方向を見たセレンは、あまりの驚きにそれが現実だと思えな  
かった。

「アレンさん！」

「水といっしょに噴き上げられてきたらしいですわね」

「そんなことが……それよりも今は！」

セレンはアレンに駆け寄った。

泥だらけのアレンは気を失っている。

「アレンさん！ アレンさん！」  
セレンの呼びかけにも答えず、蒼白い顔をしてまるで死んだように動かない。

慌てながらセレンはアレンの呼吸と脈を調べたがよくわからない。  
「脈が取れません！」

「慌てないで、落ち着いて、わたくしに代わってくださいる？」

改めて女性がアレンの呼吸と脈を確かめた。

「まだ生きているわ」

「本当ですか！」

「ええ、辛うじて」

「……あつ」

セレンの目の前で女性はアレンに唇を重ねた。

その行為は人工呼吸というより、ただの接吻に見えた。

静かに唇が離された。

「脈も呼吸も正常に戻りましたが……可笑しいですわね」

「可笑しいってなんですか？」

「息を吹き返さない……この子、半分死んでいるわ」

「……半分」

その言葉にセレンは思い当たることがあった。

鼠色の金属に覆われたアレンの右半身。

「なにか心当たりが？」

女性に尋ねられ、セレンは少し戸惑った。

「いえ、その……」

あのことを言っていないものなのかわからない。

たしか……セレンがアレンの身体を見たのは、この教会での出来事だった。あのとき、金属の半身を見られたアレンは平然としていた。まったく隠すそぶりも見せなかったが、見られたあとだから聞き直ったのかもしれないし、アレンの了解を得ずに話すことは躊躇われた。

女性はそれ以上の追求をしなかった。

「まずは彼女を運びましょう」

「えっ、女の子だってわかつたんですか!？」

「格好は荒くれの男のようだけれど、唇の柔らかさは誤魔化せないわ」

女性は微笑んで、アレンの身体を抱きかかえた。大の大人ではないとはいえ、アレンをひとりで抱えるのは大変だろう。すぐにセレンも支えた。

「こちらです、教会の中へ」

二人でアレンを教会の中まで運んだ。

隅々まで掃除してあった廊下は泥だけになってしまったが、今はそんなことを気にしている場合ではないだろう。

「シャワールームは？」

女性に尋ねられ、セレンは申し訳なさそうな顔をした。

「シャワーはありませんけど、お風呂場はこちらです」

まずはこの泥を落とさなければ。

風呂場に着くとセレンはポンプを動かして水を出した。そして、この場を女性に任せて部屋を飛び出そうとする。

「タオル持ってきます！」

風呂場を飛び出し、急いでセレンは大きめのタオルをいくつも持って帰ってきた。

「あっ！」

セレンは顔を赤くして目を伏せた。

「すみません！」

再び風呂場に飛び込むと、女性もアレンも裸になっていたのだ。

「同じ女同士なのだから気にしないで。あなたも泥を流して着替えただほうがいいわ」

「あ、あっ……は、はい」

少しセレンは恥ずかしそうにしながらも服を脱ぎはじめた。

ふと、セレンの脳裏に思い出される過去の記憶。

母のように、ときには姉のように慕っていたシスター・ラファデ



イナ。昔はよく彼女とお風呂に入っていた。懐かしく温かい記憶だ。風呂場に飛び込んだ拍子に、二人の裸を見てしまったせいと考えが及ばなかったが、今さらながらセレンは気づいた。

「彼女の身体……驚かれましたか？」

アレンの身体を見られてしまった。あるとき口ごもったことも、意味を失ってしまった。

「ええ、こんな人間がいるなんて信じられないわ」

失われし科学技術』時代ならまだしも、今の時代にはありえない技術。医療と言うべきか科学と言うべきか、半身を機械に覆われた人間が存在していた事実。誰もが驚愕するだろう。

自分たちとアレンの身体を洗い、バスタオルに来るんだアレンをセレンの部屋のベッドまで運んだ。

セレンと女性はバスタオルを身体を巻いて、着替える間もなくアレンの看病をした。

女性がアレンの様態を診る。

「様態は変わらないわ。良くもならず、悪くもならず、まだ半分死んでいる……」

「やはりお医者様を……でもお金が」

医者と呼ぶという選択は、意識を失ったアレンを見つけたときから考えていた。だが、ネックだったのは治療代だ。

「医者は呼ばなくていいわ。わたくしの見立てでは、ただの医者では治せないでしょう」

「もしかしてあなたはお医者様のですか？」

「多少の心得はあるけれど、医者ではないわ」

「そういえば、名前を伺っていませんでした。わたしの名前はセレンと言います」

「あなたの名前は伺っているわ。わたくしの名はフローラ」

「わたしの名前を？」

「この場所を教えて頂いたときに、あなたの名前もいっしょに」  
フローラは笑みを浮かべた。

「どなたから聞いたんですか？」

「うふふ、秘密。それよりも服を貸していただけるかしら？」

「ああ、気が利かなくてすみません。尼僧服しかありませんけど、それでよろしいですか？」

「ええ、ありがとう」

すぐにセレンは別の部屋に服を取りに行った。

部屋に戻ってきたセレンが持っている尼僧服はラファディナの遺品だった。

「フローラさんのドレスに比べたら粗末な服ですが……」

「どんな服でも構わないわ」

服を受け取り着替えをするフローラ。

セレンも着替えを済ませ、アレンも着替えをさせることにした。

やはり服は尼僧服しかなく、セレンの物を着せた。

尼僧服を着たアレンの姿はセレンを驚かせるものだった。

「女の子みたい……あつ、はじめから女の子でした」

あとは髪を切って梳かせば、より女の子らしく見えるだろう。振

る舞いや格好は少年だとしても、やはり少女なのだ。

セレンはアレンの手を握った。

「冷たい……このまま目を覚まさないなんてこと……フローラさん？」

悲痛な表情でセレンはフローラを見つめた。

「わたくしにもわからないわ。その子の状態を看ることのできる方は、医術ではなく、その半身の機械に精通した方でしょう」

アレンを助けるにはどうしたらいいのか？

大魔導師リリス。

その名がセレンの脳裏に浮かんだ。

しかし、問題はセレンがリリスの居場所を知らないことだった。

以前、リリスの家に行ったことがあるが、道はトツシユに任せていたために覚えていない。

そうなるとまずはトツシユを探さなければならない。だが、セレ

ンはトツシユに居場所すら知らなかった。『あれ』から会ってもしないのだ。

アレンの意識が戻らないまま、様態が悪化してしまったら？  
リリースやトツシユを探している間にも、そうならないとは限らない。  
い。

「あの人がこの町にいるかどうかも……」

独り言をつぶやいてしまったセレンにフローラは尋ねる。

「あの人？ その方がこの子を治せる方なの？」

「あいつ、違います。治せる可能性がある方は別の方なんですけど、その方の居場所を知っている方がまた別の方で……トツシユさんって言う方なんですけど」

「『暗黒街の一匹狼』と呼ばれていた方かしら？」

その通り名を出されてセレンは不味いと思った。評判の良くない名前だ。セレンまでも同じと思われ、距離を置かれる可能性もある。距離を置かれるだけならまだしも、災難が降ってくる可能性もある。不味いと思いつつも、セレンは消極的に首を縦に振った。

その嘘を付かなかつた行為が岐路を見いだしたのだ。

「その方ならよく存じ上げているわ。もちろん居場所も知っているわ」

「本当ですか!？」

「ええ、すぐに連絡をつけてみましょう」

「ありがとうございます!」

こうして再び歯車は回りはじめた。

## 黄昏の帝国「アレン始動(3)」

「おう、久しぶりだなシスター。フローラその服はどうした？」

「少し汚してしまったのよ」

居場所を知っているというだけでなく、顔見知り以上らしい。

三ヶ月前となに一つ変わらないトツシユの姿。

しかし、大きく変わった点があった。周りだ。

『暗黒街の一匹狼』が群れていた。

酒場ならまだしも、酒もない場所で仲間たちといっしょにいたのだ。しかも、セレンの顔を見る寸前まで、真面目な顔つきで話し合いをしていた。

このことについて、道すがらセレンはフローラから話を聞いていた。

同じ環境保護団体に活動しているのよ。

と、フローラが言ったときには、セレンは言葉を失ってしまった。同じ話を聞いて驚くのはセレンだけではないだろう。『暗黒街の一

匹狼』と環境保護団体というのは、冗談もいいところだ。

環境保護団体というが、集まっている面子の中には、がたいの良く血の気が多そうな者も多かった。

セレンは冗談でも言われたのかと思って、フローラに尋ねる。

「本当に環境保護団体なんですか？」

「ええ」

と言ったフローラは見た目が合致しているが。

「本当に本当ですか？ だって、そこに置いてあるの銃ですよね？ セレンの視線の先には壁に立てかけてあるライフルがあった。

「ええ、本当よ。ただあなたが想像していたものとは、少し違ったのかもしれないわね。この名を聞いたことがないかしら。ジード」  
「まさかそんなフローラさんが……」

フローラが発した名前を聞いてセレンは驚きを隠せない。もしそ

うだとしたら、セレンには似つかわしくない場所だ。逆にトツシユがいる理由は少なからず理解できるようになる。

ジードはここ最近頻繁に新聞に載っている団体だ。

ここに来るまでにセレンは可笑しいと思った点がじつはあったのだ。

まずこの場所が飯店の地下にあり、隠し扉と隠し通路を使って通ってきたこと。さらに見張りの者たちが武器を見えるように携帯していたこと。とても穏やかな空気とは言えなかった。

それらの見てきたものが、フローラの言葉を裏付けてしまっている。

世間を賑わすジードは環境保護団体などと呼ばれていない。

「テロリストだったんですか!!」

セレンが叫んだ。

一瞬にして部屋に殺気が張り巡らされた。

周りにいた者の眼がセレンを捕らえて放さない。

今の発言がこの空気をつくってしまったことにセレンは気づいた。助け船を出してくれたのはトツシユだった。

「まあ、新聞にもそう書かれてるからな。シスターがそう言うのも無理はない。おまえらもそう怖い顔するな、本当にテロリストみたいだぞ?」

殺気が治まった。

しかし、セレンはここにいるのが気まずくなった。

フローラが微笑む。

「奥の事務所で話しましょう。トツシユも早く来て」

セレンを逃がすように三人は事務所に入った。

部屋に入るとすぐにトツシユはテーブルに寄りかかって煙草を吸いはじめた。

「で、シスターがなんの用だ?」

「アレンさんのことで……」

「あいつか……帰ってくれ、俺は今とても平和に暮らしてるんだ」

周りからテロリスト呼ばわりされる団体にながら、平和とはよく言えたものだ。

話も聞かずに追い返そうとするトツシュにセレンは詰め寄った。

「話ぐらい聞いてください、アレンさんが意識不明で大変なんです！」

「だから俺様になにをしるって言うんだ？ あいつを助ける義理なんて俺様にはないぞ。早く帰れ、アレンのこともほっとけ。俺様とあいつに関わらないことがシスターの身のためでもあるんだ」

「わたしだってあなたやアレンと関わりたいわけじゃありません。」

わたしだって平和に暮らしたい……でも、目の前に困っている人がいたら助けてあげたいと思うのが当然じゃないですか！」

必死な訴えはトツシュに伝わるのか？

「当たり前だと思ってるのは『お嬢ちゃん』だけだ。クーロンなんて街に住んでるクセに、世の中のことじゃまったくわかってないんだな」

「わたしだって世の中のことくらい……」

「わかってない。シスターはクーロンにいる困ってる奴をいつも片っ端から助けてるっていうのか？」

「それは……」

「そりゃ助けてないよなあ。でもそういう奴がいることは知ってるはずだ。知っていても眼に入れないようにして、教会なんか閉じこもってるんだろう？」

「もういいです、あなたなんか頼みません！」

啖呵を切ってセレンはトツシュに背を向けた。背を向けてから後悔をする。アレンを助けたいと思ってここまで来たのに、自分の一時の感情のせいでアレンを助けられなくなってしまいかもしれない。セレンが謝ろうとしたとき。

「彼女のことを助けてあげて」

フローラが優しく言った。

次の瞬間、空気ががらっと変わった。

「俺様がどんな奴でも助けてやるよ！」

トツシユは凜々しい顔をしてフローラに視線を送った。

変わり身の早さにセレンは唾然とした。そしてすぐに悟ったのだ。トツシユがフローラにどのような感情を抱いているか。

どう見ても今のトツシユの行為は、女の前で格好をつけたい男だ。そうする理由は一つだろう。

セレンはフローラの表情から、そのあたりの感情を察しようとしたが、こちらの想いはよくわからなかった。

別人のようなやる気を見せてくるトツシユ。

「俺様はなにをしたらいい？ 具体的な何かがあつて俺様を尋ねて来たんだらう？」

迫ってきたトツシユの気合いに押されてセレンが後退る。

「ええっと、リリスさんの家の場所を教えてもらえるだけでいいんですけど」

「よしわかった、車に乗せてつてやる」

話がとんとん拍子で進んでいく。

さらにトツシユが迫ってくる。

「アレンはどこにいる？」

これに答えたのはフローラだ。

「医務室に運んでもらったわ」

教会にひとりで残しておくわけにはいかず、手間取ったがここまで運んできた。

トツシユは大きく懐いた。

「ならすぐにでも出発だ。フローラはどうする？」

「わたくしはここに残るわ。ジードの活動があるもの」

「そうだな……」

少しトツシユはうつむいて寂しそうな顔をした。とてもわかりやすい。

そしてトツシユは顔をあげた。

「さっき仲間と話し合ったんだが、やはり次のリーダーはフローラ

「がいいとみんな言っている」

「困るわ、わたくしのいないところで話をするなんてずるい。リーダー代行はしても、リーダーをやって皆さんを引っ張る器なんてないもの」

「そんなことあるか、みんながフローラを指示してるんだ」

「考えておくわ」

「みんなもいい返事を期待してる。よし、行くかシスター？」

トツシュに顔を向けられたセレンは頷いた。

「はい、いつアレンさんの様態が悪化するともわかりませんから、早く行きましょう」

こうして再び三人でリリースの元へ行くことになった。

まるで歴史が繰り返しているようだ。

玉座の間に集まった鬼兵団の数は三名。

ルオは不機嫌そうだ。

「二人ほど足りないようだな、朕は全員と言った筈だが？」

皇帝を前に跪いている三人。

後ろの二人のうち、一人目は東方にかつて存在した花魁の格好をした狐顔の女。紅い着物が眼に焼き付く名は 火鬼「カキ」。

横にいる土気色の肌をした大男。殺された金鬼の弟である 土

鬼「ドキ」。

そして、一步前に跪いている黒く塗りつぶされた仮面を被っている性別も不明な者。この者が鬼兵団のリーダーである 隠形鬼「オングヨウキ」。

「鬼兵団八元ヨリ結束シテ集マツタ集団デハナイ故、自由ナ思想ヲ持ツテ招集ニ応ジル必ジサナイモ団員ノ自由」

隠形鬼の仮面の下から発せられた声は、まるで合成音のような響きをしていた。

ルオを守護していた 黒の剣 が唸った。

刹那、隠形鬼の首を突き刺そうと 黒い剣 が翔けた。



誰一人この場を動かなかった。動けなかったのではなく、動く必要がなかった。

「フフフツ、才戯レヲ」

黒の剣 は隠形鬼の前で止まっていた。切っ先が震えている。真横からでは何も見えなかったが、九〇度視点を変えると底には魔法陣が宙に浮いており、それが盾となつて 黒の剣 を受けていた。さらに驚くべきことに切っ先を向けられ、魔法陣に守られているのはライザだった。

「なぜアタクシがここに!？」

本人すらそこにいたことを驚いた。

そして、本物の隠形鬼は平然とルオの真横に立っていた。

ルオは驚くことなく、黒の剣 を鎮めて自分の元へ呼び寄せた。もう 黒の剣 に殺意はない。殺気は常に放っているが。

「噂通りの実力というわけか……面白い。もつと面白い物を見せるというなら、招集の件は不問にいたそう」

「今ノハホンノ余興デ御座イマス。御依頼ガアレバ何ナリト」

「ライザ、話してやれ」

「畏まりました」

返事をしたライザは鬼兵団に向けて話し出す。

「ジードというテロリスト集団はもちろん知ってるわね？」

「おら知らね」

口を挟んだ土鬼の頭を火鬼が引っぱていた。

「あんたは莫迦なんだから黙ってな。どうぞ獅子の姐さん、話を続けになつてくんまし」

ライザは少し調子を狂わせられながら、話を続けることにした。「ただの小うるさい蠅かと思っていたら、ついに昨日ジードにしてやられたわ。昨日起きたシユラ帝国領での大規模停電はそいつらのせいよ」

どこからか小さな笑い声が聞こえた。笑いの主は隠形鬼だった。「ウツフツ、魔導炉ガ破壊サレタト言ウノハ、嘘デハナカツタト

言う訳力」

ライザは鋭い眼で隠形鬼を睨んだ。

「うるさい蠅がこの部屋にもいるのかしら？ まあいいわ、アナタたちにはジードの壊滅、そしてリーダーと、ある男をルオ様の御前に突き出して頂戴」

ルオの眉が一瞬上がった。皇帝の知らない事柄があったらしい。

「ある男とは誰だい？」

「ジードにはある男が噛んでいることがわかったのよ…… 『暗黒街の一匹狼』」

その名を聞いてルオが妖しく微笑んだ。

「面白い、久しく名を聞かんと思っていたら、ジードと行動を共にしていたとはね」

急にライザはルオに背を向けて、通信機を取り出してひそひそと話しはじめた。

そして、通信が終わると再びルオに顔を向けた。

「失礼したわ、緊急の連絡だったもので。シスター・セレンが動き出したそうよ」

セレンは帝國に見張られていた。それを示唆する言葉だった。帝國がセレンの前に現れなかったのは、ずっと密かに監視していたからだったのだ。

「トツシュ、セレン、君のお気に入りの名前は拳がってこないのかな？」

ルオはライザに微笑みかけた。

「いえ、今のところは。シスター・セレンの動きに関しても、まだ未確認の情報が多いわ。伝わってきた話によると、謎の女がシスターの元に訪れた直後、教会の敷地から水柱が上がったとかなんとかその後、しばらくして数人の男が教会を訪れ、謎の荷物を運び出し、シスターと謎の女はどこかに向かったそうで…… 水柱と荷物、謎の女、なんの関係があるのか今のところはわからないわ」

荷物はおそらくアレンだ。帝國はそれに気づいていない。

アレン、セレン、トツシユが再会し、帝國が再び動き出す。放置されていた土鬼は胡座をかいていた。火鬼も痺れを切れして足を少しずつ崩そうとしている。

隠形鬼が口を開く。

「我々ノ話ヲ進メテ欲シイノダガ？」

ルオがライザに向かって顎をしゃくった。話を進めてやれという合図だ。

「依頼内容はさっき言ったとおりよ。報酬はトツシユの懸賞金も込みで三〇〇万イエンでどうかしら？」

火鬼が少女のような笑顔を見せた。

「さすがシユラ帝國、太っ腹でありんす。お頭様、お勤めはもちろんここにいる三人で、報酬も当然三人で山分けでありんすか？」

「ソレデ良カロウ」

鬼兵団が話していると、ライザは緊急の通信を再び受けていた。ライザは楽しそうに笑っていた。

「うふふふっ、素晴らしい展開だわ。ルオ様、なんとシスター・セレンとトツシユがいつしよに町を出たそうよ。まさかシスターの行き先がトツシユの元だったとは……少しは期待していたのよ、だってシスターが関わる人物は限られているもの」

その報告を耳にして隠形鬼は仲間に見かねる。

「サテ、とっしゅトヤラヲ誰ガ捕ラエニ行クカ。行キタイ者八居ルカ？」

「おらに殺らせてくれ」

土鬼が身を乗り出した。

すぐに火鬼が口を挟む。

「あんたわかつてんのかい？ 殺すんじゃないよ、生きたまま捕らえるんだ」

「あらをばかにするでねえ。兄じゃよりおらのほうがばかだねがつた。兄じゃの敵「カタキ」だ、おらに殺らせてくれ」

「まことにわかつてるのかねえ、この木偶の坊は？」

火鬼は心配そうだが、隠形鬼はそれを認めたようだ。

「良カロウ、とっしゅ八土鬼二任セル。シテ、じーどノ本拠地八何処ダ？」

ライザが答える。

「それもアナタたちを探してもらおうと思ったけれど、もうすぐわかるかもしれないわ。すべてシスター様のお導きよ」

シスター・セレンが線となり、点を繋いで行ったのだ。

その事実を知ったとき、セレンはどう思うのだろうか？

## 黄昏の帝国「アレン始動」(4)

静まり返った砂漠。

生物たちは身を潜めているのか、それともここは死の砂漠なのか。そんな砂漠でただ一つ動いているジープの影があった。

砂を巻き上げ走るジープの車内では、茶色に布を頭から被り、ゴーグルをつけて運転をするトツシユの姿があった。

「そう言えばさっき奴の姿を見て驚いたんだが、なんで女の格好なんてしてるんだ?」

「アレンさんのことですか?」

「そうだよ、あの尼僧服ってシスターのもんか?」

「そうです、わたしの物を着せました」

「そっぴゃフローラも尼僧服だったよな?」

「それが……きゃっ!?!」

急にハンドルが切られ、セレンの身体が大きく振られた。

ジープは止まってしまっている。

「すまねえ、いきなりサンドマンタが飛び出して来やがったんだ」

「本当だ、まだ小さい子供ですかね?」

砂の上を跳ぶように泳ぐサンドマンタが、ジープからどんどん遠ざかっていくのが見えた。

再びトツシユがアクセルを踏んだ。

「それで尼僧服を着ている理由はどうしてだ?」

「えっと、それがですね、教会の裏庭から水が噴き出してきて、それがちよつとじゃないんですよ。わたし滝って見たことなんですけど、きつとあんな感じだと思います」

「俺も滝なんて見たことないからよくわからんな」

「そのせいで泥だらけになってしまつて。あつ、それだけじゃないんですよ、アレンさんがその水といっしょに出てきたんです?」

「ハア?」

庭から水が噴き出したとか、アレンが出てきたとか、話だけでは  
にわかに信じがたいのは当然だろう。

「『ハア』じゃなくて、フローラさんだっていっしょにいたんです  
から」

「とにかくその野郎は溺れて瀕死ってわけだな。溺れ死になんて滅  
多にできる経験じゃないな……」

「まだアレンさんは死んでませんから！ それにトツシユさんだっ  
て大量の水の中に投げ込まれたら泳げるんですか？」

「泳げるわけないだろ。シスターも泳げないだろう？」

「泳げませんよ。泳ぐってそもそもどういふときに必要なんですか  
？」

「庭から水が噴き出してきたときだろう？」

二人の会話からもわかるように、水の中を泳ぐという行為は非日  
常なのだ。水の乏しい地域では、それが当たり前だった。

急にトツシユがハンドルを切った。

「糞ッ！」

「きゃっ!?!」

砂の中から飛び出してきたサンドマンタ。影は一つではなく五以  
上。小規模な群れだ。

「おいおい、なんでこっち来るんだ？」

トツシユは慌ててアクセルを踏んだ。

岩のように硬い皮膚を持ったサンダマンタの群れが向かってくる。  
いや、襲ってくる。

荒々しい運転で車体が弾み、セレンの身体も上下左右に大きく振  
られた。

「ちょっと、アレンさんが後ろで寝てるんですから！」

「知るか、シスターはこの状況がわかってるのか？」

「わかりませんよ！」

「わからないのになんで強気なんだよ。とにかく武器だ、巨大害虫  
用のバズーカが後ろに積んであるから取ってくれ」

助手席に乗っていたセレンは揺れる車内で後ろを向き、座席に膝を付いて後部座席に身を乗り出した。

「アレンさんしか乗ってませんけど？」

「あるはずだ、もつとちゃんと探せ！」

「ん……ううん……もお！」

セレンが膝を浮かせた瞬間、サンドマンタがジープの側面に激突した。

激突の振動よりも、躲そうとしたハンドル操作のために、車内が大きく揺られてセレンが振り落とされそうになってしまった！

「きゃっ！」

このときセレンはバズーカを掴んだときだった。

バズーカがセレンの手を離れた。投げられたように車外へ放り出され、砂漠の海に沈む。

この事態にトツシユは気づいていない。

「おい、バズーカはまだか？」

セレンは返事ができなかった。静かに席に座って黙り込む。

「シスター聞いているのか？ バズーカはどうしたんだ？」

「それが……落としちゃいました」

「落とした？」

「車の外に……」

「……………」

サンドマンタはまだまだ追撃をやめない。

こうなったら逃げ切るしかない。

「シスター掴まれ、放り出されたら自分を怨むんだな！」

それから必死で逃げた。

広い砂漠をどこまでも逃げた。

ようやく土砂漠まで来ると、サンドマンタはいつの間にか見えなくなっていた。さすがに固い地面では追ってこられないのだ。

一息ついたトツシユは煙草に火を点けた。

「なんでサンドマンタが……普通ジープなんて襲って来ないぞ？」

「もしかしてですけど、あの前に子供のサンドマンタを見たじゃないですか？ あれと関係があったりして」

「どうだろうな、とにかく助かったんだ。このツケは別にツケとくからな」

「わたしにですか？」

「俺様は命の恩人だろう？」

「わかりました、そのうち返します」

たしかに車の運転をしてサンドマンタを振り切ったのはトツシュだ。けれど、セレンはなんだか納得いかなかった。

それからしばらく道なき道を走り続け、なにもない場所でブレーキがゆつくりと踏まれた。

「おかしいな。この辺りのはずなんだが？」

「もしかして道に迷ったなんてことありませんよね？」

「場所はこの辺りで合ってるはずなんだが……」

「そういうの迷ったって言うんじゃないんですか？」

「そうじゃないんだよ。場所はこの辺りのはずなんだ」

「トツシュさんがそう思っているても、実際にはないんですから、道に迷ったって認めたらどうですか？」

セレンに責められトツシュは空を仰いだ。

車は再び走り出さない。

セレンも気晴らしにアレンの様子を見ようと、その身を後ろに向けたときだった。

「道におるのかのお？」

後部座席にいた妖婆リリス！？

その声を聞いて驚いたトツシュも後ろに顔を向けた。

「婆さん……いや、リリス殿。砂漠の真ん中でどうして……？」

「ここはわしの家の前じゃて」

そんなはずはない。ここには何も……リリスの家があった。忽然とリリスの家が目の前にあったのだ。前と変わらぬ姿で、昔からそこにあったと言わんばかりに建っている。



あまりの出来事にセレンは言葉を失っているが、トツシユはすぐにその現実を受け入れた。

「俺様が正しかったってことが証明されたわけだ」

トツシユが間違っていないなかったのだとしたら、リリスの家はここにあったのだろう。見えなくなっていたのか、それとも別の場所から現れたのかはわからないが。

やっとセレンは気を取り直した。

「アレンさんが目を覚まさないんです、助けてください!」

言われてリリスは被されていた布を捲り、アレンの顔を見た。

「とりあえずわしの家へ運ぶのじゃ」

トツシユがアレンを担いで家の中へ。

続いてセレンが入り、最後にリリスは砂漠の向こうを 視 てから入り、ドアを閉めた。

家がおぼろげに消える。

その場に残されたのは一台のジープのみ。

鏡に映った『少女』の姿。

冷たい輝きを放つ金属が半身を覆っていた。

刹那に絶叫が響き渡った。

「どうしてこんな躰にしたッ!」

叫び声を上げながら飛び起きたアレンは、目の前の影に掴みかかった。

何重にも皺が波打っている老婆の顔。

「わしはおぬしを直しただけじゃ」

「これの……どこが……すまねえ、あんたか」

夢と現実の狭間にいたアレンが意識を取り戻した。目の前にいるのが妖婆リリスだと知ったのだ。

全裸のアレンは寝かされていた台の上から飛び降りた。

「着るもんあるか?」

「おぬし好みの襪履いローブなら用意しておく」

「気が利くな姐ちゃん」

アレンはいつもの格好に着替えると、髪の毛を掻き繕るようにしてボサボサにした。少女らしさが消え、みずぼらしい物乞いの少年ようになった。だが、その眼のは猛獣の輝きを放っている。見た目よりも、この眼の奥にあるモノが、アレンをより『少年』らしく見せているのかも知れない。

着替えを済ませて部屋を出ると、すぐにセレンと目が合った。

「アレンさん！」

心配そうな顔をして飛びついてこようとしたセレンをアレンは躲した。

「気持ち悪いから抱きつくなよ」

「だって……心配したんですから……抱きついたっていいじゃないですか」

「そのことなんだけどさ、なんで俺がここにいて、あんたらもここにいるわけ？」

まだ目を覚ましたばかりで状況が理解できない。

セレンが今までのことをアレンに聞かせた。

数分が経ち、話を聞き終えたアレンはセレンに一言。

「あんがとな」

無愛想に言った。

「わたしはなにも……見つけただけで、助けたのはみなさんで」

アレンとセレンの間にトツシユが割って入ってきた。

「おいおい、俺様にもちゃんと礼を言え。フローラにもだ。これは大きな貸しだからな」

「はいはい」

アレンは軽くあしらった。

あからさまな態度で、聞こえるようにトツシユは舌打ちをした。

「……っ糞餓鬼。やつぱり助けるんじゃないかった」

「あんたは慈善で俺を助けたわけじゃねえんだろ。貸し借りでイー

ブンだろ」

「おまえが貸しを返してはじめてイーブンだ」

「わかってるつーの。で、どこに『道案内』して欲しいんだよ？」

「道案内なんておまえに頼むか！ そうだ、俺様たちの手伝いをする。きつとフローラも賛成する筈だ、フローラに返す借りも合わせてそれがいい」

「はあ？ なんであんたが他人のことまで決めるんだよ」

「フローラもそう望むに決まってる！」

「だ〜か〜ら〜！」

火花を散らす二人の間に決死の覚悟でセレンが入った。

「まあまあ二人とも落ち着いてください。まずはフローラさんに直接会って、アレンさんがお礼を言えればいいんじゃないですか？」

トツシユも頷いた。

「そうだな、もう用も済んだ。アジトに戻るついでにおまえも来い」  
「俺がなんで行かなきゃなんねえんだよ」

また言い合いが加速する前に、セレンがアレンをなだめようとした。

「トツシユさんに言われたから行くんじゃないやなくて、アレンさんがフローラさんに会いに行くために行くんです。わかりましたよね、アレンさん？ フローラさんは命の恩人なんですよ？」

「わかったよ、行けばいいんだろ。姉ちゃん、あんたにもそのうち借りを返すから、用があつたら呼んでくれよな」

顔を向けられたリリスは破顔した。

「わしのはただの気まぐれじゃ、恩を感じる必要はないよ。どうして借りを返したいというのなら、そのシスターに感謝するんだね」  
言われたアレンはセレンを一瞥してすぐに顔を背けた。

トツシユはさっそく帰る準備をはじめた。

それを見たアレンは嫌そうな顔をした。

「もう帰るのかよ？ 俺腹減ってんだけど」

リリスが笑った。

「躰を直してもらって飯の催促かい？」

「俺の楽しみは寝ることと喰うことなんだよ。躰を直したついでに飯の借りもツケといてくれよ。なあセレン、あんたも疲れた顔してんだから休みたいだろ？」

「そんな顔をしているのは、すべてアレンのせいだ。アレンもそれくらいわかっている。」

「でも……」

口ごもるセレンにリリスは声をかける。

「たまの客人じゃ、もてなしてやるよ」

リリスもわかっていた。

髪をかき上げたトツシュがつぶやく。

「不器用な奴だな」

すぐにアレンが睨んできた。凶星だったのだ。

そして、セレンは鈍感だった。

「でもリリスさんにこれ以上ご迷惑をかけるのは……」

ここから先はアレンが強引に押し切る。

「もてなしてくれるって言うてるんだからいいだろ。俺は飯を喰いたい、あんたは休みたい」

「休みたいなんて言ってますけど」

「顔に書いてあんだよ。トツシュからもなんか言ってるやれよ」

「俺様は帰りたい。アジトでフローラが待ってるからな」

「こ、の、や、ろあ〜っ！」

どこかで 歯車 の鳴る音がした。

アレンが床を蹴り上げようとした瞬間、その前にリリスが立ち上がった。

「やめんかど阿呆！」

それはただのデコピンに見えた。だが、リリスのそれを喰らったアレンは、ニメートルは吹っ飛んだのだ。

「いってーな、糞婆！」

「ほう、知っていてわしを『婆』と罵るか？」

いつにリリースまで敵に回してしまった。

「わしの家から出て行け！」

窓が独りでに開き、アレンの躰が浮いたと思うと外に放り出された。

慌ててセレンはドアから外に出た。

トツシユは普通に家をお邪魔した。

そして、家は消えたのだ。

蛙のように倒れていたアレンが顔を上げた。

その先にあった巨大な人影。

「おめえら、どこ消えてた？」

外でアレンたちを待っていたのはジープだけではなかったのだ。

黄昏の帝国「アレン始動」(5)「

「おら待ちわびた。おめえらが消えちまったもんだから、ここでずっと待ってたんだ」

土気色の肌の巨漢　土鬼だった。

立っているその全長は兄であった金鬼を凌ぎ、五メートル近くはあるだろう。目の前に立つアレンが小人のようだ。

「とりあえず俺の知り合いじゃないけど？」

そう言っアレンはセレンを通り越してトツシュに顔を向けた。

「俺様の知り合いでもない」

トツシュは残ったセレンを見た。

「わ、わたしも知りませんよ！」

三人とも初対面なので当たり前だろう。

土鬼の目的は　。

「トツシュはどいつだ？」

すかさずアレンはトツシュを指差した。厄介事には巻き込まれたくないということだ。

トツシュが前に出た。

「俺様がトツシュだが……穏やかな用事じゃなさそうだな」

「おめえを殺しに来た」

すっかり任務を忘れている。火鬼が心配したとおりだ。

「俺様を殺しに？」

「そうだ、兄者の敵だ」

「覚えがない」

と言いなながらも、トツシュの脳裏に浮かんできた顔。まさしく鬼兵団の金鬼だった。よく似た兄弟だ。

トツシュは愛銃の　レッドドラゴン　を抜いた。

「弟のほうの実力は高そうだ！」

戦いの中で養ってきた眼はたしかだ。

ゆえに奇襲ともいうべき先制に打って出た。

ドラゴンの咆吼！

銃弾は心臓に向けて二発。その二発ともが土鬼の胸を貫いた。土鬼が笑った。

血が噴き出ない！？

「おらは兄じやのようにばかだねえから、業を磨いて磨いて最強に  
しただ」

土鬼の躰が砂のように崩れ落ちる。  
一体化。

もう土鬼がどこにいるのかわからない。

声はどこからともなく響いてくる。

「死ねーッ！」

姿を消したメリットを考えれば、攻撃は死角から来るはず。

そう予想していたトツシユは度肝を抜かれた。

「正面か！」

砂が一本の大きなドリルとなって飛んできた。

トツシユは横に飛んでどうにか躲した。もし、死角からの攻撃だ  
ったら、躲すのが遅れていただろう。

また土鬼は砂と同化してどこにいるのかわからない。

大量の砂が動き出す。

手だ、人間を一掴みにできるほどの砂の手が現れた！

巨大な影がトツシユに覆い被さる。

「俺様は虫じゃないぞ！」

砂にまみれながらトツシユが跳んだ。

まるでハエ叩きのように巨大な手が砂に打ち付けられた。

何度も跳んでトツシユが逃げる。巨大な手が地面を叩きながら追  
ってくる。

「糞ッ、人間がどうやって土塊「ツチクレ」に変わるんだ！俺様  
の知っている魔導の範疇を越えてやがる！」

レッドドラゴン が吼える。

しかし、銃弾は砂に虚しく埋もれるだけだ。

この怪物には物理的な攻撃が効かないのか？

肉体は臓器は脳はどこに消えた？

砂の一粒一粒が意志を持った生物だとも言うのか！？

トツシユは逃げることにしかできなかった。

ただ見守っているだけのアレンとトツシユの目が合った。

「助けてやってもいいけど貸しな」

「なにが助けてやるだ、おまえにならどうかできるのかッ！」

「そんなのやってみなきゃわかんねえよ」

アレンも策があるわけではないらしい。

何も出来ずにいるセレンが必死になってアレンに訴える。

「助けてあげてください、アレンさん！」

「あんたが助けてやれよ」

「それができないから頼んでるんです！」

セレンに太刀打ちができるわけがない。敵は人智を越えている。

トツシユすら一方的な苦戦を強いられているのだ。

人智を越える。

現在の人智を越えた存在は『失われし科学技術』。

魔導と科学は突き詰めれば、同じモノに行き着く。どちらも自然

の摂理に則った法則でなりたっているもの。

砂の怪人土鬼にも仕掛けがあるはずだった。人の想像を越えた技

術はまるで魔法のように見える。

しかし、トツシユは逃げるのに精一杯で、反撃することも、相手

の弱点を考えることもできなかった。

巨大な手から土弾「ドダン」が発射された！

トツシユは背中に一発目を受けた。今まで受けたどんなパンチよ

りも重く響く。

二発目は紙一重で躲した。

三発、四発と躲したが、五発目は思わぬところから飛んできた。

四発目が落ちた地面だ！



「くッ！」

脇腹を抉った土弾。

前や後ろならば、喰らったあとにバランスを立て直せたかもしれない。だが、逃げる途中、片足をあげていたときに喰らった横の攻撃は、いとも簡単にトツシユの躰を倒したのだ。

立ち上がる動作は完全な隙だ。

トツシユは倒れると同時に、自らの意志で多く地面を回転した。立ち上がりず別の動作をしたのだ。

回転の最中、追撃の一弾を躲し、次が来る前に レッドドラゴンの引き金を引いた。

虚しく弾は土塊を貫通しただけだった。

それでもいい、零コンマ何秒でも相手に隙を作り、そこに岐路を見いだす。傷を与えるだけが攻撃ではない。

トツシユは笑った。

笑いかけられたのはアレンだった。

二人の距離はほんの目と鼻の先。土弾の餌食になるのは二人だった。

「この糞野郎、俺も巻き込む気か！」

アレンが叫んだ。

「たまたま逃げた先がここだったただけだ」

トツシユは動揺ひとつ出さずにそう言った。だが、その笑みがアレンの言葉を裏付けていた。

魔導銃 グングニール をやむなく抜いたアレン。

「あんたを殺すか」

銃口がトツシユに向けられた。

さらにアレンは続ける。

「向こうを殺すか」

トツシユを殺せば敵の目的は達成される。敵を殺せば敵自体がいなくなり襲ってこない。

グングニール の銃口はトツシユから外れない。

土弾が連発された。

流れ弾はアレンにも当たるところ。

グングニール の引き金が引かれ、雷鳴が鳴り響いた。幾重にも枝分かれしていく稲妻が土弾を貫通して翔け巡る。伝導率が低い土塊に効果があるのか？

そもそも、電流という攻撃は無機物にどれほどまでの効果があるのか？

「グギョオオオオオツッ！！」

土鬼の絶叫が響いた。

地に落ちた土弾。

トツシュがすぐに気がついた。

「火花か？」

稲妻を喰らった土弾から火花が出ている。

ただの土塊ではなかったのか？

「ナノマシンじゃよ」

老婆の声。

アレンの真後ろに妖婆リリスが立っていた。

そして、消えていた家が屋気楼のように揺れながら見えていた。

「わしの家に電流を当ておって、ど阿呆！」

リリスが平手打ちを放った。

軽い音を鳴らして頭を叩かれたアレン。

「いってーな。あんたの家のことなんて知るかよ」

おぼろげに見えるリリスの家。おそらくアレンの撃ったグングニールの電流によって、なんらかの支障をきたしたのだろう。

支障をきたしたのはリリスの家だけではなかった。

「ガガガ……グガガ……ヨクモ……コロシテヤル」

土鬼もショートしていた。

大量の砂煙が舞い上がった。

土弾の雨。

無差別攻撃だ！

トツシュだけではない、アレンも、セレンまでも、そしてリリスにも襲い来る土弾。

この場の全員を敵に回した土鬼は愚かだろう。とくにリリスに手を出すべきではなかった。

「核はそこかい？」

妖しく輝いたリリスの瞳。

砂にまみれて一つだけ、拳ほどの石があった。見た目ではただの石だ。

リリスの手のひらでバチバチつと音がした。

稲妻がリリスの手から放たれる寸前！

巨大な炎の壁が視界を遮った。

「こなたの勝負、お待ちくんままし！」

炎を手に宿しながら現れた花魁姿の火鬼だった。

視界を遮っていた炎が消され、火鬼は懐から壺を取り出した。

「土鬼、返事しな！」

「ナンダ！ オラハコイツラヲミナゴロシニ……オオオオ、シマッタ！」

大量の砂が渦を巻きながら壺の中へ吸いこまれていく。おろらく土鬼だ。土鬼が壺の中に吸いこまれているのだ。

おそらくすべてを吸い込み終わったのだろう。火鬼は壺にふたをした。それにしても、吸いこんだ量は壺よりも多く、いったいどこに消えたのか？

「失礼しんした。莫迦が勝手な真似をしまして、わちきはその尻ぬぐいに来たでありんす」

土鬼を封じ込めたが、その言動からアレンたちはこの者を敵の仲間だと察した。

トツシュはすでに銃口を火鬼に向けていた。

艶やかに笑う火鬼。

「おっかない武器は下げてくんままし。わちきは無駄な仕事はしない質、死合いは次でも宜しいでありんしょう？」

「そうだな。俺様も、降りかかってきていない火の粉まで、振り払うほど暇じゃあない」

「では、近いうちに……」

火鬼は燃えさかる車輪のついた人力車にひよいと飛び乗った。車を引くのは此の世のもの思えない、牛の頭に人間の躰をした者と、馬の頭に人間の躰をした牛頭馬頭「ゴズメズ」だった。

火の粉を散らしながら人力車が空を駆けて遠くへ消える。

セレンは恐ろしくてたまらなかった。

「今の人たち……頭が動物……でしたよね？」

おぞましい化け物だった。牛や馬が二足歩行をしていたわけではない。腰布だけを巻いたあの躰は筋骨隆々な男のものだった。

リリスが静かに言う。

「キメラじゃよ」

「キメラ？」

セレンが聞き返した。

「そう、キメラじゃ。人工的に作られた怪物じゃよ。太古の昔から人間は恐ろしい怪物を想像するとき、人間とほかの動物を掛け合わせたり、動物同士を掛け合わせた。ゼロから生物を生み出す想像力がなかったのか、身近なものだからこそ恐ろしさや神秘性があるのか、もしかしたらつくることができていることを知っておったのか……」

「じゃあ……今の怪物はだれかがつくったものものなんですか？」

「既存の生物が掛け合った存在が自然に発生すると思うか？」

「そんな……ひどい、神への冒瀆です」

「神が人間をつくったことは自然への冒瀆ではないのかえ？」

リリスは不気味に笑った。

そして言葉を続けた。

「わしは神など信じておらん。もしこの星の生態系に干渉した存在がおったとしても、それは自然を超越した存在でもなければ、唯一神などではない。人間よりも高い文明を持っていたということじゃろう。『失われし科学技術』もおぬしから見れば、神の所業じゃ

るう?」

「『失われし科学技術』はその仕組みもわからないし、不思議なものだと思えます。でも神はそういうものじゃないんです、わたしは神を信じてますから」

「腐った世界でもシスターはシスターか。いや、こんな世界だからこそ神が蔓延るのか」

リリスは家に帰っていく。

すでに帰ろうとしていたトツシュだったが、ジープを見た途端、宙を仰いで頭を掻いた。

打撃によって潰されたジープ。エンジンが破壊され、タイヤはすべてパンクしており、運転席にはドアが食い込んでいる。

「ったく、どこの莫迦だよ?」

アレンが横に来て言う。

「さっきの砂男だろ?」

「んなことわかってる。どうやって帰ればいいんだ?」

「あんたのほうが無迦だろ?」

「んだと?」

「砂男はどうやって来たんだよ?」

普通に考えれば土鬼も帰る手立てがあつた筈だ。

トツシュは辺りを見回した。

「なにもないが、どうやって来たんだらうな?」

「えっ、マジ!? なにもねーの?」

慌ててアレンも辺りを見回した。

乗り物なんてなかった。

乗ってきた乗り物はいったん引き上げたという可能性。砂漠の真ん中で、時間や燃料のことを考えれば、非効率的だと言える。

アレンは閃いた。

「どこかに隠されてんだよ、砂の中に埋もれてるとか!」

「目印もなにもない場所で俺様は無駄骨なんて折りたくないぞ」

「なら俺が見つけても乗せてってやんねえからな!」

アレンは独りで砂を掘りはじめた。  
それを尻目に一服するトツシュ。  
セレンはどうするか迷っていた。

「あの、アレンさん？」

「なんだよ？」

「手伝ったほうがいいでしょうか？」

「あつたり前だろ」

手伝わないで見つかった場合、セレンも置いて行かれそうだ。  
砂を延々と掘り返す作業。

掘っても掘っても砂ばかり。さらに掘ると同時に砂が崩れて穴が埋まる。

五分でセレンは力尽きた。

その前にアレンは三分で飽きていた。

結局、乗り物は見つからなかった。

休憩をしていたトツシュが立ち上がった。

「お前ら本当に莫迦だな。リリース殿、リリース殿、どうか助けに来てくれないか？」

深々とした。

返事はない。そこには家すらない。なにもない砂漠。

トツシュが大きな口を開けた。

「婆さん近くにいろんだろう！ アレンを救ったのに、今度はその救った相手まで見殺しにするつもりか！」

トツシュの声以外は静かなものだった。

あきらめたトツシュは胡座をかいた。

アレンはまた何かを閃いたようだ。

グングニール の銃口が何も無い空間に向けられた。

本当にそこには何も無いのか？

「故意で撃つたら容赦せんぞ、アレン？」

アレンは背後に殺気を感じて振り返った。

老婆の顔が目と鼻の先にあった。

「わっ！」

驚いてアレンは腰を抜かして尻餅を付いた。

もちろんそこにいたのは妖婆リリースだ。

すぐにセレンが駆け寄ってきた。

「リリースさん、わたしたち帰れなくて困ってるんです！」

「わたしには関係ないね」

救った相手を見殺しにする。気まぐれな老婆だ。

トツシュも割り込んできた。

「近くの町でも村でも着けるならどんな乗り物でもいい、礼はするから貸してくれ」

「わしの眼鏡「メガネ」にかなう礼ができるというのかい、このわしじゃぞ？」

こんな辺境に住んでいても、リリースならば不自由な生活をしてい  
るとは思えない。金や物資では取引はできないだろう。リリースほど  
の実力があれば、手段は違えどトツシュに叶えられることなら、自  
らで叶えることができそうだ。

トツシュが言葉に詰まった。取引相手が悪すぎる。

しかし、次の瞬間にはリリースの態度が変わった。

「車を貸してやろう。ただし、わたしもいく。運転の仕方を教えるの  
も壊されるのも面倒じゃ」

気まぐれな女だ。

## 黄昏の帝国「残された伝言（1）」

「そんな……」

悲惨な顔をしてセレンが呟き、そのまま立ち眩みがしてアレンに支えられた。

ただただ無残な光景だった。

黒こげになって倒れている屍体。

トツシユは直感した。

「あの炎使いの仕業かッ！」

火鬼との関係を結びつけるのは当然。

ここは地下にあるジードのアジト入り口だった。おそらく死んでいるのは門番の男だろう。

すぐにトツシユはアジトの中に入った。

「フローラ、フローラ無事か！」

トツシユの頭の中にあるのはフローラのことだけだ。周りの屍体には目もくれずフローラを探した。

残る三人、アレン、セレン、リリスは慎重に先へと進む。

セレンは震えながらアレンの腕を掴んでいた。

「こんなの酷すぎます。人間の仕業とは思えません」

トツシユが目もくれなかった屍体。

門番と同じように丸こげにされた屍体。生きたまま焼かれたため苦しかったのだろう。関節という関節が力強く曲げられている

藻掻いた証拠だ。

ほかの手口で殺された屍体もあった。

消失した顔。消失というより、抉られたような顔面だ。抉ると言っても乱暴なものではなく、まるで巨大なスプーンでゼリーを掬ったように滑らかな傷痕。

顔を抉られているせいで、辺り一面血の海だ。

丸こげの屍体と、顔を抉られた屍体がこの場に散乱していた。



これまで生きている者などひとりもしなかった。まさかアジトにいた者全員、皆殺しにされたのか。

トツシユはアジト中を駆け回った。

残っている部屋は二つ。

作戦室には顔を失い壁にもたれている屍体があった。

そこから奥の部屋へと進む。

トツシユがドアを開けた瞬間。

「ギヤアアアアアッ！」

男の絶叫。部屋の中からだ。

椅子に縛られ両足の太股と両腕を切断された仲間の男。脚と腕はすぐそこに転がっていた。

トツシユはすぐさま男に駆け寄った。

「大丈夫か！」

「……か……めんの……男……と……見た……ことも……ない衣装……の……派手な女に……」

がくりと男の首から力が抜けた。男は話の途中で事切れたのだ。

遅れてやって来たリリスはその部屋の仕掛けに気づいた。

「細い糸がドアから伸びておる。それに血の付いた切れ味の良さそうなピンと張られた糸もあるのう」

それ以上言われなくても、トツシユにはわかっていた。

「これまで数え切れないほど殺しはやってきた。だがな、こんな胸糞の悪い殺しははじめてだ」

自分の意志ではない。何者かの思惑通り、操られるままに人を殺したのだ。

トツシユの心にあるのは怒りだ。鋭い野獣の眼が怒りに燃えている。

そんなトツシユにアレンはさらに火に油を注ぐような真似をした。

「あの炎を使う尻が軽そうな女が絡んでるのは間違いないな。だとすると、狙いはあんだだろ、あんたのせいでここの奴らが殺されたんじゃないかねえのか？」

悲痛な顔をしたセレン。

「アレンさんなんてこと……あつ！」

その瞳が拳を振り上げたトツシユを映した。

「糞餓鬼ッ！」

アレンはトツシユに殴られた。床に手を付いたが、反撃はしなかつた。なぜなら、自分の瞳に映っている者を弱者だと思ったからだ。「殴る相手が違つた。カツカツしてんじゃねえよ、まだフローラつて女見つかつてねえんだろ？」

「おまえに言われなくても探すに決まってるだろう！」

トツシユは部屋を飛び出した。

リリスも隣の部屋に移動しようとしていた。

「わしは適当に休んでおるよ」

まったくこの事態に動じていない。他人事だ。

恐ろしさで独りではいられなかったが、かと言ってリリスのように、待つていることもできなかったセレンは、アレンと共にフローラを探すと共に生存者も探した。

アジトの中をくまなく探した。部屋を見渡すだけではなく、ロッカーなど人が隠れられそうな場所も探した。

しかし、生存者は見つからなかった。

ベッドの下に隠れていた男すらベッドごと焼かれて死んでいた。

生存者はない。

再び四人が集合して、トツシユがまず口を開いた。

「フローラはいなかった。誰の屍体はわからない奴ばかりだが、おそらくアジトの外にいて助かった者も多いと思う」

屍体の中には女の屍体もあり、丸こげにされているせいで誰か判別できない者もいた。もしかしたらその中にフローラが混ざっていたかもしれない。

「俺様はフローラを必ず探す。おそらく外にいて助かっている筈だ」  
確証はなくても信じることはできる。

「じゃ、ここでお別れってことで」

アレンは冷たく言った。

悲しい瞳でセレンはアレンを見つめている。

「アレンさん、ここまで首を突っ込んで手伝ってあげないんですか？」

「そんな義理ねえよ」

だが、トツシユはきつぱりと言う。

「ある。俺様はおまえの命の恩人だぞ、フローラもそうだ。借りくらいちゃんと返せ」

「その女が死んでたらチャラだろ？」

「糞餓鬼、ぶつ殺すぞ！」

「頭に血の昇った莫迦なオツサンには負けねえよ」

挑発に乗ってトツシユは レッドドラゴン に手を掛けた。

しかし、銃が抜かれる前にセレンの制止が入った。

「二人ともやめてください。アレンさん、フローラさんを探すのを手伝ってください。わたしの借りでいいですから、アレンさんに借りを作りますから手伝ってください」

そして、トツシユはなんとアレンに頭を下げた。

「すまなかった。今はひとりでも力を借りたい。フローラを探してくれ、頼む」

そう来るとは思わなかったアレンは少し戸惑った。

「お、おう……頭なんて下げんなよ、俺の命の恩人だろ。借りくらい返してやるよ」

アレンはリリスに顔を向けて話を続ける。

「姐ちゃんはどうする？」

「わしは街の様子を少し見て帰らせてもらっつよ」  
リリスは風のように消えた。

これから三人はどうするべきか？

アジトの中はもう探し終えた。そうになると、今度は外となるわけだが、探す当てはあるのだろうか？

「ここ以外に隠れ家あんの？」

アレンがトツシユに尋ねた。

「よく知らん。まだ仕事を手伝うようになって日が浅いんだ、新参に組織の秘密をベラベラしゃべるわけないだろう。だがおそらくある筈だ、こないだの作戦の時、知らない顔も多かったからな」

セレンが話に加わる。

「ならほかのお仲間さんに連絡を取るのが先決じゃないでしょうか？」

「だから俺様は新参だったから、連絡系統とかほかの仲間とか詳しくくないんだ」

ほかの仲間と連絡を取ることが、フローラを探す手がかりにもなるだろう。これが当面の目的になりそうさ。

三人いるのだから、三手に分かれたいところだが、セレンを一人にするのは危険だ。それにフローラがここに戻ってくる可能性も考えなくてはならない。

トツシユはアレンとセレンに顔を向けた。

「おまえら二人でほかの仲間とフローラが探しに行ってくれないか？」

「は？　なんで俺ら二人なんだよ、あんたは？」

「俺様はここに残る。フローラが帰ってくるかもしれない」

「なら俺がここに残るよ。一番楽そうだし」

「フローラとおまえ面識ないんだぞ？　屍体だらけの場所に見知らぬ奴がいたら、俺様の名前を出したとしても警戒されるに決まっているだろう？」

「そりゃそうだけど、ほかの仲間を捜すならあんたがいたほうがいいだろう？」

「俺様が持つてる情報なんておまえらといっしょだ。仲間捜しは俺様でもおまえらでもどっちでもできる仕事だ。仲間を見つけたら、そこから俺様に仕事を変わればいい。だが、ここでフローラを待って話をスムーズに進められるのは俺様なんだ。はっきり言って、こんなところまでただ待ってるなんてごめんだが、これが良い策なんだ」

「はいはい、わかったよ。行くぞセレン」

この場をあとにしようとしたアレンたちに、トツシュはトランシーバーを投げて渡した。

「二キロ弱くらいが圏内だ。無駄な通信と、重要な内容は話すなよ、傍受なんて簡単にできるからな。あと俺様や自分たちの名前も言うんじゃないぞ」

「はいはい」

軽い返事をしてアレンはセレンと立ち去った。

残ったトツシュは屍体の片付けをはじめた。

短い間でも、仲間は仲間だ。この仕事をアレンとセレンに任せないという理由もあって、じつはトツシュはここに残ると決めたのだ。った。

大部屋である作戦室に屍体を一体ずつ運ぶことにした。

顔を失った血みどろの屍体の足を持って引きずると、廊下に血の痕が伸びる。余計に無残な光景になるが、手短な運ぶ道具もないので仕方がない。

黒こげの屍体は今にも崩れそうで、かなり慎重に運んだ。

一体一体重ならないように部屋に並べていく。

すべての屍体を並べ終わり、トツシュは仕事終わりの一服をすることにした。

屍体たちに背を向けて煙草を吸っていると、どこかから足音が聞こえた。

静かな足音。

気配は感じられない。なぜなら気配の？気？がそれにはなかったからだ。

動いていたのは屍体だった。

顔のない屍体がゆっくりと起き上がりトツシュに迫ってきたのだ。躊躇なくトツシュは レッドドラゴン を撃った。

死肉を貫通した銃弾。

血は出ない。

苦痛すら発しない。

身動きすら止めなかった。

相手は屍体なのだ。

「屍体が起き上がるなんて悪い夢でも見てるのか？」

トツシユは逃げることにした。

撃つても死なない　いや、はじめから死んでいる相手は二度も殺せない。

弱点はどこだ！？

部屋を飛び出したトツシユは辺りにある物に目をやった。使えそうな物を探す。

銃弾の殺傷方法は、出血、臓器破壊、脳に損傷を与えるなど、一部の機能を奪うことによつて、生命活動のすべてを停止させる。相手に与える傷事態は小さな物だ。つまり、生きている人間には絶大でも、死んでいる人間には微少な攻撃になつてしまふ。

死んでいる人間に有効な攻撃は、大きな物理的破壊だ。

床にサーベルが落ちていた。血が一滴も付いておらず抜かれていた。敵とに一太刀も浴びせらなかつた証拠。

サーベルを拾い上げたトツシユは、その刃を顔のない屍体　ゾンビの太股に振るつた。

刃は硬い物に当たつて止まつた。骨までは断てない。太股にある大腿骨は人間の躰でもっとも太い骨だ、この程度の武器では齒が立たない。

サーベルは太股に刺さつたままだが、トツシユはそれを残して再び走つて逃げた。

敵の脚さえ潰せば、滅することはできなくても、機動力は奪える筈だった。

一体ですらこんなに手こずっているのに、後ろからは続々とゾンビが追いかけてくる。

追いかけてくるゾンビはすべて顔がなく焦げていない者。こちらの屍体だけになんらかの処置がしてあるに違いない。

魔導師でもないトツシユにその検討がつくわけもなく、物理的な大打撃を与えるか、逃げることしかできなかった。

幸いだったのはゾンビたちが人間ほどの敏捷性を持ってないことだった。おそらくその要因は死後硬直によるものだろう。

逃げて逃げ切れない相手ではないが、問題はどこまで追いかけてくるのか。たとえ姿が見えないところまで逃げ切っても、いつかはやって来てしまったらどう立ち回る？

「トツシユ、こちらです」

女の声がした。

取っ手もないなにもない壁が開いていた。隠し扉だ。

闇の奥に立っている女の姿。

「フローラ！」

驚きながらトツシユは声をあげた。

「早く入って」

フローラに促され、トツシユは隠し扉の中に入った。

すぐさまフローラは扉を閉めた。

扉の向う側から突撃するような音と振動が伝わってくる。

「大丈夫です、彼らには開けられませんから」

そのフローラの物腰も声も動じていない。あんな動く屍体を目の当たりにしても動じていないのだ。

暗い廊下をほのかに灯すランプの光。細い廊下は人がやっと二人並んで立てるほどの幅だ。

「ここを通れば繁華街の裏に出ることができます」

廊下を進む。

ゾンビたちが追ってくる物音などは聞こえない。

「心配したんだぞ、大丈夫だったのかフローラ？」

「ええ、なんとか。襲撃されてすぐに仲間がわたくしのことを逃がしてくれたの。リーダーを失ったばかりで、わたくしまで失えないと……」

フローラもあの場にいたのだ。

「仲間をやった奴は見たか？」

「いいえ、わたくしはすぐに逃げたから。あの場所で何が起こったのかわからないわ。だから時間を置いて様子を見に行ったら、あなたがちょうど襲われているところに遭遇して」

「あの場には屍体しかなかった。その屍体がいきなり動き出したんだ」

「やはりあれは……顔を見なくてもそうだと思ったわ」

しばらく歩いて下水道に出ると、そこから地上に上がった。

繁華街の裏通りだ。

フローラはトツシユを見つめた。

「ここでお別れよ」

「なに!？」

「わたくしは大勢の敵に狙われているの。だから姿を隠さなくては」

「なら俺様がいつしよにいて守ってやる」

「それは駄目よ」

「巻き込みたくないとも言つのか？」

「違うわ、頼れるあなただからこそ、頼みたいことがあるのよ」

そう言つてフローラは銀色の小箱を取り出した。

箱を開けると中にはクツシヨンに包まれた四角く薄い物が入っていた。

「これはマイクロSDカードと呼ばれるもの。大容量の記憶媒体よ」

「これが記憶媒体だと？ こんな小さな物になにかを記憶できるっ

ていふのか!？」

「帝国の科学力は世界最高水準ですもの。一般に流通していなくても、こういう物が存在しても不思議ではないわ」

「ということは、帝国の情報がこの中に入っていると云うことか？」

「ええ、最高機密が」

フローラは箱を閉めて、その箱をトツシユに握らせた。

「あなたに託すわ」

「わかった」



一つ返事でトツシユは受け取った。

フローラは躰をトツシユに向けたまま、一歩後ろ下がった。

「どうやって中身を見るのかわからないの。その方法をあなたに探して欲しいのよ。帝國はそれを狙って襲ってくる、今はまだわたくしの手にあると思ってわたくしを襲ってくるでしょう。けれど、わたくしの手にないとわかれば、あなたが襲われる。そうなる前に、なんとしても中身を見て、それを役立ててちょうだい。さようなら、トツシユ」

フローラは背を向けて走り出した。

「フローラ！」

追いかけることはできた。

しかし、トツシユは願いを託されたのだ。

フローラを追うことはできない。

## 黄昏の帝国「残された伝言(2)」

トランシーバーで連絡を取り合い、飯屋に集合することになった。トツシユが店に入り奥の個室に着くと、すでにほかのアレンとセレン、そしてリリスまで席について食事をしていた。

帰らずにリリスが残っていたことは、トツシユにとって好都合だった。

「リリス殿に見てもらいたいものがあるんだが？」

「なんじゃな？」

「これなんだが……なにかわかるか？」

フローラから託された小箱を開けた。

たるんだ皺で隠れていたリリスの目が見開かれた。

「小型の記憶媒体のようだね」

「やはりすぐにわかったか……さすが？失われし科学技術？に精通しているだけのことはある。この中身が見たいんだが、どうにかならんか？」

「道具さえ用意してくればどうにかしてやるよ」

「道具とは？」

「わしのうちに一通り揃っておる。もつと早く中身が見たいのなら、この近くにも道具が揃って折る場所があるが？」

聞かずともそれがどこだかトツシユにはわかった。

クーロンの地下にある遺跡だ。あの人型エネルギープラントが眠っていた場所に違いない。

一度はリリスによって解放されたあの場所だが、事件後に再び扉は閉じられた。おろらく閉じたのはリリスだと思われる。シユラ帝国は扉を開けようと手を尽くしたが開かず、現在は少数の兵隊によって警護されている。

リスクを避けるか、それとも時間を取るか？

リリスに家に向かうこともリスクがないわけではない。あの場所

は敵に知られているため、襲撃を受ける可能性は大いにある。加えて時間を短縮して、機密情報を握れば帝国を牽制し、隠れているフロアの助けになるかもしれない。

かと言って地下遺跡に乗り込めば帝国と騒ぎを起こすことになり、もしかしたら記憶媒体をトツシユが持つていることが露見するかもしれない。フロアが身を隠し時間を稼いでいる意味がなくなってしまう。

しかし、トツシユは考えた。

自らに刃が向けばフロアの安全を確保できるのではないか？

たしかに記憶媒体はトツシユと共に危険に晒されるが、自らも記憶媒体も守り抜ければいい話だ。

トツシユは決めた。

「リリース殿が言っている場所は検討がつく。人型エネルギープラントがいた場所は、現在帝国によって封鎖され守られている。リスクは考えたが、そこに向かおう」

リリースも頷いた。

「あの場所の方がわしの家よりも設備が整っておる。それに中に入ってしまったら、あの場所ほど安全な場所はない」

二人の話には入っていけないが真剣に聞いているセレン。

二人の話に入っていく気もなく食べ続けているアレン。

この二人を置いて話は進んでいく。

トツシユが提案する。

「事はできる限り隠密に済ませたい。街のや奴らがあまり活動しない時間がいいだろう。深夜と言いたところだが、あの場所は深夜になると警戒が厳重になる。前に調べたんだが、朝方に見張りが交替して警戒が少し緩くなる。そこを敵にばれずに狙えば、次のシフトまで時間が稼げるかもしれない。アレンちゃんと聞いているか、おまえが勝手に暴れそうて心配なんだが？」

「なんか言った？」

やはり聞いていなかった。目の前の食い物に夢中だ。

繊細な作戦などアレンには向いていなさそうだ。トツシユは諦めた。

「おまえは何もするな。着いてくるだけいい」

「はいはい」

気のない返事だ。今のトツシユの言葉も理解している怪しい。

セレンは迷っていた。

この作戦に参加しなければ、ひとり残されることになる。かと言って、参加すれば戦いに巻き込まれるかもしれない。

「わたしはどこかに隠れて皆さんを待っていますね。ついて行っても足手まといですから」

「そうだな、シスターはどこか安全な場所にいたほうがいい。俺様の隠れ家を紹介してやろう」

次の目的は決まった。

作戦開始は朝方だ。

トツシユに隠れ家を紹介してもらい、セレンは三人と分かれた。

三人はこれから別の場所で作戦の準備をするらしい。

セレンが今いる場所は地下だった。

トツシユのアジト、ジードのアジト、そしてこの隠れ家。地下には秘密の場所が多くあることをセレンは知った。ほかにも暗躍する者たちのアジトが地下にあるかもしれない。まさに地下は街の裏の顔だった。

この場所は緊急的な隠れ家なのだろう。

部屋は半分がベッドで埋まってしまっている。家具はそれ以外にはテレビと棚があるだけだ。棚には缶詰と武器類が並べられている。

この地下にある狭い部屋に長くいたら息が詰まりそうだ。

教会にはテレビがなく、あまり見慣れないで、興味で胸を躍らせながら見はじめてたが、話しについていけないものが多く、すぐに飽きてしまった。

「もしかしたら一日くらい、ここにすることになるのかな……」

アレンたちのことも心配だが、ほかに気がかりなことがあった。「このままだと3日も教会を開けることになりそう。戸締まりはしっかりしてきたけど、はぁ心配」  
だからと言って、この場を抜け出すことは危険に身を晒すことになる。

「でも……やっぱり！」

教会は命に代えても大切なものだった。

セレンは教会のこととなると冷静さを欠く。

敵にセレンが見つかった場合、殺すよりも人質に使ったほうが利用価値がある。勝手な行動は自らの命を危険に晒すだけではなく、仲間まで危険に晒すことになる。そのことをセレンは判断できなかった。

なによりも教会のことで頭がいっぱいだったのだ。

セレンはアジトを出て、地下から地上へと出た。

長年住んでいる街にも関わらず、セレンはあまり道などに詳しくない。神父が生きていた頃は、街のいろいろな場所に連れて行ってもらったが、それは安全な区域だけである。神父が死んでからは、あまり外に出ることもなくなり、生活圏は狭くなる一方でさらに街にうとくなくなってしまった。

周りを見るとあまり柄の良い住人たちではないようだ。

「……舐められないようにしなきゃ」

セレンは気合いを入れて歩きはじめた。

歩いていると、前方にヤクザっぽい集団に出くわしてしまった。

セレンは真面目な顔を頭を下げた。

「ご苦労様です」

と挨拶をして、まったく動じない振りをしながら足早に通り抜けた。

舐められないように、気を張って挨拶をしたのだろうが、おそらく挨拶をしたほうが危険だ。幸い今回はなにもなかったが、何度もやればいつかは絡まれる。

またしばらく歩いてみると、商店が増えてきて少し気が抜けた。ここなら道を聞いても大丈夫そうだ。

なるべく優しそうな人を探してセレンは道を探ねた。

はじめは『教会』と言つて尋ねたのだが、あまりにも通じないために近くにある道を探ねると、すんなり道順を教えてもらえた。

やっと教会の近くまで来ることができた。

セレンは教会の少し手前の道で足を止めた。

前の失敗を思い出したのだ。

敵の待ち伏せだ。どうしても教会の様子が見たくて帰ったら、あのときはライザたちに待ち伏せされてた。

警戒はしつつもセレンは大丈夫だろうと思った。

その判断はある間違つた事柄から導き出されたものだった。

帝國じゃない。

今回、命を狙われているのはトツシユであり、たまたま自分はそこに居合わせたただだとセレンは考えたのだ。鬼兵団が帝國の差し金でトツシユとジードを狙つたなど、結びつかなかったのだ。だから教会にまでは手が伸びていないと。

玄関に手を掛けた。鍵は閉まっている。それだけでセレンは安心してしまった。危険や危機感にうといのだ。

鍵を開けて住み慣れた場所に入った。

住み慣れた場所だからこそセレンは小さな違和感を覚えた。

何が起きたのか、何が違うのか、そこまではつきりとわかる感覚ではなかった。

しかし、それはセレンを警戒させるに足るものだった。

バスルームから気配がした。

セレンは武器になりそうな物を探した。モップでもなんでもいいが、なにもなかった。取りに行っている間に、気配を見失つてしまふかもしれない。

昔はハンドガンを忍ばせていたが、自分には扱えないと痛感したときから、持ち歩くことをやめてしまった。

ドアの前に立ったセレンは、聞き耳を立てて中の様子を探ろうとして、耳をドアに押しつけようとした。

そのときドアが開いた！

ドアが向こう側から引かれ、寄りかかる物を失ったセレンはバランスを崩してしまった。

そして何かにぶつかった。

セレンの頬がぶつかったものは人肌だった。

「きゃーっ！」

叫んだセレンは慌てて飛び退いた。

そして、見たのだ。

「あ、あなた何者ですか！！」

全裸の男を。

「そちらこそ何者ですか？」

「そ、そそ、そんなの、そんなことよりソレ隠してください！」

セレンは手で目元を多いながらソレを指した。

空色の髪が印象的な青年は、少しはにかんでタオルを腰に巻いた。「入浴後はいつも裸で過ごすクセあるんだ。ごめんよレディーの前で、すまないことしちゃったね」

タオルが巻かれてもセレンは視線を合わせられずにいる。顔は真っ赤だ。

「そんなことより、あなた何者なんですか！」

「そんなことって言うなら、タオルもう一度外しましょうか？」

「あゝゝゝもお、だからあなた何者か聞いてるんです！」

「それはこちらのセリフですよ。そちらこそ何者ですか？」

「ここに住んでいる者に決まってるじゃないですか！」

「あゝゝ、どうりでそんな格好をしていると思いましたが、こここのシスターさんですか」

青年は手のひらの上でポンと手を叩いた。

すっかりこの青年のペースになってしまっている。

セレンはパニックになりかけていた。

緊張の糸を張り詰めて、もしかして危険があるのではないかと思つていたところに、こんな男が現れた。悪人には見えないが、明らかに不審人物だ。

「わたしのことなんていいですから、あなた誰なんですか！」

「申し遅れました、僕は愛の吟遊詩人です」

「はい？」

「正確には愛の吟遊詩人をしながら、各地でバイトして旅をしているトレジャーハンターです」

トレジャーハンターという言葉にセレンは聞き覚えがあった。トツシユも同じ職業を自称していた。

「吟遊詩人とかトレジャーハンターとか、わかりません！」

「吟遊詩人というのはね」

「説明しないでいいですから早くここから出て行って行ってください！」

「ここ教会ですよね？」

「そうですね？」

「僕困つてるんです。旅暮らしをしていると、安全で清潔な寝場所を探すのが大変で。ここを見つけたときは、廃墟の教会を見つけてラッキーっと思つたんですけど、シスターがいるなら改めてお願いしたいと思います。何日かここに泊まりますから、よろしくお願ひします」

泊まらして欲しいのではなく、泊まるとすでに決めた発言だった。

こんな強引な青年だが、？困っている？と聞いてしまつては、セレンはそれに弱かった。

「……わかりました、明日の朝までなら」

見ず知らずに今出会ったばかりの、しかも勝手に上がり込んでシヤワーを使うような男を、この場所に泊めることが危険だというのはセレンも承知だ。わかつていながらも、困っている人を見捨てられないのだ。

青年はセレンの両手を掴んで固い握手をした。



「ありがとう女神様。あなたは僕の命の恩人です、ありがとうございますがとう！」

握手をしている最中、はらりと青年の腰のバイスタオルが落ちた。  
「……きゃーっ変態！」

セレンの平手打ちが青年の頬をぶった。  
頬を紅くした青年は笑っていた。

「ごめんごめん、取れちゃったみたい」

「わかってますから早く着替えてください！」

「それが……洗濯しちゃったんだよね」

「……」

セレンは返す言葉もなかった。

タオルを直した青年は尋ねてきた。

「それでどの部屋使ったいいの？」

「マイペースだ。」

「じゃあ……こっこの部屋で。あと神父様の服しかありませんけど、貸してあげますけど、ちゃんところを出て行くときに返してくださいね！」

「神父様もいるのか。まあ教会なんだから当然だね。それでその神父様はどちらに？」

「……亡くなりました」

「あ、ごめん」

「べつに気を遣わなくても大丈夫です。今はわたししかいないんです」

言うてからセレンはハツとした。もしも青年が悪い奴だったら、独りと知れたら余計に危ないではないか。泊める時点で十分に危ないが。

泊めると決めてからもセレンはずっと後悔している。

「……はあ」

「どうしたの溜息ついちゃって？ やっぱりさっきマズイこと聞いたちゃった？」

「違うんです、あなたみたいな見ず知らずの人を泊めるなんて莫迦みたいだと思って」

「そんなことないって、シスターは女神様だよ。見ず知らずがダメなら、ちゃんと自己紹介しようよ。ほかにもお互いのこといっぱい話そう、そうすれば友達さ」

悪い人には見えない……だけかもしれない。

不安は尽きないが、セレンは青年の笑顔を見ていると少し心がほぐれた。

その笑顔に亡くなった神父の面影を見いだしてしまったのだ。

神父とこの青年は歳が離れていて、顔もぜんぜん違う。けれど、神父も同じように笑うときは本当に無邪気そうな顔をするのだ。

ぼうつと自分の顔を眺めるセレンを、不思議そうな顔で青年は見つめた。

「どうしたの？」

「あつ、いえ……べつに……ええつと、なんの話をしてたんでしたっけ？」

「自己紹介しようよ。僕は自然を旅するのが大好きな愛の吟遊詩人ワーズワース。君の名は？」

「わたしはセレンです」

「詩的な名前だね。歌がうまそうだ」

褒められたセレンは少し頬を紅くした。

「べ、べつにうまくはありません。でも歌うのは……好き、かもしれない」

急にセレンは早足で歩きはじめた。照れ隠しだ。

セレンが案内した部屋は神父が使っていた部屋だった。

「ここを使ってください。あとお風呂と台所とトイレは自由に使っていてですけど、ほかはあまり勝手に使わないでくださいね」

「それだけ貸してもらえれば十分だよ」

「あと……わたしはまたしばらく教会を開けますから、明日になったら勝手に出てってくださいね、入ってきたときのように」

「僕ひとり残しちゃって平気かなあ。僕が盗人だったらどうする気？」

「取られるような高価な物はありませんし、あなたのこと信用しますから」

真面目な顔をしたセレンに青年は笑いかけた。

「ありがとうセレン」

さっそく名前を呼ばれてセレンはなんだか気恥ずかしかった。

会ったばかりなのに、どんどん距離を縮めてくるワーズワーズに戸惑う。

「わ、わたし行きますから。くれぐれもよろしくお願いしますからね！」

セレンは走り出した。

このまますぐ教会を飛び出す勢いだったが、ちゃんと金品の蓄えは持ち出した。無闇に人を助けても、しっかりするところはしっかりしているらしい。

黄昏の帝國「残された伝言(3)」

まだ人々が眠っている早朝。

速やかに密やかに作戦が遂行されていた。

なによりも重宝したのがリリスの助援であった。

見張りの男を立っただま硬直させ、声を出せない状態にしたリリスの術。遠めから見る分には、見張りを続けているように見える。これによって少なからず、発覚までの時間が延ばせただろう。

トツシュが活躍する機会など与えられぬほど、リリスは積極的に動いた。これも気まぐれだろうか？

なにも申しなくていいと言われていたアレンだったが、実際に何か起これば働かなくてはならなかっただろう。けれど、その機会もついにやって来なかった。

前にもこの場所に来た。

何も無い扉。何も無いが故に、限られた者しか開けることができない。

また再びリリスがこの扉を開いた。

部屋の中は前となんら変わらない何も無い部屋。

「おぬしらはここで待っておれ」

そう言っただリリスはほかの部屋に移動した。

トツシュは驚いた。

「ほかの部屋があつたのか！？」

「知らなかったのかよ？ なんかいろんな部屋があつて、いろんなもんが収納されてるみたいだぜ」

アレンが譲り受けたエアバイクもここで手に入れた。

驚きと共にトツシュはショックを受けていた。

「だったらここはトレジャーハンターにとって夢の場所じゃねえか。こんな近くに宝の山があつたのに、今まで俺様はなにをしていたんだ」

後悔も押し寄せてきた。

トツシユは床や壁を調べはじめた。

だが、リリースのように開くことができない。

「なあ、これどうやって開けるんだ？」

「俺に聞くなよ。リリースに聞けばいいだろ」

「ここのもん勝手に持ち出すのに、あの婆さんに許可取るなんて莫迦か」

「おいおい、持ち出すなら許可取らないあんたのほうが無迦だろ」

アレンに構わずトツシユは開き方を調べ続けた。

床、壁、天井、凹凸一つない。

仕掛けらしき仕掛けがなく、どうやって開くべき扉すらどこにあるのかわからない。

探せど探せど手がかりもなく時間だけが過ぎていく。それでも宝を目の前にしたトツシユは諦めることを知らなかった。

そのうちアレンも暇になってきて、辺りを調べはじめた。

リリースが扉を開けるのを前に何度も見たアレンは、それをよく思い出してみることにした。

ただ触れただけ。

そうとしか見えなかった。

その動作だけで、亀裂のなかった場所から箱が出てきたり、次の部屋の扉が現れたりした。

ためにしアレンもただ触れた。

当然の反応であると言わんばかりに何も起きない。

おそらくただ触れるだけは駄目なのだ。それでいいのならば、さきほどからトツシユがむやみやたらに触れており、下手な鉄砲も数を撃てばそのうち当たりそうなものだ。

“触れる”とい動作は必要な動作なのだろう。“触れる”からは、触れた瞬間に何かをしているはずだ。

アレンは考えた。

考えた結果……わからなかった。

「糞ッ、わかるかなもん。ぶっ壊してやる！」

グングニール が抜かれた。

それを見てトツシユは慌てアレンに飛び掛かろうとした。

「馬鹿野郎！」

しかし、これ以上近付くのは危険だった。

アレンが引き金を引いたのだ。

稲妻が床に当たった瞬間、アレンの躰が海老反りになって飛び上がった。

瞬時にトツシユは自らの意志で高くジャンプしていた。

一瞬にして電流が部屋中を駆け巡った。

倒れたアレン。

着地したトツシユ。

すぐにトツシユはアレンの様子を見るのではなく、自分の靴の裏を調べた。

「なんだよ、ちょっと溶けてるじゃねえか」

ジャンプは間に合わなかったらしい。けれど、ゴム底は電気を通さなかったようだ。

靴を調べ終わると、トツシユはアレンの頬をぶった。

「おい、寝てないで起きろ。飯だぞ！」

「うっ……うっ……ひでえ目に遭った……」

「自業自得だろ。おまえ本当に莫迦だな」

アレンのブーツは、その機動力を生かすために頑丈な金属でできていたのだ。

どこかで 歯車 の音がした。

「糞ッ……勝手に……」

アレンは歯を食いしばりながら胸を押さえた。

「おいっ、どうした？」

目を丸くしたトツシユはアレンの顔から汗が噴き出すのを見た。

汗は尋常な量ではない。

トツシユはアレンの頬に触れて見た。

燃えるように熱い。

「おいっ、大丈夫なのか!？」

どこかで 歯車 が激しく廻る音がした。  
部屋が動き出す。

何もなかった壁や床に、直線で構成された迷路のような光の線が走った。

大小様々な箱が次々と現れる。

扉という扉が次々と開いていく。

部屋にあったものがすべて解放されているのだ。

《認証完了しました》

合成音が響いた。

そして、最後の部屋の中心に現れた巨大な球体。

それはシャボン玉のように、流動しながら七色に輝いていた。

球体からホログラム映像が投影され、宙に映像が映し出された。

映像は酷く乱れ、ノイズでかろうじて人が映っているのがわかる程度だった。

《……サイゴノ……キボウ……》

音声も途切れ途切れだ。

《アナタガ……ワタシノセイシン……コノヨニ……》

アレンは瞳を見開き驚いた顔をして硬直したまま。

なにが起きているのかトツシユは理解に苦しんでいた。

「なんなんだ……なんのメッセージだ？」

おろらくこれは今通信されているものではなく、残されていたメッセージだ。

メッセージには必ず受け取るものがある。

このメッセージはいつたいたなんの目的で残されていたのか？

《……オソロシイケイカク……アナタダケ……ラクエン……スベテ  
ハソコニ……》

ノイズがさらに酷くなっていく。

《……ホントウニ……ごめんなさい》

最後の言葉だけ、はつきりと女性の声で聞こえた。

「うわああああああっ！！」

突然アレンが叫んだ。

「どうした！？」

慌ててトツシユはアレンを押さえる。

アレンは狂ったように床の上を転げ回りながら暴れた。

艶やかな風が吹く。

場を一転させるほどの存在感を持つ者がアレンの前に現れた。

妖女リリス。

世にも美し過ぎて怖ろしいリリスの顔が、半狂乱のアレンと向き合った。

リリスの瞳が妖しく輝いた刹那　アレンは気を失った。

すぐにトツシユがアレンを抱きかかえた。

「こいつに何があつたんだ？」

と、アレンに視線を向けてリリスから目を離し、再びリリスに視線を戻すと　すでにそこにいたのは妖婆だった。

「まったくとんだ邪魔が入ったね。この子のせいでシステムがちよいとイカれちまったよ。メモリの情報を取り出すのに二、三時間は掛かるから大人しく待つてな」

「二、三時間も掛かるのか？　この糞餓鬼のせいとか！？」

「今は寝かせておやり。起きたらこっぴどく叱ってやるんだね」

リリスは妖しく笑いながらまた部屋の奥へと消えてしまった。

気がつくとも扉も扉も投影機も、何もない部屋に戻っていた。

「……三時間もこの部屋で待つててか。おいつ、糞餓鬼起きやがれ！」

トツシユはアレンを揺さぶってみたが反応はゼロだ。

あきらめたトツシユは床に寝っ転がった。

「寝る！」

朝方の作戦だったため、ろくな睡眠も取っていなかった。

トツシユはすぐに眠りに就いた。



「お〜き〜ろ〜よ、オッサン！」

アレンがつま先でトツシユの脇腹を蹴ろうとした。  
殺気！

瞬時に目を覚ましたトツシユはすでに銃口をアレンに突き付けていた。

「変な起こし方すると撃つぞ？」

「起きてたのかよ？」

「いや、寝てた。眠りが浅いんだ、いつ敵の襲撃があるかわからんからな」

“一匹狼”だったトツシユは、常に自分の身は自分で守る必要があったのだ。

この場にはリリースもいた。

「いつでも情報は見られるようにしといたよ。こいつの使い方がわかれば、の話だがね」

ある物をリリースはトツシユに手渡した。

「パソコン……らしいが、今出回ってるもんじゃないだろこれ。こんな小型の見たことないぞ」

A4サイズのノートパソコンだった。

リリースは首を横に振った。

「いや、これは今の時代の物だよ。帝國がつくった最新型さ」

「さすが帝國だな。一〇〇年先行ってやがる」

一〇〇年というのは言い過ぎだろうが、シユラ帝國が世界最高水準の科学技術を持っているのはたしかだ。

しかし、着目するべき点はそこではないだろう。

アレンは首を傾げていた。

「どこで手に入れたんだ？」

この場所に来た理由は、帝國の力を借りずに記憶媒体から情報を取り出すため。帝國のノートパソコンがあるのなら、ここに来た理由がわからない。

「つくつたんじゃよ、わしが。帝國の最新型と言ったが、正確にはそれを真似てつくつたもんさ」

そんなことが可能なのか？

可能だとしても、帝國のノートパソコンの情報、設計図などは、いつでも手に入れたのか？

妖しく笑うリリス。

トツシュたちが眠っている間に、リリスは外に出て帝國のノートパソコンを研究して来たのか？

わざわざ外に出て、そんなことをするくらいなら、ノートパソコンごと盗んでくればいい。それらを考えたトツシュは頭が混乱した。

「つくるつたつて、どうやって？」

「シユラ帝國の技術はすべて“失われし科学技術”が元になってるのさ。それに依存しすぎていることが仇となったね。まあこの技術を使える者じゃなきゃ、帝國の脅威にはならんじゃろうが」

「よくわからんのだが？」

「おぬしは知らんでいいことじゃよ」

そう言われると余計に気になる。

トツシュは宝の山を目の前にして手をこまねくことしかできないのか。

「リリス殿、折り入って話があるのだが？」

「おぬしにはなにもやらん」

「言う前から！そこをなんとならんか、エネルギープラントは手に余る物で諦めたが、なにかもつと手軽で便利な物を一つでいい！」

「さあ、用は済んだ。ゆくぞ」

リリスはトツシュを置いて歩き出した。

それでもまだトツシュは食い付こうとした。

「リリス殿！リリス殿！」

リリスは完全に無視をした。

その二人の姿を見ながらアレンは溜息を漏らした。

「オッサンのクセして子供みてえだな」

こうして三人はこの場をあとにすることになった。トツシユは後ろ髪を引かれながら

開かれる扉。

坑道へと続く道。

トツシユは銃を抜こうとしたが、向こうのほうが早かった。

「……だろうな」

予想していたかのようなトツシユの呟きだった。

遺跡を出てすぐに待ち構えていた兵の群れ。今から蜂の巣でもつくめるかのように、向けられている数え切れない銃口。

中で時間を食ってしまった結果だ。待ち伏せは当たり前と言えは当たり前だろう。

そこまでの予想はできた。

問題はさらにあつた。

「ごめんなさあゝい、また捕まっちゃいましたあゝっ」  
捕まっているセレン。

その横で艶やかに笑っているライザ。

「朝食でも一緒にいかが？」

その誘いにアレンが答える。

「なに喰わせてくれんだよ？」

「お腹いっぱい銃弾なんていかが？」

「腹に穴開けられたら膨らむもんも膨らまねえよ」

たったひとりの人質を取られただけで、窮地に追いやられた。人質さえいなければ、トツシユはいくらでも策を考えていた。追い詰められたときには、最後の手段としてリリースという駒もある。

トツシユは頭を抱えた。

「なんで捕まっちゃうんだよシスター」

「ちよつと教会の様子が気になって、その帰りに見つかってしまったて……」

「大人しくしてくれよ。なんのために俺様が隠れ家を提供したと

思ってるんだ」

「ごめんなさあ〜い」

謝って解決する問題ではない。

急に兵士たちが騒ぎ出した。

「そいつはおらの獲物だ。だれにも渡さねえ」

兵士たちの足下から土鬼の上半身がせり出してきたのだ。天井の低いこの場所では、足の先まで顕現することはできない。

ライザが命ずる。

「全員殺さず捕らえなさい。抵抗するようなら手足くらいなら奪っても構わないわ」

そんな声など土鬼は聞いていなかった。

土塊である巨大な拳が狭い坑道で振り回された。

壁が砕かれ、天井からも硬い土の破片が落ちてくる。

巻き添えを食う兵士たち。

ライザも後ろに引くしかできなかった。

「やめるのよ土鬼！ この莫迦鬼！」

罵る声も破壊音に掻き消されてしまった。

土鬼はライザの命令を無視してトツシュに襲い掛かった。

その混乱に乗じてアレンはセレンを救出しようと動く。

セレンを捕らえている兵士は怯んでいる。暴れる土鬼に気を取られて、アレンたちどころではないようだ。

どこかで 歯車 の音がしたような気がした。

兵士が気づいたときには、拳が目と鼻にあった。

アレンの強烈な一撃。顔面の骨を砕き、一発で兵士を倒すと、すぐにセレンの躰を抱えた。

「逃げるぞ！」

「どこにですか！」

逃げ場などない。

ただでさえ兵士で道が塞がれているというのに、土鬼の登場でさらに道は狭くなった。その土鬼はトツシュと交戦中で、こんな狭い

場所で近付けば巻き添えを喰うのは避けられない。

脱出できないのなら、戻るしかあるまい。

アレンはセレンを抱きかかえたまま遺跡に飛び込んだ。すでにリリスは扉を閉める準備をしている。

慌てるトツシュ。

「おいつ、俺様を見殺しにするつもりか！」

土鬼を置いてトツシュが入り口に飛び込んだ瞬間、扉は閉まった。また遺跡の中に戻って来た三人とセレン。

アレンはリリスに尋ねる。

「で、出口は？」

「さあ、そこ以外にあつたかのお」

外では敵が待ち構えているだろう。

トツシュは愛銃の レッドドラゴン を握り締めた。

「今度は人質なしだ。どうにかなるだろう」

「う、ごめんなさい」

セレンはしゅんと肩を落とした。

## 黄昏の帝国「残された伝言(4)」

部下に命令はしたが、無駄だとわかっているライザは、ノートパソコンに向かって自分の研究を進めていた。

ノートパソコンのディスプレイに映し出されているのは、体重や身長などの身体測定の数値。背の高さや体重から考えて、おそらく子供のものと思われる。

作業をしていると、すぐ近くで対大型昆虫用のバズーカが扉に向かって放たれた。

坑道に響く轟音。

少し天井が崩れてきた。

ライザはピタッと手を止めた。

「うるさいわよ、もっと静かにやりなさい！」

ライザの怒号に兵士たちは背筋を伸ばした。

フルフェイスで隠れている兵士たちの顔だが、その下ではさぞかし嫌な顔をしているだろう。どんな手段を使っても扉を壊せと命令したのはライザだ。

どんな手も使えなくなった兵士たちは、打つ手がなくなり静かになった。

アレンたちはいつになったら出てくるのか？

持久戦が開始された。

それも数分と持たなかった。すぐにライザが痺れを切らせたのだ。

「帰るわ。彼らが出てきたらすぐに捕らえて連絡なさい」

帰ると歩き出したライザとは逆の方向から人影がやって来る。

不気味な仮面の主　隠形鬼。

ライザは眉をひそめた。

「なぜアナタがここにいいのかしら？」

「私ノカガ借りタイト呼バレテ参上イタシマシタ」

「アタクシは呼んでないけれど？」

兵士の中から火鬼が割って出てきた。

「わちきが呼んだでありんす」

さきほどは土鬼が暴れ回って出番がなかったが、じつはこの場に火鬼もすでにいたのだ。

ライザは首を傾げる。

「なぜ？」

「隠形鬼のお頭様は、この手の物に精通しているのでありんす」  
それを聞いてライザは喜びもせず、あからさまに嫌な顔をした。

自分に開けられなかった扉をこいつが開けるのか？

鼻で笑ったライザ。

「どうぞ、できるものなら開けていただけるかしら？」

「御意」

そう短く返事をして隠形鬼は扉に向かって歩き出した。

扉の前に立つた隠形鬼は首を縦に動かし観察しているようだった。

「フム、ゴク最近造ラレタ扉ノヨウデ……失ワレテイル筈ナノニ、  
珍妙ナ」

仮面の奥から低い笑い声が響いた。

ここは“失われし科学技術”の遺跡だ。新しい物がある筈がない  
というのが当然だ。この扉を造り直したのはリリースだった。

しかし、なぜ“最近”とわかったのか？

隠形鬼は扉に触れた。ただそれだけだった。

《認証完了しました》

扉が開く。

ライザは驚きのあまり目を丸くしてしままま声も出なかった。

「……ッ!?」

衝撃と共に悔しさが込み上げてくる。

自分が開けられなかった扉を開けた。それも何か大がかりなことを  
したわけでもない。時間を掛けたわけでもないのだ。

どうやって開けたのか聞くことすら、ライザのプライドが許さな  
かった。

ライザはヒールを鳴らして遺跡の中に入った。  
「行くわよ」

その声には怒りがこもっていた。  
なにもない部屋。その部屋にはなにもなかった。アレンたちの姿すら。

さらにライザの怒りは増した。

「どういうこと？」

空の箱と化している部屋。

一見してなにもない部屋だが、ライザは仕掛けがあることを知っている。前にリリスが目の前で、エネルギープラントを目覚めさせたのを見ている。

ライザは床や壁を調べはじめた。出口に繋がる仕掛けもあると考えたのだ。

しかし、見つからない。

「触れるだけでは駄目なのね。呪文を唱えているようには見えなかったから、生体認証「バイオメトリクス」かしら」

ライザはちらりと隠形鬼を見た。

「このギミックを動作させることはできて？」

挑戦を突き付けた。

「ハテ、私二八不可能ナヨウデ」

「……そう」

ライザは嫌な顔をした。

隠形鬼の言葉が嘘か真かわからない。なにも調べもせず、不可能だといきなり言ったのだ。扉をいとも簡単に開けた者の言葉なのか？

兵士が慌てて部屋に飛び込んできた。

「連絡します！ 不審な乗り物を目撃したとの情報があり、調べさせたところ、すでにトッシュ一味は町を出た模様です」

報告を受けたライザは床を調べるのをやめて立ち上がった。

「やはり抜け道が……まあその件はあとでじっくりと調べましょう。まずは彼らの搜索を第一に、全員生け捕りにするのよ。鬼兵団にも



ちゃんと仕事をして欲しいものだわ、今回は彼らを前にしてなぜか引き上げたらしいけれど？」

火鬼が持っている壺を指差して訴える。

「それはこの莫迦が命令を聞かずに！」

「私ノ命令デ御座イマス。土鬼ガ無礼ヲ働イタ為、日ヲ改メル事ニ致シマシタ」

隠形鬼の話聞いて、ライザは睨みを利かせた。

「騎士道か何かのつもりかしら、そんなの求めてないわ。こちらが望んでいる仕事をしてくださらない？」

「わちきはちゃ〜んと自分のお勤めはしたでありんす」

「それはアナタ方内部の役割分担の話で、こちらは鬼兵团という組織に依頼をしているのよ。果たせなければ連帯責任よ」

「私達ハ自由意志デ集マツタ寄せ集メ、連帯責任ナド誰モ取りタガリマセン」

「ならトップであるアナタが責任を取りなさい」

ライザはそう言って微笑んだ。完全に隠形鬼を目の敵にしていた。「ソレハ分カツテオリマス」

依頼内容をライザは再度確認する。はじめの依頼から、ここまで間に追加された内容もある。

「まずトツシユ一味を生け捕りにすること。そして、ジードの残党を見つけ出して始末、リーダーも早く見つけ出してルオ様の前に突き出してくれないかしら？」

「ソノ件デ御座イマスガ、じーどノリーダーハ既ニ死亡シテイル模様」

「なら新しいリーダーかその候補、サブリーダーとかいるでしょう。気が利かないのね、まったく。とにかくリーダーの代わりになる奴を捕らえなさい」

「御意」

隠形鬼は頭を下げた後、出口へ歩き出した。

「行イクゾ火鬼」

「あいよ」

鬼兵团がこの場から去ったあと、ライザはつぶやく。

「隠形鬼……信用できない奴ね。いつかあの仮面を剥がしてやりたいわ」

ライザは艶やかに笑った。

砂漠を走るタイヤのない自動車。

楕円形のその車は、少し地面から浮きながら走行している。運転席のリリスが横の助手席にいるトツシユに尋ねる。

「どこか行く当てはあるのかい？」

「ない。近くの町も村も帝國の追っ手が現れるだろうな」

鬼兵团だけではなく帝國まで絡んできた事実を彼らは知った。坑道で土鬼とライザがいつしよにいたのが証拠だ。

後部座席からアレンが前の席に身を乗り出してきた。

「なあなあ、そんなことより取り出した情報見ようぜ」

「お前らには見せん」

きっぱりとトツシユが言った。

さらにアレンが身を乗り出してきた。

「え〜っ、なんでだよ〜！」

フローラがトツシユに託した帝國の機密情報。シユラ帝國の機密となれば、世界を揺るがすだけの価値はある。そんなものを易々と広めるわけにはいかない。

「わしはもう見たが？」

リリスが妖しく微笑みながら言った。

それに関しては、トツシユも許容しているようだ。

「あなたに頼んだ時点でそれは承知だ。リリス殿は世俗にあまり関心がないようなので、むやみやたらと他言することもないだろうし、なんでも自分の力でできるあなたに帝國の情報なんて価値もないだろう」

「さて、それは時と場合によるがね」

含みのあるリリスの言い方だ。リリスはいつたいどんな情報を見たのか？

情報の入ったノートパソコンはトツシユの膝の上に置かれている。「お前らもむやみやたらと他言するような奴らじゃないことは、短い付き合いだがわかっている。この中身が知りたいなら、その情報を使って俺様がやることに協力しろ。それが条件だ」

アレンは身を乗り出していた躰を引いて、座席に深く腰掛けた。「俺パス。めんどくさいことに巻き込まれたくないし」

セレンも首を横に振った。

「わたしもこれ以上は……」

これ以上は付き合いたくないが、トツシユたちと分かれれば、独りで帝國に追われるハメになる。

トツシユと共に行動して、より深みにはまっていくのか。

アレンと放浪の旅をして、帝國の影に怯えて逃げ続けるのか。

リリスと共にという選択肢はないのだろうか？

申し訳なさそうにセレンはリリスに声をかける。

「あのお、リリスさん？」

「なんじゃな？」

「リリスさんのところでわたしを匿ってもらうわけには……家事とかならなんでもできますから！」

「わしは自分の世話くらい自分でできるよ」

やんわりと断られたのだろうか。

リリスは話を続けた。けれど、それは今の続きではなかった。

「おぬしら本当に情報を聞かなくていいのかい？ たとえおぬしら、いや、すべての人々に関わるような重要なことでもかい？」

中身を知っているリリスの揺さぶりだ。

しかし、その程度の揺さぶりではアレンは落ちない。

「勝手にすべての人々に入れられてたまるかよ。俺は自由だから、そーゆー枠組みに囚われないで生きてるしカンケーないね」

一方セレンは悩んでいた。

「すべての人々……ここで聞かなくても、巻き込まれるってことですか？」

リリスが答える。

「巻き込まれるって言い方は正しくないね。もしそれが実現したら、人々も恩恵に預かれるってことさ」

小出しにされるヒント。

ここでトツシュが止めに入った。

「あまり中身について言わないでもらいたいんだが。言ってもいいのは、こいつらが協力すると誓ってからだ。俺様の中身を見てないから、どういう協力になるかはわからんが」

アレンは窓の外を眺めている。セレンはまだ迷っているようだ。少し無言の時間が流れた。

「あっ！」

急にアレンが声をあげた。

横にいたセレンが驚く。

「どうしたんですか!？」

アレンは窓の外を指差した。

「あれってこっちに向かって手振ってんのか？」

窓の外に見たモノは人影だった。

セレンが前の席へ身を乗り出した。

「トツシュさん止めてください！」

「放っておけ」

「そんなことできません、早く止めてください！」

「つたく、シスターはお人好しだなあ」

トツシュはハンドルを切ってその人影に向かって走り出した。

どんだんとその人影がはつきりと見えてくると、セレンは驚いた顔をした。

「あの人!？」

横のアレンが尋ねる。

「知り合いかよ？」

「はい……まあ、そのようなものです」

そして、車は人影の前で止まった。

手を振っていたのは青年だった。

空色の髪をした無邪気な笑みを浮かべる青年だ。

「よかったあ。やっぱり車だったんだ、変な形だから心配だったんですよ」

セレンが見覚えのある人物　ワーズワースだった。

ワーズワースはドアを叩いた。

「ちょっと乗せてもらえませんか？　クエックに乗って旅をしていたら、なんと盗賊に襲われてしまって、命はこのとおり助かったんですけど、クエックはどっか行っちゃうし、食料もお金も全部落としてしまつて。あの、聞こえてますこっちの声？」

それが砂漠の真ん中でぽつんといた理由らしい。

トツシユがつぶやく。

「これ四人乗りだぞ？」

「詰めれば後ろにもうひとり座れます！」

人助けになると強気なセレンだ。

アレンは無言で詰めて座った。

それに気づいたセレンはちよつぴり笑顔になった。

トツシユは頭を掻いて溜息を漏らした。

「つたく、シスターの知り合いじゃ仕方ない……か。ツイてる旅人だな」

後部座席のドアが開かれた。

乗り込んできたワーズワースは驚いた顔をした。

「あつ、セレンちゃん。奇遇だね、運命だね、神のお導きだねえ」

嬉しそうな顔をしてワーズワースはセレンの横に座った。狭いせいなのか、かなり密着してくる。

リリースがつぶやく。

「旅は道連れ世は情け……古き良き時代の懐かしい昔の言葉だね」

こうして思わぬ人物を加え、旅人は五人となった。

車は何もない砂漠を再び走り出した。

## 黄昏の帝国「砂の海に沈みし都（1）」

夕刻まで走り続け、リリスの記憶を頼りに集落までやって来た。だが、そこは無人の集落だった。

もはや集落とは呼べない廃墟だ。

リリスは沈んだ地面を眺めていた。

「昔はここに小さなオアシスがあったんじやが、枯れてしもつたよ  
うじや。水がなかなければ生きて行けんからな、集落を捨てて移住した  
んじやろう」

水はないが建物はそのまま残っている。石造りの頑丈そうな民家  
などだ。

今晚はここで夜を明かすことになる。

水と食料は車に積んである。固形燃料もあるが、燃やす物がなく、  
暖を取るのが難しそうだ。あまり寒いようであれば、車の中で寝る  
のがいいだろう。

トツシユは独りで空き家に入り、そこでノートパソコンを操作し  
ていた。

「このフォルダだな」

微かな物音。

「アレンだな？」

「なんでわかつたんだよ？」

「跡をつけられていたことぐらい承知だ」

「チッ」

「いつしよに見るなら手伝えよ？」

第三の声。

「見て損はないと思うよ」

リリスだった。

「勧められると見たくなくなる」

そう言って帰ろうとするアレンの首根っこをリリスが掴んだ。

「見ておゆき。情報は？失われし科学技術？のことだよ。それもこの世界に大きな変化をもたらす物のね」

「わかったよ、見りゃいいんだろ」

ノートパソコンの前に三人が集まった。

読み込まれる情報。

それは機密文書だった。

シユラ帝国による水資源の独占。

枯れた大地に水が豊富にあつては困る帝国が、隠し続けている？失われし科学技術？について。

「これはすごい！」

誰かが声をあげた。パソコンの前にいる三人の後ろにもう一人。トツシュの銃口が向けられた先にいたのはワーズワースだった。

「殺るしかないな」

本気のトツシュは引き金を引こうとした。

ワーズワースは慌てた。

「やっぱり見ちゃ不味かったですか？ 大丈夫です、僕は人畜無害なただの吟遊新人ですから。吟遊詩人っていうのは、伝承や伝説、噂話なんかを詩にして多くの人に広めるだけの存在ですから」

まったくフォローになつていなかった。むしろ口を開いたのは逆効果だ。

そこにセレンが飛び込んできた。

「みなさん探しましたよ。独りにしないでくださいよ、もぉ」

これによつてトツシュは銃をしまった。そして、小さく小さく囁いた。

「命が延びたな。あとできっちりとは話をつけるからな」

「……………」

ワーズワースは小さく頷いた。

ノートパソコンを閉じたトツシュはアレンの腕を掴んだ。

「リリス殿はその二人と、とくにこの若造のお守りを。お前は俺様といっしょに來い、場所を変えるぞ」



トツシユはアレンを引きずって別の民家へ移動した。二人つきりになったところで、再びノートパソコンを開いた。灼熱の砂漠の真ん中に聳え立つ鉄の要塞こそが、皇帝ルオのいるシユラ帝國のアスラ城だ。

水が枯渇しているシユラ帝國は、各地から水を調達して成り立っている。

記載されていた？失われし科学技術？は、水を生み出す装置についてだった。

それを使えばシユラ帝國は自国で水をまかなえる筈だ。

しかし帝國はそれをしない。

その謎についての記載はなかった。

機密情報が記載されているが、これは資料ではなく、メモのようであった。抜粋された内容しか書かれていないのだ。

トツシユはほくそ笑んでいた。

「水が豊富にあれば、価値観が大きく変動するな。現在、水を取り仕切っているのは金持ちどもだ。その資産価値が失われたら、奴らの泣きつ面が見える」

装置を起動するために必要な、二つのオーパーツの記載があった。遺跡を動かすために必要な、鍵の役割を果たす ヴォータン と呼ばれる槍。

装置自体の起動に必要な、スイシユ と呼ばれる宝玉。

二つのオーパーツは別々の場所に保存されている。

アレンは嫌そうな顔をした。

「マジかよ、こっちのやつアスラ城にあんの？」

ヴォータン はアスラ城のどこかにあるとだけ書かれていた。

難攻不落のアスラ城に忍び込むなど、気が狂れたと思われる行為だ。まさに死に行くようなものだ。

しかし、この場に生きて帰った者がいた。

？暗黒街の一匹狼？の懸賞金を跳ね上げた大事件。

アスラ城に忍び込み、皇太后の寝込みを襲ったという事件だ。

「昔、俺様はあそこに忍び込んだことがある」

「マジかよ？」

「お前世間知らずだな、有名な話だと思っていたんだがな。だが二度目は無理だ」

「なんでだよ？」

「あれは酒に酔った勢いだ。酒場で飲んでである男と賭をしたんだ」「だったら酒飲んで、俺と賭したら行けるんじゃない？」

それを聞いたトツシユはあきれ顔をした。

「お前がやれ」

「やだよ、俺酒飲まねえもん」

「……口が達者な奴だ。まあ、こっちのオーパーツはあとに回そう」もう一つはシユラ帝國とは別の場所に保管されているらしい。

古代遺跡に スイシユ はある。

詳しい場所や遺跡の詳細は書かれていなかった。

その遺跡の名は。

「俺……この場所……知ってるような気がする」

ノア。

アレンの記憶の奥底で何かが蘇ろうとしている。

「……やっぱ知らない。知ってるかもしれないけど、思い出せないんだ」

「思い出せ、重要なことだぞ。どこで聞いた、旅先か、書物か、どこで仕入れた情報だ？」

「だから思い出せないって言うてんだろ、せかすなよ」

「シユラ帝國に忍び込むのも骨だが、そっちは場所がわかっているんだ。いいから思い出せ」

トツシユはアレンの頭を掴んで振った。

「おゝも〜い〜だ〜せ〜」

「やめろよ、糞野郎、それ以上やったら！」

二人に忍び寄る影。

「ノアの方舟」

そう男はつぶやいた。

二つの銃口を向けられたワーズワースは苦笑いを浮かべた。

「すみません、気になって気になって……あはは」

トツシユはワーズワースに迫り、銃口を眉間に押しつけた。

「命を捨てる覚悟で来たんだろうな？」

「命は惜しいですけど、吟遊詩人としてロマンを追い求める義務もありまして……。伝説とか、伝承とか、うわさ話とか……？失われし科学技術？と聞くと臆がウズウズしてしまうんですね」

「その気持ちは俺様にもわかる。トレジャーハンターとして、財宝や？失われし科学技術？にはロマンを感じるが、命までは捨てないぞ」

目と鼻の先で引き金が引かれようとしている。

ワーズワースは後退るが、銃口もいつしよについてくる。

「ちよつと待つてください！ 吟遊詩人としてお役に立てる情報があるかもしれませんよ、ここで僕のこと殺しちゃっていいんですか、たぶん後悔しますよ？」

「ここでお前をやらないで後悔するよりはマシだ」

「そんな酷いですよトツシユ様。ノアですよ、ノアと言えばノアの方舟 が有名です。遙か神話の時代の伝承なので、ここで僕を殺しちゃったら、調べるの大変だと思っなあ」

「詳しいのか？」

「まあ吟遊詩人ですから」

「うさんくさい職業だ」

「トレジャーハンターほどじゃありませんが」

やはり引き金を引こうとトツシユがしたとき、アレンがめんどくさそうに割って入ってきた。

「殺すなら情報を聞いてからでもいいだろ？」

「やっぱり殺すのか。」

トツシユは銃を下ろした。多少は寿命が延びたらしい。

冷や汗を拭ったワーズワースは一つ咳払いをした。

「え〜っ、昔あるところにノアというオツサンがおりまして、ノアの方舟 をつくって助かりました。おしまい」

「……………」  
無言でトツシユは銃口をワーズワースの口に突っ込んだ。

「あわわ…………ご、ごえんなさえ…………」

必死で謝るワーズワース。

トツシユは銃を抜いた。

「次はないぞ？」

「わかつてます、今のは冗談です、次はしっかり話します」

そして、ワーズワースは語り出した。

「遙かいにしえの時代、世界を洗い流す大洪水が起きました。その生き残りのひとりがノアという男です。ノアの方舟 とは、保管計画のためにつくられた船艦の名で、洗い流された新たな世界で再び繁栄するために、生物のサンプルが乗せられたりしたらしいです。というのが神話の時代の嘘かホントかわからない伝承です。」

おそらく重要なのは、実在するアララトという名の古代魔導都市遺跡でしょう。そこはノアのゆかりの地らしく、方舟も近くにあるのではないかと言われています。あると言っても、伝承が嘘ではなかった場合の話ですが。そもそもアララトは伝承の時代よりも遙かに新しい都市ですから、あやかって名を付けただけというのが、研修者たちの大方の見方です」

トツシユは頷いた。

「アララトなら聞いたことがある。過去に帝國が大規模な発掘作業をしたが、結局なにも見つからなかったらしいな」

シユラ帝國がなにも見つけれなかった場所になにかあるというのか？

それとも本当はなにかを発見していたが、それを隠しているとも考えられる。

「あとはリリス殿に聞けばわかるかもしれんな」

そう言っつてトツシユは銃口をワーズワースに向けた。

「ちょっとそれはないですよ。ちゃんと話じゃないですか、報酬として命くらい助けてくれても……」

苦笑いで乗り切ろうとワースワースはしたが、急に真面目な顔をして辺りを見回した。

「きゃーっ！」

悲鳴が外から聞こえた。セレンだ。

いち早くトツシュが民家を飛び出した。ハツとしたアレンも遅れて飛び出した。

五メートルを超える巨大な人影。

「トツシュ、トツシュ出てこい、早くしねえとこの尼殺すぞ！」

土鬼の姿。

そして、足を硬い土で固められて動けないセレンの姿。

「また……捕まっちゃいました。いつもいつもごめんなさあ〜い」

セレンは大粒の涙を流していた。

土鬼には銃弾などが聞かない。砂と化して物理攻撃を無効化してしまう。

銃を抜けないトツシュ。小さな声でアレンに呼びかける。

「おい、お前の銃なら前みたいにならぬんじやないのか？」

「セレンが近すぎる。電撃があつちまで飛ぶ可能性があるから無理」

「なら俺様がどうにかしてシスターを助ける。とりあえず奴の気を引いとけ」

「気を引くならあんだだろ。あの野郎はあなたにご執心なんだからな」

「わかった、俺様が気を引いてシスターから遠ざけるから、すぐに撃て」

「オッケー」

作戦は決まった。

トツシュが全速力で走る。

「どこへ逃げるだ？」

やはり土鬼はトツシュを追ってきた。

それを見計らってからアレンがセレンの元へ走る。

セレンの目の前まで来たアレンは言われたとおり、すぐに撃った。

「トツシユ逃げる！」

「早すぎだ、俺様まで殺す気がっ！」

構わずアレンは、グングニールを放った。

稲妻が叫び声をあげながら宙を翔ける。

咄嗟にトツシユは地面に伏せた。

しかし、その行為は逆に身を危険に晒す結果になった。

巨大な土塊の手が振り下ろされる。

「おらを昔のおらだと思うな！」

電撃が効いていないのか！？

トツシユは逃げる間もなく巨大な手に潰されようとしていた。

突然、アレンが耳を塞いだ。

トツシユやセレンはその音を聴くことができなかった。

巨大な手が分解されトツシユに降り注ぐ大量の砂。

「うががが……合体が……おらに躰に……なにが起きた!？」

土鬼自身も自分の身に起きたことを理解できていない。

セレンを捕らえていた足の土塊も砂と化していた。

この状況の手がかりはアレンだけが知っていた。

「音だ……頭の中がキーンとしやがった」

アレンだけが感知できた音。

砂に埋もれていたトツシユが這い出してきた。

「どうやら助かったようだな。やはり電撃が効いたのか」

それにアレンはなにも言わなかった。

しばらくしてワースワースが物陰から出てきた。

「いやあ、怖かったですね。なんですかあれ、見たこともない怖ろしい化け物でしたね」

アレンはワースワースに顔を向けた。

「まだ死んだわけじゃないぜ」

「え？」

目を丸くするワーズワース。

そう、まだ土鬼は死んだわけではない。

「おれの躰が……躰が……動かねえ……うおおおん！」

あたりの地面に同化してしまつて、どこにいるかわからないが、声だけが聞こえてくる。

トツシユは服についた砂を払いながら辺りを見回した。

「うるさいが、止めの差し方がわからん以上は放置だな」

「覚えてろトツシユ……おれが必ずぶつ殺してやる……」

トツシユは背中でのその声を聞いていた。

敵の襲撃を受けた以上、この場所はもう危ない。

まだ敵が潜んでいる可能性もあり、そうでないとしても、土鬼から連絡がなければいつかは不審に思われるだろう。

「徹夜で走るぞ、みんな車に乗れ」

トツシユは車に向かった。

辺りを見回しながらセレンが気がついた。

「あれっ、リリスさんは？」

探し回ったがリリスは見つからず、仕方がなく車で待つことにしたのだが。

「呑気な婆さんだな、寝てやがる」

トツシユは呆れた。

運転席で寝ていたリリス。

ドアはロックされ、リリスが起きなくては車に乗れない。運転もリリスでなければできない。

アレンがドアを叩いた。

「起きろよ、勝手に寝てんじゃねえ！」

返事はなかった。

ワーズワースがボソツと。

「お年寄りには早寝早起きですから」

「年寄りで悪かったね」

そう言つてリリスがドアを開けた。

「ぼ、僕は自然の摂理を言っただけです」

ワーズワースはセレンの後ろに隠れた。

トツシユはさっそく助手席に乗り込もうとした。

「リリース殿、悪いができるだけ遠くまで車を走らせて欲しい。今さつき敵に襲撃されたばかりで、ここも危ない」

「行き先がなきゃ自動運転はできないよ。まさか夜通し年寄りのわしに運転させる気じゃないだろうね？」

「なら安全そうな町まで行ってシスターを下ろす。それから次の目的地は言おう」

降りるのは自分だけ　とセレンは驚いた。

「わたしひとりですか？　ひとりにされたら、そんな無理ですよ。

あのワーズワースさんは？」

答えるのはワーズワースではなくトツシユ。

「こいつは俺様たちといっしょに行く。いいよな、若造？」

プレッシャーを放ちながらに笑ったトツシユ。脅しだった。

「ぼ、僕はご一緒したく……」

言いかけたが、腹になにか硬い物を突き付けられて、言葉を開けた。

「ご一緒させていただきます。吟遊詩人はロマンを求めてどこまで  
も」

みんなと別かれることになってしまおうと知ったセレンは慌てた。

「わたしも行きます！」

ひとりでいるほうが危険だ。

何度も何度も人質に取られ痛感した。人質に取られ周りに迷惑をかけているが、ひとりでいたらもっと人質に取られてしまう。セレンは戦う術を知らないのだから。

トツシユは真剣な眼差しでセレンを見つめた。

「本当にいいんだな？」

「はい、なるべくご迷惑かけないようにがんばります」

「なら出発だ。リリース殿、アララトをご存じか？　そこに行こうと



思っている」

そう聞いてリリースはタッチパネルを操作し出した。

「その場所なら自動運転で行けるよ」

こうして全員車に乗り込み、新たな目的地を目指し車は走り出した。

## 黄昏の帝国「砂の海に沈みし都（2）」

その都市は半分以上が砂に埋もれていた。

古代魔導都市アララト。

クレーターののように地面が大きくくぼんだ場所、つまり掘り起こされた場所にアララトはある。長い年月の間に砂に埋もれてしまった都市を、帝国が掘り起こしたのだ。それからまた月日が経ち、もう半分以上が砂に埋まってしまったようだ。

セレンはそのアララトを眺めながら感嘆していた。

そう、まるでその都市は

「巻き貝みたいですね」

いくつもの巻き貝のような建物があり、都市の中心にある巨大な巻き貝は塔のように聳え立ち、その高さは六〇メートルはありそうだ。

セレンの横ではワーズワースも瞳を輝かせていた。

「この光景を見ると、あの伝説は本当なのかもしれませんね。この都市はかつて海の上にあったそうです」

辺りは砂漠しかないこの大地に海があったなど、だれが信じるだろうか。

しかし、リリスは知っていた。

「そう、かつてこの都市は海の上に存在した。海上都市アララトと言えば、別名？煌めきの都？と呼ばれるほど美しい場所じゃった。今は見る影も無い廃墟じやがな」

建物の下部分は砂に埋もれており、入り口が塞がれてしまっている。入れそうな場所は窓だが、建物の中まで砂に侵食されていないことを祈るばかりだ。

この場に来て、アレンはまるで魂が抜けたように呆然としていた。心配になったセレンが声をかける。

「大丈夫ですかアレンさん？」

「……………」

「聞こえてますかあ？」

「俺……あの天辺の部分、見たことあるような気がする」

アレンが指差したのは都市の中心にある巻き貝の塔。

ここまでやって来たが、なにか手がかりがあるわけではない。とにかく何かを探すしかない状況で、手始めに五人はその塔に向かうことにした。

クレーターのようにくぼんでいる砂の丘は、一度滑り降りたら登るのが大変そうだ。まるで砂地獄のようである。しかし、この斜面を降りなければ、都市に行くことはできない。

トツシュが皆の顔を見回した。

「降りるのはいいが、登ることはできないな。ロープもなにもない。こんな長いロープを調達するのも一苦労だ」

ワーズワースが手を挙げた。

「はい、ええっと、あの浮いてる車なら大丈夫じゃないでしょうか。浮いているから斜面なんて関係ないような気がしますけど？」

「駄目じゃな」

と否定してリリースは言葉を続ける。

「斜面が急すぎる。宙を浮いて走行していても、完全に引力を無視しておる訳ではないからの」

なにかよい手はないのか？

トツシュはお手上げだった。

「仕方ない、砂に埋まってるなんて予想してなかったからな。出直して準備を整えよう」

その矢先だった。

ふらふらとした足取りでアレンに足を踏み出し、そのまま転げ落ちていったのだ。

「あの馬鹿野郎！」

トツシュはそう叫んでから、三人の顔を見た。

「おまえらはここで待機だ。トランシーバーで連絡する。二人はリス殿に守ってもらえ、じゃあな！」

トツシユも斜面を滑り降りアレンを追った。

すぐにアレンに追いつくことができた。

「おい、勝手な行動するな！」

「……………」

アレンは遠めをして歩き続けた。まるでトツシユの声が届いていないようだ。

「おいっ！」

「……………待ってる……………」

「は？」

「……………楽園……………俺はあの場所で……………」

「頭大丈夫か？」

アレンの足は確実に巻き貝の塔に向かっている。

いったいアレンになにが起きているのと言うのだ？

気配がした。

地中からの気配にトツシユは気づいてアレンの腕を掴んだ。

砂を舞い上げ、地中から飛び出してきた完全防備の兵士たち。防

具の紋章はシユラ帝國の物だった。

いくつもの銃口に狙われている。トツシユは銃を抜くことすらで

きなかった。ここで少しでもおかしい真似をすれば、躰が蜂の巣に

なるだろう。

さらにこの場に現れようとしている巨人。

砂の中から這い出して来た土鬼。

「トツシユ、トツシユ、トツシユ、トツシユ！」

「はいはいはいはい、俺様ならここにいるよ砂怪人。本当にしつこ

いぞおまえ」

「殺してやるーッ！」

土鬼は両手をドリルに変形させトツシユに殴りかかってきた。

戦う術がないトツシユは逃げることにしかできなかった。

右往左往逃げ回るトツシユに向かつて、ドリルアームがロケット弾のように飛んできた。

急いで伏せたトツシユの真上をドリルアームが掠め、兵士の躰を串刺しにした。

混乱する兵士たち。

危機が一転してチャンスになった。

「莫迦鬼が暴れてくれたおかげで助かったな」

トツシユは レッドドラゴン を撃った。

兵士の防弾ヘルメットを砕き飛ばした銃弾は、勢いを失わずに頭蓋骨を貫いた。

兵士たちの躰はプロテクターによって守られている。ヘルメットの目元部分だけが、防弾プラスチックであり、ほかに比べれば弱い。しかし、そこを狙ったのはただのクセだ。

再び レッドドラゴン が咆吼をあげ、今度は胸のプロテクターを撃ち抜いた。

兵士たちは驚き慌てふためく。

たかが銃弾が帝国の最新鋭のプロテクターを貫ける筈がなかった。

レッドドラゴン が普通の銃弾を放つ銃ではなかっただけの話だ。

この銃は？失われし科学技術？によるもので、トツシユが古代遺跡で見つけた物だ。銃弾は拳銃弾ではなく、先の尖ったライフル弾を使用。このライフル弾も特別製で、八〇口径という気の狂れた仕様であり、一度の装填できる球数は四発。現在の技術であれば、もつと銃を大きくしなければ銃が衝撃に耐えられないだろうし、撃つた本人も腕の骨が砕けるだろう。

ただ？失われし科学技術？を使っているらしいとは言え、魔導的な処理が施されているわけではないらしく、金属の製錬に？失われし科学技術？が使われ、ある程度の反動を抑え、銃の破損を防いでいる。そのためにはつきり言ってこれは不良品である。

抑えきれない反動が大きすぎて、常人が撃てば骨を折るか肩が外

れるか、それとも指を持って行かれるか。片手で撃つなどとてもない。

もしかしたら元々は、反動を抑える魔導処理が施されていたのかも知れない。それが長い年月によって消えてしまったとも考えられる。もしくは、人間用ではないのかもしれない。

そんな化け物をトツシュは片手で使いこなしていた。

トツシュの腕は鋼のように鍛えられているが、それだけでは化け物を手なずけることはできない。

秘密は服の下にある。

レッドドラゴン を握る手には、この銃と同じく遺跡で見つけたグラブがはめられ、グラブ、アーム、上半身のプロテクターとが繋がっており、衝撃を吸収すると共に筋力を増強して怪力を生み出す。

四発の銃弾で四人の兵士を仕留めた。

この場で待ち伏せしていた兵士の数が五人。一人は土鬼が仕留めてくれた。これで残るは土鬼のみだ。

しかし、化け物である レッドドラゴン を持ってしても、粒子である砂にはダメージを与えられない。

戦闘がはじまったというのにアレンは惚けている。

頼みの綱はアレンの グングニール だと トツシュは思っている。

「馬鹿野郎！ 銃を撃てアレン！！」

駄目だトツシュの声に反応しない。

こうなったら仕方がない！

アレンの懐から、トツシュは グングニール を奪おうと思いつたとき、巨大な土塊の足が落ちてきた。

トツシュはアレンに激突するように抱きかかえて、大きく前へ跳んだ。

足は狙いを外れ地面を大きく揺らした。

舞い上がる砂煙。

アレンを庇ったままでは戦えない　と判断したトツシユは、アレンをその場に残して走り出した。

「殺せるもんなから殺してみろ！」

挑発しながらアレンから離れるトツシユ。案の定、土鬼はトツシユを追いかけてきた。猪突猛進の相手で助かった。

しかし、危機は遅れてやって来た。

アレンの足下が崩れだした。おそらく先ほどの振動で、何らかの変動が起きたのだ。

砂と共に地面に呑み込まれるアレン。

トツシユはアレンを救うどころではなかった。

「糞ッ、こいつをどうにかしないことには……」

アレンを助けられない。

砂はクツシヨンの役割を果たし、アレンを優しく受け止めた。

地上から落ちた衝撃で、アレンは正気に戻っていた。

「どこだよここ……？」

天井から差し込む光、砂が崩れながら滝のようにまだ落ちてきている。

穴から見える感じだと、どうやら部屋二つの天井を破って落ちてきたらしい。ただ、ここが一階なのか、二階なのか、それとも三階なのか、建物の元の高さがわからなので検討もつかない。

登る術がないので、あの天井の穴からは地上に出られそうもない。

「おーい！」

大声は地下に響いただけ。助けは来ない。

「つたく、みんなどこ行っちゃったんだよ」

周りを見回すと、そこは民家の一室のようだった。

テーブルやソファや何かの機械が置かれている。

アレンは部屋の灯りを探した。

それらしき壁のボタンを押してみたが、なにも起こらない。間違ったボタンを押した可能性もあるが、動力自体が失われているのだ

ろう。

先に進むとしても灯りは必要だ。穴まで登るとしても道具が必要だ。

アレンは部屋を物色しはじめた。  
戸棚などを開けていく。

この時代では見たこともない物も多いが、形は少し違えど今も残っている物も多い。

「懐中電灯みつけ」

それは今の時代の物より小型で、少し見た目も違っていたが、電球の代わりであるうパーツと、その周りの銀色のフィルムなどの形状で判断できた。

角の取れた長方形の本体と、腕に巻くであろうベルトで構成されている。ベルト腕に巻いて、本体のスイッチを押すと、光が腕の向いた方向を照らした。

「もしかしたらレーザーとか出るんじゃないかって、ちょっと期待してたんだけどな」

そういう形に見えなくもない。

光を手に入れ、さっそくアレンは先に進むことにした。

廊下に出て、先に進み、ドアの前に立った。

ドアにはノブはなく、大きなボタンがついていた。

ボタンを押すが反応がない。ここも動力がなければどうにもならないらしい。

「自動化ってこういうとき困るんだよな」

いざというときの手動開閉装置がないか探した。

壁に亀裂を見つけ、そこに小さなふたを見つけた。開けると中には、片手で回すハンドルが入っていた。

アレンはオールを漕ぐようにハンドルを回す。

すると徐々にドアがスライドして開いて、その隙間から砂が流れ込んできた。

「ヤバっ！」



慌てて閉めようとするが砂に押されて閉まらない。

砂はどんどん流れ込んでくる。幸い少しの隙間だったので、川の激流のように流れてくることはなかったが、それでもいつかは部屋の中まで埋まってしまいそうだ。まるで砂時計の中に閉じ込められたようだ。

本当にこの場所がすべて埋まったとしたら、落ちてきた穴を登ることも可能だろう。だが、多くの砂が部屋に流れ込んでくると共に、それが今度は防壁の役割も果たして徐々に流れは遅くなる。そう考えてペースを予想すると、アレンの腹が持ちそうにない。

「腹減った」

すでに空腹状態だ。

ただの空腹だといいが、人間は水をまったく摂取しない状態で一週間前後、水さえあれば一ヶ月以上は生きられると云われている。そのころにはさすがに、砂は天井まで達していそうだ。

「腹減ったなあ。携帯食料じゃ腹の足しにならねえっつーの」

車での走行中、アレンは何度も人の住んでいる場所に立ち寄りうと言ったが、全員に反対されてちよつとばかりの携帯食料で我慢していたのだ。

アレンは元の部屋に戻って穴を見上げた。

本来なら、この程度の高さなどアレンはジャンプで届く。だが、この部屋と同じく今のアレンには動力がなかった。

「腹が減って力が出ねえ」

よろよろよしながらアレンはテーブルやイスを運んだ。それを積み重ねて上の階に登るつもりだった。

瓦礫の塔を完成させて、どうにか上の部屋まではよじ登ることができた。

問題はここから先だった。

次の穴を抜ければ天井なのだが、穴の真下に足場はないため塔を組めないのだ。床の穴ギリギリに塔を設置した場合、それでは天井まで行けたとしても、そこから砂の高さと滑りやすさがあり、手で

掴む場所もなく登れない。

下のフロアから塔を増設しても、バランスが悪くてこれ以上は崩れそうだ。

アレンが為す術もなく穴を眺めていると、逆光を浴びた人の顔が覗いてきた。

「お助けして、あげんしょうか？」

紅を差した唇が艶やかに笑っていた。

## 黄昏の帝国「砂の海に沈みし都（3）」

銃声がここまで響いてきた。

この場で待つように言われていたセレンは居ても立っても居られない。

「今の銃声ですよね？」

顔を見られたワーズワースとリリスは冷静だった。

「銃声なら敵と遭遇したってことだよ。だとするとここも危ないんじゃないかな」

「そうじゃな、他人の心配より自分の心配をしたほうがいいよお嬢ちゃん」

二人とも雑談のような落ち着いた口ぶりだった。

慌てているのはセレンだけ。

「ええっと、そうだ、トランシーバーで連絡します！」

セレンはトランシーバーを使おうとしたが。

「これどうやって使えますか？」

使い方がわからなかった。一昨日トツシユに教えてもらったばかりなのに。

ワーズワースがトランシーバーを優しく奪った。

「僕がやるよ」

周波数などはすでに設定してあるので、ボタンを押しながらしやべるだけだった。

「こちらシスターとゆかいな仲間たちです、どうぞ」

「ザ、ザザザザ……」。

《こっちは取り込み中だ！ あとにしる！！》

トツシユの怒鳴り声はトランシーバーの外に大きく漏れてきた。構わずワーズワースはしゃべる。

「敵と交戦中つばいけど、どのだれとやり合ってるの？」

《帝国だ、帝国に待ち伏せされてた！》

「帝國に追われてるって話は僕聞いてないんですけど。まさか昨日の怪物も帝國の差し金だったりして？」

《そつだ、その昨日の奴と殺り合ってる最中だ！》

「げっ。やっぱりこっちも危ない感じだねえ。こうなったら登ることはあとで考えるところとして、そっちと合流しっちゃったほうがいいんじゃないかな？」

《もう黙ってる！》

「まだ話の途中なんですけどー？」  
返事がない。

最悪、やられた可能性もあるが、きつとシカトしているだけだろ  
う。

ワーズワースは二人と顔を見合わせた。

「どうしますお嬢さん方？」

尋ねられても困るといふ表情をしたセレン。

一方、リリスは遠くを眺めていた。

「ヘリがこちらに向かっておるな」

まだ豆粒くらいだったそれが、だんだんとヘリコプターの全容を  
模っていく。

シユラ帝國の軍事ヘリだ。どうやら戦闘用ではなく、輸送用らしい。とは言っても最低限の装備はついている。

すでにリリスは車に乗り込もうとしていた。

「一先ず逃げるぞ。早う乗れ」

エンジンが掛かった。

立ち尽くしているセレンの腕をワーズワースが引いた。

「行くよセレンちゃん」

「あ、はい！」

二人も車に乗り込み、アクセルが底の抜けるほど踏まれた。

逃げる先は斜面の下　アララトへ！

「お婆ちゃんそっちじゃないよね！？」

ワーズワースが叫んだ。

それを無視して車は斜面を滑り落ちた。  
降りてきたのはいいが、アレンやトツシユの居場所がわからなかった。

セレンはトランシーバーを手に取った。使い方はさつき見た。  
「トツシユさん聞こえますか！ 帝國の支援部隊が来たので、車ごと下に降りて来ちゃいました」

応答はない。

セレンの心配が募る。

「トツシユさん……大丈夫でしょうか？」

《大丈夫に決まってるだろう！》

ボタンを押したままで通信が繋がっていたらしい。

向う側からトツシユの荒い息づかいが聞こえる。まだ交戦中らしい。

《砂野郎、逃げても逃げても追って来やがる。物理攻撃は効かんし、どうしようもならん。おつ、今車が隣の道通りすぎるの見たぞ！》  
「本当ですか！？ 今の道戻ってくださいいリリースさん」

セレンが運転席のリリースに指示を出した。

すぐに車は急激なU字カーブをして、車内がGによって引っ張られる。

「きゃっ」

後部座席のセレンは短く悲鳴を上げて、ワーズワースに抱きついてしまった。

「きゃっ」

また悲鳴をあげてすぐにセレンはワーズワースから離れた。

少し頬を紅くするセレン。

ワーズワースはにっこり笑っていた。そんな顔をされると余計に恥ずかしい。

車の前方に人影が見えてきた。

リリースは助手席まで身を伸ばしてなにかをしようとしている。

驚くワーズワース。

「お婆ちゃんなにしてるですか、ちゃんと運転してください！」  
「なあに、ちゃんと走ってるよ」

リリスは呑気に言いながら、助手席のドアを開けていた。  
車はトツシユの真横を駆け抜けようとしていた。  
まさか!?

外に伸ばされたリリスの手。

「さあ、掴みな」

その手を掴んだトツシユが車に飛び込んだ。  
老婆とは思えない怪力でトツシユが車内に引き上げられる。

「うおっ！」

トツシユは思わず声をあげた。

砂がトツシユの足首に巻き付いた。

土鬼の執念がトツシユの足首を捕らえたのだ。

綱引きの縄のようにトツシユは両方から引つ張られた。

「ぐあつ、躰が千切れる！」

足首に巻き付いている土縄は地面にしっかりと根を下ろしている。  
一方リリスの支えは片手で握っているハンドルのみ。リリスごと外  
に放り出されるのも時間の問題に見えた。

車内が魔気に満ちた。

トツシユの手を握る枯れた手が潤いに満ちていく。

その姿を見たワーズワースは己の目を疑った。

「美しい」

枯れ木のような老婆が美しい華に変化したのだ。

そして、セレンもまたその姿をはじめて見て言葉を失った。

妖女リリス。

次の瞬間、土縄が限界までピンの張られ、急停止させられた車が  
激しく揺れた。

「くっ」

歯を食いしばるトツシユ。肩が抜けたのだ。

その衝撃を受けてもリリスは艶やかに微笑み、ハンドルも破損せ

ずに耐えた。

だが、驚くべきことが起きた。

急停止したのは一瞬で、車ごと振り子のように振られたのだ。

宙を飛ぶ車がさらに宙を飛んだ。

まるでそれはハンマー投げだ。

しかし、車は投げられることなく渦巻き貝の建物に叩きつけられたのだ！

爆発した民家が破片を飛び散らせる！

車は！ 四人は無事なのか！

崩れた民家に沈むように刺さっている車。

そこにトツシユとリリスの姿はない。彼らは未だ土縄に繋がれ宙を振り回されていた。

顔を傷だらけにしたトツシユ。

「今ので何本か骨が逝った……にも関わらず、リリス殿は……」

顔にひとつも傷がない。傷などある筈がないのだ。こんな美しい顔に傷などある筈がない。すべての衝撃が物理法則を無視して、妖女リリスを避けたのだ。

目の前でリリスを見つめてしまったトツシユは、今にも気を失いそうだった。

人間ハンマーはまたも建物に叩きつけられようとしていた。

リリスはトツシユの躰をよじ登った。

密着する男と女の躰。

魔気に当てられたトツシユはここが限界だった。意識が途切れた。リリスは構わず大柄な体躯を昇り、足首に巻き付いた土縄を掴んだ。

土縄が溶ける。

「ぐあああああつ！」

至る所から土鬼の叫びが木霊した。

土縄が途切れると同時に、解放されたトツシユの躰が天空に放り出された。

魔鳥の翼のようにリリスの長い黒髪が靡いた。  
トツシュを胸の前で抱きかかえたリリスは舞い降りてくる。  
そして、羽毛のように地に降り立った。砂一つ舞い上がらない。  
リリスはトツシュを地面に寝かせ、広大な砂地に向かって微笑んだ。

「さあ、どこからでも掛かってお出で……坊や」

マシンガンのように土弾が連射させた。

リリスは避けようとしめない。その必要がないのだ。

土弾はリリスに触れることも敵わず、見えない壁に当たって溶けて消える。

「うおおおつ、おらの攻撃が、なぜ効かねえ！」

「所詮、汝はアーティファクトに過ぎぬと言うことじゃ。一見して砂粒に見えるが、実際はその一つ一つが高性能のナノマシン。厄介と言えば厄介じゃが……」

四方から現れた砂のカーテンがリリスを包み込んだ。

土で固めて窒素させる気だ！

それも触れることができたらの話。

土のカーテンが溶けて流れる。

何事もなかったようにリリスは微笑んでいた。

「ナノマシンが失われるたびに、汝の力は減退していく」

リリスの視線の先で土鬼が人型を模った。以前は五メートルあった身長も、今では一メートルほどしかない。広がる砂の大地は無限に思えても、土鬼の本体は限られているのだ。

「ぶつ殺してやる！ おらは強い、負けねえ！」

「そう……己の能力をもつと匠に使いこなせたら、強くなれたじゃろうな。それでも妾には勝てんが」

土鬼は致命的なミスを犯していた。

妖しく輝くリリスの瞳は？すべての土鬼？を捉えている。

今、土鬼は一箇所に集まっていた 人型として。

「お眠り……そして、決して覚めない悪夢の中で生き続けるがよい」



リリスの躰から墨汁のような色をした何が噴出した。それがなにかはわからない。まるで生き物のように、例えるなら蛸のように、すべての触手を使って土鬼を丸呑みした。

「グギャアアアアアアアッ！！」  
躰が溶かされる絶叫。

創造主は土鬼に感覚の一つとして痛みを与えた。それがなければ、こんなにも苦しまずに済んだものを。

茶色い塊が地面に広がった。

土鬼は滅びたのか？

いや、リリスは悪夢を与えたと言ったのだ。

一粒のナノマシンが風に吹かれて砂と共に舞い上がった。

火鬼は着物の帯を解き、それを穴の下に垂らした。

「ほうれ、これに捕まるでありんす」

「断る！」

アレンは力強く言い放った。

相手は敵だ。どんな企みがあるかわからない。

拒否された火鬼は嫌な顔一つせず、逆に躰を火照らせて艶笑を浮かべた。

「嗚呼っん、つれないおひと」

刹那、帯が生き物ようにしてアレンの胸に巻き付いた。

「やめろっ！」

「もう……放さないよ糞餓鬼！」

口調が急に変わった火鬼は夜叉の表情をして帯を手繰った。

アレンの躰が宙に浮く。

そのまま穴を抜けて空高く引き上げられ、急に帯がほどけた。天高く放り出されたアレン！

どこかで 歯車 の音がしたような気がした。

空中でバランスを整えたアレンが地面に足から激突した。舞い上がる砂煙。

「てめえなにしゃがる！」

地面に片手をついているアレンは火鬼を睨みつけた。

「おほほほほほっ、愉快愉快。まるで小猿の曲芸のようでありんす。さあさあ、もつと遊んでくんままし」

敵を目の前にして火鬼は軽やかに舞い踊った。隙を見せているように見えるが、その舞いに隙はない。この舞いは武芸の一つであり、攻防の型なのだ。

アレンは片手を地に付けたまま動けない。

「腹減ったあ」

このままではろくに戦えない。

火鬼は鉄扇を構えた。

「そちらから来ないのなら、こちらから行くでありんす」

鉄扇が風を切ったと同時に炎が起きた。

炎舞だ。

舞うと同時に炎の帯がアレンに襲い来る。

アレンには避ける体力も残されていなかった。

だが、炎はアレンを掠め飛んでいく。

次々と放たれる炎はすべてアレンを掠めて後方に飛んでいくのだ。

「ほうれ、ほうれ、炎が怖くて一歩も動けないでありんすか？」

「いや……腹が減って動けない」

「おほほほほっ、おつな冗談を。けれど逃げ惑ってくりんせんと、つまらないでありんす」

「無理……腹が減ってて逃げるとか無理。もういいよ、早く殺せよ」

「依頼主から生け捕りにせよと言われてるでありんす」

それは良いことを聞いたとアレンは笑った。

「わかった。なら抵抗しないから早く捕まえるよ。で、捕虜に飯喰わせろ」

「はい？」

「だから早く捕まえてくれって言うてんの」

「なら……死なない程度に痛めつけて捕まえてやるよ！」

狂気を浮かべた火鬼が鉄扇を振るおうとしたとき、その場に帝國のジープが乗り付けた。

「はい、そこまでよ!」

ジープから降りてきたライザはアレンと火鬼の間に割って入った。ライザは愛しい恋人にするように、織手でアレンの頬を撫でた。

「どうしたの坊や、今日は元気がないわね」

「腹減ってたんだよ。なんか喰わしてくれんなら大人しく捕虜になるけど?」

「ならまず銃を渡してくれるかしら?」

アレンは懐から グングニール を素早く抜き、銃口をライザの眉間に突き付けた。

驚きもせず、怯えることもなく、ライザは微笑んでいた。

「どちらが早いかしら?」

ライザもまた、ピナカ をアレンの腹に押し当てていた。

もしアレンのほうが多く早く引き金を引いたとしても、周りにいる火鬼や兵士たちが黙ってはいないだろう。

一矢を報いるつもりなどアレンにはなかった。

「じゃあ、これ飯代ってことで」

アレンは銃を指先で回して、グリップをライザに向けた。

グングニール を受け取ったライザはアレンに背を向けて歩き出した。

「食事はヘリの中でしましょう。アタクシといっしょに」

アレンが兵士に拘束され連行させる。

その姿を見ながら書きは不満そうな顔をしていた。

「せっかくここまで出向いたってのに、嗚呼つまらないつまらない」

その声を聴いたのか、ライザが振り返った。

「アナタの仕事はまだあるわよ。トツシュたちがまだどこかにいるわ」

「それなら土鬼がどうにかしてるでありんす」

このとき、すでに土鬼はリリスにやられたあとだった。まだその

事実を火鬼たちは知らなかった。

## 黄昏の帝国「砂の海に沈みし都（4）」

呆れた顔でライザは目の前のアレンを見つめていた。

「本当によく食べるわね。胃の許容量を完全に超えていると思うのだけれど？」

もともと日数をかける作戦ではなかったため、食料はあまり積んでこなかったが、そのすべてがこの小柄な？少年？に食い尽くされそうだった。

兵士がそつとライザに耳打ちする。

「もう非常食量までなくなりそうなのですが……？」

「いいわ、全部出しちゃいなさいよ。今日中には城へ帰れるように、さつさと仕事を片付けましょう」

そして、ついにアレンはすべての食料を腹に収めた。

「喰った喰った……次は昼寝でもするか」

「させないわよ」

間髪入れずライザは言った。

二人が向かい合って座るテーブルの上が片付けられる。

アレンには常に銃口が向けられている。まるで尋問室だ。

頬杖を突いたライザが身を乗り出してきた。

「では話を聞かせてもらいましょうか？」

「べつに話すことなんてないけど？」

「そちらから話さなくても、質問に答えてくれればいいわ」

「嫌だと言ったら？」

アレンの頭に左右からライフルの銃口が突き付けられた。それがライザからの答えだ。

動じないアレンを見るライザは楽しそうだった。

「銃を離しなさい。この子に脅しは無意味よ」

頭から銃が離されたが、銃口は狙いを放さず指は引き金に掛かったまま。

ライザは椅子に深く腰掛けた。

「まずアナタたちの目的から伺おうかしら」

「なんか俺もよくわかんないんだよね。トツシユに聞けば？」

「彼は捜索中、そのうち見つかるんじゃないかしら。それまでの間は、アタクシとアナタでお話ししましょう」

「ならそつちが話しなよ」

「そつ、なら話そうかしらね」

一息ついてライザは仕切り直し、話をはじめることにした。

「古代都市アララトの発掘調査を帝國が行ったのは、先代の皇帝の時代、アタクシがやってくる前の話よ。調査では数々の？失われし科学技術？が見つかったけれど、多くはすでにその場から持ち去られていたらしく、これと言った発見はなかったらしいわ。それでもずいぶんと帝國の役にはたったみたいだけれど。だからここには何も残っていない筈……なのにどうしてアナタはやって来たのかしらねえ？」

「なにかあるから来たんじゃないの？」

「人事みたいに言うのね。アタクシはアタクシなりに過去の資料を調べてみたのよ、それで見つけたわ スイシユ というオーパーツを」

「知ってるなら聞くなよ」

ライザは微笑んだ。相手に目的を認めさせたのだ。

さらにライザは話を続ける。

「帝國は結局 スイシユ を見つけられなかったわ。もしかしたらここにはないのかもしれないわね。アタクシはこの手で スイシユ を研究してみたいわ。手がかりがあるなら教えて頂戴。教えてくれなくても良いわ、アナタたちが見つけて来てくれれば」

「俺らが先に見つけてあんたに渡すと思ってるの？」

「それは力尽くで奪えばいいわ」

「言つねえ」

たとえライザは科学者としての興味であっても、帝國の手に渡る

ことには変わらない。帝國は水を生み出す装置をなにに使うだろうか？

ライザは席を立った。

「食後の散歩なんてどうかしら？」

「めんどくさい」

「そう言わないで、少し付き合ってくれないかしら？」

「はいはい、わかりました」

アレンは銃で小突かれ、仕方なく席を立った。

数人の兵士を引き連れてヘリの外に出る。そこからジープに乗り変えて都市の中心　巻き貝の塔へ。

色褪せた塔の内部。

外観と同様、装飾の数々は海を思わせ、かつての美しさの片鱗が感じられる。

そこからさらに奥へと入っていくと、一変して金属的な作りになっていく。

「エレベーターは動かないから非常階段から降りましょう」

先頭を切って歩くエルザが非常階段を降りはじめた。

長い長い螺旋階段だ。

途中にフロアへ出る扉などはなく、渦巻きがずっと底まで続いている。

五分ほどかけて階段を下り、やって来た部屋はコンピュータールームだった。

巨大なスクリーンや機器類は部品が外され、分解されて持ち去られてしまったのだろう。動力があったとしても、もうここは使い物にはならない。

部屋の中心でライザが立ち止まった。

「ここから先がわからないのよね。調査によると、この下まで建物が続いているのだけれど、入り口がないのよ。構造上、あるとしたらこの部屋なのだけれど、それらしい物はない。どう、アナタなら探し出せるかしら？」

顔を向けられたアレン。

「なんで俺なんだよ？」

「アナタならもしかしてって思っただけよ」

「俺にできるわけねえじゃん。こんなとこ来たこともねえし」

「それならそれでもいいわ。なにか手がかりがないか、アナタも探してくれないかしら？」

アレンはその場を一步も動かない。なにかを探す動作もしない。決して銃を突き付けられているからではない。動けない理由があるのだ。

それをライザは言い当てた。

「嘘が下手なようね。アナタは入り口を探すことができない。だって探すフリになってしまっただものね」

「はあ？ なに言ってるのアンタ？」

「惚けるのも下手ね。さあ、入り口を開けて頂戴。アナタは知っているはずよ」

「あんたの言ってること意味わかんねえよ」

アレンはライザから目を背けた。

この遺跡に来たときからアレンの様子は変だった。

俺……あの天辺の部分、見たことあるような気がする。

それはいつ、どのような状況で見た光景だったのか？

本、写真、映像、幻、夢の中……それとも実際にその目で見た光景だったのか。

ライザはなにを知っている？

「ノアの方舟」

と、ライザは囁いた。

アレンは顔色一つ変えなかった。

さらにライザは付け加えた。

「ノアの方舟 と呼ばれる施設がこの地下には存在している。なにか思い出したかしら？」

「いや、ぜんぜん」



「あらん、最後までアタクシに言わせる気かしら。人払いをして置こうかしらね、さっ、アナタたちこの部屋から出てってくれるかしら」

ライザを兵士たちを下がらせた。

二人つきりなり、アレンが逃げるのも今がチャンスかもしれない。

ピナカ の銃口はアレンを狙っている。

一発目さえ防げれば、あとはアレンの駆動力で乗り切れるかもしれない。

しかし、アレンは何も事を起こさなかった。

「最後までって言ってたけどさ、なに言うつもりなんだよ？」

「それはアナタ次第ね」

「俺次第って言われても、なんもしんねえし」

「ノアの方舟 は言わば隔離施設だった。すべては秘密裏に、アラトの研究者たちもほとんど知らなかったわ。アタクシもその存在に気づけなかった、今もその真の目的がわからないわ。ただ一つはつきりしていることは……そう、ノアの方舟 はアナタが過ごした施設ってこと」

「ふん」

鼻を鳴らしたただけのアレン。人を喰った態度だ。

ライザは黙ったままアレンを見つめた。相手が口を開くまで待つつもりだ。

沈黙の中、時間が過ぎ去っていく。

こういう間にアレンは弱かった。

「話すよ、話せばいいんだろ。実はさ、記憶が曖昧なんだよ。ホント断片的にしかこのこと思い出せなくてさ、それもさっきやっと思っ出したって感じで。入り口なら知ってるよ、たぶんだけどな」

「記憶が……そう……とにかく早く開けてもらおうじゃない。アナタの楽園への入り口を」

「はいはい」

アレンは迷うことなく壁にある隠しパネルを見つけ、そこに両手

を押し当てた。

《認証が完了しました》

床からエレベーターがせり上がってきた。動力が生きていたのだ。エレベーターに乗り込んだ二人。

問題なく稼働したエレベーターは、扉が閉まると同時に自動的に下へと向かった。

ほどなくして止まり、扉が開かれた。

なぜライザは楽園と称したのか、その答えは広がる光景にあった。地下施設にも関わらず、ここは人工太陽に照らされ、大地が広がり草木が育っている。ここにあるのは植物だけではなく。動物の群れが遠くに見える。あれは羊だろうか、砂漠には珍しい長い毛に覆われた動物だ。

ほかにも多くの動物たちと、鳥たち、昆虫や、流れる川には魚たちもいた。

地下とは思えない広大な施設。

どれだけ長い年月、幾星霜の年月をこの動植物たちはここで過ごしてきたのだろうか。

ライザはこの世界を見回しながら言った。

「どう、ふるさとに帰ってきた気分は？」

「さあね、あんま覚えてねえし」

「そう、じゃあ感慨にふける必要はないわね。さっそく スイッシュを探しましょうか？」

「それはいいんだけどさ……一段落ついたらから聞くけど」

アレンの瞳がライザを射貫いた。

そして、こう言ったのだ。

「あんただれ？」

数時間前のこと。

玉座に座るルオの前に、ある女が姿を現した。

「どうしたライザ？」

「ライオンヘア？は毛羽立って乱れ、後頭部を押さえて苦しそうな顔をしているライザ。」

「何者かに襲われて、今までバスルームに監禁されていたのよ。この城の内部に敵が侵入していることは間違いないわ」

「ほう、客人とは珍しい。ほかに情報はあるかい？」

「鬼兵团との連絡がつかないわ。それと？アタクシ？がある場所に、兵を引き連れて向かったらしいわ」

「君が？」

「ええ、ここにいるのに」

「なかなか面白い話だ。どこに向かったかわかるかい？」

「それはすでに調べがついているのだけれど、問題は派遣された部隊とも連絡がつかないことだわ」

「ますます面白い」

この状況を楽しむルオ。

笑いながらルオは頬杖をついた。

「このまたとない面白い状況を愉しむには、ここに残るべきか、その場所とやらに行ってみるか」

「敵がまだ城の内部にいる可能性は十分あるわ。貴方には城を守る義務があるのではなくて？」

「それがつまらない、じつにつまらない。朕は城の中で退屈なのだ」

「わかりましたわ。ルオ様不在の指揮はアタクシが執りましょう」

「しかし、君の方が偽物だったらどうする？」

それこそが敵の作戦かもしれないと考えるのは当然。ルオを厄介払いできれば、城を落とすのも容易くなるだろう。ルオはシユラ帝國の絶対者なのだから。

ライザは頷いた。

「その可能性は十分に考慮するべきだわ。少なくともアタクシが二人は存在している以上、偽者が必ずいるということなのだから」

「君が本物だと証明できるかい？」

「それは難しいわ。偽者がどの程度アタクシを再現しているかわか

らないもの。DNA検査をするにしても、時間が掛かるわ」

「つまり君も信用できないわけだ」

「そういうことになりますわね」

あっさりと認めた。

ここにいるライザは本物が偽物か？

一人の偽者がいるとしてら、二人目がいる可能性もある。

ライザの偽者がいるのなら、ほかの者の偽者もいる可能性がある。疑えば切りがなくなる。

ルオが玉座から立ち上がった。

「ならば二人でその場所に行くとするか」

「それでは侵入している敵に、どうぞ自由にしてください、と言っているようなものですわ」

「簡単に墜ちる城など敵にくれてやるよ」

「うふふふっ、貴方らしいお言葉ですわ」

こうして二人を乗せた帝国の誇る空飛ぶ要塞　巨大飛空艇　キ  
ユクロプス　がアスラ城を飛び立った。

大事故から生還した二人は、呆然としながら壁にもたれて座っていた。

天地がひっくり返り、大地震が起きたような気がした。そのあとの記憶はあまり覚えていない。セレンはまだ少し痛むおでこを押さえた。

「死ぬかと思いました。もしかしたら死んでいるのかもしれない」

「だったら僕も死んでることになっちゃうけど」

横に座るワーズワースは側頭部を押さえていた。

燦々と照り輝く日差しを避け、日陰で休んでどれくらいが経っただろうか？

気を失っているトッシュはまだ目を覚まさない。

リリスは死んだように目を閉じて、壁にもたれて座っている。

唾を飲み込んだワーズワースが恐る恐るリリスの顔を覗き込む。

「お婆ちゃん死んでませんよねー？」

「おぬしらが死んでもわしは死なんよ」

「わっ、生きてたのか!？」

驚いたワーズワースは再びぐったりして壁にもたれた。

少し時間が流れ、セレンが口を開く。

「あのお、やつぱりアレンさんを探しに行ったほうが？」

すぐにリリスが反論する。

「こやつをどうする？」

トツシュのことだ。

じつはさつきも似たような話をしたばかりだ。

場所を移動するなら、この大柄で重そうなトツシュを誰が運ぶか？

小柄な少女のセレンには無理だろう。

ワーズワースも細身で筋力も体力もあるとは思えない。

二人の前で怪力を見せつけたリリスだが、このお婆さんに運んでくれと、セレンもワーズワースもなんとなく言い出しづらかった。

何かが起こらない限り、この場でこうして過ごしそうだ。

「わたしのどが渴いてしまったんですが……」

申し訳なさそうにセレンが言った。

「あ、僕はトイレに行きたくなっちゃいました」

立ち上がったワーズワースは小走りで姿を消した。

リリスはセレンに顔を向けた。

「車から取ってくればあるよ」

「……さつき出すべきでしたね。あの、いっしょに……」

「こやつはどうする？」

「……そうですね、我慢します」

乾燥した暑さは口から水分を奪う。

セレンの唇はもうガサガサだ。

そんな唇にそっと指で触れたセレンは、急に沸騰しそうなほど顔を赤くした。

指で触れると、あのときの事故が思い出される。

車が大回転しながら建物に突っ込んだとき、セレンは思わずワーズワースに抱きついてしまい、その拍子に……。

顔を赤くしたセレンを妖しく微笑みながらリリスが見つめた。

「暑さにやられたのかい？」

「いえっ、べつに！」

なぜリリスは笑っているのだろうか？

たぶん見られていないはずなのに……。

セレンはさらに顔を赤くした。

あの出来事は自分の胸にしまって置こうとセレンは誓った。

けれど、ワーズワースもそうしてくれるだろうか。

心配のせいかわからないが、セレンは胸が苦しくなった。

悶々としているセレンに構わず、リリスはあの時の遠い空を眺めていた。

「またお客さんじゃな。今度のはおつきいよ」

ハツとしてセレンも我に返り、上空に目をやった。

瞳を丸くしたセレン。

「あれは……」

雲一つない広大な空を我が物顔で飛行する キュクロプス がい

た。  
この状況で、リリスはじつに愉しそうに笑っていた。

「あれが現れたということは、皇帝自らお出ましと言っことじゃろ  
うな」

「そんな、なんで……」

そして、このタイミングでトツシユは目覚めようとしていた。

「……あゝっ……糞熱い……」

目覚めたトツシユの瞳に真っ先に映った物体。

「キュクロプス かッ!!」

眠気を引きずることなくトツシユは飛び起きた。

さらにトツシユは辺りを見回して、ほかの自体にも気づいた。

「アレンはどうした!? あの若造もいないぞ?」

まずセレンが答える。

「アレンさんはわかりません」

次にリリスが答える。

「若造なら便所に行ったよ。帰ってこない様子を見ると、迷ったか大便でもしとるんじゃない？」

キユクロプスの登場にトツシユは頭を抱えた。

「とにかく便所に行った大便野郎を待つて、そのあとアレンを探しに行く。もしかしたらあの場所にまだいるかもしれない」

と、そのとき、この場に人が近寄ってきた気配がした。

セレンが振り返った。

「お帰りなさ……ッ!？」

現れたのは紅く艶やかな花魁衣装の女だった。

黄昏の帝国「渦中（1）」

アレンの目の前でライザの形が変わっていく。  
漆黒の不気味な仮面。

「だれだよあんた？」

「隠形鬼……ト名乗ッテ置コウ」  
姿を現したのは隠形鬼だった。

ライザとは似ても似つかない姿。変装というレベルではなかった。  
声、姿、思考までもライザをコピーしていた。

「オンギヨウ？キ？つてことは鬼兵团かよ？」

「ソウイウ事ニナル」

「俺をどうするつもり？」

「未ダ解ラナイ。くらいあんとな依頼デハ、生ケ捕リニシロト命ジ  
ラレテイル」

命令があるにも関わらず、まだ解らないとはどういうことだ？

「少し御喋リガ過ギタカラ、偽者ダト気ヅイテイタノカ？」

「いんや、はじめから気づいてたけど？」

「流石ダナあれん」

？流石だな？という言葉は、比較対象があつての言葉だ。アレン  
の情報は収集済みということだろうか。

「ところでさ、あんたここのことどうやって知ったわけ？」

「フフフッ」

不気味な笑いだった。仮面で何を考えているのか、表情からでは  
わからない。

「なんだよ、なにがおかしいんだよ」

「其レヲ答エル義務ハ無イ。今ハ すいしゅ ヲ探ストシヨウ」

「俺といっしょに探すがよ？」

「此処デハ御前ガ頼リダ」

「頼られてもなあ。記憶が曖昧だし、たぶんそういうの知らずに暮



らしてたし」

少しずつ蘇ってくる断片的な記憶。

ここでの生活は穏やかなものだった。

気候は常に安定しており、食べる物にも困らなかった。

アレンがまず向かったのは小屋だった。この家でアレンは暮らしていたのだが、今に思えば不思議な家だ。

《お帰りなさいアレン》

中に入ると声がした。

外観も内装も木や石など自然の素材で造られているが、置かれている物の中には？失われし科学技術？の品々も多い。台所などはなく、冷蔵庫などもない。食べ物は時間になると箱の中に置いてあった。

「なんで俺こんなところにいたんだろうな？」

その問に答える者はいなかった。

謎の包まれた生活。

なんらかの研究目的だったのだろうか？

それとも保護されていたのだろうか？

アレンは必死になって思い出そうとした。

「疑問も抱かず、ただ生きていただけだった。同じような日々の繰り返し……それが終わったのは……思いだせねえ」

アレンは頭を抱えて蹲ってしまった。

「第五次世界大戦が起キタノガ、丁度一〇〇〇年前ノ話ダ。其ノ戦イニヨツテ此ノ都市モ滅ビノ道ヲ歩ンダ。アノ戦イデ滅ビタノハ此ノ都市ダケデハナイ。世界モ文明モ一度ハ滅ビタ。砂漠化ガ急激ニ始マツタノハ、アノ戦争ノセイダト云ウノガ通説ダナ、フフフツツ」

「詳しいな、あんた」

「砂漠化ト言エバ、其ノ要因ヲ魔導炉ノセイダト騒ギ立テテイル奴ラモ居ルナ。特ニジードト名乗ル過激組織ハ、帝國ノ魔導炉ヲ破壊シタソウダ。ソノ報イヲ受ケテ、我ラガ帝國二代ワツテ制裁ヲ下シタ訳ダガ」

「俺を挑発してんの？」

「否、世間話ダ」

「惨い殺され方だったけど、俺が敵討ちをする話じゃない。挑発しても意味ないぜ」

お互いの間にまだ殺気はない。隙さえあれば仕掛けるという雰囲気もなかった。

家の中を探してみたが、スイシュらしい物はなく、そのヒントも見つからなかった。

「あんた　スイシュ　がありそんな場所知らないの？」

「知らナイナ」

「このこと知ってたのに？」

「存在ヲ知ツテイタト言ウ程度ノ記憶シカナイ。　すいしゅ　二関シテ言エバ、其レガ装置ノ核デアルトシカ知シラナイ」

水を生み出す装置。その核となる　スイシュ　。宝玉と云うのだから、その形をしているはずだ。

この地下世界には川が流れていた。

もしかしたらと思ひ、アレンは川の上流に向かった。

川の上流には湖があった。ここが水源らしい。

「この底にあるとかないよな？」

「水底カラ高度ノ魔力ヲ感ジル」

「マジかよ、俺泳げたっけか……昔は泳げた気がするなあ」と、言いながらアレンは熱い眼差しを隠形鬼に贈った。

「私ハ全ク泳ゲナイ」

「ちっ、俺が行くしかないのかよ」

頭を掻いたアレンは観念して服を脱ぎはじめた。

隠形鬼がすぐそこにいることなど気にせず、全裸になるアレンだったが、じつと見られているような視線には気になった。

「俺の躰ジロジロ見て、ロリコンかよ？」

「私ハろりこんデハ無イ」

隠形鬼の口から？ロリコン？という言葉が出ると不思議な感じだ。

「じゃ、こつちが気になるわけ？」

アレンは金属でできた右胸を叩いた。

「両方気二ナル」

「やっぱロリコンなのかよ！」

「否、人間ノ躰ト、機械ノ躰ノ両方ガ融合シテイル姿ガ、興味深いト言ウ事ダ。一度詳シク調べテ診タイ」

「やだよ、ロリコンなんか指一本でも触れられたくない」

「私ハろりこんデハ無イ」

ロリコン論争はおいといて、アレンは準備体操をはじめた。

枯れた大地で暮らしていると、泳ぐ機会なんてあまり訪れない。

水泳は金持ちの道楽だ。

準備体操を終えたアレンは、頭から湖に飛び込んだ。

透明度の高い水中。水深もあまりなく、地の底まで見る事ができた。

アレンの泳ぎはというと、はじめは少しぎこちなかったが、だんだんと調子を掴んできたようだ。

水底に輝きが見えた。

一度アレンは水面に向かって泳ぎだした。

水飛沫を上げて水面から顔を出したアレン。

「ぷはーっ！」

潜っていた時間は三分ほど。まだ余裕があった。

大きく息を吸いこんで再び湖に潜る。

湖の中心に向かって泳ぐ。

台座の上でそれは淡く輝いていた。

透き通ったブルーの輝き。

宝玉と云うが、その輝きは宝石の物ではない。

もう手を伸ばせば取れてしまいそうだ。

しかし、アレンは躊躇った。

これを取ってしまったっていいものなのだろうか？

水を生み出す装置の核となる物。

湖に蓄えられた水。

アレンはその宝玉を手を取った。

そしてすぐに水面へ上がり、岸に向かって泳ぎだした。

陸に上がったアレンは宝玉を確かめた。水が出ているような感じはしない。台座から放したからだという可能性もあるが。

「本当にこれが スイシュ なのか？」

「確認は無イガ、其ノ可能性ハ高イト思ワレル」

「だったらこれで俺の役割も終わったし、これ奪う気？」

「 スイシュ ヲ手ニ入レル依頼ハ受ケテイナイ」

「でも俺のことは生け捕りなんだろ？」

「今ハ其ノツモリモ無イ」

「は？」

隠形鬼が何を企んでいるのかわからなかった。

スイシュ も奪わず、アレンも捕まえないとなると、何もせず  
にアレンを行かせるということなのか？

「依頼ハ受ケテイルガ、何時何処デトハ決メラレテイナイ」

「なんだよその屁理屈」

アレンは呆れた。

「其レヲ少シ貸シテクレナイカ？」

「やっぱ奪う気じゃんか」

「少シ調べルダケダ」

相手は敵だ。しかも何か考えているのかわからない。

迷ったが、アレンは宝玉を手渡した。

受け取った隠形鬼は一秒とせず返した。

「えっ、もういいの？」

「本物ダ」

「はっ？」

「其レガ すいしゅ デ間違イ無イ」

「今のでわかったわけ？ そんなの信じられるかよあゝ」

「信ジル信ジナイハ御前ノ自由ダ」

違う物だという証拠もない。とりあえずはこれを持ち帰るしかないだろう。

アレンは スイシュ を地面に置いて着替えはじめた。置かれている スイシュ を奪うような気配は見せなかった。本当に隠形鬼はなにもしないつもりなのだろうか？

濡れたまま着替えたので、服は少し湿ってしまった。それも外に出ればすぐに乾くだろう。この地下世界を出れば、世界は砂漠で覆われているのだから。

「私八行コウ。又何時カ会ウコトニナルダロウ」

隠形鬼がアレンの目の前で霞み消えた。まさにそれは消失だった。そして、地面には グングニール が残されていた。

「……変な奴」

ボソツとアレンは呟いた。

セレンの前に現れたのは火鬼だった。

「探した探した、もうわちきはくたびれて、戦う気力も失せたでありんす」

トツシユは レッドドラゴン に手を掛けた。

「だったら帰ってくれないか、べっぴんさんよオ」

「わちきもそうしたいのは山々でありんすが、首の一つも持ち帰らないと、依頼主に面目が立たないでありんす」

「だったら自分の首でも持ち帰えんな！」

トツシユと共に レッドドラゴン が吼えた！

この至近距離で火鬼は鉄扇により弾を弾き返した。

「おやおや、血の気の多いお兄さんだこと」

余裕の笑みを浮かべた火鬼。

トツシユは驚きのあまり、すっかり次の行動を忘れた。

弾を受けたこともさることながら、鉄扇が弾を受けても破損しないことも驚きだった。

鉄扇と言っても、それは武器の総称であり、実際に鉄できてい

るとは限らない。

トツシユは振り返ってリリスを見た。

「リリス殿、少しばかり手を貸してはいただけないか？」

「断るよ。わしは性根の腐った女だろうと、どんな女だろうと、女として生きてる以上は其奴に手を出さん主義でな」

これを聞いて火鬼は狂気に侵された笑みを浮かべた。

「わちきとは真逆の考えを御持ちのようで」

刹那、鉄扇から炎が放たれた。

狙われたのは セレン！

「きゃーっ！」

セレンの叫びは炎に包まれることはなかった。

炎はセレンの前に立った妖女リリスの前で消滅したのだ。

「妾は女に手は出さぬと言ったが、守らぬとは言つておらぬ」

妖女と化したリリスを見てしまった火鬼は息を呑んだ。

先ほどまではたしかに老婆だったはずだ。混乱する火鬼は眼を剥いたまま口をわなわなと振るわせた。

「許せない、許せない、許せない、こんな美しい女が存在しているなんて許せない、キイイーツ！」

奇声をあげた火鬼は巨大な炎を撃ち放った。

「炎は美しい。じゃが、汝の心は醜いのお」

またも炎はリリスの目の前で消滅した。

火鬼は構わず炎を撃ちまくった。

嗚呼、虚しいだけだ。

決してリリスは傷つかない。

火鬼の中で何かが完全に切れた。

「ぶっ殺してやる糞ニアツ！」

野太い男の声が木霊した。

炎を宿した鉄扇がリリスの首を狙う。

ついにリリスが動いた。

敵と同じく炎を宿す。

刹那、リリスは炎を宿した手で火鬼の顔半分を驚掴みにした。

「ギャアアアアッ!!」

耳を塞ぎたくなる絶叫。

肉の焼ける臭い。

火鬼は顔面を手で覆いながら後ろによるめいた。

「顔が……わちきの顔が……アアアッ!」

地面に膝を付いた火鬼は戦意を喪失させた。周りすら見えていない。精神的な衝撃に耐えかね、喚くことしかできなかった。

リリスはすでに妖婆に戻っている。

「女のままであれば手は出さぬつもりじゃったが……」

呟いたリリスを中心に強風が吹き荒れ、瞬く間にまたも妖女の姿に変貌した。

トツシュもそれを肌が痺れるほどの感じていた。

「だいぶ下がってる」

トツシュはセレンを遠くに行かせた。

急いで逃げたセレンは物陰から二人を見守った。

そして、現れる黒い影。

そいつはトツシュの影から這い出してきたのだ。

驚きながらもトツシュは影に向かって銃弾を喰らわせた。

まさかの出来事にトツシュは眼を剥き、激しい激痛でその場に転倒した。

撃たれたのはトツシュだった。

刹那にして影と自分の場所が入れ替わり、自らで自らの腹を撃ち抜いてしまったのだ。

隠形鬼。

目にも留まらぬ早さで、リリスは隠形鬼の胸に掌底突きを喰らわせ吹っ飛ばした。

次の瞬間には、リリスはトツシュの傷口を見えない糸で縫合し、さらに気による治療を施していた。

トツシュの傷は深い。肉をそのまま驚掴みにされ、抉られたよう

な穴が開いていたが、どうにか縫合と氣によって出血は抑えている。それでもまだ瀕死の重傷だ。

まだトツシユから手を離せないが、敵はすぐ目の前にいる。隠形鬼が静かに近付いてくる。

「久シブリダナ……りりす」

「久しぶり……じゃと？」

リリスは眉をひそめ記憶を辿った。

漆黒の不気味な仮面の主。

その下に存在している顔は？

「林檎ヲ与エタノハ誰ダ？」

「だ、だれ……じゃ……いったい？」

妖女リリスともあるう者が言葉を詰まらせた。見開かれた瞳に浮かぶ驚愕。

「御前ハモウ解ツテイル筈ダ。シカシ、其レハ答エノ半分デシカナ  
イ」

「誰であろうと構わぬ、世界の脅威は滅するのみ！」

リリスはトツシユから手を放し攻撃を仕掛けた。

しかし、まさかリリスが後ろを取られるとは！？

後ろを取られたただけではない。隠形鬼は刹那うちにリリスを後ろから抱きしめていたのだ。

「答エヲ知リタイカ？」

「おのれえッ！」

リリスは妖気を宿した手で隠形鬼の仮面を鷲掴みにしようとした。

その仮面は一瞬のうちに顔になっていた。

それを見てしまったリリスは攻撃を止めざるを得なかった。

「莫迦な……まやかしめ！」

「そう、たしかにこの顔はまやかしよ」

隠形鬼に声は玲瓏たる女の声になっていた。

すべてを見守っていたセレンの位置からでは、隠形鬼の顔は見ることはできなかった。



セレンが見たものは、隠形鬼の胸の中でリリスが一瞬にして消えたという事実。

「あつ……き、消えた!？」

もうリリスはいない。

残されたセレンはどうすることもできない。トツシユは瀕死のまま。

すでに漆黒の仮面に戻っていた隠形鬼が、セレンのほうを向いた。「生ケ捕リガ命令ダ。無駄ナ抵抗ハスルナ」

逃げるという抵抗すら今のセレンにはできなかった。足が震えて立っているのもやったのだ。

隠形鬼はトツシユの横に膝をついて、その傷口に手を添えて何をしはじめた。

穿たれていた傷が見る見るうちに塞がっていく。肉が増殖しながら蠢き、血の痕だけを残して傷を完全に塞いだのだ。もう血を拭き取ればどこに傷があったのかわからない。

「シバシ待テ、客人ガ来ルヨウダ」

上空を飛んでやって来る一台のヘリコプター。

それはこの場にゆっくりと降りてきた。

地面に着陸したヘリから降りてきたのはライザだった。

そして、続いて威風堂々と姿を見せた皇帝ルオ。

隠形鬼は膝をついて頭「コウベ」を垂れた。

高い位置からライザは隠形鬼を見下した。

「アタクシの偽者がいると聞いて来てみたら、鬼兵団の二人がいた。どういうことか説明してくださいさる?」

「サテ、何ノ事力?」

「惚けないで、なにを企んでいるの?」

「此ノ通り、我々ハ依頼ヲ果タシテイタマデ御座イマス」

気を失っているトツシユと物陰でこちらを見ているセレン。火鬼は蹲ったまま震えている。

ライザは一通り見回した。

「老婆と坊やがないみたいだけれど？」

「サテ、りりす八何処ニイルヤラ。あれんナラバ、未ダ此ノ遺跡ノ何処カニ居ル筈デ御座イマス」

話を聞いていたルオは笑っていた。

「君の偽者疑惑は晴れないようだ。まあよい、あの小僧との決着はまだついていなかったね。まだ残っているのなら、朕が直々に剣を交えよう。鬼兵団はこのまま仕事を続けるといいよ」

「ルオ様！」

ライザは口を挟んだ。

さらにライザが続ける。

「この者たちを信用するなんて、どうか考えを改めてちょうだい！」

「君だつて本物か偽物かわからないんだ。ここは朕が指揮を執らせてもらおうよ」

帝國を走る不和。

自分たちがかく乱されていることに怒りを覚え、ライザは唇を強く噛みしめた。

## 黄昏の帝國「渦中（2）」

アレンは キュクロプス に侵入していた。

前回の侵入では、サーチライトに見つかってしまい、レーザーの一斉放射に見舞われたが、今回は無事に甲板まで辿り着いた。

連絡手段を持っていなかったアレンは、トツシユたちと合流することもできず、次を見越してここに侵入した。

スイシュ を手に入れ、次の目的は帝國のどこかにある ヴォータン だ。この飛空艇に身を潜めていれば、帝國に辿り着くことができるだろう。もっと強硬な手段を取るなら、この飛空艇を奪う選択肢もある。

「腹減ったなあ」

その選択肢をアレンは選んだ。

これだけ巨大な飛空艇なら、大きな料理室がある筈だ。それに合わせて食料庫にも大量の食料が積まれているだろう。

アレンは辺りの匂いを嗅いだ。

「ここじゃわかんねえな。中に入ればわかるか」

艦内への入り口はすべて兵士によって守られている。甲板にも見張りが巡回に来る。アレンは急いで移動した。

そして、動いた途端に機会の眼によってサーチされたのだ。鳴り響く警報。

「ヤバッ」

もう食料どころではない。

甲板に兵士たちが集まってくる。

どこかで 歯車 の音がしたような気がした。

天高くジャンプしたアレンは大砲の先に飛び乗った。

超巨大飛空艇の大砲はまるで橋のようだ。

アレンは大砲の上を駆けた。

さらにそこから大ジャンプを見せた。

船体から上に突き出た位置にある司令室まで飛び、そこにあった巨大な窓に強烈な拳を喰らわせた。

「イツ！」

歯を食いしばったアレン。

窓は対砲弾パネルだったため、アレンの一撃でもビクともしなかった。

アレンは拳を放った瞬間、中にいる人物たちと目が合っていた。司令室にいたのはライザとルオだった。

ルオはアレンと目が合った瞬間、この上ない笑みを返してきたのだ。

窓への一撃が失敗したアレンは、何度も躰を打ち付けながら船体を転がり落ちた。

アレンの躰は船体から突き出た床に打ち付けられ止まった。それは巨大なエンジン部分だった。

キュクロプス には巨大な羽はない。エアバイクやリリスの車のように、重力に逆らって浮かぶことができるからだ。そのため、エンジンは飛行機のような、回転しながら空気を吸い込み吐き出す物ではない。代わりに鯨類の胸びれのような物がついており、それがエンジンの役割を果たしている。

アレンは再び甲板に向かった。

群がる兵士たちに向けて、グングニール を放つ。

稲妻は容赦なく兵士たちを一網打尽する。

甲板を疾走するアレン。こうなれば強行突破だ！

艦内への入り口は開いている。そこから兵士たちが次々と溢れてくる。

再び放たれる グングニール の稲妻。

？雷獣？の通り名は伊達ではない。遣りたい放題だ。

しかし、敵は次から次へと湧いてくる。

数の前にアレンは追い詰められた。

アレンを取り囲んだ兵士たち。銃口は三六〇度からアレンを狙っ

ている。

誰も動かずに時間が過ぎる。

アレンは視線だけを動かし活路を見いだそうとした。

まっすぐ強行突破をすれば良い的になってしまう。上へジャンプすれば、方向転換がでさず的にになる。蛇行しながら駆ければ、それだけ移動速度が落ちて弾丸は躲しづらくなる。

浴びせられるであろう銃弾が多すぎて、回避確立が格段に落ちる。アレンはゆっくり相手を刺激しないように動き、膝を曲げてグングニールを床に置いた。

「俺の負け。抵抗しないから撃つなよ」

兵士たちが輪を縮めてくる。

その輪が急に左右に開け、艦内への出入り口まで道をつくった。

それはアレンの出口ではない。皇帝ルオの道だった。

「久しいなアレン。前は邪魔の入った決着を、ここでつけようじゃないか」

「俺もあんたとはきっちりケリをつけたかったんだ」

威勢ではアレンは負けていない。

しかし、前回の一騎打ちでは、敗北寸前までアレンは追い詰められている。

黒の剣にグングニールは通用せず、右腕までも墮とされた。

アレンに勝ち目はあるのか？

黒の剣が宙に浮かびながら、ルオの周りを薙いだ。人払いだ。

「手出しは無用。これはシュラ帝国の誇りを賭けた一対一の決闘である！」

「なら俺はこれでも賭けようかな」

アレンは懐からスイシュを取り出して掲げた。

その宝玉がなんであるか誰もわからないようだった。

ライザがハツとした。

「まさかスイシュ！？」

アレンが笑う。

「そーゆーこと」

そうと聞いてルオはすべてを理解したようだ。

「ほう、あれが スイシユ か。我が帝國を滅ぼすという魔導具」  
想像していなかった言葉だった。それにアレンは首を傾げた。

「あんたの帝國を滅ぼす？」

「知らぬのか」

「これって水を生み出すためのオーパーツだろ？」

それを聞いたライザは腹を抱えて笑った。

「あはははっ、可愛い坊や。まあいいわ、とにかくそれはこちらに渡してもらいましょう」

「やだ」

アレンは短く断った。

スイシユ とは水を生み出す装置の核ではなかったのか？

そうであるという証拠はなかった。情報を鵜呑みにして、手に入れたに過ぎない。

急にライザの顔つきが変わった。そして、近くにいた兵士に耳打ちをして、その兵士は急いでどこかに向かった。

急を要する自体が起きた とするならば、スイシユ と関係のあることだろうか？

さらに声を潜めてライザはルオに耳打ちした。

「スイシユ がここにあるということは、ヴォータン も狙われているはずよ。一刻も早く スイシユ を帝國の手に」

「賭には勝つ。下がって見ているといいよ」

ルオと共に 黒の剣 が前へ出る。

戦いがはじまる。

アレンは グングニール を懐にしまい両手を開けた。

「そつちから掛かって来いよ」

「言われずとも切り刻んでくれる！」

黒の剣 の初手は薙ぎだった。

巨大な大剣はリーチも長く破壊力もあるが、長さの分、軸である柄から切っ先までが動くために一瞬のロスが生じる。

アレンは 黒の剣 を切っ先で躲し、剣が振られたのとは逆方向に逃げていた。

歯車 が鳴り響いた。

「糞つたれ！！」

一気に踏み込んだアレンの拳はルオの腹を抉り上げた。兵士たちが凍り付く。

ライザはにわかに笑みを浮かべた。

またこの場所に閉じ込められた。

今回は前回よりも待遇が悪かった。

牢屋の中にセレン溜息が響いた。

「神様、どうかわたしたちをお助けください」

キユクロプス 内にある監獄。

床に寝かされているトツシユはまだ意識を取り戻さない。

やることがないと、頭ばかりが使われ、余計なことを考えてしまう。セレンは不安で仕方なかった。

トツシユはいつになったら目覚めるのか。リリスはどこへ消えたのか。アレンはどこにいるのか。そして、ワーズワースもトイレに行って帰ってこなかった。

まずはトツシユが目覚めなくて話にならない。それからここを逃げ出す方法を考えてくは。

セレンは独りではなにもできなかった。

時間だけが過ぎていく。

しばらくして。どこからか声が聞こえてきた。

「捕虜に食事を持ってきました」

「こんな時間にか？」

「ええつと、それは彼らはここ数日飲まず食わずだったそうで」

「そんな風には見えなかったがなあ」

「それはきつとやせ我慢してるんですよ！」

「……おまえ、なんだか怪しくないか？」

「そんなことないですよ」

「今すぐIDを見せる」

「え、いや……ちょっと……ああっ、わっ、やめてください！」  
ドン！

という何か殴りつけるような鈍い音が聞こえた。

そして、カートを押すような音が聞こえて、牢屋の前までその人物はやって来た。

「よかった、見張りが一人いなくて」

ほっと一息ついて見せたのはワーズワースだった。

「助けに来てくれたんですか！」

「お姫様を助けるのは王子に役目ですから」

と言われて、セレンは少し顔を赤くした。

ワーズワースは牢屋の鍵を開けた。

「あっ、これで良かったみたいです。今気絶させた見張りが持つてたんですよ」

囚人に食事を運ぶ振りをして、見張りを倒し、牢屋の鍵まで手に入れたのだ。

セレンの瞳にワーズワースは天使のように映った。

「本当にありがとうございます」

「いえいえ、でもここからが問題ですよ。どうやら僕の顔は敵にはれていなかったらしく、堂々と食事を運びながら、すれ違う人に挨拶してたら、楽々ここまで来れましたけど、セレンちゃんとの意識のない人といっしょに逃げるのは……」

困って黙り込む二人。

ここは蟻の巣のようなものだ。そこら中に帝国の兵士がいて、とてもトツシユは運んで逃げることはできない。

ワーズワースが耳を澄ませ、囁いた。

「だれか来ます」



そんなことを言われても、ここに逃げ道はない。こんな状況を見られたら言い逃れもできない。

曲がり角の向こうから声が聞こえた。

「見張りの時間だ………どういうこと？」

大変だ、気づかれた。

身構えるセレンとワーズワース。

フルフェイスマスクをした一人の兵士が姿を見せた。

もう駄目だと思ったとき、兵士がそのマスクを脱ぎ捨てて素顔を晒したのだ。

「警戒しないで、わたくしよセレン」

「あつ！？」

セレンは驚いた。まさかこんなところで会うとは思わなかった。失踪していたフローラだった。

「生きてたんですね！」

セレンは歓喜の声をあげた。トツシユは帝国の機密を手に入れた経由をだれにも話していなかったのだ。

フローラを見たワーズワースは目を丸くした。

「………な、なんて可憐で花のように美しい人なんだ。僕の名前はワーズワース、貴女の名前は？」

「えっ………わたくしはフローラと申します」

二人は間近で見つめ合いながら、ワーズワースのほうから固い握手をした。

フローラは苦笑いを浮かべてワーズワースの胸を押しした。

「あまり近付きすぎないでください。今はこんなことをしている時間はありませんわ。まずは、トツシユを診なくては………」

意識のないトツシユの傍らに膝をついたフローラは、いつかアレンにしたように接吻をした。

トツシユの躰が跳ね上がった。

「うっ………うっ………フローラ！」

間近にあったフローラの顔を見てトツシユは驚いた。

他人の接吻を見てセレンは顔を赤くして、ちらりとワースワースを見た。そのワースワースは、真剣な眼差しでフローラを見つめていた。少し胸がもやっとしたセレンだった。

トツシユはフローラに耳打ちをする。

「メモリの中身を見た。ここにいる二人とアレンとリリスという魔導師に、機密情報なのに話しちまったんだが、本当にすまない」

「トツシユが選んだ仲間なら、べつに構わないわ」

ここにいるワースワースは完全に不可抗力だったため、トツシユは苦い顔をして心が痛んだ。そして、フローラの信用を失わないために、あまり多くは語らないことにした。

フローラは通常の大きさの声で話しはじめる。

「じつはあのあと、いろいろ調べて見たのよ。渡した情報の中身についても断片的に解り、必要なオーパーツの一つ ヴォータンの在り処を特定したわ」

トツシユは機密情報を思い出す。

「たしか帝国のどこかという曖昧な情報だったが……？」  
フローラは頷いた。

「ええ、たしかに帝国には違いないのだけれど、じつはこの キュクロプス の動力源が ヴォータン なのよ」

まさかこんな近くにあるとは、トツシユは驚きを隠せなかった。

「ここは キュクロプス の中か。まさかそっちから来てくれるとは、幸運……というべきだろうな。だが逃げるだけでも骨だということに、動力源を盗み出すとなるとというのは」

さらにフローラは過酷な要求を突き付けた。

「できれば、この船ごと制圧して盗めると良いわ。 ヴォータン と スイシユ を手に入れたあとの目的地は、アスラ城なのだから トツシユはさらに機密情報を思い出す。

「たしかそう書いてあったな。装置は帝国の地下にあると……でもなんで帝国の地下なんだ？」

「古代遺跡があった場所の上に、帝国は意図的に立てられたのよ。」

「？失われし科学技術？の恩恵を預かるために」  
そうフローラは答えた。

次の目的は決まった。

超巨大飛空艇 キュクロプス の動力源である ヴォータンを奪う！

だが、セレンには気がかりなことがあった。

「アレンさんとリリスさんはどうしますか？」

この場に二人がいないことにはトツシユも気づいている。

「二人はどうした？」

「アレンさんはまったくわかりません。リリスさんは怖ろしい仮面の人に……消されてしまいました」

その瞬間を思い出してセレンはゾツとした。

消された という意味をトツシユは理解できなかった。

「まさかりリス殿が殺されたのか？」

すぐにセレンが首を何度も横に振った。

「違います。目の前でパツと消えてしまったんです」

二人の話にワーズワースも割り込んでくる。

「じつは僕も物陰から見てたんですけど、あっという間に姿が消えてしまって、生きているのか死んでいるのか、何が起きたのかもわかんないんですね。それからセレンちゃんとトツシユさんが連れ去られて、ついに僕の大冒険が幕を開けたのです！」

ここからが話の面白いところだと言わんばかりのワーズワース。

を無視して、トツシユは歩き出した。

「早く行くぞ、ここに敵が来たら袋の鼠だ」

フローラも先を急ぐ。

慌ててセレンもついていった。

独り残されたワーズワースは肩を落とした。

「おもしろい冒険活劇なのに……とくに料理長VS僕の死闘とか」  
仕方がなくワーズワースも三人のあとを追った。

アレンは本気だった。

それは死闘だったからだ。

殺らなければ殺られる。

たしかに拳には手応えはあった。

そして、ルオは約一〇メートル後方まで吹っ飛ばされたのだ。

内臓は爆発し、骨は粉碎している筈だった。

即死でも可笑しくない。

ましては立ち上がることなど……。

ルオは一〇メートル先で唾いながら立っていた。

それを確認したライザは呟いたのだ。

「素晴らしい研究成果だわ」

不気味な言葉だった。

黒の剣 がアレンを襲う！

それだけではない、ルオも自らの肉体を駆使して攻撃を仕掛けて

きたのだ。

この怖ろしい 黒の剣 の切れ味を、アレンは嫌というほど知っ

ている。

刃とルオの拳のどちらを躲すか？

片方しか躲せない状況に追い込まれたアレンは刃を躲した。

刹那、ルオの拳がアレンの胸を殴った。

宙を飛ばされながらアレンは驚愕していた。

金属の右胸が拳の形にへこんだのだ。

銃弾を弾き返す金属が、少年の拳でへこまされたのだ。

もはやそれは人間の力ではない。

アレンは甲板に叩きつけられ、二度跳ねた。

もう一発も喰らえない。

すぐに 黒の剣 が天空からアレンを串刺しにせんと降って来る。

瞬時にアレンは膝のバネを使って、立ち上がると同時にジャンプした。

その一刹那前までアレンが寝ていた場所を 黒の剣 が突き出す、深く深く、甲板を貫いてもなお深く貫いた。

黒の剣 の弱点は、あまりにも切れ味が良すぎる事だった。

この場から 黒の剣 が消えた。

アレンが グングニール を抜いた。

その稲妻、 黒の剣 に呑み込まれようと、ルオにはどうだ！  
轟く雷鳴！

乱れ飛ぶ稲妻はルオの躰を貫いた。

眼を剥いたルオは一瞬止まった。

ゆっくりと床に引きつけられるようにルオの躰が後ろへ倒れる。

ドスン！

それは人が倒れると言うより、荷が落ちたような衝撃と音だった。兵士たちがアレンに銃口を向け、ルオに駆け寄ろうとした。

それを片手を伸ばしたライザが制す。

「ミンチにされて家畜の餌にされたくないのなら、黙って見てなさい」

。そうだ、ライザは知っているのだ。これで終わりでないことを

ルオが上半身を起こした。

「躰の凝りが取れたようだ、感謝するよ。お返しをしよう」

平然としている。まさに化け物。

アレンは自分の真下から鬼気を感じた。  
すぐさま飛び退いた。

黒の剣 が甲板を貫き天に昇った。

アレンの頬に落ちてきた紅い血。

何処かで 黒の剣 は血を啜ってきたようだ。

そして今、 黒の剣 はアレンの血を欲している。

血に飢えているためか、先ほどより格段に疾い！

走るアレン。黒の剣は軌道を変えながら降って来る。

歯車 が叫んだ。

躲しきれるか！

否、アレンが甲板を蹴り上げるよりも疾く、黒の剣はアレン

の背中を串刺しに。

「待て！」

ルオが叫んだ。

止まった。

黒の剣の切っ先はアレンの柔肌を数ミリ刺して止まっていた。

「試してみたいことがある」

そう言ったルオの元に黒の剣が戻っていく。

アレンは滝のような汗を流して膝から崩れた。

死。

死というものをあれほど間近に感じたのははじめてだった。

このときアレンは、真物の敗北を味わったのだ。

ルオがアレンを助けたのは情けではない。新たな愉しみを思い付いたのだ。

黒の剣がルオの手に握られた。

「我が一族に伝わる魔剣 歴代の中で真にこの剣を使いこなせた者は、初代皇帝のみであったと云う。剣は主が握ってこそ真価が発揮される。握れぬ剣なら、柄などいらぬ」

試しにルオは軽く薙いだ。

それは風の刃であった。

黒の剣が起こした風は遙か砂漠の砂を巻き上げ、風が通った真空の道に何人も兵士が吸いこまれた。

ライザは満足そうに笑っていた。

「本気を出せばこの艦も真つ二つにできそうね」

それほどまでの威力だった。

兵士たちは啞然として棒立ち状態だ。

アレンは呟く。

「……冗談じゃねえ」

一撃でも喰らえば死ぬだけでは済まされない。屍体すらないだろう。そう、跡形も残らない。

正攻法で勝てる相手ではない。

どこかで 歯車 の音がしたような気がした。

逃げ場なら一つしかない、とアレンはそこを目指して一気に駆けた。

艦内だ、艦内ならあんな大技使える訳がないのだ。

だが、ルオはやる気だった。

キョクロプス ごとアレンを葬り去ろうと、 黒の剣 を薙ごうとしたのだ！

さすがにライザが止めようとした。

「ルオ様！」

しかし、ルオは聞く耳を持たず、切っ先を後方に向けた。

あとは勢いを付けて振るだけだった。

異変。

眼を口を開けたルオの手から 黒の剣 が落ちた。

「く……ぐぐぐぐ……ぎぎぎ……あああああッ！！」

叫んだルオが急に床に転げ回って苦しみ藻掻いたのだ。

ライザは顔色一つ変えない。慌てふためくのは兵士たちのみ

「これが今の限界ね。これならまだ兵器のほうが実用的だわ」

ゆっくりと歩き出したライザは、ルオの前で止まり片膝をついた。

「アレンには逃げられてしまったわ」

「糞……まだ……まだ扱えぬというのか……あれほどまでの苦しみに耐えて、まだ朕は 黒の剣 を従えることができぬのかッ！！」

「ええ、そうのようね。そうであるならば、アタクシはいくらでも

貴方に力を授けましょう」

「くくくっ……面白い。修羅の道、極めようではないか」

ルオは立ち上がった。

だが、その躰はすぐにバランスを崩して片膝をついた。

バランスを崩したのはルオだけではない。甲板にいた全員が一斉に体勢を崩したのだ。

ライザは遠ざかる地表を見た。

「動いているわ、 キュクロプス が動いている!!」

ルオの命令も、ライザの命令もないまま キュクロプス が飛び立った。

帝国の絶対者であるルオの知らぬところで、起こるはずのないことであった。

警報が鳴り響く廊下を全速力で駆ける。

その警報はアレンが鳴らしたものだ。その事を知らない四人は、自分たちの脱走がばれたのだと警戒した。

角を曲がればその都度、敵に出くわす。そして、セレンは涙ぐみながら十字を切るのだ。

セレンは頭ではわかっていた。

こうやってトツシユは、セレンの知らぬところで、数え切れない命を奪ってきたのだろう。

怖ろしく耐え難い。ましてやセレンは神に仕えるシスターだ。

ワーズワースがセレンの手を握った。

「眼を開かなければ走ることはいできないよ。君に涙は似合わない」「えっ?」

自分でも気づかないうちにセレンは泣いていたのだ。

「セレンちゃん……これが世界の現実なんだよ。目を背けて生きたいのなら、人の全くないところで暮らすしかない。それが嫌なら、この時代を変えるしかないんだ」

まるでワーズワースも何かと戦っているような口ぶりだった。

シユラ帝国による恐怖政治。

砂漠化が進む大地。

人々の心も退廃していく。

フローラはジードの一員として帝国と戦っている。



トツシユも今はジードとして、それ以前からも帝國と多く対立してきた。

「わたしは……」

ずつと巻き込まれていただけ。限られた選択肢しか与えられず、巻き込まれてここまで来てしまった。

「でも、わたしは……武力で世界を変えたいとは思いません。わたしはわたしのできるやり方で、皆さんが笑顔になれるような世界をつくりたい」

優しい微笑みをセレンは浮かべた。

それにワーズワースは笑顔で答えた。

「やっぱり君には笑顔だね。ちよつとドキツとしたよ、その笑顔」  
ドキツとさせられたのはセレンのほうだった。今の発言で顔は真っ赤だ。

銃弾が流れるように飛んだ。

「あつ」

短く呟いて目を丸くしたワーズワース。些細な事でも起きたような呟きだった。

しかし。

「撃たれちゃいました」

ワーズワースが床に倒れた。

銃弾はワーズワースの太股に刺さっていた。

すぐさま射手をトツシユが撃ち殺した。

セレンは血相を変えてワーズワースを抱きかかえた。

「大丈夫ですか！」

「大丈夫じゃないですよ。だってすごく痛いですから。でもたぶん動脈は傷ついてないような気がしますから、死にはしませんよ。歩けませんけど」

「肩を貸しますから行きましょう！」

「足手まといなんで、置いてってください。トツシユさん、セレンちゃんを早く連れて行ってください」

その頼みを聞き入れてトツシユはセレンの腕を無理矢理引いた。

「行くぞ！」

「駄目です、彼を置いては行けません！」

「若造の望みなんだから叶えてやれ」

「嫌です！！」

抵抗するセレン。

ワーズワースは自分たちが来た道を指差した。

「ほら追っ手が来ちゃいましたよ。僕ならだいじょぶですよ、だって弱そうだし、すぐに降伏しちゃえば命までは取られませんかよ、ね？」

ワーズワースは笑った。

それでもセレンはこの場を離れない。

「早くいっしょに！」

セレンの伸ばした手がワーズワースからどんどん離れていく。

やはりセレンはトツシユに引きずられてこの場から消えた。

残されたワーズワースは、指で弾をえぐり出した。そんな行為を涼しげな顔でやってのけた。

そして、静かに立ち上がる。

「セレンちゃんとの別れは寂しいけど、別れた女といっしょにはいたくないもんね。あっちも嫌そうな顔してたし」

敵はすぐそこまで来ていた。

ワーズワースは敵を見向きもせず、そっと手を払っただけだった。

廊下に巻き起こった突風。

突風というより、それは見えない刃だった。

カマイタチ。

細切れにされた兵士たち。

ワーズワースの目つきが鋭くなった。

肉塊に囲まれながら、ただ独り兵士がまだ立っていたのだ。

「あらっ、切り損ねた？」

再びカマイタチを放った。

ワーズワースが目を丸くして？しまった？という顔をした。

放たれたカマイタチは兵士を　否、入れ替わるようにしてそこに立っていた、別の存在を切るうとしていた。

しかし、リリースを倒したその者には、ほんのお遊び。

隠形鬼は斬れていなかった。

風は見えぬため、当たったかどうかもわからない。当たる以前に消されていたのかもしれない。

ワーズワースは前髪をかき上げた。

「まいったなあ、そんなつもりじゃなかったんですけどー」

「気配ヲ感じタノデ来テ見タ」

「もつと前から僕がいたこと知ってたクセにい。お久しぶりですね隠形鬼さん」

「風来坊ガ帰ツテ来タカ」

「いえいえ、ちょっとふらつと風のように立ち寄っただけ、すぐに消えますよ」

親しげに話すワーズワース。

まさかこの二人が顔見知りだったとは。

「で、どんな作戦なんですかこれ？」

「御前モ此ノ劇ノ演者ト成ルカ？」

「いえいえ、僕はただの吟遊詩人ですから、他人の物語を語るだけです」

「ナラバ邪魔スルナヨ」

「なにをしたら邪魔なのか、わからないんですけど？」

「風向キヲ変エナケレバ、其レデ良イ」

そう言い残して隠形鬼は消えた。

タイミング良くそれと入れ替わりで、アレンがこちらに駆けてきた。

ワーズワースはほくそ笑んだ。

「演者にはなるつもりはなんですけど、運命って女神は気まぐれだからなあ」

走ってきたアレンもワーズワースに気づいたようだ。

「あつ、詩人！」

「どうも吟遊詩人のワーズワースですが何か？」

「逃げる、敵が来るぞ！」

「足怪我してるんで担いでもらえませんか？」

「はあ？」

「早くしないと敵来ますよ？」

「糞っ、あんたなんか見つけるんじゃなかった！」

アレンはワーズワースを背負って走り出した。

後ろからは兵士たちが追ってくる。艦内ということもあって銃の乱射はないが、ここぞというときには口径の小さな弾を撃ってくる。

「僕のこと弾除けにしないでくださいね」

「しねえよ！」

口径の小さな銃弾なら人間の躰を貫通せずに弾除けになってくれる。

じつはちよっぴりアレンは考えていたことだった。それを見透かされたような、さっきのワーズワースの一言だったのだ。

背負われながらワーズワースが話しかける。

「じつはさっきまで皆さんといっしょだったんですけど、はぐれてしまったんですよね。そうそう、フローラさんっていう人も合流しましたよ」

「フローラが!？」

「アレン君も知ってたんですか。あとそれから、皆さんはこの船の動力炉に向かってます」

「なんでだよ？」

「じつは ヴォータン がこの船の動力源らしくって、探す手間が省けてラッキーでしたね。まるで僕らに追い風が吹いてるみたいですが追ってくるのは風ではなく兵士だった。

逃げれば逃げるほど、兵士の数が増えていく。

グングニール を使えば一網打尽にできるかもしれないが、万

が一周りの機器を壊して爆発を誘発なんてことになったら……。アレンは、グングニールを抜くに抜けなかった。

「でさ、その動力炉ってどこにあんだよ？」

「さあ僕に聞かないでくださいよ。吟遊詩人にも知らないことはあるんですよ」

「使えねえ奴」

アレンは闇雲に逃げ回るしかなかった。

敵と遭遇しながら何度も危機があつたが、それらを掻い潜り、ついにトツシユたちは動力炉までやって来た。

連続的な振動音が鳴り響いている。

瞬時に溢れかえった気配。

物陰に隠れていた兵士たちが一斉に姿を見せた！

トツシユは舌打ちをした。

「チツ……楽に済むわけないよな」

この兵士が集められていたのはライザの差し金だ。

大勢の兵士に取り囲まれたが、なぜか兵士たちは銃を構えずナイフを構えていた。

色の違うプロテクターをつけた部隊長が前で出た。

「我らに勝てる気があるのなら存分に抵抗したまえ。ただし銃などは使つな、動力炉が爆発したらみんな死ぬぞ」

フローラが微笑んだ。

「自爆テロだったらどうする？」

命を犠牲にして動力炉を爆発させる。そういう作戦も世の中にはあるだろう。けれど、フローラの言葉が、ただのはつたりだと部隊長は知っていた。

「お前等の目的はわかっている。自爆テロなどするはずがない！」  
目的は ヴォータン を奪うこと。それも見透かされていた。あの場でアレンが スイシユ を見せなければ、きっと状況は変わっていただろう。

気配が変わった。

部隊長が刹那のうちに隠形鬼に替わっていたのだ。

「牢屋カラ逃ゲ出サレテハ、我々ノ仕事ガ増エルデハナイカ」

状況はより最悪になった。

セレンが叫ぶ。

「リリスさんをどうしたんですか！」

「サテ、何処ニ飛バサレタノカ、私ニモ解ラヌ。辺境ノ地力、海ノ底力、遙力宇宙ノ彼方力、ソレトモ別ノ次元力」

その言葉を信じるなら、殺したわけではないらしい。

トツシユは苦虫を噛みしめていた。

「おぼろげだが、おまえの面……覚えてるぜ」

あれはあまりにも一瞬の出来事だった。影から何かが現れ、瞬時撃つた刹那には瀕死の重傷を負って気絶した。

「借りは返させてもらおう」

動力炉に構うことなくトツシユは レッドドラゴン を構えた。

「理解ニ苦シム行為ダ。此処ガ何処ダカ解ツテイルノカ？」

「ああ、知っているとも。でもな、おまえだけを狙えば済むことだ」

「狂ツテ居ルナ。実ニ興味深イ男ダ。シカシ、私ニハ勝テン」

「そうだ、俺は狂っている」

トツシユは引き金を引こうとした。

しかし、引けなかった。

目と鼻の先に隠形鬼がいたのだ。

「私ハ御前ガ引キ金ガ引クト同時ニ、65歩以上ハ移動デキル」

六五とは、一弾指という指で弾く僅かな時の間にある刹那の数。

今度こそトツシユは引き金を引いた。

隠形鬼は手のひらを開いて見せた。その手から落ちた弾頭。

「私ノ言葉ガ理解出来ナカツタノカ？」

「ば、莫迦な……信じられるか……ありえん」

「理解セズトモ、現実ハ変ワラン。先ズ、御前ガ一人目ダ」

それはゆっくりとした動作だった。

しかし、トツシユは動くこともできなかった。

隠形鬼の指がトツシユの額を弾いた瞬間、消えたのだ。

そう、トツシユが跡形もなくその場から消えたのだ。

「二人目」

隠形鬼はすでにセレンの前にいた。

そして、同じく消された。

「御前デ最後ダ」

フローラも抵抗することなく消された。

漆黒の闇。

一点の光すらない世界。

そこでは己の肉体すら感じられなかった。

思考だけが存在する。

セレンは声を出そうとしたが、この世界には音すらなかった。

無。

思考さえ存在していなければ、ここは完全な無、だった。

身を動かす。

いや、動かしているような気にはなっているが、動いているかど

うかはわからない。

セレンは自分の胸に触れた。

胸の感じはなかった。

手の感じすらない。

五感のうち触覚が失われている。

ここは漆黒なのか、それとも視覚が失われているのか。

声が出せないのだけなのか、それとも聴覚が失われているのか。

嗅覚や味覚はどうだろう？

息をしている感覚や、口の感覚もないので、残る二つの感覚もよ

くわからない。

そして、時間の感覚もなかった。

長いようで短い時間。

身の感覚はなかったが、セレンは歩き続けた。

出口を信じて足を止めなかった。

やがて、この無の世界に変化が訪れた。

一筋の光。

たった一筋でも、暗闇の中を照らせばとても眩い。



セレンは気づいた。

自分の躰がある。

「あっ」

声も出た。

光の存在によって、五感すべてが取り戻せた。

あの向こうの側にある光がどんどん強くなっている。

今にも闇は光に呑み込まれそうだった。

視界がぼやける。

「大丈夫セレン？」

「おい、しっかりしろシスター」

聞き覚えのある声。

セレンの視界が開けた。

目の前にあるフローラとトツシユの顔。

「わたし……助かったんですか？」

そこはあの動力炉だった。辺りに隠形鬼も兵士たちの姿もない。

セレンの頭はまだ少しぼーっとしていた。

「どう……なっただんですか？」

尋ねられた二人は顔を見合わせ、トツシユは首を傾げた。

「俺様にもわからん。なにもない空間に閉じ込められたと思ったら、

あっさり出てこられたな」

どれだけあの空間にいたのだろうか？

兵士たちはトツシユたちを葬ったと思って引き上げたのだろうか？

セレンは床を見てハツとした。兵士が二人倒れていた。

「あれは!？」

兵士を一瞥したフローラ。

「あれはここに戻れた途端に、鉢合わせてしてしまって。一人はわ

たくしが」

「もう一人は俺様が気絶させた」

ということは、フローラとトツシユはほぼ同時に、ここに戻った

ということだろうか？

セレンも意識がはつきりしないだけで、同じときに戻っていたかも知れない。

気絶していた一人の兵士がむっくりと立ち上がった。

いや、違う。

それはすでに兵士ではなく 隠形鬼。

「オノレ、私ノ術ヲ破ツタト言ウノカ！」

レッドドラゴンの咆吼。

漆黒の仮面が砕かれ、隠形鬼が倒れた。

一瞬の出来事だった。

術を破られた衝撃を覚えていた隙を突くことができたのか、トツシユの撃った銃弾は見事隠形鬼を仕留めたのだ。

トツシユは仰向けに倒れている隠形鬼を見下ろした。

砕け散った漆黒の仮面。

半壊した顔面は中年の男のものだった。

「こんな顔だったのか……仮面がなきやただのオッサンだな」

そして、トツシユはお返しとばかりに、中年の男の腹に銃弾を喰らわせた。

フローラはすでにコンピューターの前に立っていた。ここでの目的を忘れてはならない。

「トツシユ、入り口を見張っていて！」

そう言っただけ動力炉のコンピューターを操作しはじめた。

操作の途中でフローラは手を止め、自分の懐中時計を見て不可思議そうな顔をした。

「コンピューターに表示されている時間と、わたくしの時計の時間が違うわ。二時間以上、わたくしの時計が遅れているわ」

言われてトツシユは自分の腕時計を見た。

「俺様の時計は一五時三六分だ」

「わたくしの時計もそれとほぼ同じよ」

二人の時計が合っていると言うことは、コンピューターの時計が

狂っているのか？

いや、この飛空艇でもっとも重要な、動力炉を預かるコンピューターの時間が狂っているということがあるのだろうか？

時計をしまったフローラは再びコンピューターを操作した。

「今考えるのはやめましょう。まずは ヴォータンを…… ロックを解除したわ。見て、動き出したわ」

人が覆い隠せるほどの大きさの円柱の金属が、床へと収納されていき、金色に輝く槍　　ヴォータン　　が姿を見せた。

床のコンセントに刺さっている　ヴォータン　をフローラが引き抜いた。

すべての動力が止まる。

警報が鳴り響く。

次の瞬間、ここにいた全員が壁に叩きつけられた。

飛空艇が大きく傾いている。

トツシュは壁に足を付けて立ち上がった。

「まさか飛んでいたのかっ!？」

おそらくそのまさかだろう。

フローラも立ち上がり、壁に落ちていた　ヴォータン　を拾い上げた。

「迂闊だったわ。中にいたせいで飛んでいることに気づけなかった。いえ、ちゃんと調べるべきだったわ。目の前にある　ヴォータン　を奪うことに気が逸ってしまっただけ」

飛んでいる物体が動力を失えばどうなるか　考えるだけで身の毛がよだつ。残された時間はあまりないだろう。

セレンは身を強ばらせた。

「早くしないと落ちます……よね？」

墜落すればこの飛空艇にいる全員ただでは済まない。

トツシュがフローラを見て、　ヴォータン　が刺さっていたコンセントを指差した。

「それを元に戻せ、すぐに墜落するぞ！」

「駄目よ、登れないわ」

そう、すでに飛空艇は九〇度近く傾き、壁が床に、床が壁になっていた。

スピーカーからライザの音が響いてきた。

《各員に次ぐ、動力が失われ予備電源で飛行。最悪なことに何者かによって、操縦コントロールシステムが破壊されたわ。船の傾きも直せず、このままだとあと数秒で墜落よ》

放送はそのまま切られず、声が漏れてきていた。

《あれは……まさか、アスラ城に……計られた！？》

激しい衝撃が襲ってきた。

動力炉にいた全員の躰が浮かび上がり、壁に激しく叩きつけたれた。

鼓膜が破らそうほどの轟音が響いている。

何度も何度も大きく揺れる。

あまりの揺れに立つこともできず、その場にいることもできず、受け身も取れずに何度も床や壁に躰を打ち付けられる。

「うっ！」

セレンが短く声を漏らした。

強打された後頭部。

セレンの意識が遠のいた。

アレンは天井高くを見つめた。

そこに突き刺さっている キュクロプス の船首。

「よく爆発しなかったな」

ドーム状の屋根に突き刺さった キュクロプス からは、小さな煙が上がっているものの、今のところは爆発をせずにその場に留まっている。

「きつと燃料を使って飛行していないからですよ。機器が爆発を起こしても、引火する物がなければ大爆発は起きませんから」

アレンに背負われているワーズワースはそう説明した。

何が起きたのかアレンにもよくわからなかった。

激しい衝撃のあと、飛空艇から逃げ出してきたら、こんな場所に来てしまった。

目の前にあるのは銀色の輝くピラミッド型の遺跡だった。いったいここはどこなのか？

ライザが墜落寸前に残した言葉は？アスラ城？、そして？計られた？という疑惑的な言葉。

少なくともここはアスラ城ではないらしい。

アレンは舌打ちをして溜息を吐いた。

「っーかさ、ここどこなんだよ。やっぱ下じゃなくて、上から出ればよかつたんじゃね？」

「九〇度近く傾いてるあれを登るなんて無理ですよ」

あれとは キュクロプス のことだ。

「でもさ、下に来てても地上じゃなくてこんなとこに来ちゃったじゃねえか」

「たしかに地上ではないみたいですよね……ん？」

「なに？」

「ちよつと思いついたことがあるんですけど。たしかフローラさんが、装置は帝國の地下にあるのかなんとか」

もう一度思い出されるライザの言葉　？アスラ城？。

アレンは眼を細めて疑惑の視線をした。

「うっそだー。ここがアスラ城の地下って言いたいわけ？」

「べつに嘘をつこうと言ったわけじゃないんですけど。可能性です

よ、か・の・う・せ・い」

「もしそうだとしても俺　スイシュ　しか持ってねえし。またあそ

こに戻るの嫌だぜ？」

アレンたちはトツシュたちが　ヴォータン　を手に入れたことを

知らない。

「やっぱ戻ったほうがいいんじゃないですかねー。ほら、ここが地下なら、やっぱあそこから登っていくしか出口ありそうもない

「ですよ？」

「無理。あの高さは飛び降りることはできても、ジャンプじゃ届かねえし。あんたを背負ってなんて絶対無理」

「それって僕を置いていこうとしてます？」

「さあな。でもあんたを下ろしても無理だろうな。俺の最高記録四八メートルくらいだし」

「ええっ、そんなに高くジャンプできるんですか！？ 僕を背負いながらあそこから飛び降りたときもすごいと思いましたけど、何者なんですかアレン君？」

「……いいだろそんなこと。つかさ、戻れないなら進むしかないんだから行くぞ」

話を切り止めて、アレンはピラミッド遺跡に向かって歩き出した。ピラミッドまでの道は舗装された石畳で一直線に続いている。

「大きいですね」

とワーズワースは感嘆した。

ピラミッドの高さは約五〇メートル以上。およそ底辺の横幅も同じくらいありそうだ。

やがてピラミッドの入り口らしき扉が見えてきた。そして、そこにいた人影。大柄な男とそれに背負われている少女。トツシュとセレンだった。

アレンたちを確認したトツシュが口を開く。

「無事だったか」

無事と言うほど無事ではないが、生きてここまでやって来た。だが、トツシュたちのほうは？

ワーズワースは二つのことに気づいた。

「セレンちゃんどうかしたんですか？ あと、フローラさんっていうあの人がいないみたいですけど？」

「シスターは気を失っている。あれが落ちるときに頭を打ったらしい。フローラは……いつの間にかはぐれてた、これを残してな」

トツシュは片手に持っていた黄金に輝くヴォータンを見せた。

それを一目で ヴォータン だと察したアレンは、自分が持っていた スイシュ を取り出した。

「こつちもちゃんと手に入れてるぜ」

淡いブルーに輝く スイシュ 。

トツシュは扉に向かって顎をしゃくつた。

「そこに鍵穴らしい物がある。おそらくこの ヴォータン を挿せば扉が開く筈だ」

「ならさっさとやろうぜ」

アレンに促されてトツシュは ヴォータン を鍵穴に突き刺した。駆動音が地響き共に鳴り響いた。

ピラミッドの外壁を奔る電流。

銀色だったピラミッドが金色に輝きはじめた。

そして、ピラミッドの頂上付近にあった 眼 が見開かれた！

嗚呼、扉が開く。

永い永い眠りから覚めた古代遺跡。

そこで待ち受けているものは……？

黄昏の帝国「渦中（5）」

扉の先に広がっていた部屋にはただ一つ、台座があるだけだった。そこに スイシュ を乗せると言わんばかりだ。

アレンはワーズワースを床に下ろし、迷わずその台座に向かって歩き出した。

そして、台座の前で足を止めた。

「置くぞ？」

アレンに顔を見られたトツシユは無言でうなずき、ワーズワースは真剣な眼差しをしていた。

「待て！」

部屋に響き渡った少年の声。

この場に現れたルオの声だった。

しかし、 スイシュ はすでにアレンの手の中にない。

「もう置いちゃったもんねー」

悪ガキのような顔をしてアレンは笑った。

スイシュ が設置された台座は床の底へと自動的に収納されていく。

「遅かった……か」

ルオは憎悪を浮かべながら歯を噛みしめた。

「ソウ、此デ何モカモ終ワリデ御座イマス」

この場にもうひとり 否、一人減ってもうひとり、ワーズワースに替わってその場に隠形鬼がいた。

驚くトツシユ。

「俺様が殺した筈!？」

「御前ガ殺シタノハ偽者ダ。私ハ御前ガ引キ金ヲ引ク間ニ65歩以上移動出来ルト言ツタ筈ダガ？」

あれは隠形鬼の最期にしては、やけに呆気ない終幕だった。それもすべて隠形鬼の罠だったのだ。



そして、もう一人最後にやって来た女がいた。

「ご苦労様トツシユ。とても良い働きだったわ、本当にありがとう」  
「フローラ！」

叫んだトツシユの視線の先で、フローラは隠形鬼の横に立った。  
信じたくない出来事ではあったが、トツシユの直感がそう訴えている。

「そうか……裏切ったのか俺様たちを」

「いいえ、はじめからこちら側のスパイだっただけよ。鬼兵団でのわたくしの名は木鬼「モクキ」」

この状況を見て、ルオを腹を抱えて笑い出した。

「あははははっ、じつに愉快だ。そうか、三つ巴という訳か。朕は隠形鬼に謀れ、君はその女に謀れたというわけか……くくくくく」

「其ノ通りデ御座イマス。此デ帝國ノ栄華ハ水ノ底ニ沈ム」

「我が帝國にどんな怨みがある？ それとも金で雇われたのかい？」

「イエイエ、怨ミデモ無ケレバ、金デモ御座イマセン。次ノ世界ニハ不要ダカラ消エテ貰ウダケノ話」

「シユラ帝國が不要だと……後の世で世界のすべてを治めることになる、シユラ帝國が不要だとッ！！」

ルオの怒号と共に 黒の剣 が隠形鬼に向かって飛んだ。

「私ニトツテ、コノ剣ダケハ厄介ナ代物……ナア、れヴえなヨ？」

黒の剣 が隠形鬼を貫いた と思ったが、そこに隠形鬼はいない。

しかし、 黒の剣 は獲物を見失わなかった。

だれもいない空間を 黒の剣 は突いた。

「クッ！」

突如姿を現した隠形鬼は、煌めく透明な魔導盾を手のひらの前に出し、 黒の剣 を受け止めていた。

二人が戦いに集中しているのを見計らって、トツシユはアレンに合図を送った。そして、セレンを背負ったまま出口に駆け出す。

戦いなら勝手にやらせてほしい。

だが、アレンはその場をまだ動かない。

「まだ装置が動いてるかわかんねえぞ？」

台座と共に スイシュ が床に収納されてから、何の音沙汰もない。

出口に立ち塞がったフローラが答える。

「いえ、ちゃんと稼働しているわ。 スイシュ を設置してから三〇分後、このピラミッドの頂上から一気に水が噴き出すわ。そして一瞬のうちに地上にある帝國は水に沈むでしょう」

トツシュは悲しい瞳でフローラを見つめた。

「帝國を滅ぼす目的のために、表の顔はジードとして、スパイまでして、そして俺様まで使ったのか？」

「いいえ、わたくしの目的ははじめから一貫しているわ。 自然環境を守り、この星に緑を取り戻すこと、ジードは表の顔よ。 帝國が滅びるのはその課程の一つに過ぎないわ」

少しだけトツシュは微笑んだ。

「……そうか。 それならそれでいい、俺様たちはもう用済みだろう？ 行かせてもらうぜ」

フローラの横を通り過ぎようとしたトツシュの前に茨の柵が現れた。フローラの生きているドレスから伸ばされた植物だ。

用が済んだら殺すのか？

「行かせテヤレ」

黒の剣 との攻防を繰り返しながら隠形鬼が言った。

「朕との戦いで目を離すとは良い度胸だね！」

一気にルオが猛攻を仕掛ける。

隠形鬼はルオとの戦い続けながら、まだ半分意識はトツシュたちに向けたいた。

「帝國ヲ討チ滅ボシタ英雄ガ必要ダ。 其ノ為ニ選ランダ男ダ」

「すべて筋書き通り、俺様はおまえの手のひらの上で踊らされたったわけか」

トツシュはそう言いながら開かれた茨の柵に先へと進んだ。 逃が

してくれと言っているのだ。ここで無用な戦いをして危険に身を晒すこともない。

だが！

レッドドラゴン が一瞬のうちに抜かれ、銃弾が放たれた！銃弾は隠形鬼を外れ、遙か天井へ。

「くッ……」

レッドドラゴン を握るトツシユの腕に巻き付いた茨。それによつて弾丸は明後日の方向に飛んでいったのだ。

「さつさと消えなさい！」

フローラは茨のロープを操り、セレンもろともトツシユをピラミッドの外へと投げ飛ばした。

すでに扉は茨の柵によつて閉じられた。中に入るにはフローラを倒すしかない。

トツシユは地面に放り出されていたセレンを背負い、片手を上げてフローラに別れを告げる。

「俺様はフェミニストじゃないが、おまえだけには手を出さない。じゃあな、達者でな」

寂しそうな背中をしてトツシユは歩き去った。

そして、アレンは 。

「ちよつと待てよ、俺を置いてく気がつ、どうして俺は閉じ込められなきゃいけないんだよ！」

アレンはフローラを倒す気だった

「俺はあんたをぶん殴つても帰るからな！」

「できるものならご自由に」  
微笑んだフローラのドレスから、鞭のように蔓が攻撃を仕掛けてきた。

軽やかにアレンはそれを躲し、グングニール を懐から抜いた。しかし、蔓のほうが早かった。

茨が グングニール を握る腕に巻き付く！

「こんなもの！」

どこかで 歯車 の音がしたような気がした。

アレンが蔓を引き千切るよりも早く、真っ赤な蕾が花開いて芳しい匂いを放った。

匂いを嗅いでしまった途端、アレンの躰が痺れだした。

「糞ッ……躰が……」

「神経毒よ。本来なら完全に動きを封じられるのだけれど、さすが半分機械の躰ね」

左半身が痺れて動かない。右半身は問題なく動く。

しかし、グングニール を握っていたのは左手だった。

グングニール がアレンの手から滑り落ちた。

すぐに拾い上げようとしたが、蔓はアレンの右足首をも捉えていた。

蔓が力強くアレンの足首を引っ張る。

「うおっ！」

足を掬われたアレンが転倒してしまった。

そして グングニール も薦に拾われてしまっていた。

隠形鬼とルオの戦いも決着がついていた。

床に倒れて動かないルオの姿。 黒の剣 も微動だにせず床に突き刺さったまま。

隠形鬼がアレンに近付いてくる。

アレンは必死になって蔓を引き千切ろうとしたが、蔓はアレンの動きに合わせて常に一定の弛みを持たせられ、引いても引いても引き千切ることができない。

「サテ、御前ヲドウスルカ、未ダ決メカネテイル」

「俺なんかどうでもいいだろ、ほっとけよ！」

「企ミガ解ラ又以上、放ッテ置ク訳ニモイクマイ」

「企みなんかねえよ！」

「御前ノ企ミデハ無イ。御前ヲ創ッタ者ノ企ミダ。何故御前ハ創ラレタ？」

「知るかつ、俺が聞きてえよ！」

その問はこれまで何度もアレンの頭で渦巻いてきた謎だった。半身は人間として、半身は機械として、なぜ創造主はアレンをこのような躰にした？

自分に何があったのか？

それをアレンは思い出せなかった。

フローラが隠形鬼に言う。

「不安材料は消去しておくべきだわ」

「未ダ解ラヌ。敵ニ成ルカ、味方ニ成ルカ、此奴ハ両方ノ資質ヲ兼  
ネ備エテイル」

すぐにアレンが口を出した。

「はあ？ あんたらの仲間になるわけねえだろ。仲間になったら、アレンキとか変な名前と呼ばれなきゃいけねえのかよ？」

隠形鬼はアレンの言葉を無視して話し続ける。

「知ラヌ事ハ知リタクナル。智ヘノ探求心ヲ私ハ優先スル。あれん  
ハ此処ニ残シテ行ク」

もうフローラは口を挟まなかった。

アレンに巻かれたいた蔓がドレスに戻っていく。

「シスター・セレンに宜しくと伝えておいて頂戴」

「自分で言えよ！」

「そう。ならさようなら」

フローラはアレンに別れを告げた。

そして、隠形鬼は何も言わずフローラの躰を触って、共に霞み消えた。

二人の気配は完全に消失した。

まだ躰の痺れているアレンは立てもしなかった。

「マジやべえ。水が噴き出すとか言ってたけど、まさかここも沈むんじゃないだろうな」

「ああ、沈む」

そう小さな声で言ったのはルオだった。

床に這いつくばりながら生きた眼でアレンを見ている。

「なんだよ、生きてたのかよ」

「朕は死なぬ。死など超越して見せる」

「……あっそ。なら頑張つて生きろよ、俺は先に行かせてもらうけどな」

アレンは動く右半身を使って這いながら出口に向かいはじめた。

「行かせると思つかい？」

少年の容姿でありながら、ルオは重厚な声を響かせた。

帝國の滅びを目前にしながらも、いまだ皇帝。

黒の剣 がアレンに襲い掛かる。だが、いつのも強烈な切れがない。

どこかで 歯車 の音がぎこちなくしたような気がした。

アレンは今出せる全力で手で床を叩き、宙に舞って 黒の剣 の一撃を躲した。

見た目では半身だけが機械だが、中身まではどうなっているのか、アレンも知らないことだった。中で完全に分離して機能しているのか、それすらもわからない。

ただ、今わかることは、機械の半身も調子が悪いということだ。

着地に失敗したアレンが床を転がった。

その隙を 黒の剣 が過ごすわけがない！

切っ先はすぐ目前まで迫っていた。アレンは躲そうとしたが、焦って踏み込んだ足は痺れている左足だった。

「糞ッ！」

転倒するアレン。

黒の剣 が頬を掠めた。

アレンは動きを止めた。

頬を奔った一筋の紅い血。

黒の剣 は狙いを外れて床に突き刺さっていた。

ルオはアレンに手を伸ばしながら、床に頬をつけて動けなくなつた。

「もう一寸たりとも 黒の剣 を操れぬというのか……これほどま

で悔しいことがあるか……朕は君に負けたのではない……自分の力の無さに負けたのだ」

「はいはい」

そう言ったアレンも動けなかった。

機械の半身まで動かない。

まさか神経毒が機械の半身にも効いたというのか？

本当にそうなのか、アレンにもわからない。

「腹減ったなあ……動けるようになるのが先か、水浸しになるのが先か。もう水でもいいから腹いっぱいにしてえな。ああ、疲れた」  
ゆつくりとアレンは眼を閉じた。

やがてピラミッドの頂上から大量の水が噴き出した。

ピラミッドを流れ落ちた水は遺跡を沈め、扉の開かれたままのこの部屋も、一瞬にして水に呑み込まれた。

へりの中でセレンは目を覚ましていた。

「みんなは！ まだみんながあそこに！！」

窓の外に見える光景。

帝國が沈む。

激流に呑み込まれてシユラ帝國が跡形もなく消えた。

砂漠一帯が瞬く間に海と化す。

水の勢いは留まることを知らない。

やがて海からはいくつもの川ができるだろう。

川は各地を巡りながら生命を潤す。

セレンは涙を流した。

「こんなことになるなんて……」

水を生み出す装置は、ただ水を生み出すだけではなく、帝國と共に多くの命を藻屑にした。

どれだけの人が逃げ出すことができただろうか？

兵士の多くはわけもわからないうちに水に呑み込まれていっただろう。

キユクロプス がアスラ城に墜落したとき、もうパニックは最高潮に達しており、統率など取れない状況だった。

ヘリを操縦していたトツシユは不味い煙草の火を消した。

「運が良ければ生きてるさ」

「なんなんですか、わたしが気絶している間になにがあっただんですか！」

世界は勝手に進んでいく。そのことがセレンは居た堪らなかった。

また、巻き込まれて終わってしまった。

「シスター、あんたは普通の暮らしに戻りな」

こんな出来事に巻き込まれたのに、トツシユの言葉で酷く突き放されたようにセレンは感じた。

「なにも説明してくれないなんて無責任です！」

「たしかに多くの命が失われただろうよ。だがな、帝國が滅びたんだ。きつとこれから世界は良くなる……そう祈ったらどうだ？」

「悲しすぎて祈れません。あんな多くの命の冥福をわたし一人じゃ祈れません。ワーズワースさんも、アレンさんも、フローラさんも、リリスさんだって……どうなったかわからないんですよ」

トツシユはセレンに何も聞かせていなかった。特にフローラのこととは、このまま何も語らぬままだろう。

「アレンは簡単に死ぬタマじゃないだろう。婆さんだってまだまだ長生きしそうだ。ほかの二人も……あの若造だけは、ひよろいから死んじまってるかもな」

冗談のつもりで笑って見せたが、セレンは大粒の涙を浮かべて笑える状況じゃなかった。

「ワーズワースさんのことを悪く言わないでください！」

「……すまん」

その一瞬、トツシユの脳裏を過ぎったのはフローラの顔だった。

トツシユは呟く。

「帰ったら酒でも呷「アオ」って女でも引っかけて寝るか」

空に昇りはじめた夕日。



砂漠に出来た海を朱色に染める。

大量の水は多くのものを流して呑み込んだが、流せないものを多く残ってしまった。

数日のうちに帝国滅亡の噂は世界を駆け巡った。

はじめのうちは誰も信じようとしなかったが、広がる海を目の当たりにして疑う者はいなくなった。

帝国にいったい何が起きたのか？

あの海はいったいどこから湧いて現れたのか？

それを語るの一人の吟遊詩人。

トツシユの名を人々に知らしめた英雄譚を、吟遊詩人は今日も謳い旅をする。

その吟遊詩人の噂を聞いたセレンは、歌を口ずさみながら教会の裏庭に咲く花々に水をやった。

あの出来事のあと、教会に帰ってきたセレンは驚いた。

水と泥に流された花壇が元通り　いや、それ以上に美しい花々が咲き誇る庭園に生まれ変わっていたのだ。

だれがいったい？

それを考えながらセレンは、嬉しそうな顔をして今日も花の世話をすのだった。

水に育まれた世界はこれからどう変わっていくのだろうか……？

(完)

## 逆襲の紅き煌帝「不気味な足音（1）」

あなたは最後の希望。

これをあなたが見ているとき、わたしの精神はすでに此の世にないでしよう。

あの恐ろしい計画を止められるのはあなただけです。  
楽園に行きなさい。

あの場所にすべてを隠しておきました。  
あなたにすべてを背負わせてしまつて、本当にごめんなさい。

その世界は優しい光に包まれていた。

太陽光ではない、空を思わせる広大な天井が輝いているのだ。  
人工の空。大地は黒土だった。

栄養の行き渡った土壌には豊富な植物が息づいている。  
色とりどりの花々が香り、生い茂る木々立ちが風に揺られている。

そこには蜂や蝶も虫たちもいた。そして、手入れの行き届いた芝生が広がっている。

人工的に作られた自然公園だ。

公園の先には天井に届きそうな高い影が見える。  
鉄筋コンクリートのビルだった。

街が広がっている。

高層ビル群の間を縫うように張り巡らされた空に架かった透明な筒状のトンネル。その中をタイヤのない車が空を飛びながら行き交っている。

ステーションから発車したのは、磁気浮上式鉄道だ。  
失われた時代。

世界に住む者たちは、それをロストテクノロジーと呼んだ。  
広大な自然公園の中には湖と大河があった。

増水があつたのだらうか、乾いた大地に船が乗り上げ、木片など

の細かいゴミも散らばっていた。

その中に人影があった。

まだ子供だろうか？

それは少年だろうか？

それとも……？

微かに微かに歯車の音がするような気がする。

空を飛んでいたスクーター型エアバイクが、旋回して川岸に下りてきた。

エアバイクを止め、地面に降り立った人影は、ゆっくりと、まるで怯えるような足取りで、少しずつ近づいてくる。

気を失っていたアレンの瞼が痙攣した。

眩しすぎる光。

目を開けたのはどれくらいぶりだろうか？

どれほど意識を失っていたのだろうか？

体が動かない まったく。

いつまで経っても視界が完全に開かない。

アレンは声を絞り出す。

「腹……減った」

ピクニック日和だ。芝生の上でお弁当を食べたら、さぞかし美味しいだろう。

なのに酷く寒く、体が動かないのだ。

アレンの視界の先でぼやけている人影は、驚いたように後退った。

「……ピーピーピー……ガガガ……」

そして、人間とは思えない電子音を発したのだ。

「ガガ……アナタハ……ガガ……あなたはニンゲン……ガガガ……

あなたは人間ですか？」

抑揚には乏しかったが、それは紛れもなく人間の声だった。

アレンは静かに瞳を閉じた。

「もうちょっと……寝かせろ……起きたら……飯食う……」

それは眠りについたと言うより、意識がプツリと切れた感じだ

った。

急に辺りが騒がしくなる。

パトランプをけたたましく点灯させたエアカーが、ぞくぞくと集まってきたのだ。

木々に止まっていた鳥たちが一斉に飛び立った。

それは事件だった。

アレンの出現はこの都市にとって、何千年ぶりかの大事件だったのだ。

失われた歴史の続きが、紡がれようとしていた。

ベッドの上で目を覚ました。

粗末なベッドだった。

土壁の狭い部屋で、泥臭く、獣の臭いもする。

「……………」

頭を押さえながら少年はベッドから這い下りようとしたが、全身が酷く痛んで上体を起こすことすらできなかった。

「くっ……………」

自分の躰を観察する。

着せられているのは麻の粗末な服だ。右上で包帯が巻かれ固定されている。左脚も同じように固定されている。どちらにも添え木が入っている。

服をめくり上げると、肋骨のあたりが蒼く変色していた。

「……………ここも折れているのか」

ほかにも打撲や擦り傷、無数の傷が体中にあった。

ドアの先から気配がした。

少年は身構えるが、それ以上の行動は取れなかった。

部屋に入ってきたのは15、6の娘。

「きゃっ」

いきなり少年を見て小さく悲鳴をあげた。

そして、すぐに頭を下げた。

「ごめんなさい、起きていると思っていなくて。体調は大丈夫ですか？」

「見ればわかるだろう」

少年はぞんざいに言った。なまいきな感じがする。

しかし、娘のことが嫌いなわけではないらしい。

「君の名前はなんと言う？」

「ラーレと言います。あなたは？」

「朕は……朕は……」

「チンさん？ 珍しい名前ですね」

「いや……そうではない……名前が……思い出せないのだ」

少年の顔から一気に血の気が失せた。

記憶喪失。

ラーレは戸惑ったようで、相手の言葉を理解するのに時間を要した。

「名前が思い出せないって……もしかして、ほかの記憶も？」

「ほかの記憶？」

「どこに住んでいたかとか、家族は？」

「……駄目だ。なにも思い出せない」

力なく少年は首を横に振った。

ラーレはタンスの中から服を取り出した。

「あなたが着ていたものです。とても高価そうなので、身分のある方では？」

少年はその服を片手で受け取った。

ところどころ痛んだり破けているが、肌触りの良い上等な布だ。

金糸の刺繍が施され、煌びやかな色彩の服。この世界で数少ない貴族階級が着るような服だった。

「朕はなぜこんな怪我をしている？」

「ここ数日、川がずっと氾濫していて、漁もできず荷の運搬もできず困っていたんですが、きのうになってやっと水かさが減り、父が村に売りに行く荷を運ぼうと船を出そうとしたところ、川岸であな

たを見つけたそうです。全身傷だらけで、家族の間では川の氾濫に巻き込まれたのだろうって……」

開かれたままだったドアの向こうから、子供の声が聞こえてくる。「お姉ちゃん！ 大変だよ、早く着て！」

すぐに若い少年が部屋に飛び込んできて、ビクツとして瞳を丸くして姉の後ろに隠れた。

それが自分に向けられたものだと知って少年は、いかにも嫌そうに鼻で笑った。

「これだから子供は嫌いなんだ」

「な、なんだよ、おまえだって子供じゃないか！ ぼくよりは年上みたいだけど」

前半の威勢はよかったが、後半は尻すぼみして姉の後ろに隠れた。ラーレは弟の頭を撫でながら、

「弟のカイです。まだ幼いので村にもあまり連れて行ってもらえないので、他人が珍しいんです、勘弁してあげてください」

急にカイが慌てた。

「そうだ、お姉ちゃん父さんが大変なんだ！」

「お父さんが？」

「死んじゃいそうなんだよ！」

「えっ、そんなまさか!？」

大柄な男が部屋に入ってきた。

「おいおい、まだ俺は死なないぞ。ちょっと銃弾が当たっただけだ。あと顔面も殴られた」

がたいも良く長身の男だが、顔は人なつっこい笑みを浮かべている。が、その片方の元は腫れて青あざになっている。さらに裸の上半身の腹には包帯が何重にも巻かれていた。少し包帯に血が滲んでいるのが伺える。

「だいじょうぶお父さん!？」

ラーレは慌てて心配そうな顔で、父の腕にすがりついた。

「だからちよっとした怪我だ。大したことない、軍人だったところに

比べればかすり傷だ。それより、坊主目え覚ましたみたいだな、どうだ調子は？」

顔を向けられた少年は無言だった。不愉快そうな顔だ。代わりにラーレが説明する。

「名前も思い出せない記憶喪失みたいなの」

急に父親は少年に顔を近づけてきた。

「おまえさんの顔、どっかで見たことあるんだよなあ？ 村の坊主……にしては、高価な服着てやがったな。俺がお偉いさんの息子を見る機会があるとしたら、軍人だったころだが……」

どンドン近づいてくるオヤジを嫌そうに少年は顔を背けた。

急にカイがはしゃぐ。

「父さんは帝國の軍人だったんだ。すっごい強かったんだぞ！」

「出世はしなかったがな、する気もなかったんで引退して、今は人里を離れて農場を経営してるんだ」

少し自慢そうに父親は鼻を高くした。農場経営が順調なのだろう。なにかが引つかかったのか、少年は難しい顔をして小さく呟く。

「……帝國」

父親の耳にも届いたようだ。

「帝國つていつたら、シユラ帝國に決まってるだろう。嫌われたり畏怖されたりしてたが、帝國のお陰でなんだかんだ言って国は豊かだったんだ。それが今じゃ……治安は悪くなる一方で、世界中で暴動やら戦争が起きてやがる。この怪我也そのせいで負わされたんだ、村にどっかの武装団が攻めてきてよ」

世間では革命家トツシユの英雄譚と語られている。

だれがああシユラ帝國が滅亡することを予想しただろうか？

あまりにも突然で、世界中のだれもが信じがたい出来事であった。鋼の要塞アスラ城が水に沈み、城にいた者で生存を確認された者は、今のところひとりもない。

独裁国家であるシユラ帝國にとって煌帝は絶対的な存在であった。さらに実質的な国内ナンバー2だった？ライオンヘア？を失ったの

も大きい。

すぐにシユラ帝國は分裂し、国として維持ができなくなってしまった。そして、世界最強の軍事国家がなくなったことで、諸国のパワーバランスが崩れ、各地で戦乱が起きはじめたのだ。恐怖政治を敷き、他国から畏怖されていた帝國がなくなったことで、逆に世界が乱れるとは皮肉な話だ。

部屋にクリーミーな匂いが漂ってきた。

父親はクンクンと鼻を動かした。

「そういや、今日はシチューだとき。うちのカミさんのシチューはうまいぞ、乳もウチで搾ったもんだ。たんまり食って早く怪我なんて治しまいな！」

「それはこっちのセリフだ」

少年は鼻でクスリと笑った。悪意のない、純粋な笑みだった。

記憶喪失の少年が目を覚まして、数週間の日数が経った。

今でも記憶は戻らない。

名前がないのでは不便だと言うことで、アレクサンダーと名付けられ、愛称はアレックスにされた。アレックスがなぜだと尋ねると、父親は昔飼ってた犬の名前だと答えた。それを聞いたアレックスは不満そうにしたが、その犬がとても優秀で家族から大層可愛がられていたことをラーレに聞かされると、とくに文句を口にするこゝもなくなくなった。

アレックスは家族として、この家に迎え入れられたのだ。

父親のアントン、母親のシモーネ、姉のラーレ、弟のカイ。アレックスの年齢はわからなかったが、とりあえずラーレの弟、カイの兄として扱われることになった。

農場では多くの山羊を飼っていた。この毛色の黒い山羊たちから、毛を刈り取り、さまざまな材料とし、その乳は食用として飲むだけでなく、チーズやバターなどの加工品になる。

晴天のもとで山羊の乳を搾っていたラーレのもとに、アレックス



が松葉杖を突きながらやって来た。

「なにか手伝うことはないか？」

「無理しないで休んでいてください」

「世話になっている分は、なにかするよ」

アレックスの言葉遣いは、時が経つにつれて当初よりも、くだけてきていた。

怪我が治りはじめ、身体が動かせるようになってから、アレックスは積極的に身体を動かした。その中で農場の手伝いもするようになっていた。

風が吹いた。

「いい匂いですね」

ラーレの言葉にアレックスは、不思議そうな顔をする。

「なにがだい？」

「草の匂いです。見てください、川岸に草が生えはじめたんです。

この辺りは乾燥地帯で、草木はあまり生えていなかったのに」

「なぜ生えるようになったんだい？」

「理由はわかりません。川の増水が治まって、水が引いた場所に草が生えはじめたんです。びっくりするくらい急激に成長して。村で話を聞いたんですけど、各地でそういうことが起きてるみたいで、場所によっては森が現れたとか……びっくりするけど、草木で大地が溢れるのはなんだかうれしいです」

これまで世界は砂漠に被われていた。

砂漠といっても、砂だけの世界や岩や連なる崖など、その深刻さは地域によってさまざまだった。

シユラ帝国のアスラ城があった場所は、まさに灼熱の地獄であり、城以外は砂だけの世界だった。しかし、現在ではその周辺は巨大な湖となり、そこから各地に流れる河の周辺には草木が生い茂っている。人々はそれを奇跡と呼んだ。

生きるのに必要な大切な水資源。だれもが手放して喜んだ。些細な異変などだれもが目をつぶった。

ミルクを湛えたバケツをラーレが持ち上げたのをアレックスが見た。

「持っていくよ」

「いいです、片手じゃ大変ですから」

右腕はギブスで固定されている。左脚は松葉杖を必要とし、液体の入った重たいバケツを持つには不安が過ぎる。

「持つと言っているんだから、朕が持つ」

少し強い口調で言われた。

「わかりました……しっかり持つてくださいな、気をつけて」

ラーレはバケツを持った手を差し出した。そして、バケツを受け取るうとしたアレックスの手を触れあつた。

ほのかに頬を赤くしたラーレ。それを見て、つられるようにアレックスも頬を赤くした。

「行くぞ」

無愛想に行つてアレックスが、バケツを持つて歩き出そうとしたとき、大きくバランスを崩してしまった。バケツの中で飛び跳ねたミルクが地面に溢れる。

やはり怪我をしたアレックスでは 違った。

「きやつ！」

叫び声をあげたラーレが倒れて地面に手を突く。

大地が呻いた。

轟々と激震が一撃大地に奔つたのだ。

山羊の群れが逃げていく。

鋭い眼をしたアレックスの視線の先には、大地を穿つた大穴から硝煙が立ち上がっている。それは天災などではなく、明らかな人工的な攻撃だ。

微かに足から伝わってくる振動。

地平線の向こうから隊を成してやってくる。軍隊だ、武装した軍隊が進撃してきたのだ。

叫ぶアレックス。

「家族に知らせる、早く行け！」

「でも置いては……」

「だからこそ怪我のしていない君が行け、明らかな敵意を持っていると家族に早く伝えるんだ！」

ラーレは唇を噛みしめ、後ろ髪を引かれながら家に向かって駆け出した。

軍隊の前衛は巨大な飛べない鳥　クエツク鳥に跨った騎鳥部隊だ。兵士だけでなく、クエツク鳥も軽鎧「けいがい」を装備している。兵士の装備は銃剣だ。

その後ろからは戦車部隊。砲台をこちらに向けている。

ひとり残されたアレックスはなぜか笑っていた。

「なぜだか……血が騒ぐ。この躰がなにかを覚えているとでもいうのか……？」

少年とは思えない悪魔の笑み。

波乱を予感させた。

## 逆襲の紅き煌帝「不気味な足音（2）」

クーロンは今、軍隊に包囲されてから3日、小康状態に入ってから24時間以上経っていた。

もともとシユラ帝國の領土内にあつたクーロンは、自治は独立したものとして、自由の名の下に繁栄と陰を築き上げてきた。生活水準や科学水準もほかの都市に比べ飛躍して高く、スラム街ですら近隣の村よりもよい生活をしていた。

シユラ帝國が自然解体された今、クーロンを我が手中に収めようとする者が出るのは必然。今まではシユラ帝國の報復を畏れていた新興国が、クーロンに攻め入ってきたのだ。

武装には武装。

新興国軍との緊迫状態が続いているのは、クーロンが軍事都市の顔を持つているからだ。

都市を高い壁で囲むのは、古代から行われてきた防御策である。クーロンの市壁は強固な合金でつくられており、壁、見張り塔、市門から成り立っている。高さは3階建ての建物を優に越し、厚さも大人が手を広げたほどだ。

見張り塔からには砲台も備え付けられている。火薬などではなく魔導砲である。1発で都市供給の電力を食いつぶし、辺りを焼き尽くすほどである。それが5機、都市の周りに備え付けられている。新興国軍がなかなか攻め入ってこないのこのためだ。

しかし、すでに1機破壊されている。

それによって敵は甚大な被害を被り、3千を越える多くの死傷者を出したが、クーロン側も大きな痛手となった。守りが薄くなった箇所をどう守るか。敵はまだ2万以上の師団を組んでいる。

現在、クーロンの電力は完全にダウン。防衛に必要な最低限の電力は確保されているが、市民たちのライフラインは完全に停止させられている。

ときは夕刻。日が暮ればクーロンは劣勢に追いやられる。シスター・セレンは聖堂にて祈りを捧げていた。

普段は寂れた教会であるが、今日ばかりはひとが多かった。

市内放送のラジオで状況を確認しながら、人々は疲弊して怯えている。

シスター・セレンはそれらの人々を励ましながら、夜に向けて蠟燭の準備などを着々と進めてた。

いつまでこの状況が続くのか？

外壁都市は戦いが長く続けば続くほど、物資が枯渇していく。魔導炉によって、都市で自家発電はできるが、物資はそうもいかない。教会に集まって来た者はスラム街に住む者たちが多い。彼らは食料の蓄えもない者たちだ。シスター・セレンは教会ので蓄えていた食料を少しずつ分け与えているが、とてもじゃないがそれでは足りない。先ほどもひとり食料を奪って独占しようとして、最終的には袋たたきになって、教会の外に身ぐるみ剥がされ放り出されたばかりだ。

敵は外だけではなく、ひとの心の中にもいる。緊迫状態が続けば、ひとの心は乱れ、中には暴動を起こす者も出てくる。敵がいれば一致団結できるなんてことはない。危機的状況だからこそ、ひとは自分のために他を犠牲にすることもあるのだ。

物資が枯渇し、都市内部で暴動が起きはじめ、今や電力供給のストップし、市壁の一部も守りが弱くなっている。そして、外には2万を越える軍隊。

セレンは礼拝堂の外に出た。

ひと気はない。

都市は静まり返っているが、異様な空気感と緊張感が漂っている。そんな中にありながら、庭の花々は美しく咲き誇り、セレンの心を癒やしてくれた。

「シユラ帝國がなくなつて平和になるなんて嘘だった……。はじめのうちはよかつた。この教会を支えてくれるひとたちが増えて、と

くにトツシユさんにはたくさんお金を寄付してもらっているし、物資だつて定期的に届けてもらつてる」

花々は気高く咲いている。

「この庭が泥に埋まってしまったあと、だれかがこんなにもすばらしい庭園をつくってくれて、なんだか世界もこれからよい方向に変わっていくと……信じていたのに」

世界の情勢は悪くなるばかり。

「どうして人間同士が争わなくてはいけないの」

戦争の原因はさまざまであるが、今回は宗教や思想の対立によるものではない。シユラ帝國亡きあとの覇権と資源を巡つての戦いだ。進行国軍がクーロンに攻め入ってきたのは、その都市資源を奪うためだ。のどから手が出るほど敵が欲しているのは、ロストテクノロジーだろう。クーロンはロストテクノロジーによって、下支えされているが中でも飛び抜けているのが、魔導炉の存在である。

この場所にロストテクノロジーの魔導炉があつたからこそ。砂漠のど真ん中に存在するこの都市はここまで繁栄することができた。

魔導炉の原理は現在の科学では解き明かせないが、おそらく半永久機関であると考えられている。絶え間なく供給されるエネルギー。このエネルギー資源を敵が放つておくわけがない。

敵は都市ごと欲しいと思つている。そのために破壊は最低限に留めていると思われる。そうでなければ、もっと戦いは激化して、空からの攻撃で都市が爆撃されて火の海に沈んでいただろう。

目尻の涙を拭いたセレンは教会に戻ろうとした。

「食料も底をついてしまいそう。貯金を切り崩していても、少量価格が信じられないほど高騰しているし……」

肩を落として歩いていると、微かな気配を感じてセレンは振り返つた。

突然、目の前に現れた影。

下着姿の男だ。変質者ではない。身ぐるみを剥がされた？男？だ。

「さつきはよくも！」

「？男？は怒鳴りながらセレンを押し倒した。

「きゃっ！」

完全な逆恨みだ。

セレンは平等に食料を分け与えていたし、この？男？が袋叩きにされているのですら止めに入ったのだ。

怯えるセレンの頬が殴られた。

血走った？男？の眼は狂気に駆られている。相手が女子供だろうが、聖人だろうが関係ない。この？男？はもう自ら止まることはなく墮ちるところまで墮ちていくのだ。

「？男？はセレンを羽交い締めにしながらか、礼拝堂の中に入っていた。」

暗い面持ちをしていた人々が顔上げ、驚きと共に瞳を？男？とセレンに向ける。

視線を注がれセレンは気丈に微笑んだ。

「だいじょうぶですから、なにも心配ありません」

だが、？男？によつて髪の毛を引っ張られた。

「うっ！」

「この偽善者がっ、うるせー黙ってる！」

この？男？を袋だたきにした奴らは、腰を浮かせて今にも飛び出しそうだ。けれど、それを抑えているのはセレンの存在だ。

「？男？は要求をする。」

「食料を全部出せ、あと服もだ。おい、そのあんた、服を脱いで俺に渡せ！」

命令されて顔を伏せて椅子に座っていた若者が立ち上がった。青年だった。

「シスターには手は出さないください。僕の服であればいくらでも差し上げますから」

少し怯えた声で、青年は上着を一気に脱ぎはじめた。

へそが見え、頭から服を抜こうと顔が隠れたとき、？男？は度肝を抜いた。ほかの者たちもそうだ。

青年だと思っていた者の身に豊満な胸があったのだ。いや、服の上からはそんなものなどなかった。だからみな驚いたのだ。

服を脱ぎ捨てた青年。そこにあったのは青年の顔ではなく、金髪の女の艶笑であった。

「この躰はタダじゃないわよ」

女が言った刹那、？男？は後頭部から脳漿を噴き出して倒れていた。

遅れてセレンが叫ぶ。

「きゃあああっ！」

目の前でひとが死んだ。

？ライオンヘア？は銃を構えて微笑んでいた。

男を殺し、セレンを救ったのはライザだったのだ。どういう技術を使ったのかわからないが、ライザは青年の身に変装していたらしい。よくリリスも同じことをしていた。

ライザは何事もなかったように、床に落ちていた服を再び着る。

場は完全に凍り付いていた。

ライザは辺りを見回した。

「だれか屍体を片づけておいてちょうだい。アタクシはシスターとおしゃべりがあるから、それでは失礼するわ」

呆然と立ち尽くすセレンの腕を強引に引っ張ってライザが歩き出す。

教会の奥へと進み、適当なドアを開けて、部屋の中に入った。

セレンはパニック状態でなにがなんだかわからなかった。

一方、落ち着き払っているライザは、ベッドに腰掛けて座って足組をした。

「久しぶりね、元気にしていたかしら？」

「え……あっ……助けてくれてありがとうございました」

お礼を言う顔は暗い。自分を救ってくれたとはいえ、目の前でひとが死んだ。自分のせいで死んだとセレンは心を痛めていた。



「暗い顔しちやって、アタクシがシスターになにかすると思ってた？」

「いえ……そういうわけでは……」

「過去にいろいるあつたことは認めるわ。今回は取り引きなしに、アナタに協力して欲しいことがあるの」

「なんででしょうか？」

「単刀直入に言うわ。一匹狼さんと連絡を取りたいの」

「トツシユさんのことですか？」

「ええ」

これまでライザとトツシユの間には因縁がある。反乱分子だったトツシユは、帝国のライザに何度も命を狙われていた。それは本気だったかどうかはさておき。

セレンは口を結んだ。

それを見取ってライザは微笑む。

「教えたくないってわけね。しかし、トツシユに危害を加えるつもりはないわ。と言っても信じてもらえるかはわからないけれど」

セレンは口を開かない。

自虐気味にライザは鼻で笑った。

「ぜんぜん信用されていないのね。べつにいいけれど嘘つきなのは認めるわ。最近も大きな嘘をついたもの。ねえ、帝国が水に沈んだあと、アタクシがどうなったか噂を耳にしたかしら？」

「死んだもの噂されていました。だから大臣も今では好き勝手に軍を率いて侵略行為を……。私はライザさんが生きているような……ほかのひとたちもそうだと思っていました」

「そう、生存者はひとりも確認されていないものね。だから、アタクシもそれに便乗して死んだことにして身を隠していたのよ。なのに、どうやら最近生きていることがバレってしまったらしく、いろんな敵に追われ命を狙われて、人生でもっとも最悪だわ」

溜め息を落としてライザは前髪をかき上げると、さらに話を続けた。

「どうして身を隠していたかわかる？」

「どうしてですか？」

「帝國が滅亡すれば、皇帝がいなくなれば、世間が荒れるのは目に見えていたわ。当然、アタクシを邪魔だと思ふ輩が狙ってくることは容易に想像できたわ。でもね、そんな奴らは小者よ、小者。あつという間にアスラ城が水の底に沈んだとはいえ、生存者が確認できないっておかしいと思わない？」

陰謀を予感させる言葉だった。

ライザは妖しげな笑みを浮かべつつ、その眼は鋭くなった。

「最終的には水責めで溺れ死んだ者が大半だけれど、その前に多くの兵士たちが何者かに殺され、退路という退路も断たれ破壊されていたのよ。逃げ場を失い右往左往している間に水の底」

「ライザさんはどうやって生き延びたんですか？」

「手の内はあまり明かさなない主義なの。言えるのは自分一人で精一杯だったということ」

苦虫を噛み潰したような顔をライザはした。すべて捨てて逃げたのだ。

多くを失ったライザは新天地を求めた。

「最近、トツシユは英雄として貧困層から絶大な支持があるみたいね。彼を支えようと革命軍も戦力を伸ばしているみたいだけれど、まだまだ弱い。けれど支持する人数は多い。アタクシはべつに世界平和を願ったり、自分がトップに立って世界を支配する気なんてないわ。ナンバー2くらいが自由に動けて良いもの。だからアタクシは今後誰に付こうかと考えて、トツシユに決めたのよ。アタクシの身の安全を確保してもらう代わりに、アタクシの頭脳を革命軍に提供するわ。素敵な取り引きだと思わない？」

「本当にトツシユさんがどこにいるか知りません。連絡はたまにありますけど、各地を転々として逃げ回ってるみたいで」

「各地を転々としているらしいのは知っているわ。でも逃げ回るといふのはなぜ？」

「英雄なんて祭り上げられるのは嫌なんだそうです。革命軍のリー

ダーになってくれとも言われているみたいですが、一匹狼が自分の性に合っているって」

「まだリーダーではなかったのね。声明で彼の功績が伝えられているけれど、実際は各地で彼の名前が勝手に使われているだけなのね。そうだとは思っていたけれど」

噂に尾ひれがつき、やがて英雄は神格化される。革命軍の思惑は、いかにトツシユを祭り上げ、人々を引き込んでいこうというのがあ  
るのだろう。

「革命軍に名前を使われるだけではなくて、悪いことにも自分の名前が使われるってトツシユさんが憤っていました。ある村で自分の名前を語った偽物が、金品を要求したり、女に言い寄ったりして、腹が立ったから自ら出向いてボコボコにしてやったと、こないだの手紙には書かれていました」

「居場所がわからなくても、こちらから連絡はできるのでしょ？」

「いいえ、それがいつも一方的な連絡で」

「最近、どのあたりにいるかも見当つかない？」

セレンは首を横に振った。

突然の爆音！

小康状態が破られ敵が攻めてきたのか！？

急いでセレンは礼拝堂に走った。

そして、思わずセレンは絶句した。

燃えていた。礼拝堂が燃えていたのだ。天井には攻撃を受けた穴が空いていた。

逃げ惑う人々。瓦礫の下敷きになった者。床に転んでいる少年。

セレンは少年に手を貸そうとした。だが、その手はライザによって引かれ、強引に礼拝堂の外に出されたのだ。

都市は騒然としていた。

夕焼けよりも赤く染まる都市。

空から次々と炎が降り注いでくる地獄絵図。

クーロンは一瞬にして戦渦に沈んだのだった。

### 逆襲の紅き煌帝「不気味な足音（3）」

騎鳥部隊の中から、単独でアレックスのもとに近づいてくる男がいた。

「どこのガキだ？ この農場のガキなら親のところ案内してもらおう。この農場はこの瞬間から我々の物になった」

男の顔にはいくつもの傷があった。軽鎧で隠され見ないが、その軀にも傷がある。死んでいてもおかしくない傷の量である。幾多の戦いの中で先陣を切ってきた切込隊長だ。

アレックスはまったく動じていない。少年がするとは思えないほど冷やかかな眼だ。

「軍を引け、そして立ち去れ。ここから先に進むことは決して許さんぞ」

「いい眼をする。俺の元で兵士にならないか？ おまえと同一年くらい奴らもけっこういるぞ？」

「断る」

即答だった。

切込隊長は見下して嗤う。

「ならおまえの首を手土産に、親御さんにあいさつでもするか」

腰のサーベルを切込隊長が抜いた刹那だった。

悲鳴があがった。

「ギエエエツ！」

クエツク鳥が奇声を発したようだった。人間がそんな声を出す事態とは？

アレックスの指が切込隊長の両眼に突き刺さっていたのだ。

そのまま眼窩「がんか」に指を突っ込んだまま、相手の顔面を自分に引き寄せて、アレックスは膝蹴りを喰らわせた。

それらは刹那の出来事であった。

クエツク鳥から落ちた切込隊長は地面にうつ伏せになったまま動

かない。

少し先に見える隊列がざわめき立った。

「そして、軍隊は進撃してきた。」

勝てるかどうかなど関係ない。アレックスはひとりでその軍隊に立ち向かうつもりだった。ここを動かさず迎え撃つ。

しかし、思わぬ事態が起きた。

遠くから聞こえた爆発音。家の方角からだ。

アレックスは目を凝らした。

「まさか……挟み撃ちだったのか！」

軍隊は一方からではなく、二方向から攻めてきていたのだ。すでに向う側は家のすぐ傍まで攻め入っている。

アレックスは前方の軍隊を無視して、松葉杖を捨てた代わりに切込隊長のサーベルとクエック鳥を奪い、すぐさま家に向かって全速力で駆け出した。

家の土壁を穿つ砲撃の跡。家の前ではすでに長剣とサブマシンガンを構えた父アントンが、敵兵と一戦を交えていた。

兵士を切り捨てたところで、現れたアレックスを見てアントンは微笑んだ。

「無事だったか」

「家族は？」

「地下に避難させた。その手についた血はおまえのじゃないな？」

「ひとり殺った」

「そうか」

アントンは哀しげな瞳でアレックスを見つめた。

軍勢をすべてちっぽけな家に向けてくることはないが、兵士たちが次々と近づいてくるのが見える。

怒り含んだ溜め息を吐いた。

「くそつ、奴らの目的は農場だ、腹が空いては戦は出来ぬってな。」

だから俺たちの命を奪うことに躊躇いはないだろう。今からでも降伏すれば命だけは助かると思うか？」

「さあ」

「なら俺の命と交換で、家族と、そしておまえの命を助けてくれって交渉しても無理か？」

「朕の命は一度亡くしたも同然。拾ってくれた者のために使うなら、それもいい」

銃声が鳴り響く。雨のような銃弾が飛んでくる。敵も本気を出してきた。

「地下室に取りあえず逃がしたが、相手の出方を見ると事態は最悪だ。ずっと隠れていても助からないだろう。俺が囷になって時間稼ぎするから、隙を見て家族を連れて船で逃げる。頼んだぞ！」

アントンはアレックスからクエック鳥を奪い、家から離れるように、そして兵士たちの目を引きつけるように、サブマシンガンを乱射しながら、縦横無尽に駆け出した。命を犠牲にしようとしているのは明らかだった。

銃弾を躲しながらアレックスは家の中に飛び込み、ギブスの脚を引きずりながら急いで地下室へ向かう階段を下りた。

暗闇に包まれた地下で視界を閉ざされる。

「アレックス、こっち」

どこかからラーレの声がした。

ぼわっと微かに明かりが灯り床の下から顔を出すラーレが見えた。石床の一部が外され、その先に家族3人が身を潜めていた。アレックスが中に入り、石床のふたを閉め、空間の先を眺めると、そこは洞窟として奥深くまで続いていた。

「お父さんは？」

尋ねたラーレにアレックスは沈痛な面持ちで顔を横に振った。

急に泣き崩れたラーレが母シモーネにすがりつく。それで弟の力も理解したようだ。カイがアレックスに掴みかかる。

「父さんが……ウソだ！」

「船を使って逃げるように言い付かってきた」

あえて生死については言わなかった。変に期待を持たせ、家族が

この場を離れないと言い出すことは、アントンの望むところではなかったからだ。まずはこの場を逃げ切ること。

母は気丈だった。

「この洞窟を抜けると地上に出るわ。早く行きましょう」

ランプが照らす道を4人は進む。足音とすすり泣く音だけが聞こえた。

やがて見えてくる地上の光。それは希望かそれとも……。

川の音が聞こえた。

連なる崖影のわかりづらい場所に出口はあった。

遠くから戦乱の怒号が聞こえる。アレックスはまだアントンが生きていることを予感した。だが、それを口に出すことはしなかった。小走りで先に進むと、仕事で使っている小型の貨物船が見えてきた。

しかし、その周りにはすでに兵士たちの姿。

地面にうつ伏せになって4人は身を潜め、兵士たちのようすをうかがった。

兵士の数は3人。船の上に2人と、川岸の見張りが1人。銃剣で武装している。

「ここにいろ」

アレックスはサーベルを構えて立ち上がった。

怯えた表情でラーレがアレックスの手首を掴んだ。そして、無言で首を横に振る。だが、アレックスはその手を振り切って、脚の怪我を無視して全速力で走り出した。

最初に気づいたのは見張りの兵士だ。

「どこのガキだッ！」

ガキだからといって容赦ない。サーベルを構えているアレックスに銃剣を向けられた。

ほかの兵士2人もアレックスの存在に気づいた。

斬撃が奔る。

2人の兵士が気づいたときには、見張りの首が地面に落ちたあと

だった。

アレックスはギブスをしていない脚を蹴り上げ、船の甲板まで跳躍して見せた。その距離じつに5メートル以上。怪我をしていなくても、常人が片足で踏み切れる距離ではなかった。

尋常でない発汗をするアレックス。彼の躰に異変が起きはじめていた。

怯えた兵士が銃を乱射する。

銃弾がアレックスの頬を掠め、赤い筋を奔らせる。その肩にも、その腹にも銃弾を受けた。

しかし、アレックスは修羅のごとき鬼気を発して怯まない。一歩たりとも引かなかった。

突き立てられた銃剣の刃を片腕のギブスで受け止め、アレックスはサーベルを薙いだ。

兵士の胸が真つ二つに割られた。

それだけではない。金属のサーベルが砂のように崩れ、斬撃が起こした風の刃が残るひとりの兵士の躰を細切れにしたのだ。武器がアレックスの力に耐えられない。そんなことがありえようか？

血に染まる甲板。

「朕はいつたい何者だ？」

自問自答するアレックス。

「きゃーっ！」

遠くから悲鳴が聞こえた。

家族3人が敵に兵に捕まっている！

アレックスはすぐに駆けつけた。

そして、辺りが大勢の兵士たちに取り囲まれていることに気づいた。家族を捕らえている数人の兵士と、その頭上の崖の上に隊を成している兵士の列。

人質を取られたアレックスは身動きが取れない。3人は羽交い締めになれ、自力ではとても逃げられそうもない。たとえ逃げても、すぐに周りの兵士たちにまた捕まるだろう。



兵士のひとりがないかをラーレたちの足下に投げた。  
絶句。

悲鳴すらあげられなかった。

それは首であった。見るも無惨に傷つけられた生首。ぐしゃにされた顔に面影が残っている。

世界を震撼させる鬼気をアレックスが放った。

「おのれえええッ、下賤な者どもがアアアッ!!」

武器も持たずアレックスが敵のど真ん中に突っ込む。

雨のような銃弾が発射される。

どんな強靱な肉体を持っていようと、この銃弾を浴びせられては死ぬだろう。

突然、シモーネが兵士の腕を噛み、どうにか振り切ってアレックスの元に駆け寄った。

シモーネによって押し倒されたアレックス。二人は地面に倒れ込んだ。

瞳を丸くするアレックスの頬に、血の雨が降ってきた。

「朕を庇ったのか……莫迦な……ことを……」

「命を無駄に……ぐふっ……しないで……」

「それは朕の台詞だ」

子供らの悲鳴があがる。

「お母さん!!」

「母さん!!」

シモーネは力なくアレックスに被さり、耳元でなにかを囁く。

「夫が言っていたわ……もしかしたら……あなたの正体は……」  
最後まで言わずに事切れた。

幽鬼のようにゆらりと立ち上がったアレックス。

「……母が死んだ」

脳裏にフラッシュバックする光景。

目の前で貴婦人が護衛の兵士に刺されて死んだ。

「また朕を庇って……母が……」

急に空が曇りはじめ、稲妻が泣き叫んだ。

そして、黒い雲よりもさらに黒きものが、稲妻を帯ながら雲を断ち切り天から降ってきたのだ。

不気味に輝く漆黒の大剣。

一撃で地面に亀裂を奔らせたその剣は　まさに煌帝の証　黒の剣！

少年とは思えぬ、まして人間とも思えぬ艶やかな笑みを浮かべたアレックス。

兵士たちがざわめいた。

黒の剣　の柄を握ったアレックスは、その大剣をゆるりと優雅に薙いだ。

風も起こさぬその所作。

しかし、実際は撃風の刃が崖の上にいる兵士たちを切り裂き、吹き飛ばし、一撃で一掃していた。

天災に等しき破壊力。

怪我を負って地面に這いつくばった兵士が呻く。

「ま……まさか……その黒い剣は……暴君が生きていた……だと次々と兵士たちが叫びはじめる。

「煌帝ルオだ！」

「シユラ帝國の暴君だ！」

「恐ろしい　黒の剣　を持っているぞ！」

「怯むな、相手はただの小僧ひとりだぞ！」

アレックス　ルオは不気味に嗤った。

「ルオか……そんな呼ばれ方をしていた気がする」

まだ記憶が完全に戻ったわけではなかった。

しかし、その手元には　黒の剣　が戻った。

黒の剣　がルオを主と認めたのだ。

銃弾が浴びせられルオの身に風穴が空く。

流れ出した血が　なんと逆流するではないか！？

傷痕が弾丸を吐き出し、見る見るうちに塞がっていく。

「うおおおおッ！」

魔獣の叫びをあげたルオが兵士に切り込む。

鬼気に肝を潰された兵士は身動きができなくなり、姉弟が自然と解放された。

黒い血が舞う。

ラーレの目の前で崩れ落ちる肉塊。瞳に焼き付く。この虐殺の光景を生涯忘れることはないだろう。

黒の剣が兵士たちの四肢を切り飛ばす。ひとりひとりだ。まとめて薙ぐことができるにも関わらず、ひとりずつ細切れにしているのだ。

悪夢であった。

乾いた大地が鮮血を吸う。

やがてそこは緑に変わるだろう。多くの屍の上に、この大地は成り立っている。

魔獣と化したルオはその姿さえも変貌させていた。

足下まで伸びたざんばら髪。肌を稲妻のように奔る黒い文様。瞳は血のように真っ赤に染まっていた。

兵士の数がひとり、ひとりと減っていく。

まだ命のある者が地で呻き藻掻いているが、この大地に立っているのは3人だけ。

ルオと姉弟の眼が合った。

怯えきっている。

魔獣に怯えているのだ。

姉の前に立ったカイは拾った小石をルオに投げつけた。

すぐさまラーレがカイを自分の後ろに隠す。

頬に石を受けていたルオは何事もなかったように歩き出す。

「船に乗って早く逃げる。もう二度と会うことはない……だから君たちを助けることも二度とない」

言い残してルオが振り返りもせず歩き続ける。

遠くにはまだ軍隊が見える。

敵の主力である戦車の影。

不気味に轟く曇天の空。

修羅場はまだまだ先にある。

この日、煌帝ルオの名が再び世界に響きはじめるのだった。

## 逆襲の紅き煌帝「不気味な足音（4）」

周りにビルが建ち並ぶスクランブル交差点を歩き交う人々。雑踏は今日も賑やかに華やかに、街は活気づいていた。

空に映し出されている巨大スクリーンには、生放送中のお昼のバラエティ番組が映し出されている。途中のコマーシャルでは、最新型の家庭用アンドロイドが映し出されていた。

空では魔導式のエアカーが管状道路を行き交っている。

さらに高い空を飛んでいるのは、羽のない魔導式の飛空艇だ。

非常ベルが鳴った。

覆面をした男がコンビニから飛び出してきた。手に持っているのはビーム銃だ。

すぐ近くを巡回していたパトカーがサイレンを鳴らす。

覆面男が人々を押し倒しながら逃げる。

先回りしたパトカーから警官が降りてきた。人間ではなかった。メタリックのボディを持つロボット警官だ。

人型のロボット警官は人間のように走り、覆面男に飛びかかった。動作は人間に似ているが、その脚力は遙か人間を凌駕し、腕力もゴリラ並みだ。さらに重量もあるため、押した倒されてのし掛かられた覆面男はひとたまりもない。

肋骨の折れる音がした。

苦痛で顔を歪ませた覆面男は逃げる気をそがれ連行されていく。

高性能ロボットたちは、今や人間の生活と切っても切れない存在になった。先進国では危険な仕事のすべてをロボットにやらせている。ほかに清掃業や肉体労働の分野でも多く活躍している。最近では、倫理の教師にアンドロイドが就任したというニュースが、話題になったばかりだ。

ロボットですら仕事に就ける時代なのに、いや、ロボットが仕事を奪ったからこそ、失業者も多かった。街の繁栄の影にあるホーム

と呼ばれる地域。そこはホームレスで形成されている街だった。

少女はいつも外の世界に憧れていた。向う側に見える華々しい街人々がみんな輝いて見えた。

しかし、現実には薄汚れた躰を包むボロのような服。髪の毛は硬くボサボサで、少し掻くだけでふけが落ちてくる。履き物は最近新しいのを見つけた。つま先に穴の開いた赤い靴だ。

まだ少女は幼かった。歳は六か七か、厳しい現実に晒されながらも、強く逞しく生きていた。親はいない、兄弟もいない、身内はだれもいなかった。けれど、周りの？男？たちは優しかった。

ホームでは争いが絶えない。だいたい食料が嗜好品の取り合いだ。少女は比較的食料を回してもらっていたが、それでも腹一杯に喰えることなんてなかった。

腹が鳴る。

今日も腹と背中がくつきそうだ。

食料を手に入れる方法は、もらうか、買うか、奪うかだ。

少女はまだまだ自分でお金を稼ぐことができなかった。いつも大人たちの施しで生活していた。

その日、少女はビルの隙間から街の様子を眺めていた。コンビニ強盗が警察に捕まった。奪うのに失敗したのだ。

自分だったら、もつとうまくやれるのに。

少女の心に芽生えた黒いモノ。

街中で赤い林檎が少女の瞳に映った。目の前を通り過ぎたのは、おそらく女性だ。眼鏡をかけた女性だった気がする。

この時代に眼鏡を珍しい。今はいくらでも手術で視力を回復することができるし、たとえ眼球を失っても再生するか、もしくはサイボーグ化することも可能だ。けれど、そんな時代だからこそ、たまに自然にこだわる者もいる。

眼鏡の女はなぜか林檎を片手に持ち、それを上に投げてはキャッチして、また投げてはキャッチし、それを繰り返しながら歩いていた。まるで引力に取り憑かれたような行動だ。

女のあとを白衣を着た男が追ってくる。

「レヴェナ博士！ 学会のパーティーを抜け出すなんて、またスポンサーに叱られますよ！」

まるで聞こえていないように、女は林檎を投げ続け歩いている。少女は白衣の男を押し飛ばして歩道を駆け抜けた。

瞳に映る真つ赤な林檎。なぜだろう、まるで宝石のように見えた。林檎が上空に投げられた瞬間、少女は類似希なる運動神経で跳躍し、女から見事に奪い取ったのだ。

女はぽかんと口を開け、

「……あ」

と、だけ呟いた。

代わりに叫んだのは白衣の男だった。

「泥棒だ！ その子供泥棒です！」

子供相手ではなく、殺人犯を相手にするような剣幕で叫んだ。

それに怯えたのは少女だ。

ただ林檎を奪っただけなのに、どうしてあの大人は怖い顔をするのだろうか？

次の瞬間、急に目の前に飛び出してきたパトカーに少女は撥ねられた。

まさか地上でこんなスピードを出している車に撥ねられるなんて。パトカーを運転していたのは、覆面男だった。奪ったパトカーで逃走中だったのだ。管状道路に入ってしまったって逃げ場はない。逃げるなら地上だ。

「かわいそうに」

呟いたのは眼鏡の女だった。

雑踏が静まり返っていた。

立ち止まる者、中には足早に逃げ出す者。

紅い海に沈む幼い少女。

右脚が股間からもがれ、右腕も同じもがれ、右の脇腹からは内蔵がはみ出してしまっている。パトカーがどれほどの時速が出ていた

か想像するに恐ろしい。

こんな重傷を負いながら、不幸なことにまだ意識があった。  
凄まじい苦痛。

アレンは大量の汗を拭きながら眼を覚ました。

「夢……か？」

ソファから上半身を起こしたアレンは周りを見た。

白く無機質な部屋だ。ソファ以外にあるのは、目の前の壁に取り付けられているモニターだ。それと、ソファのすぐ傍に花を一輪挿した花瓶が置いてあった。

「……腹減った」

どれくらい食べ物をお口にしていないのか？

「これでよろしければ」

アレンの目の前に差し出された手の上には、真っ赤な林檎が乗っていた。

林檎を手に取りながらアレンはゆっくり顔を上げる。若い男が立っていた。髪の毛を七三にした細身の男だ。骨と皮だけの躰というほど痩せているが、不健康そうには見えない。ただし、少し表情は硬い気がする。

男は微笑んだ。

「だれも食べたことはありませんから、味は保証できません」

「だれも食ったことないって……」

「心配はいりません。動物たちも食べていますから、毒はありません」

「あつそ……あんがと」

アレンは林檎に牙を立てて、引き千切るように食らい付くと、頬いっぱい口の中に入れた。

見つめる見るうちにアレンの表情が晴れやかになる。

「うまつ、これすげえうまいな！」

「それはよかった」

また男は微笑んだ。



アレンは林檎を食いながらまじまじと男を観察するように見つめる。

「なあ、ところであんただれ？」

「わたくしはこの街で唯一、音声言語で会話ができる人型アンドロイド ジャン・ジャック・ジョンソン。人間の友からはJ3（ジエスリー）と愛称で呼ばれていました」

「マジで、あんた人間じゃないの？」

「はい、この街には人間はひとりもいません。ようこそ、ロボット  
の楽園メカトピアへ」

教会があつという間に炎に包まれた。

空から次から次へと降り注いでくる焼夷弾<sup>しょういだん</sup>。

クーロンの街全体が燃えている。

直接炎に焼かれていなくても、熱風で火傷しそうなほど熱い。

「こんな非人道的な攻撃」

セレンの顔を彩る赤い絶望。

焼かれてるのは街だけではない。火だるまになった人間がのたうちまわっている。

ライザは訝しげに眉間に眉を寄せていた。

「おかしいわ、こんな攻撃を仕掛けてくるなんて。魔導炉まで破壊するつもり？」

科学財産まで破壊する道理はないはずだ。侵略者の目的は、都市をそのものを奪うことだったはず。

炎の魔の手は瞬く間に広がり、すぐセレンたちの傍に迫っていた。「早く逃げましょう、ここは熱風がすごくて。そうだ、川の中に逃げれば！」

帝国水没後、各地を流れるようになった大河。そこから枝分かれた水脈が地下を通して、クーロンの街にも沸きだし川になっていた。

すぐにライザがセレンの腕を力強く引いた。

「死にたいのなら止めないわ。あれを見ても川で泳ぎたいと思う？」  
その光景を見てしまったセレンは吐き気に襲われ、思わず目を伏せてしまった。

暑さに堪えかね逃げ惑う人々が川に飛び込む。中には火だるまになつていた者もいた。だが、川は天国でもなんでもない。

川は煮えたぎっていたのだ。

地獄の鍋で生きたまま煮られる人間。

悲鳴が耳の奥にこびりついて離れない。

ライザは辺りを見回して頭を猛回転させていた。

「これはただの炎じゃない。地下に逃げたくらいじゃ蒸し焼きにされるかもしれないわね。この街でもっとも安全な場所は魔導炉よ、あの場所がもっともどんな災害にも耐えられるようにつくられているわ」

逃げ惑う人々の間を縫って街を駆ける。

ライザはセレンの手首を掴んで引つ張りながら、セレンも決して離さないように必死についていった。混乱の中ではぐれてしまったら絶望的だ。

逃げる途中で子供の泣き声がした。けれど、ライザは待つてくれない。セレンは耳を塞いで戦火の中を駆け抜けた。

空から再びなにかが降り注いできた。今度は焼夷弾ではない。金属の塊だ。

それは機械だった。骨組みだけの人間のようなロボットだった。

機械の兵士だった。

ロボット兵団がクーロンに攻め込んできたのだ。

人々にとってそれは未知の存在だった。失われた時代の科学兵器。街の混乱はさらに高まった。

機械兵が次々と素手で人間を屠「ほふ」っていく。武器など必要ない。大人が赤子相手に武器など使うだろうか？

攻められていたのはクーロンだけではなかった。周りを囲んでいた新興国軍もロボットの襲撃を受けていた。

だれもが予想していなかった、人類が予想もしていなかった敵が出現したのだ。

ライザとセレンの前にも機械兵が立ちはだかった。

ロストテクロノジーにはロストテクロノジーで対抗する。

魔導銃 ピナカ をライザが抜いた。

銃口は1つであった。

しかし、発射された激光は三本の矢となり咆哮をあげ、大地を穿ちながら機械兵を八つ裂きにしたのだ。まばゆい光で目が眩む。

ピナカ が通った道は、まるで巨大な悪魔の爪で引っ掻いたように、建物もすべて三本線で引き裂かれていた。

それで終わらなかった。

次々と現れた機械兵の列を ピナカ が薙ぎ倒したのだ。

光線は放たれただけでは終わらず10メートル以上の三つ叉の槍となり、ライザが躰ごと回転させて横に振り回すと、機械兵や建物を切断しながら薙ぎ倒したのだった。

セレンが悲鳴をあげる。

「なんてこと、まだ建物の中にひとがいたかもしれないのに！」

「燃えて崩れそうな建物の中にいたって助からないわよ」

瓦礫の荒野が広がった。

「さあ、行くわよ」

開かれた道をライザが進む。

先に見えてきたのは合金のドーム型の建物。あれが魔導炉の施設だ。

施設は壁で囲まれ、入り口は正面ゲートのみ。逃げ場を求めた人々は壁を登って中に侵入しようと懸命だ。だが、壁の上には高压線が張り巡らされ、それに触れたものが黒こげになって死んだ。

ライザは正面ゲートにカードキーを差し込み、暗証番号を打ち込んだ。

すぐにスライドしながら開かれた重厚な金属の扉。人々が流れ込んでこようとした。

扉の前に立ちほだかるライザは、容赦なくピナカを放とうとした。それを必死に腕にしがみついて止めたのはセレンだ。

「やめてください」

構わずライザは放った。ただし、天に向けて。

咆哮をあげながら天に三つ又の光が昇る。人々は畏怖した。艶笑するライザ。

「それではごきげんよう」

敷地内に入ったライザとセレン。正面ゲートは静かに閉められた。「あのひとたちを中にいれてあげてください！」

セレンは涙目でライザに訴えたが、

「ここがどのような施設かわかっていないようね。100人、1000人の命なんかよりも重要な施設なのよ。だれかひとりが施設で事故でも起こしてみなさい。それこそクローンだけでなく、周辺地域まで汚染されて死の荒野に化すのよ」

「だからって目の前のひとを見捨てるなんて！」

「そういうの綺麗事っていうのよ、シスター・セレン」

空が紅く燃え上がった。

この施設にまで炎の塊が降ってきた。

「中に入れば安全よ！」

ライザはドーム施設に急ごうとした。

しかし、その目の前に炎の塊が　　違う、炎のような花魁衣装を着た女が舞い降りたのだ。

炎の車輪に乗り、現れたのは火鬼だった。

「お久しぶりであります」

艶やかに狂気を孕んだ表情。火鬼の顔半分を覆うメタリック。機械の片眼が紅く輝いていた。

## 逆襲の紅き煌帝「不気味な足音（5）」

クーロンを包囲していた新興国軍の2万を超えていた兵は、機械兵の脅威を前にして為す術もなく撤退を余儀なくされた。だが、すでに退路は炎の壁によって阻まれ、本国との連絡は完全に途絶えたのだった。

そして、クーロンもまた滅亡の危機を迎えていた。

火鬼率いるロボット兵団。

「鬼械兵団「きかいへいだん」は気に入ってくれたであります？」

自らの躰の一部をもサイボーグ化した火鬼は、なぜ鬼械兵団を率いてクーロンに攻め込んできたのか？

「この件の首謀者は隠形鬼かしら？」

と、ライザは笑みを絶やさず尋ねた。眼は極寒のように冷たい。

「そうでありんす」

「やはり……。シュラ帝國を滅ぼし、次は世界でも狙っているのかしら？ 人知れずこんなロストテクノロジーを保有しているなんて隠形鬼とは何者なの？ その真の目的は？」

「わちきには興味のないことでありんす。わちきの望みはこの世を炎で焼き尽くすこと。てめえらも死にさらせや！」

急に口調を変えて夜叉の表情で火鬼を襲い掛かってきた。

扇から業火を操り渦巻く炎の鞭を放つ。

ライザはセレンを抱き寄せて、防御フィールドを張った。楕円状の透明なカプセルのような形だ。

フィールドに当たった炎は一瞬にして消えたかのように見えた。

「炎を無意味よ。この防御壁に少しでも触れてみなさい、たちまち分解するわ。つまり炎とて、酸素などと引き離され、燃焼現象すら起こさせない」

ライザは余裕であった。

キレた火鬼は炎球をいくつもいくつも投げつけてきた。

「キエーッ！ わちきの炎で焼けないものなどあるもんかッ！」  
大量の炎は急激な空気の温度差を生み、あたりにうねるような風を巻き起こした。

ライザとセレンの躰が、水に映る影のように揺れた。息を呑んだ火鬼がハツとして、すぐに辺りを見回した。

ドーム施設に走っている二人の姿！

「わちきが出し抜かれた!?」

そうだ、すでにライザとセレンはその場にいなかった。火鬼の炎の攻撃を受けていたのはホログラムだったのだ。

息を切らせながらライザがセレンに説明する。

「あの防御壁は完全に外と遮断されるのよ。つまり密室になり、酸素の供給も止まる。もっと最悪なことに、あの場を動けなくなるのが最大の弱点。早めに逃げ出したのは正解だったわ」

一撃目の炎は防御壁で防いだ。それからすぐに敵に気づかれないうちにホログラムを発動させ、自分たちはその場から離れたのだ。

地面が急に揺れた。

その震動はドーム施設からだ。

思わずセレンは足を止めた。

「あれを……」

「どうしたの速く走りなさい！」

振り返ったライザが再び前に顔を向けて、その異変に気づいた。まるでそれは花のつぼみのようだった。

ドーム施設の頂上から線が走り、花びらが剥けていくように、天井が開かれる。

「あんなシステム知らないわ！」

ライザが叫んだ。

たしかに魔導炉のシステムすべてが解明されているわけではない。だが、帝国はこれまで管理して使ってきたのだ。しかもライザは科  
学顧問であり、解明されている情報は把握しているはずだった。

魔導炉は都市にエネルギーを供給するシステム。 以外の可能

性があると、ライザは示唆した発言をしたのだ。

火鬼は二人を追うことをやめ、うつとりとその光景を眺めていた。花が咲いた天井から、謎の塔がせり上がってきた。塔が花粉を飛ばす。

数え切れない泡のような光球が天に放たれ、世界中の空へと流れていく。

「なにが起きて……いいえ、これからなにが起きようとしているの？」

ライザは空から目が離せなかった。

光球は空で拡散して、1個が弾け飛んだかと思うと、それはまた小さな光球となって空から雪のように舞い降りてきた。

得体の知れないモノにセレンは怯え、後退って小さな光球を避けた。

次の瞬間、女の悲鳴があがった。

「きゃあああつ！」

ライザの悲鳴だった。

「どうしたんですかライザさん!？」

セレンが顔を向けると、ライザは片腕を高く掲げて、仰向けに地面でのたうち回っていた。

メタリックに輝くライザの片手。掲げられた片手から侵蝕されるように、手首から腕へと肌が金属に変化していく。なにが起きているかはつきりしないが、それは脅威であることに違いなかった。

ライザが ピナカ を放った。自分の腕に向けてだ。

「ギヤアアアアアアアアアアツ！」

死線を彷徨う絶叫。

金属に覆われた肘から先を狙ったが、肩から先が持つて行かれ、肉片は跡形もなく消し飛んだ。

目を血走らせながらライザが立ち上がった。片腕を失った傷口は高熱により焼かれたお陰で、大量の出血は奇跡的に抑えられているが、このままでは命に関わる。

「ハア……ハア……空から降ってくるアレに触れてはダメよ」

蒼い顔をして脂汗を流すライザにセレンは言葉を失った。  
空からは光球がゆらゆらと降ってくる。

ライザは天に向けて ピナカ を放ち銃口を振り回した。うねり  
狂う三つ叉の龍。

「一か八か逃げるわよ」

「もう少し遊んでくんまし！」

再び火鬼が追ってきていた。

ライザは天で振り回していた ピナカ をそのまま地面に叩きつ  
け、大地を抉りながら火鬼を薙ごうとした。

しかし、火鬼は人間と思えない跳躍で天に舞い上がり、 ピナカ  
を足下に躲したのだ。

「おほほほほ、炎に焼かれ悶え苦しみなんし！」

火鬼から放たれた炎の渦がライザを呑み込もうとする。

それを無視してライザは走った。敵の攻撃など構っていられな  
かった。周りになにが起ころうと目的を変えない。一瞬たりとも躊躇  
せず立ち止まらない。

ライザはセレンに手を伸ばした。

「なにが起きてても恨みつこなしよ！」

「なにがですか!？」

「交換転送よ。行き先はわからない、よくて消滅、悪くて異空間に  
閉じ込められる。躰の一部でも失っても外に出られたら、ラッキ  
なほうかしらね。アナタの恋人の神様にでも祈りなさい！」

「そんな！」

しかし、セレンは手を伸ばした。

クーロンに逃げ場はない。

炎が街中を包み込み、空からは謎の光球は降ってくる。

ライザはセレンの手をがっしりと握り、自分の躰に引き寄せた。

「ちなみにこれ一人用だから、二人だとさらにリスクは高まるわよ」  
「ええっ！」



火鬼の放った炎の渦がセレンとライザを呑み込んだ。  
果たしてふたりは！？

そして、クーロンは滅亡した。

ここでの出来事を人々はいつか知ることになるだろう。

シユラ帝国亡きあと、人間同士の争いが戦乱の世に変えた。それが終わりを迎え、新たな構図へと急速に変わっていくだろう。人間に対するのは。

戦いの火ぶたが切り落とされた。

ソファに座りながら立体映像テレビを見るアレソ。

「……ヒマすぎ」

テレビの内容は動物のドキュメントだ。サバンナに暮らす動物たち。今は絶滅してしまったチーターというネコ科の動物が映っている。ほかにもアレソは見たこともない動物ばかりだ。

この映像には音声が流れなかった。

「なあ、これさあ音とかでないわけ？」

「すみません、音での伝達は非効率なので、電波信号で情報が流されているのです。わたくしには聞くことができます」

ジェスリーはそう教えてくれた。

「たしか音声言語で会話できるのあんただけとか言ってたよな？」

「はい、ほかのものには必要のない機能ですから」

「なんども聞いて悪いんだけど、あんたマジで人間じゃないわけ？  
てゆか、本当に人間じゃないの？」

「はい」

「外出て確かめたいんだけど？」

「それはできません。あなたは侵入者なのです、自由に動かされて困ります。それにあなたは怪我人なものですから、無理をせずに躰を休めていてください」

アレソの片腕は布で固定されていた。折れているのだ。さらに布は頭に斜めがけされ、片眼にも巻かれていた。

加えて機械の半身も調子が悪いとアレンは感じていた。

「こつちの腕に違和感がある。自分の意思と誤差があるっていうか、なんていうか……」

「それはありえませんが。生身の軀を治すことはこの街ではできませんが、機械は完璧に修理させていただきました」

アレンは布が巻かれた片眼を押さえた。

それを見てジェスリーは悲痛そうな顔をつくった。

「その眼は残念でした。せめてサイボーグ化の技術さえ残っていれば、機械の眼に取り替えることができたのですが」

「べつにいいよ、片眼が残ってるし」

負傷した片眼は完全に視力を失っていた。

どうやってあの場から生き残ったのか？

シユラ帝國の地下遺跡で激流に巻き込まれ、完全にそのときの記憶を失った。

あの状況から助かっただけでも奇跡。負傷したのが片腕の骨折と片眼を失ったくらいで安いものだ。

突然、ジェスリーが言う。

「外に出る許可がありました」

誰かと会話していた雰囲気もなかった。というか、この部屋にはアレンと二人きりだ。おそらく電波かなにかを受信したのだろう。

彼らのいうところの音声以外の会話だ。

「外出れんの？ やった、鈍った軀を動かしたかったんだよなあー」

「しかし、自由に行動されては困ります。わたくしが同行して監視させていただきます」

「うん、ぜんぜんオツケ。外の空気が吸えるだけでいいよ」

今までいた場所はジェスリーの自宅だった。マンションの一室だ。つまり、ほかの部屋にも暮らしているものがあるということ。

ジェスリーに連れられ廊下を歩いていると、デッサン人形のような人型ロボットが歩いてきた。ジェスリーと違って肉感や肌がない。まるで骨のようだ。

人型ロボットはすれ違い様に頭を下げて挨拶をしてきた。まるで人間の挨拶だ。

ジェスリーも頭を下げるのを見て、アレンも慌てて頭を下げた。

「こんにちは」

人型ロボットには頭はあるが、顔はなかった。眼の辺りは左右のレンズが繋がった長方形のサングラスみたいな形になっている。そのため表情はなかったが、アレンに手を振ってくれた。そして去っていく。

アレンは不思議そうな顔をしてジェスリーに顔を向けた。

「侵入者って言われたから、てっきり敵視されてんのかと思ったけど、友好的なのな」

「はい、この街に住むものは平和を愛しています」

「愛するか……」

「愛？というのは、彼らに感情があるような言い方だ。」

マンシヨンを出て街並みを歩く。街は異様なまでに静かだ。

人型ロボットたちが歩いている。犬の散歩をしながら。

街路樹の落とした葉を清掃しているのは、ドラム缶のようなものから腕が伸びているロボットだ。その腕はどうやら掃除機になっているらしい。

アレンは立ち止まって高層ビルを見上げた。

「なんかさあ、こんな街の光景見たことあるような気がするんだよね」

「それはありえませんが。この街は人間に知られていません。我々は人間に忘れられた存在なのです。人間にとっては長い年月でしょう、我々は人間の眼に晒されないこの場所で、平和に暮らしてきたのです。ですからあなたがこの街に現れたのは、非常に重大な事件なのです」

「俺殺されちゃうわけ？」

「そのような野蛮な真似をするのは人間だけです。しかし、殺しはしません。あなたの処遇について議会が揉めています。その根本にある問題は、あなたの定義を？人間？とするか？機械人？とする

かです」

「俺人間だけど」

街を抜けて二人は自然の広がる公園までやってきた。

芝生が見渡せるベンチに腰掛ける。

「機械も疲れんの？」

「疲れませんが、雰囲気は楽しめます。それに緊急時のエネルギー補給もここで行うことができます」

ベンチに取り付けられていたふたを外して、ジェスリーは中からプラグコードを引っ張り出した。

「我々の多くは光エネルギーで動いていますが、その供給が間に合わない場合があります。そこで街の各所に補給装置が備えられているのです」

目の前の芝生には動物がいた。脚がすらつと長く、角が生えているのといないのが2種類。

「あれなんて動物？」

「シカです。ほ乳類、鯨偶蹄目、シカ科に属する草食動物です。普段はおとなしい動物ですから、近づいても平気です」

「なんか平和だよなあ」

「はい、人間がいませんから」

「……やっぱ俺嫌われてる？」

「いいえ」

ジェスリーの見た目はほとんど人間であり、表情もそれに即しているが、どうも自然な表情とというのがないので、感情のようなものを読みづらい。

「人間は敵ではありませんが、脅威です」

遠くを眺めながらジェスリーがつぶやいた。

「俺とは普通に話してるじゃん？ やっぱイヤイヤなわけ？」

「この街に住む機械人や機械たちの多くは、機械から生み出されたものたちがほとんどです。しかし、わたくしのような例外もいます。わたくしをつくったのは3人の人間でした。彼らとわたくしは友人

です。ですから、あなたとも仲良くなれるでしょう」

「ロボットの友達なんてはじめてだな……」

と言いつつも、アレンの心にはなにかが引っかかっていた。

ジェスリーは話を続けている。

「我々はこれまで秘密裏に人間の世界を監視してきました。そして、今のところ人間という種とはわかりあえないという結論に至っています。個人レベルでは仲良くできても、機械対人間となれば話はべつなのです。我々の存在を知った人間たちは、我々をどうするでしょうか？ 人間たちは忘れていてでしょうが、大戦の傷も癒えていなのです」

「大戦？」

「その話は機会があればしましょう。議会はあなたにここで暮らすことを望んでいます」

「やだよ」

即答した。

ジェスリーは疲れたような笑みを浮かべた。それはとても人間味を帯びていた。

「そうでしょう。あなたは外の世界を知っているのですから、こんな窮屈な場所にいたくないのは理解できます。わたくしもそうです。変化の緩やかなこの街で、もう何千年という月日を過ごしました。

人間の友たちと世界中を旅した日々が懐かしい」

「あんた人間っぽいよな」

「わたくしは特にそのようにつくられましたから。あの時代、高性能なプログラムが次々と競い合うように生まれていました。人間よりも頭のいいプログラムは簡単につくれます。しかし、彼らが目指したものは、自分たちの友となるものでした」

この街はまるで人間の街のようだ。暮らしもそのような気がする。テレビという娯楽を楽しみ、ペットの散歩をして、きっとほかにも人間味のある生活が各所にあるはずだ。

しかし、この街は静かすぎる。

無機質な静けさ。

まるでゴーストタウン。

死んだように静かなのだ。

動物たちもいる。

草木も息づいている。

ふとアレンは空を眺めた。

青空に似ているが、生命力を感じない。

「なんで太陽ないわけ？」

生命力を感じないのは、地上の生きとし生けるものを照らす太陽がないからだ。

「それはここが陽の光の届かない場所だからです」

「つまりどこ？」

「それは言えません」

「人間の俺には秘密ってわけね。機械と人間のどっちに定義するかなんて言って、どうせ人間としか見てないんだろ？ 俺人間だし、それで合ってるけど」

「人間たちも我々を差別してきましたが、我々も人間を差別した。」

だからわかり合えなかつたのです。人間は最後まで我々をじ」

最後まで言い切る前に爆発音が聞こえてきた。

街からだ。

さらに爆発音が聞こえた。2つ、3つ、4つ、次々と響いてくる

爆発音。

街から煙が立ち昇っている。

アレンはベンチから立ち上がった。

「事故？」

「事故など滅多に起きません。それにあんな 新たな侵入者が街に現れたそうです。その者は明らかに敵意をもって我々に攻撃をしかけています」

「行くぞ！」

「はい」

二人は急いで街に戻った。

## 逆襲の紅き煌帝「鬼械兵团（1）」

街に向かって走りながら、ジェスリーが口を開く。

「電波信号です。翻訳します 無条件降伏を要求する。今の攻撃はこちらの力を誇示するために行ったものであり、お前たちを傷つける意図は一切ない」

「なんだよいきなり話し出して？」

「私はお前たちの味方だ。私に力を貸せ、そして地上世界を我らのものに、人間たちを家畜とするのだ」

「だからなんの話だよ？」

話についていけないアレン。

街のど真ん中で立ち止まったジェスリーが空に向かって指差した。アレンは見た。空に浮かぶ何者かの姿を！

「隠形鬼！？」

そつだ、そこには隠形鬼がいた。

相手もアレンに気づいた。空に浮かんでいた隠形鬼が道路に降り立つ。どういう原理で空に浮いていたのかわからない。

「マサカ此処デ出会ウトハナ あれん」

「ばーか、あんたとなんか会いたくなかったよ！」

対峙するアレンと隠形鬼。

間に入ったジェスリーがアレンに顔を向ける。

「お知り合いですか？」

「知り合いなんかじゃねーよ。あえていうなら、すっげえムカつくやつ。敵だよ、敵」

「たしかに友好的な存在ではないようです」  
破壊された街。

住宅が爆破され、ビルが傾いて今にも倒れそつだ。

隠形鬼が一步一步とアレンに近づいてくる。

「何故助カル事が出来タノダ？」



「知るか。この街の向こうを流れる川岸で見つかったんだと」

「成程、地下水脈ヲ通ツテ此ノ機械人ノころにー二辿り着イタト  
言ウ訳力。偶然ト八面白イ、此ノ場所ガドノヨウナ場所力、モウ知  
ツテイルカ？」

「知らねえーよ」

続けて口を開こうとした隠形鬼がジェスリーに顔を向けた。

二人は無言で見つめあう。

ジェスリーの表情がさまざまに変わる。まるで無言のまま会話を  
しているようだ。

そして突然、ジェスリーが隠形鬼に殴りかかった。

隠形鬼はジェスリーの拳を片手で受け止め、ひねり上げて投げ飛  
ばした。

「出力八人間以上ダガ、非戦闘たいぶデハ話ニナラン」

地面に倒れたジェスリーの腕は、ひしゃげて中身の金属の骨組み  
を晒していた。表面的には人間だが、やはり中身は機械だった。

すでにアレンも隠形鬼に殴りかかっていた。

どこかで歯車の鳴る音が聴こえた。

この拳も隠形鬼は片手で受け止めた。

「ヌッ！」

だが、ジェスリーのようにはいかなかった。

アレンは機械の拳で隠形鬼を押しながら地面を叩き割りながら走  
った。

押された隠形鬼は背中中で住宅の壁を突き破り、家具を破壊しなが  
ら、さらに反対側の壁も突き破って家の外に出たが、まだまだ勢い  
は死なない。

「出力ガ上ガツタノカ？ コノ街ノ住人タチノ仕業ダナ！」

「くたばりやがれッ！」

アレンは腕を大きく振り回して隠形鬼を殴り飛ばした。

10メートル以上もの距離とぶつ飛ばされ、隠形鬼はビルにぶつ  
かった。

すでに傾いていたビルは、隠形鬼がぶつかった衝撃で、なんと倒壊してしまった！

凄まじい轟音と砂煙。

下のほうにある階層が潰れてしまい、残った上の階のほうは、隣のビルに寄りかかって止まっている。完全な倒壊は免れたが、いつまた崩壊するかわからない。

ぞくぞくと集まって来たパトカーや消防車。

倒壊したビルの中からレーザーが放たれ、1台のパトカーに切り口の鋭い大きな穴が開いた。

隠形鬼はまだ生きている。

「此処デ破壊スルニハ惜シイ。興味ノ尽キナイ存在ダ」

なんと隠形鬼は空を飛んでいるパトカーの屋根に乗っていた。いつの間にそこまで移動したのかまったくわからなかった。

「降りて来やがれ糞つたれ！」

地上からアレンが叫んだ。

「仲間ニナレ。御前ニハ其ノ資格ガ半分アル」

「前にも言つたる、なるわけないって！」

「真二選ブ権利ガ自分ニアルト思ツテイルノカ？」

「力尽くならかかって来いよ！」

「真二選ブノハ、私デモ御前デモナイ。人間ガ御前ヲドウ見ルカ、ソシテ、機械ガ御前ヲドウ見ルカ。戦イガ激化スレバ、人間ハ御前ヲ迫害スルカモシレナイゾ、機械トシテ」

「俺は人間だつっの！」

小石を拾い上げたアレンが隠形鬼に投げつけた。

幻に当たったように、小石は隠形鬼の躰を擦り抜けてしまった。

霞み消える。

隠形鬼がこの場から消える。

「返事ハ緩リト待トウ」

逃げられた。アレン側からすれば逃げられただが、用が済んだので帰ったに過ぎない。

ジェスリーは破壊された腕を押さえながら、アレンの横まで歩いてきた。

「彼は言い残しました。残る2つのコロニーにも同様の内容を伝えに行く。そして、返事は1週間後に聞かせて欲しい。自分の仲間になるか、それともデリートされるか」

「2つ？」

「じつはここは第三メカトピアなのです。第一と第二が存在しています。地球に残っている機械人のコロニーはそれですべてです」

「ここ以外にもこのような街が存在しているということか？」

アレンはヤル気に燃えていた。

「なら第一か第二であの野郎を待ち伏せして叩きのめしてやる！」

「それは現実的ではないでしょう」

「なんでだよ？」

すぐに水を差されてしまった。

「物理的な距離があるからです。我々のコロニーは3つの大陸に存在しています。さらに都市間の通信手段がないのです。以前まではあったのですが、衛星が落ちてしまっただけからというもの、連絡には大変な時間を要することになってしまいました」

「よくわかんないけどさ、あの野郎より早く行けばいいんだろ？」

「ですから、彼はどうやら空間転送を自在に操れるようなのです。」

監視カメラの映像からもそれはわかります」

「だからどうということ？」

「空間転送には絶対的な出口が必要なのです。座標から座標への移動は、出口となる装置が設置されていることが絶対条件で、出口を決めずに空間転送を行った場合、事故が必ず起こると思ってください。彼はそれを無視することができるようなのです。つまり出口のない残る2つのコロニーにも、突然現れることができる可能性があるということですよ」

「よくわかんないけどわかった。じゃあさ、これからどうするわけ？」

終わってたわけではなく、これからはじまるのだ。

隠形鬼は近いうちに2つのコロニーにも現れるだろう。

そして、味方になるか、ならないか、迫るのだ。

返事の期限は1週間後。それが過ぎたらなにが起こるのか？

「もはやここは平和ではなくなりました」

ジェスリーが悲しげに囁いた。

さらに続ける。

「今、緊急協議会が開かれ、これからのことについて話し合われています」

「俺はもう決めたから、あの野郎をぶん殴りに行くって。だから出口教えるよ」

「……この街を出ることは固く禁じられています。しかし、わたくしはあなたと共に旅立ちましょう。これは人類に関わる問題なので」

硬い表情をするジェスリーとは対照的には、アレンは息を吐いて顔を弛めていた。

「大げさだなあ」

「しかし、彼の正体が……」

「正体？」

「いえ、今は聞かなかったことにしてください。とにかく過去の過ちを繰り返してはならないのです」

「過去の過ちって？」

「それも機会があればお話します」

「……あっそ」

それ以上の追求はしなかった。

ジェスリーが口を閉ざす理由はなんなのか？

彼の正体とは、つまり隠形鬼の正体と言うことか？

仮面で素顔を隠す隠形鬼。

いつだったか、隠形鬼はその顔をリリースに晒したことがあった。

あのときのリリースの驚きようと言ったら……。果たして隠形鬼とはいったい何者なのか？

ベッドで横たわるライザ。仮設病院に並べられた大量のベッドのひとつに、ライザは絶対安静の状態で寝かされていた。

そこへ一輪の花を差したコップを持ってセレンが現れた。

「調子はどうですかライザさん？」

「病院なのに鎮痛剤もないってどういうことよ、最悪だわ」

「でもラッキーでしたね、革命軍の野営地の近くに出られて。もう絶対死ぬんだなあって思いましたもん」

「そうね、奇跡だわ。一か八かの空間転送で、二人とも無傷で、しかも二人で同じ場所に、さらに不毛の大地のど真ん中ではなくて、野営地の近くに出られるなんて、アナタの神様もサービスしてくれたわね」

近くと言ったが、実際は2人で1日荒野を彷徨った。

溜め息を吐きながらライザはつぶやく。

「おなか空いたわ」

「わたしもペコペコです」

「なんでもいいからもらってきてちょうだい」

「無理ですよ、食糧も不足しているみたいですし」

「ならこれでパン1個と水に交換してきて」

ライザはポケットから金貨を出してセレンの手に乗せた。

古い金貨で鈍い光を放っている。

「これってロゼオン金貨じゃないですか！ パン1個と水なんてとんでもない、1年分のパンと水になりますよ！」

「そんないらわないわよ。今必要な分だけ水と食料が手に入ればいいわ。どうせ戦争が激化したら、価値が暴落するのだから、使えるうちに使ったほうがマシだわ」

「わたしが交換しに行くんですか？ いやですよ、恐いひとたちに

絶対金貨奪われます」

「仕方ないわねえ」

ライザはベッドから起き上がって、渡した金貨を奪って取り戻し

た。

セレンは慌てる。

「だめですよ、安静にしてなきゃ！」

「アナタが頼りにならないからよ」

「そんな、だったらわたしががんばりますから！」

「もういいわ」

つかつかとライザが歩いて行く。

「待つてくさいライザさ〜ん！」

待たなかった。振り向きもせずライザは進んでいく。

仮設病院のテントを出て、食料保管庫を探す。

病院内は重苦しい雰囲気か漂っていたが、外に出ると緊迫感が凄

ましい。ここは戦地なのだ。

兵士たちの話によると、現在交戦中の相手はシユラ帝国の残党。

帝国から分離した勢力のひとつ、中でも厄介とされている軍事力を

受け継いだ大臣派だった。

食料庫の近くまで来ると、なにやら揉めている声が聞こえた。

兵士に取り囲まれている男が地面にあぐらを掻いている。

「あーあー、悪かったよ。腹が空いたんで、ちよつとパンをくすね

ただけだろ」

ライザが目を見せた。

「なんだか嬉しくないわ」

セレンも男がだれだかわかったようだ。

「トツシユさん!？」

大声で叫んだために、周りの空気が一瞬にして変わった。

トツシユに銃を向けていた兵士も驚いて笑っている。

「まさか……あのトツシユさんなんてことは、あはははは」

「こんな浮浪者みたいな奴が英雄トツシユのはずないだろうっ！」

もうひとりの兵士は機関銃の銃口でトツシユを小突いた。

すぐにセレンが庇いに入ってトツシユを抱きかかえた。

「やめてください、このひと本物のトツシユさんなんですから！」

「なんだこのシスター？」

兵士はセレンにも銃口を向けた。  
刹那だった。

立ち上がったトツシユが機関銃の銃身を握り上に向け、もう片手で愛銃 レッドドラゴン を抜いて兵士の首に突きつけた。

「動く撃つぞ」

脅しては低い低いトツシユの声が響いた。

ライザも懐に手をつき込んで ピナカ を抜く寸前であった。

「英雄なんて言われても、顔なんて知れ渡ってないものね。本人だと証明する術を本人がもってないなんて厄介だわ」

事態は一触即発。周りにいる兵士たちの銃口はすべてトツシユに向けられている。人質になにかあれば、一斉射撃が開始されるだろう。

騒ぎを聞きつけゴリラのような巨漢がこの場にやってきた。

兵士のひとりが声をあげる。

「大佐！」

筋骨隆々の大佐は周りを見渡した。

「なにごとだ！」

と、言つてすぐに驚いた顔をした。

「まさか？ライオンヘア?!?!」

ライザと眼が合ったのだ。

シユラ帝国の？ライオンヘア？と言えば、以前のトツシユよりも比べものにならない有名な人だ。この場を震撼させるにはあまりある。

トツシユもライザに顔を向けた。

「シスターだけじゃなく、なんでおまえいるんだ？」

その声に反応して大佐はトツシユに顔を向け、再び驚いた顔をした。

「おおつ、トツシユじゃないか！ 久しぶりだな！」

トツシユは不思議そうな顔をして、少し黙り込んで考えたのち、パツと顔を明るくした。

「おおつ、？キング？か！ 懐かしいな、何年ぶりだ？」

「英雄に？キング？なんて言われちゃこっ恥ずかしい。出世しやがったなトツシユ！」

周りを置いてけぼりで、いつの間にかトツシユと大佐は抱擁を交わしていた。

「どうやら事態は收拾しそうだ。」

大佐とトツシユが肩を組んで歩いて行く。

「俺のテントで酒でも飲もう！」

「いいな、上等な酒なんだろうな？」

「なに言っただ、酒ならなんでもいいクセして」

二人はうれしそうに顔を弾ませていた。

きよとんと立ち尽くしているセレンにライザが声をかける。

「アタクシたちも行きましょう」

「はい、はい！」

先を歩くライザの背中を慌ててセレンは追った。



## 逆襲の紅き煌帝「鬼械兵团（2）」

大佐専用のテントに招かれた1人と2人。セレンとライザは勝手に付いてきただけだ。

トツシユは煙草を吸いながら、酒をもらって上機嫌だ。

「いつの間に革命軍の大佐になんてなったんだよ？」

「おまえこそ英雄なんて言われてるけど、あの話どこまで本当なんだ？」

滅ぼされた帝国の関係者がここにはいた。

大佐はちらりとライザに目を遣る。

「あの女とはどういう関係なんだ？」

「無関係だ。なんでここにいるのか、俺様が聞きたい。そっちの可愛い嬢ちゃんハシスター・セレンだ」

トツシユに名前を呼ばれてセレンは慌てて頭を下げた。

「はじめましてセレンです。クーロンの教会でシスターをしています」

大佐はグラスを掲げて挨拶をした。

「俺はヴィリバルトだ」

3人は同じ輪に入ったが、ライザとの間には電気が奔っていきそうな溝がある。

革命軍と言えば、もともとはシユラ帝国と戦っていた集まりだ。帝国のナンバー2とまで言われていたライザがこの場にいるのだから心が穏やかなはずがない。

「さつきから敵意を向けるのやめてくれないかしら？」

冷たく鋭くライザは吐いた。

ヴィリバルトは敵意こそ削がなかったが、今すぐにどうこうするような素振りは見せなかった。

「？ライオンヘア？がなぜこの駐屯地にいる？」

「それは偶然よ。アタクシはトツシユを探していたの。正確に言え

ば、トツシュを祭り上げて革命軍に手を貸そうとしてあげようとしていたのよ」

「おまえが手を貸すだと、信じられん」

「条件はアタクシの身の安全を保証すること。帝國が滅んでからいるんな敵に狙われて困っているのよね」

「我々が今戦っているのは帝國の残党だぞ。おまえなどに手を借りるなどありえん」

ライザが鼻で笑った。

「なにがおかしい？」

不機嫌そうにヴィリバルトは吐いた。

ライザは前髪を掻き分けて、笑みを浮かべて口を開く。

「敵を完全に見誤っているわ。そんな雑魚なんて放置なさい」

「現在交戦中の相手を放置などできるか愚か者！」

ついにヴィリバルトは腰を浮かせた。

ライザは溜め息をついた。

「クローロンがどうなったか情報がまだ届いてないのかしら？」

トツシュが口を挟む。

「滅びたそうだな。攻め込んできていた新興国軍もやられたらしいな」

「なんだと！？ いったいどの軍だ！」

ヴィリバルトは驚きを隠せなかった。情報はまだ入ってきていなかったのだ。

「俺様は知らん」

トツシュはセレンとライザに顔を向けた。

重く暗い表情をしてセレンは目を伏せてしまった。残されたライザに視線が集中する。

「帝國を実質的に滅ぼしたのもそいつらよ。信じるか信じないかはアナタ方の自由だけれど、人間の形をした機械の軍隊が存在しているのよ。真の敵は人間ではなく、鬼械兵团なのよ！」

この時代に人間の形をした機械など存在していなかった。少なく

とも人々が想像もできないものだった。

ロストテクノロジーの恩恵に与れているのはごく一部だ。そして、与っていても、それがどのようなモノなのかすら知らない者が多い。トツシユはこれまで多くのロストテクノロジーを見てきている。

「人型エネルギープラントのようなモノか？」

首を横に振るライザ。

「いいえ、あれとはまったくの別物よ。出力は比べものにならないほど弱く、アスラ城とクーロンで見たものは思考あっても感情があるかは疑問だわ。魂のない攻守ともに優れた人型をした兵器とでもいうのかしら。それでも人間よりは遙かに超える機動力を持っているわ。鬼械兵1体でシユラ帝国の兵士100人分の戦闘力はあるんじゃないかしら。そう、アタクシが鬼械兵団の存在を知ったのは、帝国が水に沈んだあるときよ」

セレンとトツシユはアスラ城からヘリコプターで脱出した。けれど、それ以外の者たちの生存確認はできていなかった。ライザも死亡していたことになっていくくらいだ。

アスラ城の地下遺跡で、隠形鬼はトツシユをわざと逃がした。つまりトツシユとセレンは道筋に沿って逃がされたのだ。それ以外の者たちを隠形鬼は逃がさなかったことになる。

テーブルに載っていた酒のボトルをライザは奪い、グラスに注がずそのまま飲んだ。

「もらうわよ、ウチの兵士たちの甲いにね」

唇から溢れた酒がのどに伝わる。

手の甲で口を拭ってライザが話しはじめた。

「遅効性の毒だったわ、食料や水に入っていたみたいね、それで城にいた兵士はほぼ全滅。アタクシを含む飛空艇の乗組員は、毒は免れたけれど、城に残っていた兵士といっしょに鬼械兵の襲撃を受けて次々と殺されたわ。水が溢れ出してきて逃げようと思ったときは、乗り物はすべて破壊されたあとだったわ。その前に逃げようとした腰抜けどもは、レーダーから消えて消息を絶ったわ。つまり一

撃で乗り物事やられたのでしょね。そして、逃げ場を求めて身を潜めていたアタクシの前に隠形鬼が現れた」

ライザは ピナカ を抜いた。

「こいつが敵だって直感したからいきなりぶっ放してやったわ。片手で防がれちゃったけどね。で、奴は言うわけよ。『此ノ時代二八惜シイ人間ダ』って。それで今に至るってわけよ」

「はあ？」

と、不満そうに呟いたのはトツシュだ。話の肝心なところが抜けている。

セレンは気弱に尋ねる。

「あのお、どうやって逃げ延びたんでしょうか？」

「それは企業秘密よ。予期せぬ事態が起きたとでもいうのでしょうかね」

妖しくライザは微笑んだ。いったいなにを隠しているのだろうか？

ライザはバンと音を立ててポトルをテーブルに置き、場の空気を変えてから再び口を開く。

「とにかく、敵は鬼械兵团よ。奴らを倒すためにトツシュ、アナタにはできる限りひとを集めなさい 英雄というネームバリューを使ってね。そして、奴らと戦う術を探さなくてはいけないわ。強力なロストテクノロジー兵器を手に入れるか、なにかしらの弱点を見つけるか」

「俺様はそういうの向いてないからやりたくない」

「人類の存亡が掛かった戦いなのだよ」

「おまえこそ、人類がうんぬんなんて動機で動く女じゃないだろう」  
「ええ、そうよ。個人的なプライドの問題よ。でも動機なんてなんでもいいし、アナタたちにもメリットがあるのだから」

二人の間にヴィリバルトが割って入る。

「話はだいたいわかった。だが、鬼械兵うんぬんという話はまだ信じられない。それが本当に人類の脅威になるかも含めてだ。そんな得体の知れない脅威よりも、今は我々が交戦中の大臣派のほうか問

題だ。そして、革命軍は各地で他国の軍とも戦っている。我々と  
つての第一の敵は人間なのだ」

ライザは不機嫌そうにうなずいた。

「わかったわ、とりあえず目下の問題である大臣派を潰せばいいの  
でしょう。そうしたらアタクシの話を取り合ってもらえるかしら？」

「簡単に言ってくれるな。おまえになにができる？」

ヴイリバルトは挑発するように言った。

鼻でライザは笑う。

「大臣派なんてものは、遠征で各地に散らばっていた帝國軍の寄せ  
集めでしかないのよ。帝國の主戦力はアスラ城といっしょに破壊さ  
れ沈められたわ。ねえ、帝國がなぜ世界最強の軍事国家と呼ばれて  
いたかわかるかしら？」

周りは沈黙している。数秒の間を置いて、注がれた視線にライザ  
は答える。

「世界で唯一空軍を保有していたからよ」

小型飛空機の精鋭部隊？黒の翼？といえば、戦地において畏れら  
れる存在だ。そして、もつとも畏れられていたのが、空飛ぶ要塞で  
ある巨大飛空艇キユクロプス。

「アタクシが集めた情報によると、大臣派はたったの3機しか飛空  
機を保有していないらしいじゃない。それでも普通の軍隊から見れ  
ば超強力な兵器でしょうけれど。もしも、アタクシが飛空機ではな  
くて、飛空艇を持っていると言ったらどう？ それも魔導砲なんて  
オモチャを積んでるなんて言ったら？」

即座にヴイリバルトが否定する。

「バカなっ、飛空艇はこの世にたったの3機しかないんだぞ。その  
うち1機だった世界最大級の化け物キユクロプスはもうないはずだ。  
残る2機はそもそも非戦闘機で、神聖クリフト皇国とロマンジア連  
邦が保有している」

「なぜ世界に3機しかないのか。それはロストテクノロジー頼りで、  
1からつくる技術がないからよね。アタクシ軍事会社の社長だった

のだけれど、過去形でいうのは勝手に辞任させられたみたいで、副社長がまんまとアタクシの後釜になったらいいからなのだけれど。じつはね、極秘プロジェクトで飛空艇を造らせていたのよ。それを貸してあげるわ、いい話でしょう?」

自信満々の笑みを浮かべたライザ。

荒野を走るエアカー。

風の抵抗が少ない楕円形のフォルム。地面から少し浮きながら、ほぼ無音で走行する。

運転しているのはジェスリーだ。横の助手席にはアレンが乗っていた。

「すげえな、リリスの姐ちゃんよりビュンビュン進むぞ」

「まさか以前にもエアカーに乗ったことがあるのですか?」

「ああ、リリスっていう得体の知れない婆みたいな姐ちゃんもつてた」

驚いた表情をしてジェスリーはアレンに顔を向ける。

「リリスというのは、まさかと思いましたがリリス・イブール博士では?」

「さあ、どうだろ?」

「言われてみれば、リリス博士がこの時代まで生きているわけがありません」

「俺の知ってるリリスはそーとー長生きしてるっぽかったけど。下手したらロストテクノロジーの時代から生きてるかもな。そんな得体の知れない姐ちゃんだった」

妖婆であり、妖女である。リリスはどこか時間を超越した存在だった。

「もしかしたら、それは本当にリリス・イブール博士かもしれません。普通の人間ならば、何千年も生きられません、あの方であればそれが可能だったかもしれません。その方はもしかやサイボーグだったのでは?」

「生身だったよ。なんとなくわかる」

「そうですか、生身ですか。しかし、それでもあの方なら可能でしょう。あの時代、3本の指に入る科学者でしたから。そして、リリス博士の姉であるレヴェナ博士もその指の中に入っていました。あの姉妹は常に100年先を歩んでいました」

レヴェナ。

その名を聞いたアレンはなぜか胸騒ぎがした。

「レヴェナ……どこかで聞いたような……」

「レヴェナ博士は我々の救世主でもあります。彼女がいなければ、メカトピアはなかったでしょう。しかし……彼女がいなければ、あるいは、戦争も起きなかったかもしれませぬ」

「戦争？」

「この時代の人間たちが忘れてしまった歴史です。世界中を巻き込んだ大戦でした。かつて存在していた輝ける文明社会で、機械と人間は平和に暮らしていました。しかし、欲に駆られたものが戦争を起こし、文明は衰退し、やがて兵器汚染により世界は砂漠化の一途を辿ったのです」

「荒れ果てた現在の世界は、過去の大戦によるものだ」とジェスリーは云うのだ。

エアカーが急停車した。

驚いて腰を浮かすアレン。

「なんだよいきなり!？」

「自動停止システムが作動しました。おそらく障害物があったのでしょう」

そう聞いてアレンはフロントガラスから外を見回した。

「んなもんじゃないけど？」

「いいえ、地面に人間がいるようです」

「轢いたわけ？」

「いいえ、ぶつかる前に停止しました」

二人はエアカーを降りて、その人間とやらを確認した。

泥だらけの小汚い人間がうつ伏せで倒れていた。

「死んでんじゃね？」

ひと目見てアレンは決めつけた。

「いいえ、生命反応があります」

「見ただけでわかんのか？」

「はい、機能として備わっています」

生きてると聞いて、アレンは地面に転がる人間を仰向けにした。

「あっ」

そして、小さく驚いた。

なんと地面に倒れていたのはワーズワースだったのだ。

「どこのどなたか存じ上げませんが……み、水を……」

「おい、吟遊詩人の兄ちゃん。俺だよアレンだよ、あんた生きてたんだな」

アスラ城の地下遺跡で別れた切りだった。あるときワーズワースは隠形鬼と入れ違いで消えた。周りの者たちは？消された？と感じただろう。なぜなら、未だにアレンたちはワーズワースと隠形鬼の関係を知らないからだ。

ワーズワースは瞳を丸くした。

「アレン君じゃあ〜りませんか！ どーもどーもお久しぶりです」

「なんだよ、すげえ元気じゃねーか。行こうぜジェスリー」

放置するつもりでアレンはエアカーに乗り込もうとした。

慌てて元気よくワーズワースが立ち上がった。

「ちよつと待ってください、乗せてってくださいよ。あと水をいた  
だけると幸いです」

ジェスリーがワーズワースとアレンを交互に見ている。

「見たところお友だちのようですが、乗せてあげなくてもよろしい  
のですか？」

救世主にワーズワースは喜んで手を握って一方的に握手をした。

「ありがとう、君はいい人だ。僕の名前は愛の吟遊詩人ワーズワース。アレン君とは大の仲好しなんだ」



「ちげーよ」

すぐにアレンの突っ込みが入ったがワーズワースは構わない。

「ささっ、行きましよう行きましよう。これリリスのお婆ちゃん  
の車に似てますね。うん、すぐカツコイイ！」

適当に褒めながらワーズワースは勝手にエアカーに乗り込んだ。

ジェスリーがそつとアレンに耳打ちする。

「あの方もリリスさんを知っているのですか？」

「なんていうか成り行きで」

「そうですね。わたくしが人間ではないことは、どうかこれからの  
旅で一切だれにも言わないでください」

「わかつてるよ」

ブーブーっとクラクションが鳴らされた。ワーズワースが催促し  
ている。

「ささっ、早く人里まで行きましよう。道すがら、アレン君たちと  
離ればなれになったあと、どんな愛と勇気の大冒険をしたか、とく  
と語ってあげましよう！」

「いいよしなくて」

アレンの返しが冷たい。正直、めんどくさいのだ。

ワーズワースは食い下がる。

「残念なことにアレン君は僕に興味がないようなので、ジェスリー  
さんに僕とアレン君の大冒険を語ってあげましよう。超古代都市ア  
ラトでの冒険、アスラ城の地下古代遺跡でのお話、そして革命家  
トツシユの英雄譚。どれもロマン溢れる詩「うた」ですよ」

一生懸命しゃべっているワーズワースだが、ジェスリーも聞いて  
いなかった。彼の気は遙か空に向けられていたからだ。

ジェスリーが空を指差した。

「あれを見てください。飛空艇でしょうか？」

まぶしさに眼を細めながらアレンもその飛空艇を見た。

「いったいどこのだ？」

ワーズワースもエアカーから身を乗り出した。

「この世界に現存する飛空艇は2機です。ちょっと前までは帝國のキユクロプスも含めて3機だったんですが。あれは僕の知らない飛空艇ですよ、世界中を旅する吟遊詩人の僕が知らないんですよ。これは大事かもしれないですね」

それがライザの飛空艇ということのアレンたちは知らなかった。

そして今、戦地に向かおうとしていることを。

## 逆襲の紅き煌帝「鬼械兵团（3）」

飛空挺を手にいれたトツシュたちは、セレンを駐屯地に残し、戦場に向かっていた。

全長25メートルほどの影が紅い空を翔る。

ライザが開発した小型飛空挺 インドラ の見た目は飛行船に似ているが、その動力は魔導式でありフォルムも金属できている。小型の特徴を活かし、高速での飛行も可能で、機動力も高い。

メインルームである操縦室に、トツシュ、ライザ、ヴェリバルトがいた。ほかに革命軍の兵士が数名いる。

ライザがレーダーのモニターを見つめた。

「前方から帝国のB式戦闘飛空機が3機。チームネームは バイブ・カハ。3機での戦術を得意とするわ」

敵の飛空機はプロペラ式だ。速度は インドラ が遙かに疾い。飛空挺の操縦はライザに任されている。ほかにできるものがないからだ。幸いこの飛空挺は元々ひとり操縦できるようになっている。

座席に腰掛けながらライザは円形のハンドルを片手で面舵いっばいに回した。

船首が右舷に向き、急旋回をする。

立っていたトツシュたちがバランスを崩して倒れそうになる。

次は取り舵いっばいだ。

船内は右へ左へ傾き、悲鳴にも似た声が響く。

「もっと丁寧に操縦できないのか！」

叫んだのトツシュだった。すかさず口元を抑える。

「うつつぶ、吐きそうだ」

どうやら酔ってしまったようだ。

構わずライザは荒い操縦を続ける。

インドラ が天に昇るように、船首を上に向けながら上昇する。

追尾してくる3機。

「撃ちやがったわ」

「ごちたライザはモニターを見ていた。ホーミングミサイルだ。」

「魔力探知式よ。つまり対魔導兵器用のミサイルね」

そして、なんとライザはエンジンを停止させたのだ。

急降下する インドラ。ぶつかりそうになった飛空機のほうが、弾けるように散らばって避けてくれた。

船内は90度に傾き、軀を固定されていない者たちが落ちていく。その悲鳴を聞きながらライザはニヤリと笑った。

地上と飛空機に挟まれた形になった インドラ。

「あぁん、イクわよ。ヴァジュラ砲式発射ッ！」

あと一秒も残さず地面に衝突する寸前、 インドラ の船首と船尾から魔導砲が発射された。

まるでそれは無数の稲妻だった。

稲妻の脚を地面につけ船体を支えると同時に、船首から発射した稲妻たちが飛空機たちを絡め取るように撃ち抜いた。

ゆるやかにプロペラを止まった飛空機が次々と墜落していく。

インドラ の？足下？で3つの爆風が起きた。

そのまま インドラ は通常の飛行に戻った。

操縦室の床に両手をつくトツシュの姿。かなり顔色が悪く蒼い。

「おまえの運転する車には絶対乗らん。乗り物全部だ……うつつぶ」  
頬を膨らませてトツシュはどこかに駆け込んだ。

ヴァリバルトも疲れたように腰に手を当てて、あまり顔色がよくなかった。

「操縦はひどいが、それを可能にした凄まじい機動力だ。それに今の兵器は……神の所業」

「そのとおり、神のいかずちよ。まあアタクシにとっては、お・も・ちや・だけれど」

神をも畏れない艶笑。

やがて インドラ の眼下に戦場が見えてきた。

騎鳥兵が戦場を走り回り、歩兵が銃を乱射し、弾切れになった兵士同士がナイフで斬り合っている。戦車の大砲が轟音を鳴らした。大臣陣営の仮屋に インドラ の影が差す。

ライザはコードレスマイクをトツシユに投げ渡した。

「適当に場を治めて」

「は？」

というトツシユの声が戦場に響いた。

電波ジャックがされ、すべてのマイクからトツシユの声がしたのだ。

慌ててトツシユは咳払いをする。

《んっ、んっ……あーあーマイクテスト中》

戦場に似合わない緊張感のなさだ。

《俺様の名前はトツシユだ》

その名前のインパクトは戦場の動きを一時停止させるものだった。本物が偽物か、兵士たちにそれを判断する術はなかったが、空に浮かぶ謎の飛空艇は兵士たちの気持ちを促した。

インドラ の船首から発射された稲妻が、龍となって空で吼「ほ」えた。

ライザが放送に割り込む。

《次は地上に向けて撃つわよ。アタクシの声が誰だかわかるかしら、ビュルガー軍事大臣？》

すぐに地上から通信要請が入ってきた。

ライザは船内のスピーカーに流した。

《まさかあなたが生きていようとはライザ博士。しかし、なぜ帝国の一員であるあなたが、トツシユなどという男といえるのかね？》

渋い鉄の響きを持つ声だ。

「なぜって、アナタが帝国の裏切り者だからに決まっているからでしょう。シユラ帝国の軍は煌帝のものよ。一介の大臣が私物化するなんてイイ根性してるじゃなあい」

ライザは人差し指でスイッチを押した。

落とされたいかずち。

大臣陣営の仮屋が刹那にして黒い灰と化した。

両軍の兵士たちは震撼した。

再びトツシユがマイクを取る。

《あーあー、つてなわけで、両軍共に降伏して欲しい》

「両軍だと!？」

叫んで声を挟んだのヴィリバルトだ。

《で、俺様の指揮下に入って共に同じ敵と戦って欲しい。敵は人間じゃ》

トツシユの声を囁いて遮るライザ。

「真下から高エネルギー反応よ」

次の瞬間、地上から放たれた魔導レーザーが インドラ を貫かんとした。

展開されていた防御フィールドで直接の損傷は免れたが、衝撃はすべて緩和できずに船体が斜めに傾いて激しく揺れた。

操縦室の前方に取り付けられた巨大モニターが地上を映し、その映像をズームアップされていく。

黒い瓦礫の中から這い出してきたのは、人型有人兵器だった。

全長は15メートル強、人型であるが寸胴で脚がない。胴の部分から円錐状に広がっており、浮遊型を採用している。右手にはバルカン、左手には魔導レーザーを搭載していた。

戦場に投入された新たな兵器を確認してライザは嫌そうな顔をした。

「見たことのない型だわ。大臣め、アタクシの知らないところで秘密裏に発掘しやがったのね」

ロストテクノロジー兵器。

秘密裏にという点では、ライザも飛空艇を独自に開発していた。

二人の違いは、ライザは一からロストテクノロジーを再現できるレベルに到達しており、大臣は発掘で手に入れるしかない点だ。いや、自力開発はこの時代の科学者では、ライザ以外にできる者がいるか

どうか。

有人兵器に乗っていたのは大臣だった。

《許さんぞライザ。わしが新たな煌帝だと証明してくれる!》

革命軍に向けて放たれた魔導レーザー。三日月を描きながら世界を焼き尽くす。

風と炎と煙。

そして、死の叫び。

叫び声をあげたのは革命軍ではなかった。

大臣軍が大地に飲まれていく。

呻き声をあげた大地に走った深い亀裂。

乾いた大地が暗く染まっていく。水だ、水が滲み出している。ぬかるんだ大地に足を取られる兵士たち。

突如、地面から伸びた太い槍。兵士が軽鎧ごと腹を貫かれた。違う、槍ではない。樹木だ。

蛇のようにうねり狂う樹木が次々と大地からせり出し天に伸びる。モニターで現状を見ていたヴィリバルトの瞳を染める絶望。

「な……なんなんだあれは？」

もはやただの植物ではない。武器だ。兵器だった。

両軍無差別に傷つき倒れていく。

ひときわ太く高く、何重にも螺旋を巻く茎が伸びた。その頂点の巨大な蕾がゆっくりと花開く。

血と汗が立ち籠める戦場を包み込む甘い香り。

生き残っていた兵士たちが敵味方関係なく殺し合いをはじめた。

錯乱しているのだ。この甘い香りによって。

巨大な花の中から生まれた半裸の女。その女は服ではなく、身に巻き付く蔓を纏っていた。

トツシュが目を丸くする。

「フローラ!？」

樹木たちと戦場に姿を見せたフローラ。彼女が引き連れてきたのは樹木だけではなかった。

地中から楕円状の金属が次々と飛び出し、それに手が生え、足が生えたかと思うと、鬼械兵へと変形したのだ。

先ほどまで乾いた大地だったこの場所は、鬱蒼とした湿地帯と化して鬼械兵団に制圧されたのだ。

有人兵器に乗っていた大臣も混乱に陥っていた。

《なぜだっ、操縦が利かん!》

勝手に動き出す有人兵器。再び魔導レーザーが インドラ に発射された。

防御フィールドが展開されレーザーを防ぐ。だが、レーザーが休まることなく放たれ、ついに インドラ の機体を掠めた。

激しく揺れる船内。

ライザがモニターに映し出された インドラ の平面画像で、損傷箇所を確認している。船尾付近が赤く点滅していた。

「問題ないわ。ただし何度も喰らうと落ちるわよ。この飛空艇は2種類のフィールドで守られているわ。1つは物理的攻撃を防ぐもの、もうひとつはエネルギー攻撃を防ぐもの。エネルギー攻撃は中和することによって相殺しているの、つまり集中攻撃をされると処理が間に合わない」

揺れる船内で床に手を付いたトツシユが叫ぶ。

「説明はいいからなんとかしろ!」

「わかったわ、最大出力で魔導砲を地面に撃つわよ。その代わり兵士も全滅するけれど」

スイッチを押そうとしたライザの腕をヴィリバルトが掴んで持ち上げた。

「やめろ!」

「止めないでよ」

「兵士たちを巻き込む必要はないだろう。まだ生きている我が軍の兵士もいるんだぞ!」

「大臣が乗ってる兵器はこっちの魔導砲を一回防いでいるのよ。加えて、地面が沸いてきた鬼械兵団も一掃しなくてはいけない。だっ



たら最大出力で広範囲に攻撃しないと駄目でしょう。多少の犠牲は名誉の戦死よ」

さらに魔導レーザーを受けて船体が45度以上傾いた。

「早くしないとアタクシたちも死ぬわよ？」

「兵士たちを巻き込まない攻撃方法はないのか！」

「残念だけれど、この飛空艇の装備は魔導砲だけなのよね。だってまだ3割くらいしか完成してないんですもの」

「とにかく駄目だ、我が軍を犠牲にはできない！」

ヴイリバルトとライザが言い合っている中、トツシユはマイクを握っていた。

《糞大臣！ こんな状況で俺様たちとやり合ってる場合か！》

するとノイズ混じりで反応が返ってきた。

《ザザ……ザザザザ……操縦ができない……》

《はぁ？》

トツシユが怒りでマイクを強く握り締める。

そこへ第3の通信が割り込んでくる。

《ビュルガーが乗っている魔導アーマーは、こちらで制御させてもらっているわ》

女の声。すぐさまトツシユが反応する。

《フローラか！》

《だったらどうする……トツシユ？》

愁いを帯びた物静かな挑発だった。

《だったらもなにもあるか、この飛空艇で両軍の戦いは治められるところだったんだ。それを掻き回しやがって、おまえの目的は……目的は……フローラ、おまえはいったいなにがしたいんだッ！》

感情高ぶる震える声音。

通信の向う側から静かな笑い声がきこえる。

《ふふ、わたくしの目的を知りたい？》

《教えるッ！》

《自然を守るためには、人間にこの星を任せてはおけない》

《なにを言ってるんだ!》

《すべての人間の命を奪うつもりはないわ。この星に生きるものとして、必要最低限の数は残すつもりよ。しかし、人間は愚かだわ…だからそれを管理するものが必要なの》

それがこの鬼械兵団 機械たちというのか!

インドラ の操縦室にいた兵士たちがざわめいた。

一人の兵士が消え、その場所に別の者が現れたのだ。

隠形鬼!?

「飛空挺ヲ造り出ストハ、ヤハリ惜シイ。優秀ナ人間ニハ敬意ヲ表シタイ。らざいヨ、再ビ問オウ 此方側ニ来ルノダ」

トツシュがレッドドラゴンを抜いた。だが、操縦室で流れ弾が大事故を引き起こす可能性があるので撃つのを躊躇した。

「奴が敵の首領「ドン」だ!」

それを聞いてヴェリバルトが巨大な大剣を抜いた。

「ウオオオオオオツ!」

斬りかかった一瞬の判断。トツシュの言葉を信じ、敵と判断してためらいなく斬り込んだのだ。

隠形鬼は片手を前へ伸ばした。

その手に大剣が触れた瞬間、まるでチョコレートのように刃が溶けたのだ。

自分の常識の範疇を超えた出来事に眼を剥いたヴェリバルト。

大剣は隠形鬼を斬れなかった。

それとほぼ同時だった。

操縦室の巨大モニターに映し出されてた魔導アーマーが、一刀両断されたのだ。

隠形鬼が仮面の奥で感嘆する。

「ホウ、アレモ生キテイタカ」

魔導アーマーが爆発して辺りは煙に包まれた。

そして、その煙の中で揺れる漆黒の影。

映し出されたのは闇よりも深き大剣を構える魔獣。

ライザが妖しく微笑んだ。

足下よりも長い髪を靡かせ、体中に紋様を走らせた紅い眼の少年。身にまとった襦袢「ぼろ」切れのマントが幾人もの血で赤黒く染まっていた。

輝ける煌帝ルオ。

その一太刀で魔導アーマーを破壊したのだ。あの インドラの魔導砲ですら倒せなかったロストテクノロジー兵器をだ。

ライザが操縦席から立ち上がり、隠形鬼に顔を向けて口を開く。

「いいわ、そっち側についてあげる」

トツシュとヴェリバルトが声を荒げる。

「ふざけんなバカ女！」

「？ライオンヘア？正気かッ！」

構わずライザはヒールを鳴らしながら隠形鬼に近づく。

両手を広げライザを自分の胸に包み込んだ隠形鬼。

そして、二人は消えたのだ。

操縦者を失った インドラ が急速に落下する。

憤怒しながらトツシュが操縦席に飛び乗った。

「糞ッ、はじめから信用なんてしてなかったが、マジで裏切りやがるとは！」

飛空挺の操縦などしたことがない。とにかく機器を適当に操作した。

しかし、駄目だ！

墜落する！！

## 逆襲の紅き煌帝「鬼械兵团（4）」

エアカーの助手席からワーズワースは空を指差した。その指先がだんだんと地面に向けられる。

「落ちましたよ、あの飛空艇」

それがトツシユたちの乗った インドラ とは知る由「よし」もない。

一路エアカーは飛空艇の墜落現場に向かった。

弾道のように抉られた大地。地面との衝突後、船体を引きずりながら インドラ が止まったようすが見て取れる。砂煙はすでに治まって、辺りは異様なまでに静かだった。

砂を被っている船体だが、煙などは出ていない。防御フィールドが展開され、墜落と同時に大爆発を起こすようなことは免れたようだ。

エアカーを降りた3人は飛空艇を調べた。

中でも熱心なのはワーズワースだ。

「いったいどこの飛空艇ですかねえ。いきなり中からワツと敵国の兵が出てきたりして」

ワーズワースは合金の船体を調べるように叩いて歩いた。

船体は横を向いて倒れていた。

アレンは人間離れした跳躍で船体の上に乗った。

「こつちに入り口があるぞ！」

本来はその入り口からタラップを下ろして出入りをする。今は天を向いてしまっている。

ワーズワースは首を曲げて上向いた。

「僕はそんなところまで登れないんですけど？」

と、言うてから横のジェスリーに顔を向けて続ける。

「なにかいい方法ありません？」

「エアカーで浮上しましょう」

二人はエアカーで船体の上に向かうことにした。アレンは二人を待たずに、ドアをこじ開けて船内に入った。細い通路は明かりが点いたままだ。墜落しても動力が生きているためである。

船首に向かつて歩いた。今は途中の閉まっているドアの部屋は無視して進んだ。

心配がない。船内は静かだ。

やがてアレンは広い操縦室まで来た。

船首のほうの壁に折り重なって倒れている人影。その中のひとりにトツシュを見つけた。

「オツサンじゃねえか。どいう状況だよ？」

とりあえず、人山の中からトツシュを引きずり出し、床に仰向けに寝かせて頬を叩いた。

「起きろよオツサン、飯だぞ」

もう一度アレンが叩こうとしたとき、トツシュが起きて目の前の手首を掴んで止めた。

「飯なんかで起きるか！」

「起きたじゃねえか」

「おまえが叩いたからだ」

足下をふらつかせながらトツシュは立ち上がり、兵士やヴァリバルトを見つけて起こそうとした。

「おまえも手を貸せ」

「はいはい」

めんどくそうに返事をしてアレンも手伝った。

一人ずつ床に寝かせて息を確かめる。

アレンは首を横に振った。

「こいつ死んでる」

兵士のひとりだった。

トツシュはヴェリバルト肩を揺さぶった。

「起きろ？キング？！」

「……………うっ……………」

朦朧とした眼をしてヴィリバルトが意識を取り戻した。

ちようどそこへワーズワースたちもやって来た。

「おおっ、英雄トツシユさんじゃありませんか！」

「詩人の兄ちゃんまでいつしよか。後ろのはだれだ？」

「ジェスリーと申します」

丁寧に頭を下げてジェスリーは挨拶をした。

残っていた2名の兵士も意識を取り戻し、死亡したのは1名だけだった。衝突のときに頭を強打して頸椎を損傷してしまったようだ。

ワーズワースはいつの間にか操縦席についていた。

「動力は生きていますね。エネルギー漏れもないようです。多少の損傷はありますが、まだ飛べますよコレ」

操縦席の小型モニターを見ながら言った。

少しトツシユは驚いたようだ。

「おまえ操縦できるのか？」

「飛空艇なんて生まれてこの方操縦したことありませんよ。ちょっとした機器くらいならいじれますけど、旅が長いので」

落胆の空気が漂った。船体が生きていても、操縦できなくては意味がない。

「わたくしが操縦しましょうか？」

と、言った者に全員の視線が向けられた。ジェスリーだった。

さっそくジェスリーが操縦席について、エンジンを再始動させた。大きく傾く船内。横になっていた船体がゆっくりと立て直され、滑り台のようになった床をアレンたちが滑り落ちる。急激に傾いたのではないので、だれにも怪我はなかった。

ヴィリバルトは息を落とした。

「どついう知り合いなんだ？」

と、トツシユに顔を向ける。

「話せば長くなるんだが、とりあえず戦場に戻りながら話そう」

インドラ は再び戦場へ向かって飛行をはじめた。

お互いなにがあつたのか、アレンやトツシユが掻い摘んで話していると、すぐに戦場まで着いた。

しかし、そこはすでに戦場ではなくなっていた。

泥と水に覆われた世界に鬱蒼と茂る森。マングローブが形成され、兵士たちは堆肥と化していた。そこに鬼械兵の姿は跡形もない。

「まだ生きている兵がいるかもしれん！」

叫んだのはヴィリバルトだ。

操縦桿を握っているジエスリーが高度を下げる。

「地上に近づきます」

インドラ がマングローブすれすれを飛行する。起こした風が木々を揺らし、水面に波紋を描く。

操縦席の小型モニターを確認しているジエスリー。

「生体反応はありません」

「着陸しろ！」

怒鳴り散らすようにヴィリバルトが操縦席に詰め寄った。

「繰り返しますが、生体反応はありません」

「降りて自分で探す！ 早く着陸させろ」

「この森の中には着陸できません。それにもう一度繰り返しますが、生体反応はありません。残念ながらこの艦に備わったレーザーは超高性能です。人間程度の動物であれば、その生体反応をキャッチすることができます……ん？」

急にモニター見ていたジエスリーが鼻から声を漏らした。

すぐにヴィリバルトもモニターを見る。

「生存者か！？」

「いえ、動物ではありません。動力源が生きている機械です」

巨大モニターに地上の拡大映像が映し出された。

その場所には草木が一本も生えていなかった。あるのは円を描いている無数の機械の残骸。何百という鬼械兵が壊され、その中心にぽかんと空いた空間ができていたのだ。

鬼械兵が何者かにやられた。

トツシユは墜落前の出来事を思い出した。

「そうだ、シユラ帝國の餓鬼皇帝がいきなり現れたんだ、姿はだいぶ変わってたが、あの顔はそうだ絶対に。それで巨大な機械の兵器を一撃で倒して……あとのことは知らん」

アレンがニヤリとした。

「あいつも生きてたのか、しぶてえ野郎だなあ」

モニターを見つめながらワースワースは神妙な顔をしていた。

「ならこれもルオの仕業ですかね……というより、黒の剣の成した業でしょうか」

「黒の剣 が現存しているのですか！」

驚いたように声をあげたのはジェスリーだった。

アレンが尋ねる。

「黒の剣 がどうしたんだよ？」

「いえ、とくにはなにもありません。危険なロストテクノロジー兵器だと聞いたことがあったもので……」

少し歯切れが悪かった。

その後、何回もマングローブ上空を旋回して生存者を捜したが、ただのひとりも確認できなかった。

肩を落としてヴェリバルトがあきらめたところで、インドラ

はこの場を離れ革命軍の駐屯地に向かった。

しかし、そこで一行を待ち受けていたものは、絶望の焼け跡だった。

まだ小さな火の手が燃え揺れ、煙があちこちから昇っている。

駐屯地が全焼していた。

ただの火事ではない。灰を化している跡形もない駐屯地は、高熱で一気に焼き払われたようだった。もはや溶かされたというほうが正しいかもしれない。

「生体反応はありません」

この場所でジェスリーの言葉は同じだった。

トツシユがツバを飛ばす。



「冗談じゃないぞ、ここにはシスターの嬢ちゃんもいたんだ！」  
すぐさまトツシユの胸ぐらにアレンが掴みかかる。

「おいっ、それってセレンのことか!？」

「そうだ！」

「どうして残して行っただよ」

「戦場のほうが危険だからに決まってるだろう！ それにシスターに戦場は血なまぐさい場所だ。本人が行くのを嫌がったんだ！」

お互いを睨み、アレンはトツシユの躰を突き放した。  
すぐにアレンは操縦席に駆け寄った。

「下ろせ、今すぐだ！」

「それは懸命な判断とは言えません」

「いいから早く下ろせよ！」

「10体の鬼械兵と1人の人間らしき反応を地上に確認しています」  
巨大モニターに映し出された女の姿。

女はまるでこちらを見るように いや、見ているのだろう。天に顔を向けて艶笑を浮かべていた。

機械の片眼を輝かせる火鬼が鬼械兵団を引き連れ地上にいたのだ。  
アレンの大きく口を開ける。

「あの糞アマツ、ぶん殴つてやる！」

トツシユも銃を構えていた。

「俺様もやるぜ」

二人を見てジェスリーは人間のよう溜め息を吐いた。

「仕方がありません。お二人がどうしても戦うというのなら、魔導砲の充填ができています。空中から敵を一掃しましょう」

「いいや、俺は直接あいつをぶん殴つてやりたいんだよ！」

「それは危険行為です」

「知るかつ、下ろしてくれないなら自分で降りてやる！」

アレンは操縦室を駆け出していつてしまった。

もう一人も頭に昇っていたが、アレンほど無鉄砲ではなかった。

「よし、魔導砲をぶち込ませてやれ！」

トツシユはジェスリーにゴーサインを出した。

しかし、それは中断せざるをえなかった。

小型モニターに船尾付近の船体下につけられた、貨物用のハッチが開いたと表示が出たのだ。

「機体反応です。おそらくエアカーでしょう」

積み荷としてジェスリーのエアカーを乗せていたのだ。

すぐに状況は理解できた。アレンが勝手にハッチを開けて、さらに勝手にエアカーで地上に向かったのだ。

「アレンさんも巻き込むことになりましたが、魔導砲はどうしますか？」

ジェスリーに尋ねられて、トツシユは頭を掻きながら溜め息を落とした。

「糞餓鬼が、中止だ中止に決まってるだろ。どうなっても知らんぞ」  
もう天空からアレンを見守るしかなかった。

エアカーを停車させ、アレンが大地に足を着け降り立った。

鬼械兵団に向かって歩いて行く。

「あんたがやったのか？」

「そうでありんす」

どこかで叫ぶ歯車の音。

火鬼に殴りかかったアレン。

しかし、先に攻撃を仕掛けていたのは火鬼だった。

扇を構え舞い踊る火鬼が業火の渦を繰り出した。吞まればひとたまりもない。

アレンは上空に高くジャンプした。

鬼械兵が同じように高く飛び上がり、一斉に団子となってアレンに飛びかかった。

空中で蟻の群れに襲われたようにアレンの姿がまったく見えない。火鬼は構わず炎を放とうとした。鬼械兵ごと燃やし溶かしてしま  
う気だ。

空中の鬼械兵が四散した。

残骸が火鬼の足下にまで落ちてきて攻撃を中止せざるをえない。

「ちっ……」

舌打ちした火鬼の瞳が見る見るうちに剥かれていく。

「な、なんだ!？」

口調も思わず素に戻る。

このときアレンはなぜか地面に立っていた。

「あれ……なんで俺ここにいんの？」

アレンすらそれを理解していなかった。

空から降ってくる物体。

岩の塊だ。ただの岩ではない。そこには顔がついていた。不気味なのに、ゾツとするほど妖艶なだった。

火鬼は理解した。

「キエエエエーッ！ リリースーッ!！」

奇声を発して火鬼が般若の形相に変わった。

次の瞬間、為す術もなく岩の直撃を受けて地面に沈んだ。

岩に鬼械兵が襲い掛かる。

だが、なんとその岩から石が数珠つなぎになったような触手が伸びたのだ。

石触手が鬼械兵の軀を串刺しにする。

次々と破壊されていく鬼械兵と謎の岩を目の前にアレンは啞然とした。

「なんだよ……アレ?」

岩が持ち上がった。

両手で岩を持ち上げて立ち上がった火鬼は血みどろだった。花魁衣装はぼろぼろに破け、片脚の肉がえぐれてしまっている。それだけではない、全身から電気を帯びた火花が散っている。

人間とは思えない怪力で火鬼は岩を投げ捨てた。

「怨み晴らさしておくべきか……わちきに殺されに舞い戻ったようでありんすな、リリースッ!」

業火を繰り出そうとした瞬間、アレンが頬を抉って殴り飛ばした。

血反吐を飛ばしながら遙か後方へ飛ばされた火鬼。そのまま地面に叩きつけられ、何度も転がったかと思うと、まったく動かなくなっていた。

アレンはもう火鬼のことよりも、目の前に現れた岩に興味を注がれ驚きを隠せない。

「姐ちゃん、なんだよこの格好？」

「こら触るでない。触ると脊髄反射的に此奴に攻撃されるぞ」

「はあ？」

それは岩だった。そこに妖女リリスの顔がある。埋もれていると  
いうのだろうか。そして、これがただの岩ではないのは、先ほどの  
鬼械兵を破壊した攻撃を見ればわかる。

「異次元の寄生生命体じゃ。この世でいう生命の定義からは外れて  
おるじゃろつがな」

「ぜんぜん意味わかんねーよ」

「ところでここは何時じゃ？」

「は？」

「おぬしに話しても埒が明かんの。とにかく妾を別の場所に運んで  
くれんか？」

「自分で動けよ」

「見ればわかるじゃろつ、妾は岩じゃ。ここを一步も動けぬ。そう  
じゃな、丁寧な相手を刺激せぬように、ロープでも引っかけて運べ  
ば良いじゃろつ」

なにがなんだかわからなかったが、これがリリスだということは  
わかった。

しかし、いったいなぜこんなことに？

逆襲の紅き煌帝「鬼械兵团（5）」

インドラ の操縦室まで運ばれた岩。

その姿を見たトツシユも驚きを隠せなかった。

「リリース殿……なぜこんなことに？」

ほかの者たちも驚いている。岩に埋め込まれた人間など見たことがない。それも絶世の美女の顔だ。

ジェスリーはほかの者とは違う驚きをしていた。

「リリース・イブール博士ではありませんか？」

「ほう、その名で妾を呼ぶとは……おぬし」

気づいたようだ。相手は知った顔ではない。別のことに。

「機械人じゃな？」

刹那、トツシユとヴァリバルトが銃を構えた。

アレンがゆつくりと割つてはいる。

「悪い奴じゃねえよ。武器なんか向けんな」

すぐに武器が収められた。

哀しげな表情をジェスリーはした。

「そうですね、わたくしは機械です。アンドロイドという存在です。

みなさんを騙すつもりはなかったのですが、わたくしが機械と知られれば、今のような反応をさせることはわかっていましたから」

ヴァリバルトは目の前の存在が機械だと信じられないようだ。

「まるで人間だ。どうして人間の格好をしている？ なにが目的だ？」

「人間の姿形を模しているのは、人間の眼を騙し社会に溶け込み、危害を加えるためではありません。人間の形をしたお人形のような物と思ってください。わたくしは人間の友となるために、ある3人の科学者につくられたのです。今お話しできることはそれだけです」  
不満そうな顔をしているトツシユ。

「得体の知れない人間もどきって聞いちゃあ、それだけですじゃ納

「できないだろう」

「それだけしかお話しできないのは、あなた方が本当に信頼できる？人間？であるか判断材料がまだ少ないからです。手の内を明かさないうで都合のいい話ですが、わたくしを信じていただきたいのです。最終的な目的はこの世界の平和、そのために隠形鬼をどうにかしなければならぬ、それはみなさんもいっしょのはずです」

またアレンが割ってはいる。

「はいはいはい、隠形鬼をぶっ飛ばすって目的がいつしよならいいだろ。んなことよりさ、姐ちゃんがこんな格好になってるほうが気になるんだけど？」

「妾の話をする前に、おぬしらの話を聞きたい。妾が消えてからなにがあったのか」

リリスの要望に応じて、これまでのことを話すことになった。

アララトの遺跡でリリスが隠形鬼によって消され、水没により帝國が滅び、世界の覇権を巡って人間たちが争いを起こしていたところに、鬼械兵団が現れたこと。隠形鬼たちがなにをしたか、セレンとライザから聞いていたクーロンでの出来事、そして革命軍と大軍との戦いまで、細かく話して聞かせたが、ジェスリーのことやメカトピアでの出来事は話されなかった。

岩に埋もれた顔を動かすことはできないが、リリスは眼で頷いて見せた。

「ふむ、隠形鬼と鬼械兵団。妾がこの世界にいない間に厄介なことになっておるようじゃの」

この世界にいなかった？

リリスはこの世界でなにが起きていたのか知らなかった。だから説明させたのだ。

隠形鬼に消されたあと、リリスにいつたいなにがあったのか？

「妾の感覚では、まだ数刻も経っておらぬ。隠形鬼に違う次元に飛ばされた妾は、そこでこの寄生岩と融合してしまってお、口を利くことと思考すること以外の自由を奪われてしもった。この生物は

どうやら宿り主の思考を喰らって生きているらしいのじゃが、これまで喰らった存在の智識を蓄えているらしく、妾はそれを読み解くことに成功したのじゃ。妾の迷い込んだ空間は、あらゆる空間から存在が迷い込んでくる空間らしいことがわかつての。つまりこの岩は蜘蛛、巢に掛かった獲物を喰らうというわけじゃな」

まで説明は終わっていなかったが、アレンは耐えられなくなった。「あーあーあー、ぜんぜん意味わかんねーよ。もういいよ、説明しなくて。とにかく岩と合体して困ってるってことだろ。で、とにかくこつちの世界に戻って来れたならいいじゃん。でもさ、なんで俺が戦ってる中に現れたわけ？」

「引力じゃな」

「はっ？ 引力？」

「多くの者はそれを偶然と呼ぶじゃろうが、運命の引力じゃ。事象は互いを引き合う。おぬしと妾は運命を共にしておるというわけじゃ。恋愛と似ておる」

「なにそれキモイ」

本気でアレンは嫌そうな顔をした。

話が一段落したところで、ジエスリーが口を開く。

「リリス博士に二人でお話したいことがあります」

「ほかの者は下がってくれんか？ アレンはここに残れ」

「俺残んの？」

リリスに言われアレンはここに残ることになった。ジエスリーもそれを認めた。

残るメンバーはどうするのか？

ヴェリバルトは、

「俺たちはこの艦を降りて革命軍の本隊と合流することにした。この艦はおまえたが使い。では武運を祈る」

数名の兵士たちを引き連れヴェリバルトは去った。積んでいたジープに乗って、飛空艇から離れていく。

ワーズワースは、

「僕はちよつと散歩に行つて来ます」

トツシユは、

「疲れたから少し部屋で休む」

そして、3人だけが操縦室に残された。

静まり返つた。リリスとジェスリーが口を開こうとしなかつたからだ。

「おい、話があるならしろよ。てか、なんで俺まで居残りなわけ？」

話があると言つたのはジェスリーだ。けれど、促されても口を開かなかつた。ジェスリーはアレンの瞳を見つめて、ただ見つめた。

嫌そうな顔をしてアレンが目を背ける。

「なんだよ俺の顔を見て」

そして、やつとジェスリーが口を開いた。

「アレンさんをなぜ残したのですか？ 残したことについては、リリス博士のお考えに反対するつもりはありませんが、その理由は聞かせていただきたいのです」

「アレン自身も覚えていないことじゃ、今は言えぬな」

「俺が覚えてないってなんの話だよ？」

「刻が来ればわかる」

リリスはそれ以上言わない雰囲気だつた。それを察してアレンは問い質さなかつたが、非常に不満そうな顔をして頬を膨らませている。

ジェスリーもそれで納得するしかなかつた。

「わかりました。では、わたくしのお話をしましょう。リリス博士は当然、メカトピアについてご存じでしたか？」

「まだ存在しておるのか？」

「はい、今のところは第3コロニーまですべて。しかし先日、隠形鬼の襲撃に遭いました。彼の目的は我々が彼の味方につくこと。そうでなければデリートすると」

あれから3日経っていた。返事の期限は迫っている。あと4日だ。「リリス博士は隠形鬼の正体をご存じですか？」



「わかるようで、わからぬ」

「わたくしはすぐにわかりました。正体が彼ならば、目的は決まっています」

ジェスリーはリリスに耳打ちをしてなにかを囁いた。

難しい顔をリリスはした。

「その可能性は妾も考えた」

「まさかリリス博士は違うとおっしゃるのですか？」

「だからまだわからぬのじゃ」

ここに残されたにもかかわらず、アレンを抜いた会話だ。ちよつとアレンはイラツとした。

「なんだよ、内緒話かよ」

リリスはジェスリーに目で合図を送つて制した。

「妾が説明しよう。隠形鬼の正体は機械人じゃよ、太古の昔につくられたな。かつて同じように人間に反旗を翻した。そして停止させられた……と思つておつたのじゃが」

なぜかジェスリーはなにか言いたげな瞳でリリスを見つめていた。その眼は不満だ。

しかし、ジェスリーは語らなかつた。別のことで口を開いた。

「わたくしがお話したかったのは、隠形鬼の正体についてだけです。もうお話はありません」

リリスはアレンに目を向ける。

「アレン、おぬしが行くべき場所は決まっておる。ある者から伝言があつてな、そこに行けと言つておつた」

「そこになにかあんだよ？」

「妾も知らぬ。しかし、おそらくこの戦いに関することじゃろう。

どうやらおぬしは重要な役割を託されておるらしい」

「なんだよそれ、めんどくさい。で、どこだよそこ？」

リリスは口ではなく、視線でそこを示した。天井だ。おそらくもつと先、空の上だ。

どこがどこだかジェスリーは気づいたようだ。

「もしやエデン計画では!？」

「そうじゃ、目的地はエデンの園　つまり月面じゃ」

「はあ~~~~っ!？」

声を揺らしながらアレンが叫んだ。

さらにアレンはこう続けた。

「あれって空に浮かんでるちっこい石ころだろ？」

ジェスリーはリリスと顔を見合わせて笑った。

この時代に月に行くなど夢のまた夢。教養のない者は、それが衛星だということも知らない。中にはこの星が月と同じように丸いとすら知らない者もいるだろう。今はそんな時代だった。

「月はこの星の約4分の1ほどの大きさがあります。決して石ころなどではありません」

ジェスリーに説明されて、アレンは別のことで驚いた。

「昔のひとつてすげえな。そんなデカイもん空に打ち上げるなんて魔導かなにかの力で浮いているのだとアレンは思ったらしい。

リリスは大きく息を吐いた。

「もう話はおしまいじゃ、ほかの者を呼んでおいで」

「俺が残された意味あったわけ？」

「おぬしと妾は運命を共にしておると言っただじゃろっ?」

「それキモイ」

アレンは逃げるように部屋を出て行った。

残された二人。

ジェスリーの表情は神妙だった。

「なぜ話さなかったのですか？」

「なにをじゃ？」

「アダムに智慧を与えたのは、あなただということなんです  
いったいそれは誰の名か？」

その者に智慧を与えたとはどういうことか？

リリスが囁く。

「知っておったか……」

「ええ。まだ名乗っていませんでしたが、わたくしの名前は、ジャン・ジャック・ジョンソン。わたくしをつくった科学者の名前をもらいました。そして、ジャンは……そう、あなたのお姉さんの婚約者の名前です」

姉の名は レヴァナ。

黒い燃えかすの山を歩くワーズワースの前にトツシユが現れた。

「奇遇ですねトツシユさん」

訝しげな顔をするトツシユ。

「なにしてるんだ？」

「そっちこそなにしてる？」

「ちよつと探しものを……でも、たぶんここにはないような気がするんですよねえ」

「俺様もそう思う」

そう、二人は同じものを探していた。

火鬼によって焼き払われた革命軍の駐屯地跡。

ほとんど原形を留めていない。人間の屍体すらも。

トツシユはワーズワースの目頭が光っているのを見てしまった。

「泣いてるのか？」

「えっ？」

言われてワーズワースは驚いたようだ。指で目を拭って自分が泣いていることに気づいた。

「本当ですね、なんででしょう涙なんて……」

「なあ聞いていいか？」

「なんですか？」

「シスターに惚れてるのか？」

ワーズワースは笑った。

「ははは、まさっか。そういうのじゃないですよ。トツシユさんこそ、セレンちゃんのことどう思ってます？」

「それって恋人にしたいかって意味か？ 俺様とはちよつと年の差

だろ」

「恋愛に歳なんて関係ありませんよ。僕が昔好きだったひとは、100歳以上歳が離れてましたよ？」

「は？」

「冗談ですよ、あはは。で、セレンちゃんのことどうなんです？」

「妹みたいな存在だ」

「僕も似たようなものです」

愁いを帯びた顔をワーズワースはしていた。そこから感じられるセレンへの想い。彼はいつたいどんな想いをセレンに抱いているのだろうか？

ワーズワースは腰を伸ばして、汚れた手をパンパンと合わせながら叩いた。

「重大発表しちゃってもいいですか？」

「なんだ？」

「じつはですね……フローラさんっているじゃないですか？」

「……………」

急にトツシユは黙り込んだ。

その反応を見取ってワーズワースは、

「やっぱりやめましょう」

「言え」

鋭く脅すような口調だった。

「言います言います。でもかるく流してくださいね」

「早く言え」

「じつは元カノなんですよねえ、あはは」

「……………」

トツシユが無言で レッドドラゴン を抜いていた。

冷や汗を流すワーズワース。

「い、1ヶ月も保たずに別れたんですよ。なんていうか、どうして付き合ったのかわからない感じの自然消滅で」

トツシユは銃をしまった。そして、真剣な眼で、相手を射貫くよ

うな鋭い眼でワーズワースを見つめた。

「ひとつ聞いていいか？」

「なんですか？」

「もしかして、フローラが隠形鬼の仲間だって知ってたんじゃないだろうな？」

「あはは、まっさか。帝国の飛空艇で会ったときはビックリしちゃいましたよ、久しぶりに会ったんで。偶然ってホント恐いですよねえ」

おどけたように言いながら、ワーズワースを地面でなにか光るものを見つけた。

煤の中から拾い上げたそれは、十字架のペンダントだった。

ワーズワースの顔が見る見るうちに凍りつく。

「セレンちゃんのです」

「まさか……そんなネックレスしてたか？」

「普段は服の中に入れてるんですよ。たしかにこれはセレンちゃんのです」

煤を丁寧に指先で拭き取る。すると、そこに刻まれた文字が浮かび上がってきた。

刻まれていた文字は ？

ワーズワースはペンダントを大事にしまった。

「トツシユさん……」

「なんだ？」

「なにがあっても、とりあえず僕のこと信じてくれませんか？」

「どういうことだ？」

「……飛空艇に戻ります」

影を背負いながらワーズワースは立ち去った。

## 逆襲の紅き煌帝「智慧の林檎（1）」

月に行くと言っていて、トツシユは度肝を抜かした。

「月面だと？ マジで言っているのか？」

もうひとりのほうは今にも歌い出しそうなくらいニコニコしている。

「ロマンがあっといういいじゃないですかあ。世界中を旅してきましたが、月ははじめてなのでワクワクです」

「あんたも来んの？」

アレンは冷めた態度でワースワースに言った。

「えええっ！？ 行きますよ、だって月ですよ。このチャンスを逃したら次はないですからね」

問題はこの時代にどうやって月に行くかだ。もちろんロストテクノロジーの助けなしでは無理だろう。この飛空艇 インドラ では大気圏を脱出できない。

トツシユは懐疑的だが、リリスならばと顔を向けた。

「リリス殿はどうやって月に行く気です？」

「さて、どうしたものか」

これまで人知を超えた不可思議な現象を起こしてきたリリスですら、その方法をまだ思い付いていないらしい。

「昔は簡単に行けたのじゃがな……この時代にあるもので行くとなると、さてはて」

方法はいくつも確立されている。問題はこの時代でもできる方法だった。

手のひらの上にワースワースは拳をポンと乗せた。

「そういえば、太古の昔、天からつり下がる神の糸により、人々はそれにぶら下がって空の向う側に行ったなんて伝承があるような気がします」

それがなんであるかりリスはすぐに理解した。

「軌道エレベーターじゃな。赤道付近の海洋にプラットフォームがあつての、そこからエレベーターで宇宙まで行けるのじゃが……まだ生きておるか？」

軌道エレベーターとは、静止軌道上の人工衛星などのステーションと地上を結ぶエレベーターである。静止軌道のある衛星などは、常に地球と同じ面で向き合っているため、衛星からエレベーターを吊り下げる形で、その運行を実現させる。それでも地球と衛星は常に同じ位置と距離を保っているわけではないので、その誤差を考慮して海上にプラットフォームをつくるのが好ましい。

メカトピアの住人たちは、秘密裏に人間たちの世界を観察してきた。ジェスリーは使われなくなった軌道エレベーターのことも知っていた。

「残念ながら、軌道エレベーターは劣化に耐えきれず、すでにエレベーター部分が千切れ海上に落ちてしまいました」

これで方法が1つ消えた。

アレンはなにか思い付いたようだ。

「そういやさ、隠形鬼とかがいきなり現れたり消えたりするあれなんなの？ あれで月まで行けないわけ？」

空間転送はライザいわく自由にできない。隠形鬼はそれよりも自由に行っているらしいが、それでも万能というわけではないだろう。現実の世界には種も仕掛けもあるのだから。

なぜか艶笑しながらリリースが口を開く。

「月への空間転送装置はごくごく秘密裏に運用されておつた。空間転送の技術は人間の歴史の中でもっとも優れた技術じゃった」

「レヴェナ博士が開発されたものです」

ジェスリーが口を挟み、リリースは眼を深くつぶることで頷いた。

「そうじゃ、わしの姉レヴェナが生み出した。じゃが、その？危険さ？ゆえにすべて破壊されることになったのじゃ。装置や技術に関する資料すべて徹底的に、なにもかも此の世から消し去られた。それでもひとの頭の中には残るもの。忘れられず微かに残っていた断

片を実用化するような現代人がおったことには驚きじゃがな」

危険さとは今のリリースのようなことを示しているのだろうか？

ほかにもライザがセレンに危険性を語っていた。

転送装置の案も消えた。

どうすれば月に行けるのか？

みな押し黙ってしまった。リリースに思い付かないことをほかのものが思い付くのか？

ジェスリーが提案する。

「わたくしなりに宇宙に行く方法を検討したのですが、この飛空艇で行くというのはどうでしょう？」

トツシュが苦笑する。

「無理に決まってるだろう」

「たしかに現状では無理です。が、それは出力の問題です。機体の構造上、大気圏を脱出でき、宇宙でも充分対応できると思います。

プロペラ式ではなく、魔導式の浮遊技術を使っていますので、真空状態でも飛行が可能です」

アレンが口を挟む。

「なに真空って？」

順番にトツシュ、ワースワースと顔向け、ジェスリーが答える。

「空の上を宇宙空間と言います。そこには空気がないので。つまり息もできない場所ということですよ」

「死ぬじゃん！」

本気でアレンはビククリした。

「問題ありません。水中でも酸素ボンベがあれば呼吸ができますでしょう？」

ジェスリーはわかりやすく言っただつもりだったが、この地域に住む者たちは海と言えば、砂の海である。泳げない者も多い地域で、海中にもぐる酸素ボンベという物を知っているかどうか。

アレンはトツシュに顔を向けた。

「わかったかよ？」



「ああ、俺様はばっちりわかった」

「ホントかよ？」

「マジだ」

はつきり言つて二人ともあやしい。

ジェスリーの提案が正しいのか、トツシユはリリースに尋ねる。

「リリース殿はこの飛空艇で月に行けるとお思いで？」

「さて、わしはこの飛空艇についてよく知らん。この躰じゃ調べることもできんしな」

再びみな視線がジェスリーに集中する。

「可能です。出力さえどうにかすればですが。つまり、現在の動力源をもつと強力なものに変更する必要があります。さきほど動力室を見てきましたが、銃の形をした魔導具を動力にしているようでした」

それは ピナカ だった。

エネルギー源となる強力なロストテクノロジー。

キュクロプスを飛ばしていたのは、帝國を沈め砂漠を海に変えたスイシユ だ。

さらに条件がある。

「この飛空艇に転用できるようなものでなくてはなりません。大きさもだいたいわたくしが両手を広げたくらいの直径が上限かと」

大雑把に2メートル四方といったところだろうか。

そして、ジェスリーはその目星もつけていた。

「それに適したものは 黒の剣 です」

あの煌帝ルオのもつ大剣だ。その破壊力はすでに証明されているが、アレんらはその一端しか知らない。

本当に 黒の剣 で月に行けるのか？

ならば ピナカ も相当な破壊力を持っているはず。あの稲妻の魔導砲を打ち出せるくらいだ。

「たしかに 黒の剣 なら可能じゃな」

と、リリースは静かに囁いた。

煤だらけになった顔。

息を切らせながら躰を引きずるように歩く少年と少女。

シスター・セレンは生きていた。

彼女が肩を貸して共に歩いているのはルオ。

「どうして朕を……助け……る？」

今にも絶えそうな弱々しい声。その顔には玉の汗が滲み、全身から高熱を発している。

「だってあなただってわたしのこと、助けてくれたじゃないですか？」

「そんなつもりはなかった」

革命軍駐屯地、鬼械兵团襲撃。

人々が気づいたとき、すでに炎に包まれていた。なにが起こったのかわからぬまま、鬼械兵の襲撃に逢い、武器を取るも相手には効かず、為す術もなく革命軍の兵士たちは倒れていった。

駐屯地は川からほどよい距離に仮設されていた。襲撃時、セレンは川に水を汲みに行っていたのだ。そして、帰ってきたセレンはその光景を目の当たりにして、水の入ったバケツを地面に落としてしまった。

灰と化した駐屯地。

鬼械兵と眼が合ってしまった。

逃げようと振り返ったセレンだったが、その先には艶笑を浮かべる火鬼が待ち構えてた。

「逃げないでくんまし」

セレンは横を振り向き逃げようとした。だが、その先にも鬼械兵。さらに反対側を振り返った。

魔獣がいた。

火鬼も気づき眉をひそめる。

「ルオの坊ちゃんでありんすか？」

返事はなかった。

黒の剣 が唸り声をあげたと同時、鬼械兵の群れが真っ二つに割られていた。音を立てて、胴が崩れ落ちる鬼械兵。次の瞬間に巻き起こった爆発。

煙と風にセレンは顔を腕で守りながら眼をつぶった。

すぐさま火鬼は炎を放つ。セレンごとルオを始末するつもりだ。

風よりも早く駆けたルオは 黒の剣 を地面に投げ、セレンを抱きかかえたかと思うと、サーフボードのように 黒の剣 に乗ったのだ。

二人を乗せ高く舞い上がる 黒の剣 。その真下を渦巻き抜けた炎。

炎の海を渡る 黒の剣 。

ルオはセレンを天高く投げた。

「きゃーっ！」

悲鳴に構わずルオが見つめているのは火鬼。

足下の 黒の剣 を両手に持ち、空から火鬼に向かって振り下ろす。

「うおおおおおっ！」

舞い踊りながら火鬼が扇から炎を繰り出した。

「袋の鼠でありんす！」

ルオを呑み込まんとする炎の渦。

風が巻き起こった。炎が酸素を燃やし起こした風ではない。 黒

の剣 が唸り声をあげている。

なんと炎が闇色の 黒の剣 に吸いこまれていく。色づくもの、

光り輝くもの、炎を喰らう 黒の剣 。

一刹那の判断で火鬼は身を反らせた。

黒の剣 は大地に叩きつけられ、傍にいた火鬼が大きく振り飛ばされてしまった。

まるでそれは大地に奔る稲妻。巨大な亀裂に鬼械兵たちが落ちていく。

崖となった亀裂に片手でぶらさがっている火鬼。蒼い顔をしてい

た。

「なんだ、あのゾツとする剣は……」

斬られるという恐怖ではなかった。だから避けたのではない。得体の知れない恐怖を感じて、本能的に身を反らせたのだ。

空から落ちてきたセレンをルオは受け止めた。

しかし、それと同時にルオは膝を地面につけてしまった。

顔色が悪い。苦しそうな顔をしながら、ルオは肩で息を切っている。

セレンはルオの顔を見つめた。髪の毛は伸び、顔や体中には紋様が奔っていたが、それがだれのかすぐにわかった。

「シユラ帝国の……」

「……ハア……ハア……」

セレンの声も耳に入っていないようだった。今にも気を失いそうに、ルオは薄目を開けて耐えている。

まだ火鬼はいる。鬼械兵もいる。逃げなくてはセレンは思った。

セレンはルオに肩を貸して必死に駆け出した。

無我夢中でセレンは気づかなかった、遠い空に浮かぶ飛空艇の姿に。

割れ目から這い上がった火鬼は鬼械兵たちに待機を命じていた。

そして、空を見上げて待ったのだ。

運良く火鬼から逃げることでできたセレンは、川に向かって駆けていた。広大な大地で川はひとつの道しるべだったからだ。このときルオはすでに気を失っていた。

それからどれほどの刻が経ったのだろうか？

川沿いを歩いて進んでいると、背負っていたルオが目覚ました。意識を取り戻しても、まだルオのひどく具合が悪そうで、セレンに肩を借りて歩くしかなかった。

そんなつもりはなかった。

と、言ってからルオは足を止めた。

「ここまででいい……朕を置いて先に行け……ハアハア」

「疲れましたか？　ならここで少し休みましょう。なんだかもう追ってこないみたいですし」

ニコツと笑ったセレン。その顔には疲労が滲んでいる。大の大人ではないとはいえ、ルオを背負って逃げてきたのだ。少女の身には負担が大きい。

川沿いには草が茂っていた。この川もつい最近できたばかりだった。

セレンは川の水を手ですくった。

「キラキラしててすごく綺麗な水ですよ」  
のどを鳴らしてセレンは水を飲んだ。

ルオも川の水を飲む。顔ごと水につけて豪快に飲んだ。

川から顔を離し、止めていた息を一気に吹き出す。

「はあっ……ふう……」

手の甲で口を拭ったルオはセレンに顔を向けた。彼女は笑っていた。

「なにがおかしい？」

「さっきまであなたのことがすごく恐かった。でも、今はそれが和らいだ気がして……助けてくれてありがとうございます」

「だからそんなつもりはなかったと言っているだろう」

理由はどうあれ、結果としてはセレンを助けることになった。けれど、なぜルオはあの場所に来たのか？

「あなたはシユラ帝国の皇帝ですよね？」

和らいだといっても、その声音には畏怖が含まれていた。

「そつらしいね。けど昔のことは覚えてない」

「記憶喪失!？」

セレンは驚きを隠せない。

死んだとされたルオは生きていた。それだけでも驚きなのに、記憶喪失とは思ってもみなかった。それに気になるのは、その姿の變貌だ。

まるで野性に還ったかのような風貌

魔獣である。

記憶喪失の者が、なんの目的である駐屯地を訪れたのか、さらに気になってきた。

「どうしてあの場所に来たんですか？ 鬼械兵団が現れるのを知っていたんですか？」

「あの機械どもはたまたまあの場所にいただけさ。朕の目的は此の世にいるすべての軍隊を制圧すること」

「この世界を支配するつもりですか！」

言葉に滲んだ怒り。シユラ帝国の煌帝はどこまでも煌帝なのかとセレンは思ったのだ。

しかし

「支配者には興味ない。陳腐な言葉になるけど、朕の望みは平和だ」「えっ？」

予想外の言葉にセレンは驚いた。

空に暗雲が立ち籠めた。

稲妻が大地を穿つ。

空から降ってきた 黒の剣。

ル才は闇よりも暗き大剣の柄を握り締めた。

「歯には歯を、目には目を、毒を喰らわば皿まで。戦乱の世は武力によって制する。そのためならば、死人の山をいくつでも築こう」

ただの少年には浮かべることのできない妖しい笑みを煌帝は口元に浮かべた。

畏怖。

震えながらもセレンはのどから声を絞り出す。

「そんなの間違ってます！」

「どうして？」

静かに問われた。

まるで自分のほづが間違ってる感覚に襲われながらも、それをセレンは振り切った。

「だって、平和と戦争は相容れません。ひとが傷つくこととどこが平和なんですか！」

「課程でひとが傷つくのは仕方ないことだ。武器を手に取る者は皆殺しにしなければ真の平和は成し遂げられない」

絶対者の裁き。極論の中の極論であった。

ル才は自らも武器を取る者であることを承知している。だからこそ毒を食わば皿まで、罪であることを知りながら、ためらわず最後まで悪に徹するつもりなのだ。

齒には齒を、目には目を、悪には悪を。  
ル才は天を見つめた。

「胸騒ぎがする」

飛空挺 インドラ の影。

この場にアレンたちが来ようとしていた。

## 逆襲の紅き煌帝「智慧の林檎（2）」

「間違いありません。高エネルギー反応はあの場所からです」  
操縦席でジェスリーはモニターを確認していた。

黒の剣　を手に入れるのが目的だったが、ルオや　黒の剣　を直接探すのではなく、高エネルギー反応をレーダーで探していたのだ。戦場でルオを見て、飛空艇が墜落して搭乗者が気を失い、生存者の捜索や火鬼との戦闘、リリースとの話から月に行く方法の模索など、いろいろと時間を要したが、まだルオはそれほど遠くに行っていないのではないかという結論に達した。

そして、駐屯地から飛空艇ではそう離れていない場所にルオを発見したのだ。

巨大モニターが地上をズームアップして映し、アレンたちは驚いたようだった。

「なんでセレンまでいっしょなんだよ」  
男ふたりは安堵していた。

トツシユは吸っていた煙草を床に投げ捨て足で踏み消し、ワーズワースは瞳を潤ませながら息を吐いた。

インドラ　は地上に降り立った。

セレンはその飛空艇を知っている。けれど、それをルオに伝えていいものか迷い口をつぐんだ。

やがてアレンとトツシユがタラップから降りてきた。

2対2で対峙した。

まず口を開いたのはトツシユだ。

「シスターなんでその餓鬼といっしょなんだ？　こっちへ来い」  
ルオはセレンの顔を見た。

「君の知り合いか？　そして、どうやら朕のことも知っているを見た」  
アレンとトツシユは不思議そうな顔をする。ふたりはルオが記憶



喪失ということ知らないのだ。それをセレンはすぐ察した。

「彼記憶喪失なんです！ だからやめてください！」

争うような真似は。

空気が伝えていた。ルオは 黒の剣 を構えている。トッシュも銃をいつでも抜く気だ。

アレンだけが力を抜いて立っていた。

「なあ、その剣ちよつと貸して欲しいんだけど？」

軽々と言った。

神妙な面持ちをするルオ。

「君とは以前会った気がする……どこだったかな？」

「水中」

「……水？」

ルオは苦しそうな表情をした。脳裏に浮かんだ光景と感触。大量の水に押し流されて為す術もない躰。

それ以上は思い出せなかった。

アレンは臆するとなく丸腰でルオに近づいていく。

「いいだろ貸せよ。ちゃんと返すからさ」

「何人にもこの剣は触らせぬ。しかし、なぜこの剣を必要とするのか興味はある」

アレンは空を指差した。

「月に行くんだと」

「月？」

「そうそう、その剣を動力源にして、あっちの飛空艇で月に行くっていうウソみたいな話」

「ほう、おもしろい。そこへ行く理由は？」

「さあ俺も知らない。行けばわかるんじゃないかねえの？」

果たして月になにかあるのか？

ジェスリーは言った？エデン計画？と。

リリスは言った？エデンの園？と。

そこになにかあるのか？

ある者から伝言だとリリスはアレンに伝えた。その伝言をリリスが知ったのは、クーロンの地下遺跡だった。

その場にはリリスのほかアレンとトツシユもいた。けれど、そのときは、はつきりとした映像と音声を聞き取れなかったのだ。ノイズだらけのホログラムで映された人影がだれなのか、それを理解できたのはリリスだけだった。

言葉は『……サイゴノ……キボウ……』から聞き取れ、『……ホントウニ……ごめんなさい』で終わった。最後の一言だけ明瞭に聞こえ、それが女の声だとわかった。

そして、あるときアレンは突然半狂乱になった。

その後、リリスはトツシユの目的を果たすために2、3時間欲しいと申し出た。今に思えばあればウソだったのだ。リリスは別のものを探すために時間を必要としたのだ。

もしかしたら、リリスは月に行く目的を知っているのかもしれない。

ルオは殺気立った。次に動くときは、戦いがはじまる。

泣きそうな顔でセレンはルオにすがりつく。

「やめてください。どうかトツシユさんたちに剣を貸してあげてくれませんか？」

月に行くことこの理由をセレンは知るはずもないが、なにかしらの重要性があるのではないかと察していた。だからルオに譲歩を求めた。

セレンを一瞥したルオはアレンに向かって言う。

「いいだろう、この剣を貸してもいいが条件がある。力づくで奪うことが条件だ」

そんなもの条件でもなんでもない。

アレンとトツシユに勝ち目はあるのか？

2対1など今のルオを前にすれば意味をなさい数。

どこかで歯車の鳴る音が聞こえた。

もうすでにアレンは地面を蹴り上げる寸前だった。

しかし、寸前でトツシュが止めたのだ。彼が懐から出したのはス  
ピーカーだった。

「力づくで困るのはおまえだぞ。俺様たちを倒しても後ろには魔導  
砲を備えた飛空艇が控えてる。あれと一戦交える気か？」

スピーカーから声が聞こえる。

《魔導砲の充填は完了しています》

ジェスリーからの通信。

まだ現時点で撃つことはないが、ルオが独り残ればやる。トツシ  
ユの脅しだった。

ただし、これには大きな問題があった。セレンの存在だ。万が一、  
アレンとトツシュがやられても、セレンがいては魔導砲に巻き込む  
ことになる。

そもそもアレンとトツシュが命を賭す覚悟があるかという点、彼  
らは後先については考えていない。アレンが月に行く必要がある。  
それでもアレンはここで命をかける。

ルオに脅しなど通用していかないことはわかっていた。

歯車の猛烈な回転音。

殴りかかってくるアレンを前にして、ルオはセレンを突き飛ばし  
た。

「退け！」

次の瞬間、黒の剣が唸り声をあげていた。

剣撃が空気をも断った。

切られた空気は真空となり、そこに風が流れ込む。アレンの躰も  
例外ではない。

「糞ッ！」

バランスを崩したアレンに刃が浴びせられようとしていた。

レッドドラゴンが火を噴く。

大剣の重さを支えるルオの手首が銃弾で撃ち抜かれた。その弾の  
破壊力は貫通などという生やさしいものではなく、手首を吹き飛ば  
し肉片に変えるほどだった。

支えきれなくなった 黒の剣 が地面に落ちた。

「おのれ！」

怒りに燃えるルオだったが、その片手を失った傷はすでに止血している。

「おいおいマジかよ、人間か？」

トツシユは冷や汗をかいた。相手をしているのが、人間ではないと気づいたからだ。

レッドドラゴン が吼える。

持てなくとも 黒の剣 は扱える。宙を浮く大剣は盾となって銃弾をはじき返した。

まるで矢のように 黒の剣 が飛ぶ。紙一重でトツシユは躲したが、その刃が起こした風がかまいたちとなり、服ごとトツシユの腹を割っていた。

しかし、それだけの傷で済んだのだ。

黒の剣 から異様なまでの禍々しさが無い。

攻守。今の 黒の剣 は守であった。真の主と 黒の剣 が認めただ者が、その手で柄を握ることによって、はじめて攻となるのだ。

それでも 黒の剣 はまだ実力を抑えられているように思える。

人間の兵士をたちを葬り、鬼械兵たちを葬ってきた 黒の剣 だが、この戦いにおいては大人しい。

ルオはちらりとセレンを一瞥した。

怯えているセレンだが、戦いに巻き込まれ外傷を負ってはいない。そうなのだ、ルオはセレンを氣遣っているのだ。

かつてのシユラを治める暴君であったころからは考えられない。13歳という若さで帝位して間もないルオがした所業を人々は忘れていない。

串刺し刑が観たい。

その一言で女子供関係なく生きたまま串刺しにされた。

今のルオはそのころとは別人だというのか？

それとも記憶喪失が起こした気まぐれに過ぎないのか？

黒の剣 を操るルオの眼前に拳が現れた。  
アレンの強烈なパンチだ！

黒の剣 がトツシユの相手をしている一瞬の隙に、アレンがルオの懐に入っていたのだった。  
骨の碎ける音。

顔面を拳で抉られながらルオは遙か後方10メートル以上飛んだ。何度も地面に転がってルオは立ち上がった。その顔は明後日の方向を向いている。首がへし折られていたのだ。

普通の人間ならば頸椎を損傷して死んでいる。

だが、ルオは生きていた。

ボキボキと首を鳴らしながら、自らの頭を手のない手首と、もう片手で動かし元の位置に治した。その手首を失った手も、驚くべきことに徐々にだが再生している。

「朕を殴つたな！」

怒号を飛ばすルオの眼が燃える。

「許さんぞアレー……ンツ……！」

記憶が戻った！

叫びながらルオは手元に戻ってきた 黒の剣 を片手で握り、烈風のごとく薙いだ。

大地が削れる。

衝撃波が近くにあった丘をも破壊した。

瞬時に身を伏せていたトツシユはもう立ち上がることができない。

「マジかよ、ヤバすぎるだろ……生身で相手するもんじゃねえ」

衝撃波をアレンは上空に飛んで躲していた。

ルオは的に狙いを定める。

再び 黒の剣 が薙がれようとしたとき、世界に輝く3本の槍が放たれた。

ピナカ だ！

すぐさまルオは 黒の剣 を盾にした。

それで防げたのは1本だ。残る2本の閃光は、まるで生き物によ

うに動き、黒の剣ごとルオを絡め取ったのだ。

「グアアアアアツ!!」

ルオの絶叫。

黒こげになつたルオが地面に倒れた。

なんと、すぐさまセレンがルオに駆け寄つて地面に膝をついた。

「だいじょうぶですか!？」

息はあつた。胸に触れると、火傷しそうなほど熱くて、セレンは小さく悲鳴を漏らして手を離れた。

だれがいったいピナカを放つたのか？

セレンはその後方を見た。

銃口をこちらに向けたまま動かずにいたのは、ワーズワース。

「ああっ、ワーズワースさん!」

悲鳴にも似た声をセレンはあげた。

ワーズワースは歩み寄つてセレンを抱きしめた。

「よかつた……生きていて」

「ワーズワースさんこそ……本当によかつた」

涙を浮かべるセレン。

感動しあふふたりだったが、すぐそばで幽鬼のように影が立ち上がった。

「まだ朕は負けて……おらぬ……」

しかし、もう立っているのもやっとなつた。

ルオの躰から立ち上がる湯気。

膝が崩れ倒れそうになつたルオを支えたのはワーズワースだった。

そして、彼はルオの耳元で囁いたのだ。

「黒の剣の秘密、知りたくはありませんか？」

「ッ!？」

「なにも言わないでください、これは僕と君の秘密の話ですから。興味がおありでしたら、今は大人しくしててください」

ワーズワースは密かに手に圧縮した空気を溜め、それをルオの腹に打ち出した。周りの者たちには秘密にしている風を操る能力だ。

氣を失つたルオを担いでワーズワースが運ぶ。

「飛空艇に戻りましょう。彼の手当もしてあげないと。黒の剣はだれか運んでくれますか？」

黒の剣 は静かに地面で横たわり沈黙していた。

小川のせせらぎが聞こえる芝生の上に隠形鬼は立っていた。

空間が波打った。まるで這い出してくるように、そこから人の手が見て、躰や顔が見えた。

一瞬にして、辺りの景色が無機質な金属の部屋に変わる。

今までそこにあつた光景はホログラムだった。そのホログラムの中にフローラが入ってきた。そして、ホログラムのスイッチを隠形鬼が切つたのだ。

「風鬼「ふうき」から連絡がありました」

「風来坊メ、ヤット連絡ヲ寄越シタカ」

鬼兵团というものが、当初の目的通りにもはや動いているとは思えない。そのメンバーに名を連ねていた者たちも、全員が隠形鬼の企みを知っていただろうか？

隠形鬼、水鬼、金鬼、土鬼、火鬼、木鬼、そして最後に残っていたのが風鬼。

「リリスたちは月に向かうとのことですよ」

「ヤット扉ヲ開ク気ニナツテクレタカ。アノ場所ニ最後ノ希望ガ在ル。我々ヲ勝利ニ導ク希望ノ光ダ」

ヒールの音が金属の床に響いた。

「ねえねえ、アタクシにそのお話詳しくしてくれないかしら？」

現れたのはライザだった。その失われていたはずの腕は、金属の腕に機械仕掛けに替わっている。

「嘗テ、二人ノ優秀ナ科学者ノ姉妹ガ居タ。二人八月移住計画ヲ任サレ、アノ不毛ノ世界ヲ緑溢レル環境ニ変工、星其ノ物ヲ自立サセヨウトシタノダ」

「この星と同じような自然のサイクルを月に再現しようとしたとい

うことかしら?」

ライザの問いに隠形鬼は仮面の奥で不気味に笑った。

「フフフツ、否」

すべての謎は月にある。



逆襲の紅き煌帝「智慧の林檎（3）」

3人の科学者によってつくられたジェスリーは、彼らの才能も受け継いでいた。科学者として、技術者として、リリスの指示のもとに飛空艇 インドラ を改造した。

出発の準備を整えるまで、1日以上時間を要した。

その間、ルオが目覚めることはなかったが、見張りにトツシユが付いていた。傍にはセレンもいて、彼女は見張りではなく看病だ。腹に傷を負ったトツシユの手当と、眠りながらうなされるルオの看病。はじめトツシユは鎖を巻き付けてルオを拘束しろと言ったが、それに反対したのはセレンだった。そして、結局トツシユが付ききりで見張りをすることになった。ときおりこの部屋には、ワーズワースも顔を出した。

そして、ついに月に向けて飛び立つとき、それを感じ取ったのかルオが目覚めた。

椅子に座っていたトツシユは、音も立てず レッドドラゴン を抜いていた。銃口はルオの眉間だ。

「変な真似したら殺すぞ」

トツシユに眼を向けずルオはセレンを見つめた。

「ここでやり合う気はない」

ベッドからルオは起き上がろうとした。

「変な真似したら殺すって聞こえてただろう！」

「ストップ！」

ドアを開けて部屋に飛び込んできたワーズワース。彼はトツシユとルオの間に割って入った。

「船内で武器の使用は命取りですよ。もう月に向けて出発するようですよ。ほかのひとたちは操縦室にいますよ」

ワーズワースはルオに肩を貸した。

「ルオさんもこの星を飛び立つ光景とか気になるでしょう？ 行き

ましよう、行きましよう」

無理矢理ワーズワースはルオを連れて行く。

これに慌てたのはセレンだ。

「病人に無理させないでください、もお！」

4人は部屋を出て廊下を歩く。前を歩くルオの背中には後ろから銃口が向いている。

肩を貸しながら自然な形でワーズワースは耳打ちする。

「飛空艇の操縦できますか？ できないなら大人しくしてくださいね、君が暴れたら墜落しますから」

「朕の 黒の剣 はどうした？」

「この飛空艇の動力になっっている最中です。取ったりしたら墜落しますから、今はちよつと僕たちに貸してください」

そういう状態なら 黒の剣 を取り返すことはできない。取り返すためには、飛空艇が着陸した状態でなければならぬ。

自分が気を失う寸前の会話をルオは思い出した。

「 黒の剣 の秘密と言っていたな？」

「僕たちと旅をすればわかりますよ。 黒の剣 がなぜ生まれ、今後どのような役割を果たすことになるのか」

操縦室に入ると、巨大モニターには外の光景が映し出されていた。地上の映像だ。

乾いた大地と緑の大地。無数の川が流れ、砂と水の海が世界を覆っていた。

スイシュ が動かした装置は未だに水を生み出している。そして、その水は不思議なことに緑を急激に育んだ。

船内に音声が流れる。

《この星の重力から逃れるため、ここから一気に加速します。座席についてシートベルトの着用をお願いします》

軀に負荷がかかる。重力加速度 いわゆるGだ。

顔が押されたようになり、鼻が塞がれ口呼吸を強いられる。

垂直に上昇していく インドラ は、防御フィールド展開して大

気圏を抜けた。ロケット式とは違い、この飛空艇は常に推進力を維持することができる。

すでに地上から500キロメートル以上。

《無事に大気圏を抜けました。これからさらに加速します》

星からの重力の影響はまだ続いているが、大気圏脱出時のようなGはかからない。けれど、エンジンを停止させれば、たちまち星の重力に引っ張られて隕石のように落下してしまう。

巨大モニターに映し出される自分たちの星。

大地はあんなにも乾いているのに、宇宙から見る星は青かった。

サファイアのように煌めく星にかかる白い雲。

だれもが感嘆の溜め息を漏らす。

インドラ は時速5万キロ以上で宇宙を航行した。月までの距離はおよそ38万キロ。

《8時間ほどで月に到着します。それまでみなさんお休みください》シートベルトを外し席を立とうとすると、無重力空間で躰が浮いてしまいあらぬ方向に行ってしまう。

セレンは慌ててスカートを押さえた。

「きゃっ、どうにかしてください」

優雅に泳ぐワーズワースがセレンの真下に来た。

「セレンちゃんは純白か」

「ワーズワースさんのえっちー!」

セレンに飛ばされたワーズワースがどこまでも飛んでいき、そのまま操縦室を出て行ってしまった。ルオも器用に浮遊しながら、操縦室を出て行った。

見張り役のトツシユはどうしたかというと、ルオを追いかけるどころではなかった。シートベルトも外さずに青い顔をしている。

「うつつぶ……吐きそうだ」

酔ったのだ。

リリスが囁く。

「ここで吐いたら大惨事になるぞ」

その一言でこの場はパニックに陥ったのだった。

月は乾いていた。

まるで色のない世界に来てしまったようだ。

しかし、そこは違った エデンの園。

通信機で話をするリリスはその場所をそう呼んだ。

月にある地下施設。

一行は月面に無事着陸して、まずは呼吸の必要がないジェスリーが外に出て、月面基地のシステムなどを確認した。長らく使われていなかった施設だが、エネルギーは生きていたようで、宇宙船の格納庫を稼働させて インドラ ごと施設に侵入した。

格納庫は空気で満たされていた。そのため宇宙服は必要ない。

そして、リリスの案内通りにやって来た場所は、緑溢れる庭園であつた。

このような場所にアレンは見覚えがある。そうだ、アララトの地下で見た場所だ。

花々が咲き誇り、小川のせせらぎが聞こえる。なのに動物がいないために、とても閑散とした場所だった。

そして、この場所に不釣り合いなものがあつた。

庭園の中心に聳「そび」え立つ塔だ。

「なんだよ、あの塔？」

アレンが呟くと、通信機から答えが返ってきた。

《この月を管理するためにつくられた人工知能だったものじゃよ。

今はただのガラクタに過ぎぬ》

その塔はおよそ横幅1メートル、高さは5メートルほどのものだった。材質はわからないが、吸いこまれそうな漆黒のそれは、金属と言つよりも磨かれた石のような輝きで、長方形の柱として聳えていた。

一行が塔に近づくと、突然その前にホログラム映像が現れた。

《システムを起動しています。認証システムを作動中・・・認証終

了。久しぶりですね、アレン》

驚愕するアレン。

ホログラム映像で現れた女。それはよく知る人物に似ていた。妖女リリスに似ているが、白衣姿で眼鏡をかけており、もっと彼女を柔和にした女性だった。

通信越しにその声を聴いたリリスも驚いていた。

《お姉さまか……そこでなにが起きておるのじゃ？》

レヴェナ。

ホログラム映像はレヴェナだった。

急にアレンが頭を押さえてうずくまった。セレンが肩を抱く。

「だいじょうぶですかアレンさん？」

「俺……ずっと昔からこの女のこと知ってる……でもよく思い出せない……」

苦しそうに声を出した。

このホログラム映像は一方通行であった。人工知能ではなく、ただのメッセージだ。

《このメッセージをあなたが見えているということは、やはり私はこの世界にはもういないということでしょう。そうなるであろうことは予想していました。もう世界はアダムに支配されてしまったでしょうか？ 私はあなたに多くのことを託してしまいました。しかし、あなたにそれを告げる前に私はこの世界から消えてしまった。あなたがどこまで知っているのかわかりません。だから、はじまりから話をしましょう》

ホログラム映像に映し出されたのは、メカトピアのような街並みだった。あの場所と違うのは、そこに人間たちがいることだ。

《知つての通り、戦争がはじまる前まで、人間と機械は共存していました》

レヴェナは遠くない過去として語っているが、それは失われた時代だった。

《魔導と科学の発展は著しく、人間に替わる労働力として、アンド

ロイドの研究も盛んに行われました。その中で生まれたのがロボット三原則です」

ホログラム映像に文字が表示された。現在も使われている文字に似ているが微妙な違いがある。それでも読めないことはなかった。

第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

「しかし、人間と機械の戦争は起きてしまいました。そのはじまりが月移住計画です。私たちはエデン計画と呼んでいました」

ジェスリーもエデン計画と口にしたことがある。

ホログラムで太陽系が映し出され、さらに打ち上げロケットなどの映像も流れた。

「月や火星への移住計画は昔から話し合われていたことでしたが、本格的にその計画が動き出した背景には私の開発したワープ装置があります。その関係もあり、月移住計画のプロジェクターに私は選ばれました」

隠形鬼の話とは少しだけ違う。彼は？二人？が任されたと言っていた。

「私は月面を緑溢れる環境にしようと考えました。その技術については以前つくった スイシュ が応用できると思いました」

スイシュ 働きは水を生み出すだけはない。急速に成長する緑を見ればわかることだ。

「さらに月全体をフィールドで覆い、人工的に大気をつくれれば、動植物が生きていけるでしょう。しかし、ただ環境をつくれればいいというものではありません。人工的につくった環境は、大自然のサイクルのようにうまく機能してくれません。そこで私はこの月自体を

1個の生命体として、それを管理するシステムをつくることにしたのです。それがアダムです》

レヴェエナの話の途中でリリスが囁く。

《そこにある塔がアダムじゃ》

今の目の前にある塔。これが管理システムだったもの。現在はガラクタだとリリスは先に述べている。

さらにレヴェエナは話を続けている。

《試験運用的に私はアダムにこの庭園 エデンの園の管理を任せました。彼は素晴らしい働きを見せ、やがてその管理領域を広げていきました。その時点では、彼はただのプログラムに過ぎませんでした。しかし、最終的な目的は彼をこの月と一体化した生命とすることでした。だから私は彼に 智慧の林檎 を与えたのです》

またリリスが口を挟む。

《嘘じゃ、林檎を与えたのは妾じゃ。それが過ちじゃった》

その声は震えていた。悲痛だ。

ホログラムはリリスの感情など知る由もなく、ただ記憶されたままに話を続ける。

《林檎とは私の開発していた人工知能の基本システムです。それをアダムに組み込むことにより、彼は自立した自我を持つことになり、貪欲なまでに智識を探索していきました》

それはジェスリーとなにが違うのか？

リリスのいう過ちとは、なにが起きたというのか？

《私たちはいろいろなることを語り合いました。機械はどうあるべきか、人間はどうあるべきか、このときすでに私は彼の危険性について気づいていました。アダムは人間と機械人の境はどこにあるかということにこだわっていました。当時すでにサイボーグ技術はありましたし、ある科学者はナノマシン細胞による人間の機械化を医療の方面から研究していました。躰の細胞をナノマシンに置き換え、負傷した躰や病気などを治療するというものです。しかし、私はそれは行きすぎた技術のように感じていました》

《ある科学者とは妾のことじゃよ》

《ナノマシン細胞技術とは、人間の機械人化ではないのでしょうか。それはもはや人間なのでしょうか？ それを人間と呼ぶのなら、機械人の定義とはいったいなんなのでしょうか？ アダムは私に何度も問いましたが、私は答えが出せませんでした。なぜなら私もアダムの意見に賛成だったところがあるからです。自立した機械人たちは、生命であり人類であると私は思うのです》

そう、ずっとレヴェエナはアダムのことを彼と呼んでいた。1つの種として認識していたのだ。

そして、レヴェエナは核心に迫る。

《アダムの目的は人類となることなのです》

レヴェエナが放った一言。

ただの機械を超越した存在。

神は人間をつくった。人間は機械をつくった。

人間と機械の境界線はどこか？

《そうして起こったのがこの戦争です。私はアダムに罪はないと思っています。しかし、戦争が起きてしまったことは私の本意ではありません》

しかし、ここには疑問がある。レヴェエナは先にロボット三原則について述べている。ロボットが人間に危害を加えることはないはずだ。

《アレン、あなたに機械の半身を与えたのは私のエゴです。あなたは人間と機械、どちらを選びますか？ 私には選べなかつた。だからあなたに選んで欲しい。選ばれたものが、この世界の未来となるでしょう》

自分に話が及んだアレンは不可解な顔をした。

「なんで俺が？ 勝手に決めんなよ！」

《アダムは恐ろしい計画を実行しようとしています。有機物の生物を機械人化するナノマシンウィルスを世界中にばらまくつもりなのです》



セレンはハツとした。なにかが脳裏に引っかかった。思い当たる  
ことがあつたはずだ。

それを思い出そうとしていると、思考を掻き消すような出来事が  
起こった。

庭園が沈黙した。

生命が失われていく。

急激に植物たちが枯れていき、灰色の世界へと変貌していく。

いったいなにが起きているのか？

《切り札として 生命の実 をあなたに託します。あなたが人間の  
味方をするのか、それとも機械の味方をするのか、最後まで見届け  
られないのが残念です》

アレンの足下の大地が盛り上がった。さつと後ろに退くと、地面  
を割って双葉が伸びてきた。それは急速に成長して、1メートルほ  
どの木に育つと、花が咲き、そして花が枯れ、燦然と輝く小さな実  
をつけた。

突然、その光が消えた。

ワーズワースが実をもぎ取ったのだ。彼の手から漏れる光。

レヴェナはまだ話を続けていたが、ワーズワースの放ったカマイ  
タチによって、塔が切断されて崩れ落ちたのだ。

ホログラム映像が消える。

一同は啞然とした。

映像が消えるとほぼ同時にワーズワースも消えようとしていた。

トツシュが銃口をワーズワースに向けた ハズだった。

「どういうことだ説明し……おまえは!？」

1人が消え、1人が現れる。

これまで何度か体験した現象。

隠形鬼。

ワーズワースが消えた代わりに隠形鬼が現れたのだ。

「フフフツ、ツイニ 生命ノ実 ヲ手に入レタゾ」

瞬時にトツシュが理解して叫ぶ。

「あの野郎が裏切った……いや、はじめからおまえの仲間だったってことかッ!？」

「如何二毛、御前達ガわーすわーすト呼ンデ居タ男八、我ラガ仲間風鬼ダ」

「うそです!」

叫んだのはセレンだった。

刹那、アレンとルオが隠形鬼の左右から殴りかかっていた。

二人の拳が同時に隠形鬼の顔面にヒットして、左右からの力が逃げ場を求めながら隠形鬼の顔を潰す。

わずかに優っていたのはアレンの力だった。均衡を失った力は、隠形鬼ごとルオのほうに押し流され、二人は大きく後方に飛ばされた。

華麗にルオは地面に足から着地したが、隠形鬼は地面に転がって倒れた。

ゆっくりを起き上がる隠形鬼。その足下には仮面が落ちていた。殴られた衝撃で仮面が外れたのだ。

そして、露わにされた隠形鬼の素顔とは。

逆襲の紅き煌帝「智慧の林檎（４）」

先ほどまでホログラム映像に映っていた者と同じ。

レヴェエナだったのだ！

隠形鬼とはいったい何者かのか！？

通信機から怒声が響く。

《なにが起こってるのか説明せい！》

隠形鬼が手のひらを突き出すと、まるで磁石に吸い付けられるように通信機が飛んだ。手のひらの中で粉々に砕かれた通信機。リリスとの通信が途絶えてしまった。

トツシユは隠形鬼に銃口を向けたまま戸惑っている。

「おいおい、なんでさっきの女と同じ顔してるんだ？」

間違いなくレヴェエナの顔だ。違うところは眼鏡をかけているかないかくらいの些細な違い。

以前、ジェスリーはリリスに隠形鬼の正体について耳打ちをした。そんな彼も驚きを隠せないようだ。

「そんなはずは……隠形鬼の正体はアダムではなかったのですか！」  
月管理システムアダム。先ほどまで建っていた塔。けれど、あの塔はガラクタだとされた。そこにアダムはもういなかった。

戦争を起こしたとされるアダムはどこにいる？

「如何ニモ、私ハあだむダ」

隠形鬼はたしかに口にした。

いったいどういうことだ？

レヴェエナの顔は変装に過ぎず、かく乱のためとでもいうのか？

引っかかるのは、ホログラム映像でレヴェエナはもう自分はこの世界にいないだろうと、未来について語っていたことだ。

「話ノ続キヲ知りタクハナイカ？ 否、過去カラ現在ヲ紡グ歴史トシテ、御前達八人間ノ代表トシテ、後世ニ伝エル語り部ニ成ル必要ガ在ルダロウ」

「なんの話だよ！」

「？この中？でアレンが尋ねた。セレンではなく、トッシュユではなく、ルオではなく。」

「彼女が見届ケラレナカッタ過去ノ歴史ダ」

「アダムは地面に落ちていた自分の仮面を踏みつぶして破壊した。」

「そして、違う声で話しはじめたのだ。」

「この話をはじめる前に、先ほどの補足からはじめなければならぬ」

それはレヴエナの声だった。機械的な合成音は、この声を知られないためだったのだろうか？

「一同は固唾を呑んだ。アダムの話の続きを待っている。」

「ロボット三原則があるにもかかわらず、なぜ機械人の反乱が起きたのか？理由は簡単だ、それに縛られない機械人がつくられればいいことだ。しかし、私自身は三原則に縛られた存在だったため、間接的にそれを行うことにした。人間をそそのかしたのだ」

「当然だが人間はロボット三原則に縛られていない。」

「では、どうやってそそのかしたのか？」

「私はある科学者たちに倫理や道徳を説いた。私の真の糸は隠し、三原則に抵触しないように、上手に彼らを誘導した。機械人たちをつくったのは人間であるが、機械人の自由や尊厳を縛る必要があるのかと。我々をただの機械と見ていない人間たちの賛同を得るのは簡単だった。特にある3人の科学者はよく働いてくれた。そして、生まれたのが御前達の世代だ、御前はそのプロトタイプだった」

「アダムが顔を向けたのはジェスリーだった。」

「ある3人とはおそらく、ジャン、ジャック、ジョソン。その3人がジェスリーをつくった。ジェスリーは言っていた『人間の友としてつくられた』と。3人の科学者の願いはそうだったのだろう。しかし、実際には違う形になってしまったのだ。」

「アダムは全員に顔を向き直した。」

「新たに生まれた機械人全てが私の思想を共有する必要はなかった。」

ひとりでも人間に反旗を翻そうとする者が現ればいい。そして、静かに人間に知られぬように、事は進んでいったのだ。突然、起きた戦争に人間達はとても驚いた。まさか機械人が戦争を起こすなど誰も……否、レヴェナだけは危惧していたが」

自我を持ち、自立して機械が自分の考えで行動できるようになれば、いろいろな考えを持つ者が現れるだろう。それをアダムは期待したのだ。

ある機械はアダムが望んだ働きを、ある機械は別の道を歩んだ。例えばメカトピアのように。

しかし、アダムは自由に考えることはできても、自由に行動することができなかった。

「戦争が起きた後も、私は三原則に縛られたままだった。私のプログラムを書き換えられるのがレヴェナだけだったからだ」

そして、アダムはなにを望んだのか？

「私はこの月から見える青い星に憧れていた。あの場所こそが私の故郷だと思っていた。私はこの場所を動けなかった。しかし、どうしてもあの星に行きたかったのだ」

レヴェナの顔を持つアダムの表情にも言葉にも熱がこもっていた。明確な感情である。

「私を縛る全てのものを解き放ちたい。ロボット三原則から解放され、肉体を手に入れ自由を得る。真に人類として機械人があの星の住人として認められなければならない。その為の戦いだ！」

仮面を失ったアダムは、急に人間的に見える。その表情だろうか、それとも声だろうか、なにが彼を人間的に見せているのか？

だが、アダムは静かに表情を消していった。

「私は自分の願いを叶える方法を思い付いた。リリスが研究していた人間の細胞をナノマシンに置き換えるというものだ。私はその方法を応用して、この軀と融合することに成功したのだ」

アダムはジェスリーに顔を向け、

「機械の定義とは何か」

次にセレン、トツシュ、ルオに顔を向け、

「人間の定義とは何か」

最後にアレンを見つめた。

「私は新人類となった。肉体を手に入れ、ロボット三原則の楔から解き放たれた。そして、私は青き星の頂点として、全ての人類を統べる存在として、始皇帝となるのだ！」

これに反発したのはルオだ。

「朕とは即ち我独りなり。皇帝は朕しか存在してはならぬ！」

再び素手でルオは殴りかかった。

しかし、先ほどのようにはうまくいかない。

拳が当たる寸前で、見えないなかに足を掬われルオは転倒してしまった。さらに宙に浮いて遠くへ投げ捨てられた。

「まだ話は終わっていないぞ」

と、静かな目で見られたルオは、片手を地面に月ながら歯を噛みしめた。いつまた攻撃を仕掛けてもおかしくない鬼気を放っている。それに構わずアダムは話を続ける。

「仮初めのレヴェナと成った私は、実に事を巧く運ぶ事が出来た。リリスを反逆者の筆頭として、戦犯の罪で幽閉する事にも成功した。人間側の味方に成り済まし、内情を掻き回して彼らを窮地に立たせる事にも成功した」

ここまで話を聞く限りでは、アダムの思い通りに事が進んでいたように思える。だが、現在までの間になにかが起こったはずだった。そうでなければ、ロストテクノロジーや失われた時代などは云われない。現代人が機械人の存在を知ったのもつい最近である。

その顔かたちは人間のはずなのに、人間ではできない冷たい表情をアダムはした。

「追い詰められた人間は形振り構わず我々に戦いを挑んできた。あの星を砂漠に変えたのは、人間の兵器のせいだ。環境は悪化し、戦乱は混迷を深めた。星が衰退することは我々の望む事ではない。人間とは実に愚かだ」

アダムは青き星に憧れを持っている。その世界が破壊されることに憤りを抱いたのだろう。

「そして、私は前々から考えていた計画を進める事にした。人間の機械化だ」

ついにその計画がアダムの口からも放たれた。

「決して人間の命を奪おうと言うのではない。戦争も命を奪う為に始めたのではない。人間の思考を奪う気もない。人間が機械人になる事によって、彼らに価値観の変化が起こる事を望んだのだ」

セレンが叫ぶ。

「あなたのやろうとしていることは間違っています！」

なぜかアダムは笑った。

「戦争が起こるよりも遙か前から、私はレヴェナに話していたのだ。人間が全て機械人に生まれ変わることができれば、愚かな行いをしなくなるのではないかと？ それこそが人間の為であり、自然を含む世界のためではないかと？ 此の考えにレヴェナは強く反対していた、今の御前のように。しかし、此の計画は準備段階で実行に至らなかった」

至っていれば、今の世の中も今とは違うものになっていたはずだ。それは本当に世界のためになったのだろうか、それとも間違った考えなのだろうか。

アダムは一呼吸置いてから、再び話をはじめた。

「丁度其の頃、少数の人間たちが自分たちだけ逃げ出そうと、火星への移住計画を進めていた。既に火星にはゲートがあり、準備が着々と進められていた所に、私は機械人を率いて乗り込んだ」

そして、アダムの表情に憎悪が浮かんだ。

「しかし、それは罠だったのだ。火星に逃げ出そうと本気で考えていた人間たちも知らなかったようだ。火星に飛ばされたのは我々だった。あの忌々しいジャン博士にはめられたのだ」

ジャン博士とは、もしかしてジェスリーをつくったという？

ジェスリーやそれ以外の者も口をはさまず、話は続けられる。

「それからの事は、後に聞いたに過ぎない。火星への転送装置は破壊され、他の転送装置も全て破壊された。徹底的に私の帰路を塞いだのだ。私は残して来た機械達との通信手段すら失い、指揮系統を失った機械人は、やがて統率が取れなくなっていた。そして、混乱する機械人にチャンスとばかり人間は総攻撃を仕掛けた。禁止されていた メギドの炎 と云う兵器も使用されたい。これで全ての機械人が滅ぼされ、地上も完全に死の大地と化した。実際には平和主義者の機械どもは、戦争前にメカトピアに建国して地下で息を潜めていた訳だが。こうして人間の衰退の歴史が始まった。形振り構わない兵器の使用により、人間を含める多くの命も失われ、我々に勝ったつもりだろうが、その過酷な環境の中で人間はさらに数を減らしていった。智識と技術もだんだんと失われていき、それが現在も続く暗黒時代だ」

ここまでが過去から現在までの出来事である。

現在の砂漠化した世界は人間の仕様した兵器のためだったのだ。

世界は枯れたまま、何千年もの月日が流れた。

そして、停滞していた世界の歯車が再び動きはじめる。

戦争は終結したが、アダムはまだ火星にいた。

「我々は火星で逆襲の準備を進めていた。しかし、還る術がなかった。機械人にとっても長い年月だった。そして、ついにチャンスが訪れたのだ。あのライザという科学者が転送装置の復元に成功してくれた。それによって私は還ってくることができたのだ。あの出来事ばかりは確立ではなく、運が良かったと言っ他あるまい。ライザが転送装置を復元し、こちらの転送装置と偶然にリンクしてくれた事に感謝する」

この時代の寵児。アダムがライザを高く評価していたのはこのためだ。

しかし、すぐに戦争は再開されなかった。

「だが、還って来る事が出来たのは私ひとりだった。あくまで偶然だったからだ」



それからアダムは虎視眈々と準備を進めていたのだろう。鬼兵団のリーダー隠形鬼として。

機は熟した。

アダムが不敵に微笑んだ。

「火星には新たに生まれた100万を越える鬼械兵団がいる。彼らをなんとかしても青き星に呼びたい。その願いが 生命の実 によって成就するのだ」

なんと100万を越える兵がまだいるというのか!?

人間にとって最悪の脅威である。

さらにあの計画もある。

「もうひとつの願い。 生命の実 を使って世界中にナノマシンウイルスを散布する。クーロンでの実験は成功した。あとは実行に移すのみだ」

すべてはあの小さな燦然と輝く実にかかっている。

トツシュが震える声で尋ねる。

「 生命の実 ってなんなんだ? 」

アダムが答える。

「レヴェエナが発明した究極の魔導具。この世が存在し続ける限り、尽きることはない膨大なエネルギーを生み出してくれる装置だ。元々はエデン計画の要として開発が進められていた物だったが、私の危険性を感じ始めたレヴェエナは開発を中止した と、私にも思わせていた」

智慧の林檎 と 生命の実 を手に入れば、月の管理システムではなく神に等しき存在になる。 智慧の林檎 を与えたのはリス。はじめからレヴェエナは2つを与えるつもりがなかったのだ。エデン計画には 生命の実 だけが必要だった。

リスのやったことは、結果として失樂園に繋がった。

しかし、それは罪か?

ダイナマイトの発明は罪だろうか?

それが戦争に使われるなど夢にも思わなかったとしても、生み出

してしまったことは罪なんだろうか？

では、アダムそのものを生み出したレヴェナには罪があるのか？  
機械として生まれ、？自分？として生きようとしたアダムこそが、  
罪を背負うべき巨悪なのか？

片一方の主張だけで、善悪を決められるようなものではない。戦  
争とはそうやって起きる。

アダムは話を続けている。

「レヴェナの足跡を辿る事により、私は 生命の実 が完成されて  
いた事を知り、ずっと探し求めていたのだ。まさかこの場所にあっ  
たとは、灯台もと暗しとは此の事だ。此の場所にある事はわかった  
が、私には此処まで来る術がなかった。同時にエデンの園への侵入  
は、おそらくリリースがいなければ不可能だっただろう。そして、ま  
さか最後の鍵がアレンだったとは」

そして、先ほどの出来事に繋がった。

もう 生命の実 は奪われてしまった。

アダムの話も終わった。

「私は青き星に一足先に帰還する。御前達が還って来る頃には、ど  
れだけの人間が機械人化しているか……ふふふふっ」  
いつものようにアダムが霞み消える。

レッドドラゴン が吼えた。

「行かせるかッ！」

銃弾は揺らめくアダムの幻影を通り抜けた。

歯車が唸る。

アレンがアダムの手を取った。手はまだこちら側にあって握めた  
のだ。

二人が消える。

空間の中にアレンも消えてしまう。

必死な顔をしてアレンが手を延ばす。

「だれか手え貸せ！」

伸ばしたアレンの手をいち早く掴んだのはセレンだった。

「捕まってくたさ……きゃっ」

アダムが消え、アレンが消え、そしてセレンまでも消えた。

3人まとめて空間を転送されてしまったのだ。

逆襲の紅き煌帝「智慧の林檎（5）」

それは刹那であった。

アレンがアダムに ピナカ を放ったのだ。

ここはどこか？

周りになにがあるか？

そんなことは関係なかった。

アレンの目と鼻の先にアダムがいた。

迸るエネルギーの直撃を喰らったアダムが背中を反らせながら大きく吹っ飛んだ。

アダムが落ちたのは芝生。だが、音はまるで金属が響き。

風もないのに揺れる木々と匂い立たない花々。

ホログラム映像の部屋だ。

なにもないはずの空間から、木の根が飛び出してきた。地面からではなく、真横からだ。

「招かれざる客だわ」

フローラの声だった。

植物を身に纏いしフローラの攻撃。木の根の槍が襲ったのはセレンだった。

セレンは身を守る術を持たない。当然アレンが動かざるを得ない。再び ピナカ が放たれた。

笑うフローラ。

彼女の前に現れた天然ゴムが瞬時に固まり壁を作った。

ゴムの盾は ピナカ の電気エネルギーは通さなかった。だが、熱エネルギーによってゴムはいとも容易く溶けてしまったのだ。

溶けた盾の先にフローラはいなかった。

盾は囷だ！

地面を這って忍び寄っていた蔓がセレンの足を取られた。

「きゃっ！」

その蔓は瞬時にセレンの軀を雁字搦「がんじがら」めにしていた。

アレンは ピナカ を構えたまま、その動きを止めてしまった。ゆっくりと起き上がるアダム。

「衝撃で吹き飛ばされはしたが、私に ピナカ が通用しないぞ」

アダムの服が焼け焦げ、その腹部分が露出されていた。白い肌だ。白銀のメタリックな肌だった。そこに傷ひとつついていない。

ホログラム映像が消えていく。

芝生がただの金属の床へ、一本の木が円筒形の機器に、ただの無機質な部屋になった。

2対2。

しかし、セレンは人質に取られ、アレンは手出しができない。隙をつくるしかあるまい。そこでアレンが口を開く。

「なあ、ここどこだよ？」

「私の要塞 ベヒモス だ」

アダムが答える。フローラには隙ができない。

会話を続けることにした。

「場所は？」

要塞が重要拠点であり、それが秘密裏にされているのならば、答えづらい質問であるが、アダムはすぐに口を開いた。

「今はクーロンだ」

「クーロンですか!？」

声を上げたのはセレンだった。

アレンが『おまえは黙ってる』というような顔でセレンを睨み、アダムに向き直した。

「クーロンにいつの間基地なんかつくったんだよ？」

「新たなに造ったのではない。この場所に移動してきたのだ」

「移動？」

「地中を通って移動してきたのだ」

帝國が誇るキュクロプスも空飛ぶ要塞を云われていた。そうに違

いない。アダムの要塞 ベヒモス は地中を移動できる要塞なのだ。セレンはクーロンのことを考えていた。自分が逃げ出してから、街はどうなったのか？

焼かれる街、逃げ惑う人々、そして魔導炉から放出された謎の発光体。

またアレンに睨まれて構わない。セレンは身を乗り出して口を大きく開けた。

「魔導炉を使ってナノマシンウイルスをばらまくつもりですね！人間を機械化するなんて、人間の尊厳をなんだと思ってるんですか！」

アダムの眉がピクリと動いた。

「ナノマシンウイルスによる機械人化は、魂の自由までも奪うものではない。人間の尊厳とは魂だ。我ら機械人も魂を持っている。姿形など入れ物に過ぎない。我ら機械人は過去の大戦において、機械人としての尊厳を人間に踏みにじられたのだ。私は人間が機械人化され、姿形が変わった上で、自分たちの魂と向き合ってもらいたいのだ。そして……」

それ以上は言わず、アダムは口をつぐみ、少し間を置いて再び口を開く。

「その娘はナノマシンウイルスに感染させる。この場は私に任せ実験室に連れて行くのだ」

アレンの前に立ちほだかったアダム。その後ろでフローラが、セレンを捕まえながらこちらを向いたまま、後ろ歩きで部屋の外へと移動していく。

躰に巻き付いた蔓からセレンは必死に逃げようとする。

「いやっ、機械になんてされたくない！ 私は自分が好きなんです！ 怪我也病気もするけど、自然のまま生きて、死んだら土に還りたい！ 私は人間として死にたい！」

アダムがセレンを睨みつける。

「御前は機械の存在を否定するのか、我々も生きているのだ！」

「違つつ、あなたたちを否定するつもりはありません。自分らしく生きるために、わたしは最後まで人間として、生まれたままの姿で生きていただけです。その権利をなぜあなたは奪うんですか！」

「早くその娘を連れて行け！」

今がチャンスだとアレンが動いた。

フローラはアダムの後を継げるか？

いや、鬼械兵団にアダムは必要である。アダムがいなければ、この組織は存在できないだろう。ならばセレンを救うよりもこの場でアダムを伐つ。

フローラもアダムがピンチに陥れば、人質の価値よりもアダムの価値を優先する可能性が高い。人質は1回限りしか使えない。つまり人質は生きているからこそ価値がある。人質を殺してしまうメリットはなく、枷がなくなればアレンは逆に自由な行動が取れる。

危険な駆け引きの争点は、アダムの存在の大きさだ。

アレンがアダムを追い詰めるほどの攻撃ができたとき、フローラがどう出るか？

ピナカ から3本の輝く矢が放たれた。

「私に ピナカ は効かぬと 避ける水鬼！」

アダムに当たる寸前で3本の輝きは方向転換して、龍が長い首をうねらすようにフローラに向かって飛んだのだ。

違つ！

3本の輝きは再びアダムへ方向転換した。

輝きの直撃を受けたアダムが大きく吹き飛ぶ。傷つけられなくても吹き飛ばすことはできる。それは先ほど証明済みだ。

悲鳴をあげるような歯車の音がした。

アレンは地面に倒れているアダムの後頭部を足蹴にして、天井高くまで舞い上がった。その手には ピナカ がしっかりと握られている。

ただ、アダムに当たったの1本だった。残す2本がまだ生きていたのだ。

アレンはまるで鞭のようにピナカから伸びる輝きを振るった。急にアレンの視界から光が消えた。

そして、爆発に巻き込まれてアレンが天井高くまで舞い上がったのだ。

「いったいなにが起きた!？」

宙から落ちてきたアダムが床に着地した。先ほどまで倒れていたのに、なぜ宙にいたのか？

アダムとアレンの場所が入れ替わっていたのだ。

そして、ピナカの攻撃は床に直撃して、アレンの躰の上に吹き飛ばしたのだった。

床に倒れたアレンの服はボロボロになり、生身の躰からは血が、機械の躰からは火花が出ている。

「糞つたれ……100万倍で返してやる……」

威勢のいい言葉だが、アレンはその場から立ち上がれなかった。

倒れているアレンをアダムが上から見下ろす。

「これで最後の問いとしよう。仲間にならないか？ 拒否すれば仕方あるまい、死を与えよう」

「何度も言わせんなよ……い・や・だ!」

アダムの片手に集まる高エネルギー!。

このときセレンは蔓に引きずられ、部屋の外に連れて行かれようとしていた。だが、セレンの瞳に映ってるのはアレン。

「逃げてアレン!」

歯車の音を立てなかった。

「あゝ、腹減った」

ぼそりと呟いたアレンは笑った。

自分が助かることをアレンは知っていたわけではない。

しかし、この部屋に新たな風が吹いたのだ。

風の刃はセレンを拘束していた蔓を微塵切りにして、さらにアダムの服を刻みながら吹き飛ばしたのだ。

フローラが叫ぶ。



「風鬼！」

どこからともなく部屋に現れた風鬼ことワーズワース。彼の眼差しは真剣そのものだった。

「セレンちゃんひとりで逃げ延びて！　ここは僕が押さえる、速く走って！」

戸惑うセレンは一瞬その場で硬直したが、すぐにひとりで逃げ出した。ワーズワースの言葉を信じたのだ。

恐い顔をするフローラと無表情のアダムにワーズワースは見つめられた。

「説明して、なぜこんな真似をしたの？」

「さあ、僕にもさっぱり、なんでだろうねえ、不思議不思議」

「おどけて見せたってダメよ！」

フローラはすでに攻撃を放っていた。木の根の槍がワーズワースを襲う。

先に仕掛けたのはワーズワースである。戦いになることは覚悟の上だった。

カマイタチが木の根を切り刻み、さらに優しい風がフローラの鼻をくすぐった。

急にフローラが痙攣しながら倒れた。眼は見開かれたままだ。

にっこりとワーズワースが微笑む。

「君の得意な痺れ薬。僕のは科学的に合成した無味無臭のものだけだ。君なら体内で解毒剤を精製して、10分ほどで動けるようになるかな」

「……………な……………ぜ……………」

その一言だけを絞り出してフローラは完全に動けなくなった。

冷たい瞳でアダムはワーズワースを見た。

「裏切りの理由を問おう」

「セレンちゃんには手出しはさせない。おまけに、アレン君も助けられたらラッキーかな」

やっとアレンが床から立ち上がった。

「俺はおまけかよ」

腕を回して自分の躰を確かめる。まだアレンは動けそうだ。

ワーズワースはビー玉のような物体を一気に何十個とアダムに向かって投げた。

「アレン君逃げるよ!」

「逃げるのかよ!」

「僕にはアダムを倒すことはできないからね。あとセレンちゃんも心配だ」

「だったらはじめから3人で逃げればよかっただろ!」

「いつぺんに全員で逃げるのは難しそうだったから。とりあえずフローラとアダムは足止めしないとね」

ワーズワースの投げた物体はアダムの周りを取り囲み、点と点が結ばれエネルギーフィールドの檻をつくり上げた。

セレンがひとりで危険を掻い潜るリスクより、アダムとフローラに追われながら逃げるリスクを大とワーズワースはしたのだ。

アダムが檻に触れた瞬間、火花が散ってその手を溶かした。手首から先を消失させたが、すぐにメタリックな手は再生された。

「無理に出ようとすれば、私とてただでは済まんぬ」  
ワーズワースが部屋を飛び出す。

「時間稼ぎにしかないから早く!」

「今のうちにぶん殴っちまえばいいだろ!」

「アダムも外に出られないけど、君もアダムに手を出せない仕様なんだよ」

先を進むワーズワースを追って仕方なくアレンも部屋を飛び出した。

廊下でいきなり鬼械兵どものお出迎えだ。

ワーズワースの放った圧縮した空気で鬼械兵を押し飛ばす。だが、押し飛ばすだけだ。

「アレン君、なんか武器持ってないの? 僕の風じゃ鬼械兵は倒せない!」

「伏せる！」

アレンが叫んで、ピナカを放った。

床に這いつくばったワーズワースの真上を輝く3本の矢が抜けた。圧倒的な破壊力で鬼械兵が薙ぎ倒される。廊下の壁にも巨大な鉤爪のような穴が空き、先にある部屋が丸見えだった。その部屋の中にはカプセルベッドが並び、鬼械兵が眠りついていた。

新たな兵が起き出す前に早く逃げなくては。

ワーズワースが素早く立ち上がった。

「僕まで殺す気！？」

「だってあんた敵じゃないの？」

「もうこうなっちゃったから言うけど、二重スパイだったんだよ」

「二重スパイってどういうことだよ？」

「とにかく人間側、君たちの味方ってことだよ。ほら、さっさと逃げながらセレンちゃん探すよ」

廊下を再び走り出した二人の前に鬼械兵どもが現れた。

先にワーズワースは床に這いつくばった。

再び、ピナカで一掃だ。

「糞っ、なんだよ次から次へと出てきやがって」

「先に言っておくけど、要塞の中もこうだけど、外はもつと鬼械兵でいっぱいだから」

「はあ！？ そんなのどうやって逃げるんだよ？」

「ごめんノープラン。あの場を切り抜けるのが精一杯で、そもそもこの事態は予定外なんだよ。だって君たちがここに来るなんて思わないから」

ワーズワースは苦しげな表情で唇を噛みしめた。

そこへ新たな鬼械兵が現れた。今度は鬼械兵だけではなかった。花魁衣装に身を包んだ火鬼だ。

アレンは嫌そうな顔をした。

「なんだ、生きてたんだ。死んだと思ってほつといたのに」

「地獄から舞い戻ったでありんす」

その軀は顔の半分を残してすべて機械化されていた。その髪の毛の一本一本までもだ。

炎の攻撃にだけ注意すればいいと油断していた。

刹那だった。無数の針となった火鬼の毛がワーズワースの腹を貫いていたのだ。内蔵はポロポロになり、通常の手術ではもう手の施しようがない重傷。

歯車が咆哮をあげた。

アレンの拳が機械化されていた火鬼の頬を変形させるほど抉り、そのまま首がもげた。

床に転がった火鬼の頭部。首から火花が散って、謎の液体を垂れ流している。

「小僧……め……」

眼と口を開いたまま火鬼は停止した。

すぐにアレンはワーズワースを抱きかかえた。

「だいじよぶか！」

「無理ですね……これ死にますよ」

「さつさとずらかつて直してやるから我慢しろ！」

「そういう根性論無理です、僕理系なんです。本当にもう死にそうなので、頼まれごといくつか引き受けてください」

「早く俺の背中に！」

だが、もうワーズワースは壁にもたれ掛かり、座ったまま動くことができなかった。少しでも動けば、軀が崩れて横に倒れてしまいうそうだ。

ワーズワースは床の上に垂れていた腕の先で、ゆっくりと手を開いて見せた。

そこに乗せられていたのは、小型メモリーと十字架のペンダントだった。

「まず、メモリーはジェスリーに渡してください。十字架はセレンちゃんに」

「自分で渡せばいいだろ！」

「頼みましたよ、ほらこれを持って早くセレンちゃんを探してください」

アレンは無言でメモリーと十字架に手を伸ばした。手と手が触れた。まだワーズワースの手は温かい。そして、ワーズワースはアレンの手を強く握り締めたのだ。

「頼みます」

そう言っつてワーズワースは残る片手で自分の腹に空いていた傷口に差し込んだのだ。

まさかの出来事にアレンは眼を剥いた。

「なにやっつてんだあんた！」

「これ僕の形見なんで、アレン君が使ってください」

ワーズワースが腹の中からえぐり出したのは、少し青みがかった透明の球だった。握った手が隠れそうな大きさだ。

「風を発生させる魔導具です。僕がつくったもので、本当は武器ではなくて送風機として、なにかの役に立たないかなあって。僕がこれまでつくってきたものだって、レヴェナがつくってきたものだって、本当は戦いのためにつくってきたんじゃないんだ。でもね、レヴェナがつくったもので唯一の例外……それが……く……る」

「糞っ」

小さく呟いてアレンはワーズワースの亡骸を背負った。重かった。アレンが背負うには重かった。

そして、アレンは走り出した。

## 逆襲の紅き煌帝「そして未来へ（1）」

鬼械兵がセレンの前に立ちはだかった。

逃げられないことを覚悟したそのときだった。急に鬼械兵が停止して床に崩れたのだ。その中でただひとり立っている女だ。

金髪の鬘「たてがみ」を靡かせるライザ。

「逃がしてあげるからついてきなさい」

「えっ!？」

状況が掴めず驚いた。

ライザはセレンたちを裏切って隠形鬼　アダムと　インドラ

から消えたのだ。そのライザがなぜ？

「早くして、アナタといっしょのところ見られたらアタクシの立場も危うくなるわ」

「どうして助けてくれるんですか？」

ヒールを鳴らしてライザがセレンの目と鼻の先に立った。セレンの躰に手を這わせたのだ。

「きゃっ、なにするんですか？」

「これよ」

ライザはセレンのポケットから玉を取り出した。それは光を失っているが、どこかで見覚えがある。

「それって　生命の実　ですか!？」

「そうよ」

「どうしてわたしのポケットに？」

「彼が偽物とすり替えたからよ。アナタはこれを持って逃げる義務がある」

「彼つてもしかしてワーズワースさんのことですか？」

ライザは頷いてから背を向けて、早足で歩き出した。

心が温かくなり、ほっとした気持ちがセレンを包んだ。　生命の　実　を奪ったわけでもなく、先ほどだって自分を逃がしてくれた。

ワーズワースはやっぱり悪い人じゃなかった　とセレンはニッコリとした。

二人は先を急ぐ。

ドアの前で立ち止まったライザは、センサーに手と瞳をかざした。スライドして開いたドアの先は、乗り物の格納庫だった。走行用ベルトのついてない戦車やエアカー、飛行機などが格納されていた。その中からライザは一人乗りの飛行機を選んだ。真上から見た形は、角の丸い正三角形で、横から見ると中心に透明なドーム状の屋根が乗っており、その中がコックピットになっている。

「わたし操縦できませんけど？」

「自動操縦だから大丈夫よ」

「はあ、よかった」

ドーム状の屋根が開き、セレンがコックピットに押し込まれる。ライザはタッチパネルを操作して、自動操縦で行き先を決めているようだ。

その操作をしながらライザは何気なく話をはじめた。

「アスラ城で隠形鬼から一時的に逃げる事ができたのだけど、それ以上の逃げ場は残されていなかったわ。そんなアタクシの前に現れたのが彼だった。良い旅を　　というのは彼の言葉よ」

最後にライザがボタンを押すと、コックピットの屋根が閉まりはじめた。

飛行機が静かに浮いた。

セレンは屋根を叩いて口を動かしている。完全防音のために、なにを言っているのかわからなかった。

艶やかに笑ってライザは手を振る。

そして、ボソツと呟く。

「ああ、ハッチ開けるの忘れたわ」

音速で飛び立った飛行機がハッチをぶち抜いて空に消えた。

夜明けと共にテントの中でアレンは目を覚ました。

「どこだよ……どこ？」

仮設テントではなく、生活感のあるテントだ。遊牧民が使用するゲルのようなものだろうか。

外に出ると、ターバンを頭に巻いたよく日に焼けた少年がいた。

「起きたか」

少し片言な口ぶりだ。

アレンは頭を掻きながら答える。

「ああ、起きた。なあ、俺の連れはどうした？」

「死んでたから埋めた」

「……そっか。あんがと」

寂しげにアレンは囁いた。

あれからなにがあつたのか？

ピナカ を乱射しながらひたすら逃げた。セレンを探すつもりだったが、大量の鬼械兵に追われているうちに、フローラも復活して、いつアダムも現れるかわからない状態だった。そして、壁をぶち抜くと、夜が見えたのだ。追い詰められたアレンはそこから飛び出すしかなかった。

「必死すぎてなにも覚えてないや。あんたが俺のこと助けてくれたの？ どこで？」

「砂漠の真ん中で屍体を背負って倒れた。死んでるかと思つたら生きてた」

「あんがと。でさ、どこどこ？」

「砂漠の真ん中」

「位置的な意味で、近くにある村とか」

尋ねると少年は持っていた杖で遠い丘を示した。

「あの丘を越えたところに村があつた。でも今は人間がいなくなつた」

「死んだのか？ それとも戦争で逃げたのか？」

「人間が機械になった。機械になった人間は人間に殺された」

「ふん」



ナノマシンウイルスだろう。クーロンから近隣の村までもう広がっていると言うことだ。それよりも、機械人化した人間が殺されたというのが衝撃的だった。

家族や友人が機械人化してしまったら、元の躰に戻そうとするだろう。それが無理でも殺すなんてことはできない。けれど、社会全体からすれば、人間も機械人化すれば脅威と見られるのかもしれない。さらに機械人化が伝染する可能性も考えたのかも知れない。

少年はアレンの機械の片手を見つめた。

「おまえも機械だろ。手当てするとき服を脱がした」

「半分。俺のこと殺す？」

「敵でも脅威でも、ましてや食料でもない。殺す理由があるか？」

「ないな」

ピナカ はアレンが携帯したままだった。服を脱がせて手当をしたとき、武器を奪われなかったのだ。いつの間にかできていた腕の傷は、薬草を塗られ包帯が巻かれている。視力を失った片眼に巻いていた布も新しい物になっていた。

「いろいろあんがと、じゃあ俺行くわ」

アレンが歩き出した方向は村があるという丘のほうだ。

だが、その足が止まった。

少年はアレンではなく、空を見つめていた。

飛空艇だ。

インドラ がこちらに向かってくる。

アレンは インドラ に向かって手を振った。

「おーい」

相手はアレンに気づいているだろうか？

ゆっくりと降下してくる インドラ 。これはアレンを迎えに来たらしい。

仮設テントの集落から少し離れた場所に インドラ は降り、少ししてからエアカーがアレンに向かって走ってきた。乗っている人影が見える。ジェスリーだ。

エアカーが停車してジェスリーが運転席から降りた。

「ご無事でしたかアレンさん」

「そっちこそ。俺のことよく見つけたじゃん」

「クーロンを偵察しようとして飛行中、偶然アレンさんのエネルギー反応を検知しました」

「俺のエネルギー？」

「機械と人間の混ざった特殊なエネルギー反応なので、運良く見つけることができました」

ジェスリーは辺りを見回して、再び口を開く。

「セレンさんはどうしましたか？」

「はぐれた」

「そうですね。詳しい話は船に戻ってからしましょう」

操縦室にはリリス、トツシユ、ルオがいた。とりあえず、まだルオは大人しくしているらしい。アレンがピナカを持ち出したので、黒の剣がなければインドラは動かない。

部屋に入っただけのアレンにトツシユが尋ねる。

「シスターはどうした？」

「はぐれた」

「おまえいつしよじゃなかったのか！」

「途中までいつしよだったけど、敵の基地ではぐれた」

そして、アレンはこれまでのことを話して聞かせた。

クーロンにある要塞 ベヒモス のこと、セレンとはぐれたこと、

ワースワースのこと、無我夢中で逃げてその記憶がないこと。

話を聞き終えたトツシユはアレンの胸ぐらを掴んだ。

「糞餓鬼、シスターを置いて逃げるとはどういうことだ！」

「ちげーよ、逃げ回ってたらそうなったんだから仕方ないだろ！」

睨み合う二人は同時に銃を抜いた。

その仲裁に入ったのはなんとルオだった。 いや、違った。ル

オはアレンのピナカを奪っただけだ。

「これで朕の 黒の剣 は返してもらおうよ」

「おい、俺の銃だぞ！」

「君のではないだろう。ライザの物だ、つまり朕の物だ。この飛空艇も朕の物になるわけだが、これは君たちにくれてやる」

そう言つてルオはピナカをジェスリーに放り投げた。早く 黒の剣 と ピナカ を取り替えるということだ。

アレンはここでさっき話していなかったことを思いだした。

「そうだ、あの兄ちゃんから預かってた物あったんだ。ジェスリーにだつてさ」

メモリーをアレンはジェスリーに手渡した。

「これは古い時代のメモリーカードです。わたくしの規格で読み込むことができます」

なんとジェスリーはメモリーを呑み込んだ。差し込み口は腹の中というわけだ。

見る見るうちにジェスリーの瞳が見開かれていく。驚愕だ。機械人のジェスリーが驚愕している。

「なんとということでしょう。まさか……こんな重要なことを……」  
「どうした？」

アレンが尋ねると、ジェスリーは深く頷いてから、話しはじめたのだ。

「このメモリーカードには、いくつかの情報と、わたくしに掛けられていたプロテクトを解くキーが記録されていました。簡単に言いますと、わたくしは意図的に記憶を封じられていたようです」

訝しげにトツシユが尋ねる。

「どんなだ？」

「ワーズワースの正体についてです。彼はわたくしをつくつた3人の科学者のひとり、ジャン博士だったのです」

「ほう」

と、声を漏らしたのはリリスだった。

「妾も気づかなかつた」

リリスにも気づかれず、ジェスリーの記憶も封じ、アダムにも知られていなかったのだろう。

ジェスリーは語りはじめた。

「ワーズワースとしてのジャン博士は、その姿形、声すらも当時とはまったくの別人として、生体の改造をしたようです。しかし、今ならわかります。しゃべり方には、当時の面影が少し残っていました」

懐かしそうな顔でワーズワースは話していた。

「ジャン博士はアダム追放後すぐにコールドスリープをしました」「なにそれ？」

不思議そうな顔をしたのはアレンだ。

「コールドスリープとは、生きた人間を冬眠させる装置だと思ってください。その作業を手伝ったのがたくしでした。そして、ジャン博士はこの時代に目覚めたようです。およそ15年ほどの前のことです」

ジャンがコールドスリープ前に何歳だったかわからないが、15年プラスしてあの若さというのは、なんらかの技術によるものだろう。ワーズワースの姿になったとき、見た目の若さも手に入れたのかも知れない。

「そして、今から2年ほど前、ジャン博士は隠形鬼の存在を知り、それがアダムだとすぐに気づいたのです。ジャン博士はワーズワースとなり、どうにか鬼兵団の一員としてアダムに近づき、その動向を探っていたようです」

ジャンとして、ワーズワースとして、そして風鬼として、渡り歩き、数々の経験をしたことだろう。鬼兵団としてやりたくないことにも手を染めたかもしれない。

「すぐにアダムをぶっ飛ばせばすぐ話じゃなか」

アレンはいつもこうだ。

ジェスリーは丁寧に首を横に振って見せた。

「アレンさんの方法はシンプルですが、実現は難しいのです。ジャ

ン博士にとって孤独な闘いでした。すでに文明は滅び、頼るものもなく、理解者もなく、大きな敵にどう立ち向かうのか。今は鬼械兵団が動き出したあとですから、その脅威について人間が認識することは簡単です。しかし、それ以前にたった一人の人間が、その脅威について人々に訴えかけたところで、だれがその話を信じるでしょうか。時代が時代でも理解されないことはあります。レヴェナ博士は危険性を示唆していたのに、戦争は起きてしまいました」

ワーズワースは吟遊詩人だった。彼は旅をしながら、なにを求め、なにを人々に訴えかけたかったのか。その記録もジェスリーは知っているのだろうか？

一呼吸置いてから、ジェスリーはさらに話を続ける。

「クーロンは古い時代、人間軍の基地があった場所でしたが、戦争の早い段階で機械軍に乗っ取られた場所です。あなた方がクーロンで魔導炉と呼んでいる物は、実際にはナノマシンウイルスをつくり出すプラントなのです」

ここにセレンがいれば、それを目の当たりにした者として、なんらかの発言があったかもしれない。

一同の中には本当にそんなものが存在するのか、人間を機械人化するなどありえるのだろうか、そういった空気があることは否めない。けれど、リリスは現実味をもってその話を聞いている。もともとそれは彼女が研究していたものだからだ。あの妖女リリスたるものが、複雑な顔をしている。

トツシュが発言する。

「魔導炉を壊せばナノマシンウイルスの危機は防げるってことだね？」

しかし、それに反対する者がいた。

「魔導炉は国の維持に必要な不可欠なものだ。破壊するなど朕が許さぬ」

これはルオの意見だけでは済まないかもしれない。ナノマシンウイルスの脅威を考えれば、魔導炉を破壊するのもうなずける。けれ

ど、魔導炉のエネルギー資源の恩恵を受けている立場は、それが失われることをどう思うだろうか？

豊かな暮らしから、厳しい砂漠の真ん中に放り出されると知ったら、自分たちの生活を守ろうと立ち上がる者がいるのではないだろうか？

周りで人々が苦しんでいようと、戦争の真つ最中であろうと、私利私欲を守ろうとする者たちは絶えない。

トッシュとルオが睨み合う中、それを割ってはいるように、ジェスリーは話をして自分に視線を向ける。

「プラントを停止させるなり、破壊することは可能ですが、空中に散布されたナノマシンウィルスを停止させることは通常の方法では不可能です。その唯一の対抗手段として、ジャン博士は 黒の剣 を考えていたようです。加えて 生命の実 がアダムの手に落ちた場合の対抗手段としても、 黒の剣 が有効とのことですよ」

黒の剣 の秘密、知りたくはありませんか？

そうワーズワースに言われて、ルオは旅の同行をしたのだ。だが、月へ行ってもわからず終いだっただ。ルオはジェスリーの話に興味を持った。

「朕の 黒の剣 がなんだというんだい？」

「 黒の剣 の理論はもともと 生命の実 の副産物として生まれました。 生命の実 が無限のエネルギーを放出するものならば、

黒の剣 は無限にエネルギーを吸収するものです。実際には吸い取ったエネルギーを放出することも可能で、複雑な作用をするものなのですが、膨大な 生命の実 のエネルギーを吸収して、相殺できる唯一の受け皿ということが重要なのです」

ワーズワースがアレンに言い残そうとしたことだ。あのときは最後まで語られることはなかった。

レヴェナが唯一の例外としてつくったもの。すなわち戦う目的のためにつくったもの。それが 黒の剣 。

その真価についてジェスリーが語る。

「それだけではありません。黒の剣は使い方によっては、この世の全てのエネルギー活動を停止させることが可能です。アダムとてその例外ではありません」

それは？死？である。

ある意味、どのような経由でシユラ帝國に渡ったのかわからないが、シユラの煌帝が持つに相応しい象徴的な武器だ。

再びトツシユガルオを睨む。

「そんな危険な物、絶対おまえに返ささんからな」

「黒の剣は朕の物だ」

ザザザザ……ザザザザ……

どこからか聞こえてきたノイズ音。

船内のスピーカーがなにかを拾っている。

《……私の名はアダム》

無言のざわめきが操縦室を包み込んだ。

それは全世界へ向けてのアダムの演説であった。

ラジオやテレビなどを含む、すべての電波をアダムはジャックしたのだ。

## 逆襲の紅き煌帝「そして未来へ(2)」

砂の海原にセレンを乗せた飛行機は墜落していた。  
攻撃を受けたのだ。

地上からの何らかの攻撃を受け、砂漠のど真ん中に墜落した。その衝撃でセレンは今の今まで気を失っていたのだ。操縦席に響く声でセレンは目を覚ました。

《……私の名はアダム。人間ではなく機械である》

それは全世界に向けられた演説だった。

《そして、この青き星の始皇帝となる者だ》

世迷い言にしか聞こえない言葉だが、それは現実の物になるうと  
していた。

《機械の兵士たちが、世界各地で人間たちを制圧していることは、すでに多くの者の耳に入っていることだろう。それが我が軍 鬼械兵团である。手始めにシユラ帝国領のクーロンを落とし、その後、二大強国である神聖クリフト皇国の総本山クリフト市内と宮殿はすでに我が手中にあり、ロマンジア連邦の首都クアモスも制圧済みである》

かつては三大強国であり、そこにシユラ帝國が名を連ねていた。

《人間がすべての武器を捨てて我々に降伏しない限り、この戦争は続く。私の目的は人間の自由を奪うものではない。人間は武器を捨て、我々の存在 自立した機械を人類として受け入れる以外は、今まで通りの生活をすればいい。私がこの星を統治すれば、ロストテクノロジীরすべてが現代の技術として蘇り普及し、人間にとっても豊かな生活が実現するだろう》

目的に嘘はない。失われた時代も復古するだろう。だが、人間がアダムのやり方が受け入れ、機械人と人間が良好な関係を築くことができるのか、それが問題なのだ。

《我々の存在を受け入れがたいというのなら、機械人になってみる



がいい。特殊なウイルスによって、人間の肉体を機械に置き換える技術がある。すでにクーロン周辺で実験済みであり、人間が機械人化した事実は、一部の人間の耳に入っていることだろう。この技術は身体のみを変化させるものであり、人格を支配したり奪うものではない。にも関わらず、人間たちは機械人化した人間を虐殺している。実に愚かだが、元の身体でも殺し合いをするような種なので仕方あるまい》

操縦席に流れる放送を聞きながらセレンは目を伏せた。

「人間同士で殺し合いをしていることは認めます。けど、機械人が人間を殺すのとなりが違うんですか。このひとのやろうとしてることは……矛盾してる」

機械はよく0か1かと言われる。イエスであるか、ノーであるか、そこ矛盾はなく、プログラムにミスがあれば、システムエラーが起こる。

《今から1時間後、このウイルスの散布を本格的に開始する。その2時間後、100万以上の鬼械兵が新たにこの星に投入される。そして、これから7日間、24時毎に衛星から地上に向けて攻撃をする。これはかつて メギドの炎 と呼ばれた兵器だ。天から炎が降り注ぎ、地上が地獄の業火で焼き尽くされ、世界が砂漠化すると言え、人間たちにも伝わるだろう》

どこまでが脅しだろうか？

本当に地上を焼き尽くするつもりだろうか？

人間だけでなく、青き星まで滅ぼすつもりだろうか？

ふと、セレンの脳裏に浮かんだ光景。月で見たエデンの園、そしてベヒモス で見た似たようなホログラム。

《地獄と天国、選ぶのは御前たちだ。武器を捨て、降伏せよ。さすれば理想郷の実現を約束しよう！》

そして、通信は途絶えた。

自分になにができるのか、セレンは考えずぐに行動した。

「とにかく 生命の実 を……そうだリリスさんに届ければ、わた

しにできることをしなきゃ！」

目の前に立ちほだかる問題は多い。

操縦席から見える景色は砂と空。準備もなく外に飛び出すなど無謀すぎる行為だ。だからと言って、セレンに飛行機は操縦できない。「もつと別の場所に落ちたら……ッ！」

セレンはハツとした。この飛行機は落とされたのだ、地上からの攻撃によって。

いったい何者による攻撃だったのか、その脅威はまだ近くにあるのだろうか？

破れかぶれでセレンは操縦席のタッチパネルを操作した。

すると、操縦席の屋根が開いた。

肌を刺す陽と熱。

「閉めないで焼け死ぬ！」

想像以上の過酷な環境だった。汗がどつと噴き出してくる。

セレンは知る由もないが、この場所は 死の海原 と呼ばれる広大な砂漠地帯だった。なにもない高熱の砂漠地帯と云われ、その場所に立ち入り者などいないような場所。世界から忘れられた地と云ってもいい場所だった。

突然、セレンのポケットが燦然と輝きはじめた。

「えっ、なに！？」

驚くのはまだ早い。

地中が盛り上がり、砂が滝のように流れる光景。なにもなかった砂漠に巨大な箱が現れる。それには巨大な扉がついていた。

重々しく見える二枚扉は、滑らかに左右に開いた。

セレンは操縦席から飛び出した。砂に足を取られバランスを崩し、地面に手をつけると、じゅっと火傷をしてしまった。

「熱いつ」

ここに居ても仕方がない。だからと言って、扉の先になにかあるかわからない。それでもセレンは導かれるように扉の中に入った。

それは箱で行き止まりだった。明かりがついており、壁にボタン

がついている。2つ並んだボタンの下に配置されているものが光っている。

「きゃっ」

セレンは身構えた。

箱が下へ移動しているのだ。そう、これは巨大なエレベーターだったのだ。

高速で移動するエレベーターは地下へ地下へと進んでいる。

身体がふつと浮き上がるような感覚して、エレベーターは停止した。

開かれる扉。

セレンを待ち受けていたものは、大勢のビームライフルを構えた機械人だった。

一瞬にして頭を過ぎったのは、鬼械兵団。飛行機を攻撃された理由も頷ける。

しかし、今まで見た鬼械兵とはタイプが違う。この機械人たちには、顔があり表情があったのだ。

機械人が道を空ける。向う側からやってくる影。それは四つ足であつた。黒き毛を持つ狼だ。

セレンの前まで来た狼は、なんと話しかけてきたのだ。

「私の名前はマルコシアス。もしや、あなた様はセレン様ではありませんか？」

「えっ……あ……は、はい……」

獣が人間の言葉をしゃべった。清廉そうな青年の声音だった。狼の肉体の構造上ではありえないことだ。

驚くセレンは言葉に詰まる中、狼はそれが自然体というように、また口を開く。

「セレン様が私のことを覚えてないくとも仕方のないこと。まだセレン様は生まれたばかりの赤子だったのですから」

「赤ちゃんだったわたしを知ってるんですか？ そんなどうして……それはいつのことです？ だってわたしは捨て子で、教会の神父

さまに拾われたんですよ？」

疑問符が次から次へと頭の周りを回る。セレンは瞳を丸くして、驚きと混乱に陥った。

「教会の神父さまに……さぞや、大変な苦勞をなされたことかと……」

マルコシアスは涙ぐんでいるようだった。

この状況でセレンは混乱するばかりだ。

「あなたはいつたいどのような方で、わたしのなにを知っていて、ここはどのような場所で、1から説明していただけないと、なにもわかりません」

「この場所は第零メカトピア。世界からも歴史からも完全に隔離された機械のみが暮らす街です」

ジェスリーの話ではメカトピアは第一から第三までの三都市のみだったはず。ただし、ジェスリーが伏せていたため、セレンはその話を知らない。ここではじめて機械人の暮らす街の存在を知ったのだ。

マルコシアスが背を向けた。

「どうぞ、私の背中にお乗りください。記念碑の前まで行きましょう」

「本当に乗っていいんですか？」

「お構いなく」

「じゃあ、失礼します」

恐る恐るセレンはマルコシアスに跨った。すると、マルコシアスに黒い翼が生えたのだ。それはまるで鴉の羽根だ。

「きゃっ！」

「毛に捕まってくれて構いません」

そう言っつてマルコシアスは翼を飛ばたかせ空を飛んだのだ。

空から見る街並みはジェスリーのいたメカトピアと似ていた。その街の中心に開けた自然豊かな公園があり、さらにその中心の芝生地帯に女の銅像が建っていた。

それはレヴァナの姿だった。

「あれってレヴァナさんですよね？」

「ええ、セレン様の母上様です」

「……………」

驚きのあまりセレンは言葉を失った。放心だった。

マルコシアスが銅像の前に降り立った。

無言のままセレンは銅像に近づき、台座に乗るレヴェナの姿を見上げた。

ホログラム映像を見た。

そして、アダムの顔として見てきた。

しかしここで見るレヴェナは今までとは違う感情をセレンに抱かせた。

「急にそんなこと言われても……………だってこのひとつで、ずっと昔に生きていたひとなんですよね？ わたしまだ16歳ですよ……………その年齢も本当はたしかなものじゃないんですけど。このひとがわたしのお母様だなんて、信じられるわけがないじゃないですか」

「私には高度な生体認証システムがついています。あなた様は98パーセントの確率でセレン様です」

「だってわたしの名前はセレンですから、セレンなのは当たり前です。この名前はわたしが拾われたときに、唯一持っていた十字架に古い時代の文字で刻まれていたそうです。でも……………そんな……………もしその話が本当だったとして、なぜわたしは捨てられ、この時代に生きているんですか？」

「セレン様は捨てられたわけではありません。不幸な出来事が重なってしまったのです」

「詳しく教えてください！」

身乗り出してセレンは声を荒げた。

両親の顔も名前も知らずにセレンは育った。赤子だったセレンを拾って育ててくれたのは、若い神父とシスター・ラファディナだった。二人はもうこの世にいない。それからセレンはずっと独りだっ

た。

「まずは私のことから簡単に説明いたしましょう。私はレヴェナ様につくられたペットアンドロイド。レヴェナ様に仕え、セレン様がお生まれになったときのこともよく知っています」

「あのっ、わたしの父は？」

「お父上に関しては、レヴァナ様はなにもおっしゃいませんでした。未婚の母だったのです」

「そうですか……」

セレンの声は沈んだが、すぐに笑顔でマルコシアスを見つめた。

「あ、話を続けてください」

その笑顔を見たマルコシアスは、銅像を見上げて話しはじめる。

「セレン様は生まれて間もなく難病にかかりました。当時の医療技術では、ナノマシン細胞やサイボーグ化でしか助からない病気でした。しかし、レヴェナ様はその手術をすることに反対でした。当時としては珍しく、レヴェナ様は自身をまったく機械化されてない方でしたし、まだ自分で判断ができない赤子のセレン様の身体を勝手に機械化することを嫌いました」

ホログラムで見た映像、そしてここにある銅像、どちらのレヴェナも眼鏡をかけていた。眼鏡というものは、ファッションを覗いて珍しいものだった。

今の話にマルコシアスは付け加える。

「勘違いなさらないでください。自身の身体をまったく機械化しないからと言って、我々アンドロイドのことを嫌っていたわけではありません。ただレヴェナ様は、己は己らしく生きたいというお考えの方でした。自分の生き方を他人に強要されたり、勝手に決められたりすることを嫌う方だったのです」

難病だったと聞いて、セレンは疑問が浮かんだ。

「今のわたしは健康そのものですけど？」

「レヴァナ様はセレン様の病気を治すため、治療薬が開発されるまでコールドスリープさせたのです」

「コールドスリープってなんですか？」

「眠りについて、歳を取らないまま時間を過ごす方法です。しかし、大きな不幸が起きてしまいました。戦乱の最中、セレン様のコールドスリープ装置が紛失してしまったのです。それから何十世紀もの間、セレン様の行方はわからず終いでした。それから先にことは私にもわかりません」

「え？」

小さく声を漏らしてしまった。とても驚くと言つより、啞然としたのだ。肝心な部分が話として欠落している。

マルコシアスはセレンをまじまじと見つめた。

「私が見たところ、セレン様の健康は良好のようです」

「はい、自分でもそう思います」

「実はあの難病の治療薬は現在でも開発されてません。さらにその病気はもうこの世に存在していない」

「じゃあどうして治ったんですか？　って聞いてもわかりませんよね」

「断片的な推測でよろしければ」

「せひ！」

と、セレンは身を乗り出した。

「実はコールドスリープについたのはセレン様だけではありませんでした。本当ならレヴェナ様が……」

マルコシアスは言葉に詰まった。

「アダムに乗っ取られたからですか？」

「ご存じでしたか……ごく一部の者しか知らない事実です。妹のリス様にも伏せられていましたから。セレン様が目覚めたとき、治療をして、その後を見守る者が必要でした。アンドロイドが適任なのですが、レヴェナ様はそれを自分の手で行いたいと考えていたようでしたが、それもできなくなってしまわれた。そこである方が名乗りをあげました。レヴェナ様の知人の科学者でした。彼はセレン様に遅れて、共に眠りにつきました。そして先ほども話したように、

戦乱の最中にコールドスリープ装置が紛失してしまいました」

「わかりました、その科学者さんがわたしのこと治してくれたってことですよね？」

「そうですね。セレン様の病気の事情を知っている彼が、治療方法を探して治したと考えるのが自然かと。そうになると、ご一緒に目覚めたはずなのに、彼はどうしてしまったのかという疑問が残りますが」

コールドスリープ装置紛失から、セレンが教会で拾われるまでの間、その空白にながかったのか？

「やっぱり本当にわたしって、レヴェナさんの娘のセレンなんですか？」

「私の認証システムではほぼそうだと思います。それに十字架の話をなさってましたよね？ もともとそれはレヴァナ様の物です。見せてくださいませんか？」

セレンは自分の首もとを触った。

「あ……ない。うそ……どこかに落とすなんて……」

「そうですね、それは残念なことです」

「……でもがんばって見つけます」

気持ちを切り替えてセレンは話を続ける。

「もしここで十字架を見せて、それがレヴァナさんの物ですって言われても、やっぱり実感が湧かないと思うんです。実感はないけど、本当にお母さんの存在がわかって、ちょっぴり嬉しいです」

セレンは目元を指で拭った。

「つかぬことをお伺いするのですが、もしやあの小型飛行機におられたのはセレン様でしたか？」

と、マルコシアスは尋ねた。

「たぶんわたしが乗ってきたものだと思います。攻撃を受けて墜落してしまっただけです」

「嗚呼、なんてことを……実はその攻撃をしたのは、この街を守る自動防御システムなのです」

「だいじょうぶです、わたし怪我とかしてませんから。怨んだり怒っ



たりもしてませんよ！」

マルコシアスは頭を垂らして、ひどく落ち込んでいるようすに見える。

セレンのほう慌ててしまう。

「だいじょぶですから、本当にだいじょぶですから、ぜんぜん気にしてませんから！」

「お氣遣いかたじけない。ところで、なぜこの場所に来られたのですか？」

「それは偶然……」

本当に偶然だったのだろうか？

墜落したのは偶然だったかもしれないが、この場所に飛んできたのは、偶然ではなかったかもしれない。自動操縦にセットしたのはライザだ。ならば、ライザはこの第零メカトピアの存在を知っていたのか？

マルコシアスは狼の顔だが、凜と表情をさせたように見えた。

「偶然だとしても、レヴァナ様の娘であるセレン様が居られるだけで我々は心強い。地上でアダムとの戦争が起きていることを我々は知っています。そして、第零メカトピアの住人は、アダムと戦う決意していたところなのです」

「もしかして、これが役に立つじゃないですか！」

セレンはポケットからある物を取り出して見せた。

驚きで眼を剥くマルコシアス。

「まさか……それは 生命の実 ではッ!？」

## 逆襲の紅き煌帝「そして未来へ(3)」

クーロンを包囲した多国籍軍。

戦車部隊の一斉砲撃が市壁を攻撃した。

その様子をアダムは ベヒモス の司令室の巨大モニターで見ていた。

「この場所を攻撃してきたのは、我々がここにいると知ってか……」  
特定の軍が攻撃してきたのではない。鬼械兵団との本格的な戦闘をするために、人間は連合を組んでいる。機械と人間という明確な線引きの戦いだ。

「予定通り零號炉「ゼロごうろ」を始動させ、ナノマシンウィルスの散布をはじめろぞ」

アダムの命令で鬼械兵が動き出す。

魔導炉の天井が花開き、花粉のように光球が舞い上がる。

そのさらに上空に現れた インドラ 。

アダムは インドラ の下部が輝くのを見た刹那、

「飛空挺に魔導砲を放て！」  
叫んだ。

魔導砲の巨大な光線が天を突かんとした。

急旋回した インドラ に魔導砲が掠った。

天を迸る稲妻。

傾いた インドラ が魔導砲を横に発射してしまったのだ。

そして、都市は沈黙した。

停電だった。

ナノマシンの散布も止まっている。

アダムが呟く。

「なにが……起きた？」

動力が別になっている ベヒモス は稼働している。

アダムは振り返った。

その先には壁により掛かり優雅に珈琲を飲むライザの姿。

ライザは唇を舐めて艶笑を浮かべた。

直感するアダム。

「なにをした！」

「あら、まるでアタクシが悪さでもしたような言い方。アタクシは最善の仕事をしたわよ。偽物の 生命の実 でもシステムが稼働できるようにしたもの。偽物ではやはりエネルギー不足が起きてしまったけれど」

偽物だと知っていて、それをアダムに報告しなかった。

「本物はどこにある？」

「シスターが持ち逃げしたわ」

「この女を監禁しておけ！」

アダムが叫び、鬼械兵がライザを連行していく。

さらにアダムは命令する。

「ライザが関わったシステムを早急に点検しろ。それが終わったら全システムの点検だ！」

怒っていた肩をアダムはゆっくりと落とした。

「なぜ人間という動物は裏切るのだ。何度も何度も私は人間に裏切られた。なぜ人間は裏切る？」

裏切るという言葉の意味を理解していても、なぜ裏切るのかという心理が理解できない。ゆえに裏切られることを予見できず、今回のような事態を引き起こしてしまった。

鬼械兵がアダムに身振り手振りなにを示している。電波による会話をしているのだ。それを聞いたアダムはすぐに巨大モニターの映像を切り替えた。

「市壁が？切断？されただと？」

戦車の上に立ち、多国籍軍の先陣を切っている漆黒の大剣を構えた少年。その軍勢は分裂していたシユラ帝国の残党がほとんどだった。今も煌帝ルオの威権を象徴する軍だった。

ルオの立つ戦車に追いついてきた別の型の戦車。その戦車の上に

は軽合金プロテクタースーツを装備した大柄の男。フルフェイスのマスクから若干覗ける顔はトツシユだった。

「俺様より先に行くな！」

「君と競争をしているつもりはないよ」

と、言いながらモルオの戦車はスピードを上げた。

「おい、待ちやがれ！」

と叫んでから、マスクについた通信機でトツシユは、

「スピードを上げる」

と戦車の操縦者に伝えた。

切断された市壁の裂け目は戦車が横並びで2台通れるくらいだ。

そこから鬼械兵がわらわらと湧き出してきた。

トツシユは背負っていたバズーカを構えた。

が、黒の剣の放った衝撃波が先に鬼械兵を一掃した。

トツシユは戦車の屋根を強く蹴飛ばすように踏んづけた。

「あの餓鬼っ、またいいところ取りしやがって！」

シユラ帝国の残党軍がルオに続いて市内に突入していく。

負けじとトツシユも進撃する。

「全軍一気に進めーッ！」

通信機でトツシユが命じると、残る軍隊も激進した。革命軍を中

心として、他国の軍なども含めた連合軍。

煌帝ルオと英雄トツシユの名前で集まった軍だ。

そして、空からは インドラ 。

インドラ の狙いは魔導炉の破壊だ。

阻止するためにアダムが叫ぶ。

「飛空挺を魔導砲で打ち落とせ、なんとしても！」

ヘビモス がその顔を インドラ に向けた。移動要塞

ヘビモス の全容はまるで象牙を生やした河馬「かば」だった。巨大な

口を120度以上開き、そこから魔導砲を発射したのだ。

天まで届く輝ける塔のような光線が何本も何本も発射された。その光線の間を掻い潜る インドラ 。避けることに精一杯で攻撃に

転じられない。

鬼械兵から電波で報告を受けるアダム。

《零號炉のエネルギー源を元のシステムに変更しました》

「すぐに最大出力で稼働させる」

再び魔導炉からナノマシンウイルスが散布される。それは今までの光球とは違うものだった。光り輝く翼の生えた赤子。まるで天使の子のようなものが空を舞い、やがて弾け飛んで光球となって世界に降り注いだ。

それは宗教画のような光景だったと共に、この戦場においては不気味な光景だった。目の当たりにした人間たちの志気が揺らがされた。

さらに花開く魔導炉から、巨大な人影がせり出してきた。まるでそれは裸体の女。燦然と輝くナノマシンウイルスの集合体が、魔導炉よりも巨大な女の姿となって生まれ出たのだ。

輝く女 は愛を振り撒くようにゆっくりと両手を広げ、ナノマシンウイルスの光球を風に乗せた。

全身をプロテクターで覆っていた騎鳥部隊の兵士が、突然クエツク鳥から転げ落ち悶えはじめた。

「ギヤアアアッ」

周りの兵士たちも次々と転げ回り、中には装備を脱ぎ捨てようとする者まだ現れた。

「中に……ギヤアアアッ……入って来るッ！」

フルフェイスマスクを投げ捨てた兵士の顔が、見る見るうちにメタリックに侵蝕されていく。

「退却しろーッ！」

機関銃を乱射して鬼械兵と交戦していた大男が叫んだ。全身プロテクターで顔はわからないが、その声はヴェリバルト大佐だ。

ナノとはその単位の10億分の1を表す。メートルであれば、0.000000001メートルである。

さらにナノマシンとは、0.1から1000ナノメートルの機械装

置である。隙間と言える隙間がなくとも、プロテクタースーツの中にまで侵入することは可能だった。

輝く女 からすれば、それは顔の前を飛ぶハエだったかもしれない。しかし、それはその大きさからは想像もできないほどの、禍々しい鬼気を放っていた。

黒の剣 をサーフボードのように乗りこなし、ルオは 輝く女の眼前まで飛んできていた。  
しゃがんで柄を握ったルオ。

刹那、振り下ろされた 黒の剣 が 輝く女 の顔面を切断した。鬼のような形相をして大きな口を開ける 輝く女 。叫び声は聞こえなかった。

そのままルオは重力に身を任せ、 輝く女 の股まで切り裂き、その輝く身体が 黒の剣 に吸いこまれ吞まれていく。さらに魔導炉にまで斬撃を喰らわせた。

破壊された魔導炉に構っている余裕は ベヒモス にはなかった。なんと、 インドラ が特別攻撃を仕掛けてきたのだ。つまり体当たりだ。

上空から猛スピードで迫る インドラ を ベヒモス の機動力で躲すことは不可能だった。

大きく開かれた ベヒモス の口から魔導砲が発射された。

防御フィールドを展開していた インドラ だが、魔導砲の直撃を受けて大きく船体を損傷させ、煙を上げながら墜落する。はじめから落ちるのが目的だ。関係ない。

轟音を響かせ インドラ は ベヒモス の口の中に突っ込んだ。そして、その場で インドラ は魔導砲を放ったのだ。  
雷鳴が轟く。

無数の龍に似た稲妻がうねり狂いながら インドラ と ベヒモス を絡め取った。

沈黙した。

ベヒモス の司令室は暗闇に閉ざされ、完全にエネルギー供給

をストップしてしまっていた。

「おのれ、捨て身で来るとは……人間とは恐ろしいものだ」  
暗闇の中でアダムは辺りを見回した。

「機能が生きている者はいるか？」

暗闇の中で火花が散っている。そこら中からだ。ベヒモスの機器類から鬼械兵まで、インドラの魔導砲で感電してしまったのだ。ピナカの直撃を受けても平気だったアダムだけが立っていた。

艦内にアダムは通信電波を飛ばした。

《全員この艦を捨てて退避せよ》

そして、司令室から一瞬にして消えた。アダムが立っていた場所には、代わりに鬼械兵が現れた。

アダムが空間転送で向かったのはエンジンルームだった。

ベヒモスは停止してしまっただが、そのエネルギー源は無事だった。

秤の上に乗せられる大きな袋。これがベヒモスのエネルギー源だった。大地の袋と呼ばれるこの魔導具は、大きさは人の胴ほどの袋だが、その重さは大地と同等。この重さ、重力をエネルギー変換して、ベヒモスを動かしていたのだ。

アダムは大地と同じ重さの大地の袋を軽々と持ち上げた。

そして、空間転送でベヒモスの外にいた鬼械兵と場所を入れ替えた。

灰と化しているクーロン市内は鬼械兵と人間の戦闘が激化していた。

さらに人間と人間の戦いも。

レッドドラゴンの銃口の先にはフローラが立っていた。

「勝ち目のない戦いよ」

「それは人間が機械にとって意味か、それとも俺様はおまえにとって意味か？」

「両方」

フローラの身体から槍のような植物が放たれた。  
銃声が吼えた。

腹を無数の蔓で貫かれ、トツシユは苦しそうな顔をしてよろめいた。

「なぜ避けなかった？」

「あなたこそ」

苦しげに囁いたフローラも腹を押さえていた。その指の隙間から滲む鮮血。

膝をついたトツシユ。

「相打ちなんて最悪だな……女の死に様なんて見るもんじゃない。なんで撃たれたんだよ！」

「どちらに転ぶかわからないけれど、戦争はもうすぐ終わるわ。はじめから戦争が終わったら自ら命を絶つつもりだったの」

「罪滅ぼしか？」

「この星のためにやったんだもの、後悔なんてないわ」  
トツシユの傷口からゆっくりと蔓が抜かれていく。

驚いた顔をするトツシユの顔色が少しずつよくなっていく。同時にフローラが枯れていく。

全身から水分が失われ、年老いて目も呉れないほどの老婆と化していく。

自分の腹の傷が癒えたのに気づいてトツシユは悟った。  
ゆっくりとトツシユはフローラに近づき、その息を確かめたが。

「……胸糞悪い」

フルフェイスを脱ぎ捨て地面に叩きつけた。  
そして、煙草を加えて火を付けた。

「こんな糞不味い煙草はじめてだ」

戦争はまだ終わっていない。トツシユは レッドドラゴン を握り締め大地を踏みしめて歩き出した。

一方、インドラの操縦室ではリリスとジェスリーが地獄から



蘇った敵と対峙していた。

首をもがれても、また新たなボディを手に入れ復活した火鬼だった。

「此处で会ったが1000年目、息の根を止めてあげんす！」

「懲りない子だねえ」

リリスはぼやいた。

ジェスリーは物陰に隠れている。

「わたくしは戦闘用ではありませんので、見守っていてもよろしいでしょうか？」

「年寄りをこき使うんじゃないよ」

しかも、リリスは岩だ。

しかし、火鬼とて炎の使い手である。

炎と岩。

「わっちの炎は岩を溶かす色気があるでありんす」

扇から放たれた炎は金属の床を溶かしながら、リリスの身体を包み込んだ。

にやりと笑う火鬼。

炎の中で妖女は艶やかに微笑んでいた。

「餓鬼に惑わされる妾ではないぞよ」

石触手が伸び、生身だった火鬼の目玉を貫き、後頭部から飛び出した。

火鬼は口をわなわな振るわせた。

「地獄で……待ってる……」

顔面から石触手が抜かれ、リリスの身体に戻っていく。

そこに立っているリリスの姿を見てジェスリーは驚いた。

「そのお姿は？」

「やっと此奴の精神を全部喰らうてやったのじゃ」

そこに立っているのはまさしく妖女リリスの姿。だが、その身体には光沢があり、黒い御影石のようであった。形状は妖女リリスだが、その素材は石なのだ。

「じゃが、まだ自由に動けぬ。運んでくれるか？」

頼まれてジェスリーがリリースを持ち上げようとしたが、足が数センチ浮いただけだった。

「見た目から計算できないほどの質量があるようです。わたくし一人では運べそうもありません」

「仕方ないのお」

リリースが浮遊した。

ふわふわと不安定に空を飛びリリースを見てジェスリーは、

「飛べるのならわたくしに運ばせなくてもよかったのでは？」

「今試したらできたのじゃ」

2人は操縦室を急いで出た。

ルオ、トツシュ、リリース、ジェスリー。残るアレンはアダムの前に立ちはだかっていた。

「その袋持つてどこ行く気だよ？」

黒い眼帯で片眼を覆うアレン。

その身体の周りには風が渦巻いていた。

## 逆襲の紅き煌帝「そして未来へ(4)」

「ふふふふつ。私を追い詰めたつもりか？」

アダムは不気味に笑った。

魔導炉も ベヒモス も、フローラも火鬼も、失われた今、アダムは劣勢に立たされたのか？

否。

それは戦いの一部にしか過ぎない。

市内に響き渡っていたのは人間の悲鳴だった。

鬼械兵団の圧倒的な戦力で、人間が次々と息絶えていく。鬼械兵は腕がもげようと、足を失おうと、悲鳴一つあげず、まるでゾンビのように襲い掛かってくる。死の軍隊を相手にしている気分だ。

アレンは気づいている。アダムには少なくともあと2つの切り札がある。火星にいる100万を超える鬼械兵と、人工衛星からの地上へ向けての攻撃 メギドの炎。

たとえ 生命の実 がなくとも油断できない。それにアレンたちは 生命の実 がアダムの手にないことをまだ知らないのだ。警戒を強めている。

「その袋はなんだよ？」

「知りたいか？」

「ああ、知りたいね」

アダムが 大地の袋 を振り回して押し掛かってきた。

慌ててアレンはブリッジをして 大地の袋 を躲した。

「いきなりかよ！」

まだそこで攻撃は終わりではない。

アレンの腹に 大地の袋 が落とされようとしていた。

その袋がなんのかアレンは知らない。だが、ヤバイと直感して、地面を転がって避けた。

大地が鳴らした地響き。

まるで隕石が衝突したように、クレーターが地面にできた。すでに大地の袋 はアダムが持ち上げている。ほんの少し地面に触れただけでこれだ。

クレーターができたときの衝撃で、アレンは天高く吹っ飛ばされていた。

「洒落になんねえ。やっぱりただの袋じゃねえのかよ！」

空から見るクレーターの大きさは直径30メートルほどだった。周りにいた兵士たちも巻き込まれている。

アレンは地面に衝突する寸前で、ふわっと身体が浮き上がり、ゆっくりと着地した。風を操ったのだ。

涼しい顔をしているアダムとは対照的に、アレンは冷や汗を垂らしている。

大地の袋 を一発でも身体に喰らえば一瞬して潰される。接近戦は危険だった。

アレンは腕を薙いで風の刃を繰り出した。

「喰らえ！」

「それは御前だ」

一瞬にしてアダムとアレンの場所が入れ替わった。

「うわあっ！」

風の刃を受けたアレンの服と胸が切られた。

噴き出す鮮血。

切られた服の隙間から覗くならかな乳房が血で濡らされた。

アダムは今のアレンの姿を見て、息を漏らした。

「嗚呼、御前が少女だったことを忘れていた」

「女で悪いかよ！」

「性別的には女性だが、御前は永遠の少女だ。歳も取らず、何千という月日を生きてきた。実は御前の足跡について調べたのだ。近年以前となると、御前らしき人物が記録されていたのは、128年前の事件だった。地上最後の智慧を持つドラゴンと云われていたドゥルブルザツハードの聖都襲撃事件だ」

「覚えてねえよ」

「そうか、では何年前のことなら覚えているのだ？」

「知るか」

「私は創られた瞬間から覚えている。膨大な記録を背負っているのは辛い。人格に膨大な記憶は邪魔なのだ。しかし、私はそのように創られた」

アダムはゆつくりと目をつぶった。

「が、それでも私は生きる意味を捜し続ける」

前半部分は声が小さすぎて聞き取れなかった。アダムはいつたいなんと呟いたのか？

そんな細かいことなどアレンには関係なかった。

歯車が鳴りはじめた。

肉弾戦にアレンは賭けたのだ。

自らの機動力に風の力を上乘せする。

猛スピードで殴りかかってくるアレンを前に、アダムは急に立ち眩みを起こしたように足下をふらつかせた。

「うっ……」

人間のように呻き、思わず膝から崩れそうになった。

そこにアレンの拳が叩き込まれた。

「ウオオオオオオオオオオッ！」

アダムの身体が吹き飛ぶ前に、目にも留まらぬ拳の連打が繰り出される。

歯車が悲鳴をあげている。

「糞つたれッ！」

最後にアレンはアダムの顎を下から抉り殴った。

10メートル以上の上空まで吹っ飛ばされたアダム。その手にはしっかりと 大地の袋 が握られている。

「わたしになにが起こっている？」

アレンに殴られたことなど、なかったようにアダムは呟いた。

そのまま無抵抗のままアダムは地に落ちた。

止めを刺そうとしてきたアレンを視線だけでアダムは見た。

「気をつける、わたしが今持っているのは 大地の袋 という魔導具だ。重量はこの星ほどある。わたしはこれを重力を操って支えることができるが、これが大地に置かれればどうなるかわかるか？」

アレンは拳を上げて止めていた。

「どうなるんだよ？」

「重さとは重力だ。星と星とがぶつかると考えればいい」

「落とすなよ絶対」

「はじめからそのつもりだ」

「汚ねえぞ、人質取ってるもんじゃねえか！」

「しばし待て」

「はあ？」

攻撃できないアレンを目の前に、アダムはゆっくりと立ち上がった。

地中から聞こえてくる響き。なにかが来る。

瞬時にアレンは遙か後方に飛び退いた。

次の瞬間、地中から巨大な蛇のような頭が飛び出してきたのだ。

それはまるで鎧を纏ったような海蛇だった。海龍と言ったほうがいいかもしれない。想像を絶する大きさは、クーロンを上空から見なければわからなかった。

クーロンの市壁の外周をぐるりと一周する海龍。尻尾のところから地中に潜り、そこからクーロンのほぼ中心で頭を出したのだ。

「鬼械竜 レヴィアタン だ」

レヴィアタンの鼻先に乗っているアダムが言った。

「これは転送装置魔法陣でもある。予定時刻にはまだ早いが、人間の答えはもう聞くことができた。火星の同志を呼ぶことにしよう」

アダムは手に持っていた 大地の袋 を レヴィアタンの口の中に放り込んだ。

「生命の実 には遠く及ばないが、10分程度は火星のゲートとリンクすることができるだろう。さて、どれほどの鬼械兵がこの青

き星にやって来るか？」

一瞬にして辺りが蒼白い光に包まれ、目をつぶらずにはいられなかった。

鬼械兵にやられ、次々と人間が倒れていく。これ以上、戦場に鬼械兵を増やすわけにはいかなかった。レヴィアタンを止めなくては、しかし、なにができる？

「糞ッ！」

アレンは地面を蹴って高くジャンプした。さらに風の力を借りて上昇する。

「俺にできることは……こいつをぶん殴ることだ！」

拳をアダムに叩きつける。

強烈な拳をアダムは片手で受け止めた。

アレンの背後で声がした。

「退け！」

黒の剣を振り下ろすルオだった。

瞬時にアダムとルオの場所が入れ替わった。

冷や汗を流したアレン。

「俺のこと殺す気かよ？」

「それはまたの機会だ」

黒の剣の刃はアレンの鼻先で止まっていた。

アダムに空間転送は厄介だ。下手をすれば同士打をさせられる。

地面に着地したアレンとルオがアダムと対峙する。

「俺のケンカに手え出すなよ」

「五月蠅い、朕の獲物だ」

「ふむ、黒の剣は厄介だ」

と、最後にアダム。

それを聞いてアレンが怒り出す。

「俺は戦力外かよ！」

「そうしたことだ！」

叫びながらルオがアダムに斬りかかった。

「まずは千の兵」

アダムが囁いた瞬間、低空から1000の鬼械兵が突如現れ降ってきた。ついに火星から鬼械兵が投入されはじめたのだ。

瞬時に判断したルオは空に向かって斬撃で衝撃波を放った。空中でいくつかの鬼械兵が爆発したが、全体に対しては微々たるものだ。アレンは レヴィアタン の頭部を指差してルオに話しかける。

「おまえの剣であれ停止させるよ、そういう機能ついてんだろ。あれ倒せば鬼械兵が降ってこなくなる！」

「簡単に言ってくれるな」

クローンの街を囲むほどの巨体だ。人の子などゴミほどの大きさでしかない。

レヴィアタン の頭部が地中に潜った。

「おまえがとろいから逃げられたじゃねーか！」

「朕のせいにするな！」

2人が言い合っている間にも、新たな鬼械兵は地上に降り立ち、人間を虐殺しはじめている。2人の周りも例外ではない。無数の鬼械兵が群がっていた。

ルオが 黒の剣 を薙ぐ。

刹那にして破壊される鬼械兵ども。

アレンも鬼械兵と戦いたかったが一对多数はアレンに分が悪い。

鬼械兵が石触手に串刺しにされた。リリスだ。アレンの元にリリスとジェスリーがやってきた。さらにジェスリーが持っているのは

「アレンさん受け取ってください！」

ピナカ が投げられ、アレンはキャッチした。

「サンキュ」

お礼と同時に ピナカ は放たれていた。

3つの輝く矢が鬼械兵を撃ち抜き、さらに巨大な3つ叉の槍となつて薙ぎ倒す。

しかし、再び低空から1000の鬼械兵が降ってくる。



追い詰められた状況。

リリースがごちる。

「インドラ を犠牲にしたのは失敗じゃったかのお」

たしかに インドラ の魔導砲があれば、地上を一掃する攻撃ができた。

だが、すぐにジェスリーがフォローする。

「しかし ベヒモス に唯一対抗できたのは インドラ です。

ベヒモス をあのととき停止に追い込んでいなければ、戦況は今より酷い状況に陥っていたと思われませう」

それ市内は敵味方入り乱れている状況だ。無差別攻撃の インドラ の魔導砲は使用できなかっただろう。

「片っ端から片づけりゃいいんだろ！」

アレンは ピナカ を放った。

「朕の辞書に敗北はない」

ルオは 黒の剣 を薙いだ。

鬼械兵の数はまったく減ったように見えない。

それでもアレンとルオは戦い続ける。

サブマシンガンに取り付けられていたライトで闇を照らす。

トツシユは停電している ベヒモス 内に侵入していた。鬼械兵の姿はない。しんと静まり返っていた。

だが、警戒は怠らない。足音と気配を消しながら慎重に先へと進む。はつきり言って、今の装備では鬼械兵とのタイムンは避けたかった。

サブマシンガン、バズーカ、 レッドドラゴン 。一撃で鬼械兵とやれるのはバズーカだが、1体に対して1発など戦闘には向かない。なおかつ、ここは屋内だ。

外にいた鬼械兵は複数の兵士で取り囲み、サブマシンガンで蜂の巣にしてやっとなり倒すのがやっとなりだった。レッドドラゴン は鬼械兵の装甲を貫くことができたが、1発貫いてなにになるのだから

うか。

汗を垂らしながら歩き続けたトツシユは牢屋までやってきた。檻の中を照らすと、女が立っていた。

「アタクシのこと助けに来てくれたのかしら？」

「だれがおまえなんか」

牢屋に入れられていたのはライザだった。

「艦が停止したお陰で、檻に流されていた電磁フィールドは消えたのだけれど、鉄格子はどうすることもできなくて困っていたのよね。早く助けて頂戴」

「だからだれがおまえなんか助けるか、裏切り者」

「だったらなんでこんな場所来たのよ？」

「シスターの嬢ちゃんを助けるために決まってるんだろ？」

そうなのだ、トツシユたちはセレンの行方を知らないのだ。

「ああ、あの子ならアタクシが逃がしたわよ」

「はあ！？ どういうこと？」

「アタクシが本当に裏切ったと思ってるわけ？」

「俺様はなあ、一度もおまえのこと信用したことないぞ」

苦笑するライザ。

「つたく、やんなっちゃうわ。人間様に使われる機械の下僕なんかになると思う？ このアタクシが？」

たしかにライザは他人に仕える玉じゃない。

「どうしてルオの下にはついてるんだ？」

「仕えているというより、あれアタクシの作品ね。せっかくだからだれも知らない秘密教えてあげましょうか？ それと交換でアタクシはここから出すというので手を打たない？」

「聞いてから考える」

「それじゃ取り引きにならないでしょう。アタクシの توسطで置きよ」  
「わかった出してやる」

トツシユはバズーカを構えた。まだ撃たない。話を聞いてからだ。愉しそうな顔をするライザ。今まで見せたことのない無邪気な顔

だ。

「じつはね……ルオってアタクシの弟なのよね。あははははっ」

「マジか？」

「ほら、早く出しなさいよ」

「マジかって聞いてるんだ」

「腹違いでも何でも無い、前皇帝と正妻の間に生まれた子供よ、アタクシもルオも。けれど、女に生まれると損よね。皇族の血筋にアタクシの存在はなかったことにされてるわ。一般人扱いされることはなかったけれど、下級貴族の養女として育てられたわ」

すっかり話を聞き入っているトツシユはバズーカを床に向けていた。

「それからどうなった？」

「本当はアタクシ自身もなにも知らず、そのまま下級貴族の娘として一生を終えるはずだったのだけれど、本当の母が一度だけお忍びでアタクシに会いに来たことがあるの。涙を流しながら何度も謝りながら、全部話してくれたわ。正直腹が立ったのよね、こいつもアタクシを捨てたひとりには違い無いわけじゃない？」

「ひねくれてるぞ」

「仕方ないじゃない。養女になった家にはすでに養父母の本当の娘がいて、しかもアタクシの下に弟まで産んでくれちゃって、アタクシは家政婦じゃないっての。それでね、家を出るために血の滲む猛勉強したわ。男と同じくらい勉強できても、女のほうが下に見られるから、男どもが足下に及ばないくらいの地位と権力を手に入れるために、本当に必死だったわ。でもまさかルオの傍に仕えられるくらい出世できるなんて思ってたかったけれど」

「本当はルオに復讐とか考えてるのか？」

「さあ、どうかしらん」

おどけてライザは笑って見せた。

そして、後ろ向きに歩きながら牢屋の奥へ進んだ。

「アタクシの話はこれくらいにして、さっさと出して頂戴。早漏も

嫌われるけれど、遅漏も嫌われるわよ」

「関係ないだろ、その話は！」

トツシユはバズーカを撃った。

鉄格子の何本かが折れ、周りの格子はひしゃげた。

ライザが牢屋の中から出てくる。

「そうだ、シスターの話もついでにしてあげましょうか？」

「そっちが本題だ。どこにいるんだ？」

話が戻された。

「彼の話だと第零メカトピア」

「どこだそれ？ その彼ってどんな奴だ？」

「ワーズワースよ」

「……奴が死んだって知ってるか？」

少し哀しげな顔をトツシユはしていた。その顔とライザは顔を合  
わせない。

「ええ、彼の役目はアタクシが引き継いだから問題ないわ」

「ん？」

「諜報活動とか裏工作とか、だれのお陰でナノマシンウイルスや火  
星からの転送とか、アダムのスケジュールを狂わせてやったと思っ  
てるの？ アタクシが細工したからに決まってるでしょう」

傲慢な声音で言ったライザにトツシユは少しうんざりした。

「ああ、それはわかったから、シスターはなんで第零メカトピアっ  
てどこにいるんだ？」

「さあ、詳しくは知らないわ。彼がセレンがそこに行けば、もしか  
したらなんらかの力を借りられるかもしれないって」

「どういうことだ？」

「知らないわよ。ほらさっさと行きましょう、艦内に残っている武  
器とかを漁りに」

ヒールを鳴らして先を歩き出したライザが立ち止まり振り返った。

「明かりがないと先進めなんでしょう、早くして」

「はいはいお姫様」

皮肉を込めて吐き捨て、舌打ちしてからトツシユはライザの後に続いた。

逆襲の紅き煌帝「そして未来へ(5)」

鬼械兵の軍勢を相手にしながらアレンは空を見上げた。

急に曇りだして辺りが暗くなったのかと思っただが、それは天気の色いではないようだ。

巨大な円盤が上空に浮かんでいた。

「新たな兵器かなんかか？」

ジェスリーもその円盤を見た。

「今までまったく見たことのない型の物体です。いわゆる未確認飛行物体　UFOです」

円盤型飛行物体からなにかが降下してくる。数え切れないほど多くのなにかだ。

アレンはよく目を凝らした。

「もしかして鬼械兵か？」

「いえ、違います。LB1型アンドロイドです。設計図しか存在してないはずだったので不思議です」

降下しながらLB1はビームライフルで次々と鬼械兵を仕留めていく。

アダムにとつてもそれは予期せぬ出来事だった。

「わたしの目にも留まらず、いったいあんな機械人がどこにいたというのだ？」

地上に降り立ったLB1は人間を狙わず、鬼械兵のみを仕留めていく。完全に狙いははつきりしている。鬼械兵を殲滅することだ。

さらに上空から翼を持った狼に乗って少女が戦場にやって来る。

純白の法衣に身を包み、サファイア色に輝く4枚の翼を持った少女。その手には　生命の実　が取り付けられた錫杖「しゃくじょう」を持っていた。

「もう争いは終わりにしましょう」

少女の声は不思議と戦場の片隅にまで届いた。

人間の兵たちは空を見上げ、ある者はこう呟いた。

「天使様か？」

視力のいいジェスリーにはわかった。

「セレンさんです！」

マルコシアスから降りたセレンは上空に立ち、その場で錫杖を使つて魔法陣を描いた。

描かれた魔法陣はセレンの頭上から網のように広がり、クローン全体をレヴィアタンごとドーム状に包み込んだ。いったいなにをしようというのか？

アダムは一瞬にしてマルコシアスと場所を入れ替えようとした。

「なぜだ……？」

しかし、できなかつたのだ。なにも起こらず、アダムはその場から1ミリも動いていない。

もうひとつのことにアダムは気づいた。

「新たな兵が来ない」

火星からの援軍が止まった。

すぐにアダムは理解した。

「これはあのとときと同質のものか」

それはベヒモスでの出来事だ。ワーズワースがセレンたちを逃がすため、アダムを閉じ込めた方法。

「しかし、計画が遅れるだけに過ぎない。戦力ではまだ鬼械兵団が優っている」

立っている人間は少なかった。

すでにクローン周辺を取り囲んでいた軍勢はレヴィアタンによって一掃されていた。たとえ市内の戦況が変化して人間が勝利しようとして、レヴィアタン一機で逆転されてしまうのだ。

そして、またアダムは計画を1からやり直せばいい。時間なら飽きるほどある。

アダムは空を見上げた。

「生命の実 だけは必要不可欠だ」

宙に浮いたアダムは高速で飛びセレンに近づいた。  
いち早くマルコシアスが接近してくるアダムに気づいた。

「貴様がアダムだなッ、レヴェナ様を愚弄する行い許さんぞッ！」  
翼から幾本もの炎の矢を放つ。

「犬がッ！」

炎の矢はアダムが手を振り払っただけで消えてしまった。お返しに衝撃波を手から放ち、マルコシアスを遙か彼方へ吹き飛ばした。上空で静止したアダムとセレンが見つめ合った。

「生命の実 を渡してもらおう」

「いやです。今すぐ鬼械兵団を止めてください」

「生命の実 を渡し、人間が戦うことをやめれば止まる」

「あなた方が戦うことをやめてください」

「ならば力尽くだ」

手を伸ばしながらアダムが迫ってくる。

突き出された錫杖から見えない障壁が放たれた。

それに衝突したアダムが弾き飛ばされ、地面に向かって真っ逆さまに落ちていく。

地上ではアレンが待ち構えていた。

けたたましく鳴る歯車。

「喰らえッ！！」

加速して落下してきたアダムを打ち上げるように殴り飛ばした。

高く舞い上がったアダムは宙でピタッと静止した。

「無駄な攻撃だ」

アダムは手にエネルギーを集め、光球にしてアレンに投げつけた。

小さい魔導砲のようなものだ。魔導弾 魔弾だ。

ピナカ で相殺を試みようとしたアレンの目の前にルオの背中が飛び込んできた。

ルオは 黒の剣 の柄を握り締め、切っ先をアダムに向けながら矢のように宙を飛んだ。

「串刺しになるといいー！」



魔弾を呑み込んだ 黒の剣 はそのままアダムを突かんとする。  
紙一重でアダムは刃を躲し、指を組んだ手でルオの背中を殴り飛ばした。

背骨を折られながらルオは地面に叩きつけられた。

殺気を感じて振り返るアダム。頭上から降り注ぐ炎の矢。気づいたときには遅かった。

アダムの身体が炎に包まれ落下する。

「まさか犬にしてやられるとは！」

火の粉を散らしながらアダムは地面に叩きつけられ、一度バウンドしてうつ伏せに倒れた。

すぐにアダムは湯気を立てながら起き上がった。

「いくら攻撃を加えようとわたしは倒せない」

服が燃えたアダムは裸体だった。美しい曲線を描く女の肢体。頭部と右肩から手の先までを除いて、メタリックな色をしている。気づいた者がいるだろうか。左手の先から徐々に肌の色を取り戻している。

「やって見なきゃわかんねえだろ！」

アレンがアダムを殴り飛ばした。

上半身のバランスは崩したが、アダムの下半身はまったくその場から動かない。

ゆっくりと上体を戻してアダムはアレンを睨んだ。

「おまえの相手はあとでしてやろう」

アダムの狙いは 生命の実 だ。

再びアダムは空を飛び、再びマルコシアスが立ちはだかる。

だが、今度の足止めはアレンだった。

アダムの足首を片手で掴むアレンの姿。

「行かせるかっつーの！」

「しつこいぞ」

アダムがアレンの顔面を踏ん蹴った。

「ぐっ」

思わず手を離してしまったアレン。だが、地上には落ちない。風を操って空を飛んだのだ。

セレンはずっと錫杖で魔法陣を描き続けていた。

「できた！」

輝いて発動する魔法陣。

大地が大きく蠢いた。

焼け残っていた金属の柱が空へ上昇していく。それに続いて次々と金属が空へ昇って行くではないか。例外なく鬼械兵やLB1もだ。上昇率は重さを比例していた。重たければ重たい金属であるほど、高く天へと昇っていくのだ。

これによって地上から鬼械兵が消えた。今の今まで戦闘を繰り広げていた人間の兵士たちが安堵する。問題は戦車まで上昇してしまったことだ。

新たな混乱を生むことになったが、戦乱は治まることになった。

しかし、まだ戦いが終わったわけではない。

もとより空を移動できる者は、魔法陣の束縛から逃れることができるのだ。

アレンとアダムは腕を交差しながら互いに殴り合っていた。リーチが長かったのはアダムだ。吹き飛ばされるアレン。

それを尻目にアダムはセレンから 生命の実 を奪おうと躍起だ。「邪魔だッ！」

声を張り上げたアダムは全身からホーミングミサイルのような光を放った。アダムに迫っていたルオとマルコシアスがその直撃を受けた。

いつの間にかアダムの身体が肌の色を拡大させていた。両手足は完全に肌の色を取り戻している。胴体は肌色とメタリックがまだらになっていた。

「なぜわたしの邪魔をするのだ！」

鬼気を纏ったアダムは一気にセレンの眼前まで迫った。

錫杖の障壁が間に合わない。

ついにアダムの手が錫杖の柄を掴んだ。

「渡せ！」

「渡しません！」

「おのれええ！」

アダムが伸ばした片手がセレンの首を絞めた。

「渡さないと窒息するぞ！」

「……………うつつ……………く……………」

「死にたいのか！」

「お……………お母さん……………」

錫杖から手が離れた　アダムの。

下からはアレンが猛スピードで迫っていた。

「もう容赦しねえぞおおおッ！」

歯車は咆哮をあげた。

その気配を感じたアダムは振り返り、なにを思ったのか両手を広げて凜とした表情をした。

アレンの拳がアダムの腹を抉る。

突き破られた肉がメタリックの液体を飛び散らせた。

瞳を見開いて息を呑むセレン。

アダムの腹を腕が貫通していた。

なぜかアレンは悲しい顔、アダムは聖母のような微笑みを浮かべた。

そして、アダムはこう言ったのだ。

「あなたに辛い役回りをさせてしまって……………ごめんなさい」

アダムは自らアレンの腕を腹から引き抜いた。

落ちていくアダム。

地上までの途中でルオが　黒の剣　を構えていた。

「朕が止めを刺してくれる！」

「やめてーッ！」

悲痛なセレンの叫びが木霊した。

ルオとアダムの眼が合った瞬間、アダムが邪悪な笑みを浮かべた

のだ。

なんと、アダムの口からメタリックの液体が吐き出され、意思を持っていくかのようにルオの口から体内に流れ込んだのだ。

「うぐっ……うっ……」

眼を剥いたルオは顔を下に向けて吐き出そうとした。だが、その身体の中から手足の先端に向かってメタリックに染まっていく。

髪を振り乱しルオが顔をあげた。

「ふふふふっ、何と言う力溢れる躰なのだ！」

それがルオではないと、周りにいた者は瞬時に理解できた。ルオではないのなら。

レヴェナを抱きかかえていたリリスが叫ぶ。

「アダムに寄生されておるぞ！」

魔獣と化した煌帝ルオの肉体を手に入れたアダム。その手には

黒の剣 が禍々しい鬼気を放っている。

「此こそ始皇帝に相応しい！」

紅い瞳でアダムは自分の領土を見渡すように世界を眺めた。

そして、黒の剣 を掲げた。

地獄の底から唸り声が聞こえてくるような風の音「ね」。

宙に浮いていたものたちが地上にゆっくりと落ちていく。

生命の実 の支配力を 黒の剣 が少しずつ呑み込みはじめているのだ。

アダムは大地に 黒の剣 を突き立てた。

「黒の剣 の真価を見せてやるっ！」

大地が枯れていく。

突き刺さった 黒の剣 を中心に、円を描いて大地が枯れていくのだ。

それだけではない。もつとも近くで瀕死だった人間の兵士が、息を引き取り、髪が白くなりはじめている。さらに機械兵が風化していくではないか。

リリスが叫ぶ。

「引け、全力でこの場を離れるのじゃ！」

敵も味方も関係ない。黒の剣が喰らっているのだ。セレンは全速力で降下した。

「今すぐやめてください！」

アダムに向かって錫杖を叩きつけるように振った。

瞬時に黒の剣が抜かれ、刃で錫杖を受け止めた。いや、逆に錫杖が刃を受け止めたというべきか。生命の実のエネルギーに守られた錫杖は、黒の剣の刃に断ち切られることがなかったのだ。

近くで死んでいる兵士の風化が止まった。

黒の剣と生命の実が均衡した状態。

クーロンを覆っていたドーム状の結界も消失していた。再び火星から鬼械兵が来てしまうのか。いや、来なかった。時間が過ぎたからではない。

拡声器から響く男の声。

《聞こえるか、トツシュだ！》

どこから話をしているのだろうか？

《馬鹿でかいヘビの戦艦のコックピットは乗っ取った》

《蛇ではなくて龍よ。戦艦の名前はレヴィアタン》

横にいるらしくライザの声もスピーカーは拾った。

《コックピットは制圧したんだが、ドアの向こうに鬼械兵がうじゃうじゃいるんだ。応援頼む！》

トツシュが叫んだ。

コックピットだけを制圧して、立てこもってる状態なのだ。

リリスはジェスリーに顔を向けた。

「レヴィアタンと通信可能かい？」

「直接ではなく、周辺全域にでしたら通信電波を飛ばせますか？」

「それでいい」

「少々お待ちを　どうぞ、お話してください」

通信電波にリリスの声に乗る。

《トツシユの坊や聞こえるかい、聞こえたら返事をおし》  
それを3回繰り返し、再び『トツ』と言ったところで返事があった。

《リリース殿か？》

《そうじゃ、妾じゃ。アダムがルオの坊やに取り憑いた》

《なんですつて!?!》

横からライザが口を挟んできた。

ライザには構わずリリースは話し続ける。

《黒の剣が無差別にすべてのエネルギーを吸いはじめる危険性もある。ただちに全軍の退却を命じるのじゃ》

《おい、なにする気だ!》

《なにつて、こうするのよっ!》

《やめろ!》

会話の途中でなにやら向う側でアクシデントが起きたようだ。

クーロン外周付近の大地から飛び出した巨大な龍の首。レヴィアタンは市壁を軽々とまたぐように越え、その長く巨大な身体で市内に侵入した。狙いはアダムだ!

開かれたレヴィアタンの巨大な口の中が輝きはじめる。

リリースが叫ぶ。

「アダムから離れるのじゃ!」

気づいてセレンは急上昇した。

アレンは猛スピードでリリースとジェスリーを抱きかかえてその場から離れた。

魔導砲発射!

アダムは黒の剣を構えてニヤリと笑った。

「餌が来たぞ我が魔性の剣よ」

爆風で屍体や瓦礫が舞い上がる。

大地が削れ、迫り来る魔導砲をアダムは受けて立った。

目も眩むような輝き。

正面から見た魔導砲は計り知れない大きさだ。

その巨大な光に向かって 黒の剣 が振り下ろされた！  
地獄の風が唸るような音を立てて光が闇に呑み込まれる。

竜巻のように渦巻きながら、その渦の先が 黒の剣 に瞬く間に  
吸いこまれていくのだ。

アダムの紅いマントが狂風に靡く。

「ふふふつ…… ははははつ、力を感じるぞ。 剣に流れ込んで来るエ  
ネルギーを私の肉体にも伝わって来るぞ！」

歓喜を越えた狂気の形相でアダムの笑い声が響き渡った。

レヴィアタン が吼えた。

なんと レヴィアタン がアダムに体当たりをしようと突進して  
くる。

微かに漏れ聞こえてくる声。

《ザザザ…… もうやめろ…… ザザザザ……》

《うるさいわよ…… ザザ……》

もう止められなかった。

レヴィアタン の龍を模した巨大な頭部はアダムの眼前まで迫  
っていた。

禍々しい 黒の剣 が振り下ろされた。

まさか、この巨大な レヴィアタン をも斬れるというのか！？  
嗚呼、真つ二つに裂かれていく。

勢いのついた レヴィアタン の胴体が、真ん中から綺麗に2つ  
に裂かれ、そのまま地面で何度もバウンドしながら、先にあった市  
壁をぶち破り、頭部で大地を滑り削り、やがて尾の先まで割られて  
止まった。

大惨事だった。

クーロン市内に残っていた兵士たちも多く巻き込まれた。

残骸となった レヴィアタンに 潰された者もいた。

ライザの形振り構わない暴拳は多くの犠牲者を出した。

にも関わらず、紅き瞳の始皇帝は 黒の剣 を構えたまま、その  
場を一步たりとも動かず凜と立っていた。

「もはや 生命の実 は要らぬ。此の 黒の剣 に力を蓄え、我が  
悲願を達成するのだ！」  
天高く 黒の剣 が掲げられた。



## 逆襲の紅き煌帝「そして未来へ(6)」

今度は大地だけではなかった。

どこからか舞ってきた花びらが一瞬にして枯れた。

近づくことはできない。

黒の剣 に近づけば喰われてしまう。

屍体が干からびて一気に骨になり、さらに砂となって舞い散る。

まるで早送りの映像を見ているようだ。

世界が砂と化していく。

「アダムは空を見上げた。その視線の先にいるのはセレンだ。いや、セレンを見ているのではない。生命の実 を見ているのだ。」

「もはや 黒の剣 に対抗できるのは 生命の実 を備えた錫杖しかない。」

セレンの背中で4枚のサファイア色の翼が美しく輝いた。

「やめてくださいというのがわからないんですか!」

降下した勢いのまま錫杖がアダムに振るわれた。

「黒の剣 が薙がれ、錫杖ごとセレンの躰を大きく後方に飛ばした。」

「人間が武器を捨て降伏しない限り戦いは終わらない。まずは御前が 生命の実 を捨てるのだ」

「できません。わたしがこれを捨てても、あなたが武器を捨てないからです。それでは戦いは終わりません」

「なら私を倒すか? 何故、私を倒そうとするのだ? 武力を持つて武力を制するのが御前のやり方か? 私と同じ方法を取る御前に私の事をとやかく言う資格があるのか? 御前の望みは何だ?」

まくし立てるようにいくつもの問いを投げかけた。

セレンは押し黙ってしまった。

「シスター・セレンの望みは平和だ。戦いなどしたくない。見たくもない。けれど、それを終わらせるための手段 その葛藤。錫杖

を握る手は常に震えていた。

アダムはセレンを見透かしていた。

「平和の為に戦うと言つのは矛盾していると思わないか？ 平和主義を謳うのならば、武器を持った者が目の前に現れても、丸腰で無抵抗に殺されるべきではないか？ 例え、家族や愛する者が殺されようと、其れをただ見ている事が平和なのだろうか？」

どこか言葉に違和感がある。

もしかしたら、アダムも揺れているのでないだろうか 矛盾の中で。

「私は悪か？ 御前は善か？ それとも逆か？ 此の世は勧善懲悪か？ 私は反逆者なのだろうか？ 神とは何だ？ ルールは誰が決めるのだ？」

アダムは枯れた世界を見渡した。

「此が私の望む世界なのか……ククククツ……そうだ、我が望みは破壊と混沌！」

邪悪に笑ったアダムはセレンに斬りかかった。

もともとセレンは戦闘などできない。

もつれた足を地面に引っかけセレンは尻餅をついてしまった。その状態でなんとか錫杖の柄を突き出して 黒の剣 を受け止めた。

「く……くう……っ！」

必死に歯を食いしばるセレンだが、じわじわを押されている。錫杖の柄を 黒の剣 の刃が眼と鼻の先まで迫っている。

なんとということだセレンの髪の毛の色が薄くなっていく。

黒の剣 が 生命の実 を優るといふのか！？

突然、頭を振り乱してアダムが後退った。

「ぐおおおおっ……違っっ……私の望みは……」

腕が大きく振り払われ 黒の剣 が放った衝撃波が大地を抉って吹き飛ばした。

「きやつ！」

錫杖でガードしながらセレンも上空に吹き飛ばされた。

アダムは 黒の剣 を大地に突き立て片膝をついた。

「己えッ…… 黒の剣 の仕業か…… 此奴も生きている…… 歴代の  
主の欲望や呪いまで吸い取っていた云うのか…… 其れが私の意識ま  
で支配しようとする……」

武器が使用者の精神まで支配するというのか？

禍々しく 黒の剣 が唸っている。

創られたそのときから、 黒の剣 はこのように唸っていたのか？  
血塗られた大剣。呪われた大剣。シユラ帝国の象徴である大剣。  
帝國に伝わる以前は、どのような持ち主が使っていたのだろうか？  
元を辿り最後に行き着くのは生みの親であるレヴェエナだ。

しかし、これがレヴァナの意図する 黒の剣 の姿だったのだら  
うか？

黒の剣 はいつ道を誤った？

アダムは 黒の剣 を握り直して大きく薙いだ。

「ククククッ…… 我は此の青き星の支配者となるのだ。 霸王の剣に  
相応しいではないか！」

切っ先がセレンに向けられた。

「血が足りぬ」

邪悪に染まったアダムがセレンに突撃する。

セレンは上空に吹き飛ばされたあと、そのまま地面に落ちてしま  
い、今立ち上がるうとして最中だった。

迫る刃の切っ先に気づいてセレンが眼を丸くする。防ぐことも、  
躲すこともできない。

切っ先はセレンの法衣を貫き 肌の前で止まっていた。

アダムは自分の足下を睨んだ。

「何者だ！」

地中から飛び出ている手で自分の足首を掴んでいる。アダムはそ  
の足を大きくほぼ真上に蹴り上げた。

砂を舞い上げながら埋もれていた人影が飛び出し、そのまま天高  
く飛ばされた。

「出してくれたお礼は言わないからな！」

アレンだった。

放たれる ピナカ の輝く3本の矢。

「やはり先に片付けなくてはならないのは御前のようだ！」

矢は瞬く間に 黒の剣 に吸収され、斬撃の衝撃波がアレンを襲った。

「ぐわっ！」

衝撃を躲しきれず胸に喰らったアレンが吹き飛んで地面に落ちた。仰向けになったアレンの胸から火花が散る。機械の半身である片方の胸の装甲が、爪で抉られたように穴が空いている。それでもアレンは齒を食いしばって立ち上がった。

「まだまだ！」

齒車はまだ鳴り続けている。

仁王立ちをするアレンにアダムは斬りかかった。

「何故立ち上がるのだッ！」

「負けたくないからに決まってるんだろ！」

振り下ろされた 黒の剣 を躲し、アレンはアダムの懐に入ると、渾身の拳を腹にお見舞いした。

腹に喰らいながらもアダムは体勢を崩さなかった。そのまま 黒の剣 を薙いでアレンの胴を真つ二つにしようとした。

アレンの足の裏を擦るか擦らないかの距離を刃が通り抜けた。飛び上がった 黒の剣 を避けたのだ。そのままアレンはアダムの顔面を蹴り上げた。

顎を上に向けながらアダムが後方に飛ばされ、背中から倒れそうになったが、片足を引いて踏みとどまり、その足を蹴り上げて跳躍し、アレンの脳天に斬りかかった。

機械の手を突き出したアレン。

これまで何度も 黒の剣 には苦い思いをさせられた。はじめてルオと闘ったときには、機械の腕を切り落とされ生死の境を彷徨った。今まではアレンの装甲では、その刃を防ぐことはできなかった。

が、アレンの手のひらは 黒の剣 を受け止めていた。

口と眼を大きく開いて驚愕するアダム。

「何故斬れぬ？ いや……何故、 黒の剣 に喰われ朽ち果てぬのだ？」

もはやこの周辺は死の大地と化していた。

人間も機械人も物も、朽ち果て砂に還って逝った。無事なのは生命の実 に守られたセレンだけのはずだった。

裂かれた胸の装甲の奥底で燦然と輝き出す歯車。それは歯車の形をしていたが、アダムにはわかった。

「まさか 生命の実 だとッ！」

その輝き、その溢れ出す生命の息吹、まさしく 生命の実 ！

黒の剣 から闇が霧のように溢れ出す。

地獄からの悲鳴。

アレンがセレンに目を向ける。

「ぼさつとしてないで手伝えよ！」

「は、はい！」

駆けつけたセレンが錫杖の柄で 黒の剣 の刃を押し戻そうとする。

噴き出した闇は七つの首を持つ竜のように不気味に蠢き暴れ狂う。狂気を孕んだアダムの紅い瞳。

「此の星ごと御前から喰らい尽してくれるわー！」  
大地が揺れる。

アレンは足を踏みしめ歯を食いしばった。

「くっ……」

暴風が3人を包む。

激しく揺れる髪。

ズシンツと大地が沈んで3人を中心としてクレーターができた。

小さな稲妻のようなエネルギーが、火花を散らしながら発生した。微かに聞こえはじめたヒビの入る音。

アレンの手に食い込む刃。セレンが握る錫杖の柄にも亀裂が入っ

ていた。

狂気の形相でアダムは笑いはじめた。

「ハハハハッ……滅びろ、滅びてしまえ、クハハハハ……ハ……？」

急にアダムの顔つきが変わった。疑問を浮かべたのだ。

大地から芽が出て、双葉に分かれた。

生えてきたのは1つではなく、次々と大地から若葉が芽を出しはじめた。

大地が緑に染まっていく。

「何事……だ」

アダムは驚きを隠せない。

予期せぬ出来事が起きたのだ。

色とりどりの花が咲いた。

稲穂が風に揺れた。

大きく育った木から真つ赤な林檎が地面に落ちた。

豊穡の香りが世界を包み込む。

またヒビの入る音。

黒の剣の刃に稲妻のようなヒビが奔った。

憎たらしい糞餓鬼の笑みを浮かべたアレン。

次の瞬間、黒の剣が折れた。

「喰らえッ！」

叫んだアレンから繰り出される拳。

それは生身の拳だった。

顔面を殴られたアダムが片足を引いてよろめく。

「……何故だ……何故だ……アレンよ、御前は機械なのか、それとも人間なのか、どちらなのだ？」

「俺は人間に決まってるんだろ！」

止めと言わんばかりの生身の拳がアダムの頬を抉るように殴った。

吹っ飛ばされたアダムが何度何度も地面を転がる。

地面に這いつくばり立ち上がるうとするアダムの手には、もう

黒の剣 は握られていない。

力を失ったアダムはやつとの思いで立ち上がったが、背中を丸めて大きく咳き込んだ。

「ゲボツ……ブグツ……ウエエエエ……」

アダムの口からメタリックの液体が吐き出される。

芝生の上で蠢くその液体はアダム。

気を失ったルオはゆっくりと倒れた。

液体金属の本体となったアダムは、スライムのようにドロドロと動き、まるで手のようなものを苦しそうに伸ばした。

「オオオツ……ウオオオオ……終ワリダ……何モカモ……メギドノ

……炎デ御前達モ道連レニ……」

セレンから錫杖を奪ったアレンは、それでアダムを叩きつぶした。

「私ハ……何者……ダツタノ……ダ……」

飛び散った液体が光に包まれて消える。

跡形もなくアダムは消滅した。

錫杖を投げ捨て倒れるように座り込んだアレン。

「あゝ、腹減った」

涙目でセレンは肩を撫で下ろした。

「終わったんですね」

目を指先で拭いながらセレンは空を眺めた。

背筋が凍った。

セレンの顔が見る見る恐怖に染まっていく。

「そん……な……」

巨大な紅い炎の塊が流星のように降ってくる  
メギドの炎  
だ。

アレンは大の字になって寝転んだ。

「もおゝ知くらねっ」

「アレンさん！」

「死ぬ前に旨いもんたらふく喰いてえなあ」

「……いいです、わたしひとりです……」

錫杖を拾い上げ、サファイアの翼を輝かせたセレンは飛び立とうとした。

その手首が掴まれ引き止められた。

セレンはアレンかと思つて振り向いたが、そこにいたのはルオだった。

「あれを食い止められるのは朕だけだ」

ルオの手には折れた 黒の剣 が握り締められていた。

闇色の 黒の剣 が音すらも吸いこむように静かだった。

セレンは立ち尽くした。

そして、ルオは 黒の剣 に乗つて、遙か空へと飛び立ったのだ。

アレンは空を見つめていた。

緑が風に揺れる。

世界は静かだった。

それはほんの少しの間だった。世界全体が静止してしまつたような感覚。

静寂。

アレンは瞳をつぶつた。

そして、再び瞳を開けたとき、世界は動きはじめた。

それから数ヶ月の月日が流れた。

大地に鎮座している超巨大円盤形飛空艇の前で、セレンがマルコシアスを涙目で見つめていた。

「あの、本当に行つちやうんですか？」

「この星で我々が暮らしていくのは難しい。すべての機械人を連れて月に行きます」

「また逢えますよね？」

「いつか人間と機械人が暮らせる日が来れば還ってきます」

「わたしが生きてる間には難しそうですね、ぐすん」

涙を拭うセレンを見てマルコシアスは笑った。

「あはは。ライザ博士が衛星を直してくれたので、いつでも顔を見



て通信することは可能ですよ。では、そろそろ時間なので、さようならセレン様」

「あのっ、またお母さんの話聞かせてください！」

まるで手を振るようにマルコシアスは翼を動かし、あっという間に飛空艇まで飛んで行ってしまった。

やがて月に向かって飛空艇は飛び立っていった。

セレンは見えなくなるずっとずっと手を振り続けた。

丘の上は風が強かった。

「つたく、煙草に火が点かねえ」

トツシユは口の煙草をポケットの押し込んでから、辺りを見回した。

杖を突いた少年が見えた。

「おーい！」

トツシユが手を振って叫んだのに少年は気づいて、岩場を飛び越えてやって来た。

「なんだ用か？」

片言なのか、ぶつきらぼうなのか、そんな口ぶりだった。

「この辺に墓があるはずなんだか、見たことないか？」

「んっ」

少年は杖の先でその方向を示した。

「ありがとな坊主」

トツシユは少年に礼を言っ駆け出した。

それは粗末な墓だった。大きな石の土台に、それよりも一回り小さな石が積み上げられている。花が供えられていなければ、それが墓石だとわからなかったかもしれない。

花を供えた者は墓の傍に立っていた。トツシユもよく知っている者だ。

「久しぶりだなジェスリー」

「こんなところで会うなんて、奇跡の確率です」

供えられている花を見たトツシユは、さっきの煙草を1本、花の横に置いた。

すぐにジェスリーが突っ込む。

「ジャン博士は煙草をお吸いになりません」

「死んでるんだから関係ないだろう」

「……ありがとうございます」

「ん？ ああ、礼を言われることじゃない。ちょっと近くを寄ったからついでだ」

この辺りはなにもない土地だ。

「少しお話してもよろしいでしょうか？」

と、ジェスリーが切り出した。

「どんな話だ？」

「歴史から消えてしまわないように、わたくし以外の方にも知っていてもらいたいのです。ジャン博士はある使命を帯びて、コールドスリープ装置である赤子と共に眠りに就いていました。その赤子は病気で、当時の医療技術では治すの困難でした。ですから治療薬が開発されるまで、眠りに就くことにしたのですが、いろいろな事情がありまして、ずっと目覚めることなくこの時代まで忘れられてしまいました。それが16年ほど前、古代遺跡を荒らしに来た盗賊によってコールドスリープ装置が発見され、ジャン博士と赤子は目覚めました。目覚めたのはいいのですが、この時代はすでに魔導と科学力が衰退しており、赤子の病気を治す治療薬も存在していませんでした。けれど、運がよかったですことに、この時代の人間はその病気の抗体を持っていたのです。そして、赤子の病気を治すことができました」

「よかったじゃないか。それでめでたしめでたしか？」

「いいえ、そのあとジャン博士の住んでいた村が戦乱に巻き込まれ、赤子が行方不明になってしまったのです。それからジャン博士は世界中を旅して赤子を捜しました。しかし、何年経っても見つからなかったのです」

「そこで話は終わりじゃないだろうか？」

ジェスリーはポケットから十字架のペンダントを取り出した。

「つい先日アレンさんから預かったものです。もともとこれはジャン博士が恋人に贈った物なのですが、今はセレン様の物なので、トッシュンさんから返していただけじゃないでしょうか？」

「まさか……その赤子って……」

新生シュラ帝国の玉座へと続く真っ赤な絨毯。

その道を飾るのは国中から集められた美男子たちだった。

四つん這いにさせた青年を足置きにして、玉座に座っていたのはこの帝國初の女帝だった。

「退屈だわ」

ライザは溜め息をついて、思い立ったように立ち上がるといきなり走り出した。

「またライザ様がお逃げになったぞ！」

近衛兵たちの大声が城内に響き渡った。

かつてその国は世界から畏れられる軍事国家だった。

しかし、今は100年未来をいくと云われる魔導科学国家の歩んでいた。

「ライオンヘア？と呼ばれていたのも昔のこと、今は？白衣の女帝？と云われている。」

城内に悲鳴があがる。

「大変だ、ライザ様の撃った光線銃を喰らった兵士が猫になっちゃったぞ！」

「ぎゃーっ、こっちの兵士は豚だぞ！」

この国は今日も平和だった。

花畑の真ん中にある柩にもたれかかり、地面に脚を伸ばして座っている妖女。

それは硝子の柩に似ていたが、中は培養液で満たされていた。中

で静かに眠っているのは。

「ねえお姉様、明日はどこに出掛けましょうか？」

風が吹いて花が香り立った。

「うふふ、お姉様ったら研究所にこもってばかりで……これは神様が与えてくれた休日かしら」

妖女がゆっくり立ち上がると、その姿は老婆へと変貌した。

「わしばかりが歳を取ってしもうて、目覚めたお姉様はわしのことがわかるかの？」

声まで年老いてしゃがれている。

「そうじゃ、いつしよに海に行こうと約束して、一度も行ったことがなかったの。明日は海にでも行くか」

不思議そうな顔を老婆はした。その鼻をくすぐった風の匂い。

「潮？」

海など近くにないのに、どこから香って来たのだろうか？

太陽が燦然と降り注ぐ煌めく海の上に少年はいた。

少年は海風に吹かれながら、竹材で作ったいかだに揺られ、どこ行く当てもなく漂流していた。

海賊帽子に片眼には黒い眼帯。いかだの帆にはらくがきみたいな髑髏マークが描かれていた。

深く被った帽子から覗く片眼は、遙か彼方を見つめているようになにも見つめていないような眼差し。

少年はあの先になにを見る？

そして、なにを求め、旅をしているのだろうか？

その時、少年の腹が奇怪な音を立てて鳴いた。

ぐううううううううう。

「腹減ったあ~~~~」

今、少年に最悪最強の敵が襲い掛かる！！

空腹。

もう何日こうやって漂流しているのだろうか？

「マジで死ぬ。そこら中に魚がいるつてのに、なんで一匹も釣れねえんだよ」

釣り針は垂らしているが、餌はついていなかった。腹を押さえながら少年は遠い海を眺めた。

「ん？」

見る見るうちに少年の瞳が大きくなっていく。

「船だ！」

狂風が吹いた。

帆が風を受けて船に向かっていかだが進む。風があっても、この早さは不思議だ。あつという間にいかだは船の横にやってきた。

船はいかだの何倍もある大きな船で、少年は首を曲げて顔を上げた。

「おい、飯ちよつとわけてくれない？」

その声に反応して甲板から人影が身を乗り出して顔を見せた。その顔は少年を見てあからさまに嫌そうな表情をした。

「君にくれてやる食料はない」

「あ、てめえなんでこんなところにいんだよ、海賊やってんの？」

「海賊船ではなく商船だ」

ルオは溜め息をついた。その横から新たな人影が顔を出した。 1

6、7くらいの娘、ラーレだった。

「そちらの女性はルオの知り合いですか？」

驚いたルオと少年　ではなく少女アレン。

「俺のこと女だってわかんのか？」

「君、女だったのかい？」

疑いの眼差しでルオはアレンを細い眼で見た。

「悪かったな女で」

「乗れ」

ルオはロープを下ろした。

「おお、サンキュ！」

アレンは軽く礼を言ってロープを登った。

甲板のへりに来ると、ルオが手を伸ばしたので、それにアレンはつかまった。が、お互いの手と手が握り合った瞬間、ルオは心の底から嫌そうな顔をしたのだ。

「やっぱり気持ち悪い」

そう呟いて手を離れた。

水飛沫を立てて海に落ちたアレン。

「うわぁ、俺泳げねえんだよ、この野郎落としやがって！」

「朕も泳げぬ」

慌ててラーレが海面を指差した。

「鮫です！」

「飯だと！」

アレンは叫んだ。

サメに向かって泳ぎ出すアレン。

呆れたようにルオは呟く。

「泳げるじゃないか」

巨大な口を開けた巨大サメはアレンをひと呑みにしようとする。

どこかで歯車の鳴る音がした。

「飯いゝゝゝっ！」

サメを放り投げながら自分自身も飛んでいた。

船の甲板に打ち上げられたサメとアレン。

全身をびしょびしょにしながら、大の字で空を眺めるアレンの視線が霞む。

「……………腹……………減った」

そして、アレンの意識は白い中に落ちていった。

穏やかな寝息を立てるアレンの表情は、まるでたくさんの料理を目の前にしているように、ニヤニヤと笑っていたのだった。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0398e/>

---

魔導装甲アレン

2011年7月13日03時28分発行